
Adventurous? ~ 物語の序章 ~

るり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Adventurous? 〈物語の序章〉

【Nコード】

N7530K

【作者名】

るり

【あらすじ】

ある夏の誕生日。ちよつとした出来事から、短い冒険が幕を開けます。

小さなニンゲン2人が、幼いポケモン2匹を兄弟のもとへ返しに行くだけ。それだけで済んだはずなのに、そこでちよつとしたハプニングに巻き込まれ。その場の勢いと思い付き、etc.でゴールがいつになるか分からない冒険へと導かれていきました。旅に近い、ちよつとした物語。この旅が終わってから始まる、なが〜い旅へと続く、普通より長いプロローグでもあります。

ポケモンの世界には

この世界には“ポケットモンスター”と呼ばれる生き物が存在しています。

その生き物たちは、縮めて“ポケモン”とも呼ばれていて、森や町にはもちろん、水の中や土の中、空にも住んでいます。

ポケモンは、私たち人間と共存しています。

しかし私たち人間が森を破壊すると、ポケモンが襲いかかってくる場合があります。しかしそれは人間が勝手な行動をしたために、森に住んでいるポケモンたちが怒っただけのこと。

本来、“ポケモン”というものはおとなしいものが多いのです。仲良くなればなるほど、友達や家族のように感じる事ができます。人によれば、それ以上の存在にもなれることができます。

ポケモンは、ある一定以上の力を持つと“進化”と呼ばれる現象を起こすことがあります。

それ以外にも、特定の道具を使ったり、特定の場所で力が上がったりとその他にも様々な理由から“進化”が起きるということが現在の研究で明らかになってきています。

“進化”はポケモンの姿かたちが変わるだけでなく“タイプ”まで変わることがあり、世間でもよく知れ渡っています。

“タイプ”と言うのは、ポケモンが体内に秘めている力のことで

有名なところで言うと草、炎、水、電気、ノーマル。

それ以外には氷、格闘、毒、地面、飛行、エスパー、虫、岩、ゴ

ースト、ドラゴン、悪、鋼で合計17項目あります。
ポケモンたちはこの力を1つないし2つ、体内に宿しています。

それ以外にもポケモンたちには不思議な力があり、体内で合成した力を“技”という形で体外に放出することができます。

その“技”にもタイプがあり、その威力は技を受ける相手のタイプによって変動し、ときには全くダメージを受けないということもあります。それが“タイプ相性”と呼ばれるものです。

『草は水に強く、炎に弱い』、『炎は草に強く、水に弱い』、『水は炎に強く、草に弱い』という文章がよく初心者ガイドブックに載っています。

また、『電気は地面には効果が無い』、『ノーマル、格闘はゴーストにダメージを与えられない』、『鋼は毒を受け付けない』というのも有名でしょう。

技にはここでは紹介できないほどたくさん種類があります。中にはどんなタイプにも全く効果がない技もあるほどです。

人間はポケモンたちをもっと身近に置くために“モンスターボール”と呼ばれる、ボール状でちょうど手に収まるほどの大きさの道具を開発しました。

この道具は年月を経るごとに進化を遂げ、現在ではワンタッチでボールの拡大・縮小、ポケモンの出し入れが簡単にできるようになりました。

ボールは拡大するとポケモンを自由にに出し入れすることができ、

また縮小するとピンポン玉サイズになりポケットに入れることができるのです。

このことから『未知なる生き物であった“魔獣”が“ポケットモンスター”と呼ばれるようになった由縁である』と、とある学者が発表しています。

人間はモンスターボールを使ってポケモンを捕まえると、そのポケモンに指示を与え、ポケモン同士を戦わせるようになりました。これが“ポケモンバトル”と呼ばれるものです。

ポケモンバトルを繰り返すうちにポケモンの力が上がり、前述した「進化」というものが起きるのです。また、新しく技を覚えることもあります。

この様に、ポケモンを捕まえることでポケモンを集め、ポケモンの強さを競わせる人間のことを一般的に言葉で“ポケモントレーナー”と言います。

ポケモンバトルが若者の中に広まったところ、町には“ポケモンジム”というものが設置され、“ジムリーダー”と呼ばれる人が守っています。

ジムリーダーは一般のトレーナーよりもはるかに強いと言われています。一般トレーナーの強さがジムリーダーよりも上回っていれば すなわちポケモンバトルでジムリーダーに勝つことができれば“ジムバッジ”と呼ばれるバッジを渡されます。

ポケモンジムは“ポケモン協会”と呼ばれる組織の管轄かんかつ下に置かれています。

その協会は各地方 カントー地方やジョウト地方など に8か所以上のジムを設置しました。

ポケモントレーナーは同じ地方内に建てられた8か所のジムで見

事勝利し、その証であるジムバッチを8こ取得することができれば、“ポケモンリーグ”と呼ばれる年に一度の大きな大会に参加する資格がもらえます。

その資格をもらうためにポケモントレーナーはたくさんいろいろな町をめぐるのです。

また現在、ほぼ全ての町や一部の道路には“ポケモンセンター”と呼ばれる、ポケモンのための治療施設　いわゆる病院が建てられています。

ここでは“ジョーイ”と呼ばれる女医がおり、傷ついたり、病気になったりしたポケモンの治療・入院はもちろん、トレーナーのために宿泊施設やレストランなども運営しています。

昔は人間の言葉を正確に理解するポケモンも少ししかいませんでした。当然その逆も然りです。

しかし数十年ほど前から理解するだけではなく、人間の言葉を話すことができるポケモンも徐々に現れてきています。

このことについて数多くの意見がありますが、今日では『人間と今までよりもより良い友好関係も結びたいから』、『人間がポケモンの住処を奪ったり、虐待したりと虐げすぎたから』というこの2つの説が有力です。

この2説に共通することは『人間と話し合いたい』という、温厚かつ純粹であるポケモンたちの気持ちでの表れだと言われています。ポケモンたちの知力が私たち人間と同じぐらい高くなってきていることを認めざるを得ないのです。

人間の言葉を話すことができるようになったポケモンの中には、『人間と同じように学校という場で勉強したい』と願うものが増えしてきたそうです。

そして、いつのころからでしょうか。

各地方の町や道路のどこかに「空間の歪み」ができました。それも1か所ではありません。多いところでは5か所以上もの「歪み」が発見されました。

そして、その「歪み」を通るとひとつの場所に行き着く事から“抜け道” “抜け穴” と呼ばれ始め、次第に“道”や“穴”と省略されるようになりました。

またそこを通ることで行き着く場所とは、ポケモンが人間のように通える学校が建てられている大きな大きな土地でした。それも保育所・幼稚園から大学・大学院までの全ての教育機関という凄まじさ。

さすがに「すべてがまとまってひとつの学校」となっているわけではないですが、1つの教育機関に少なくとも5校以上が、大学となれば10校以上もの学校が建っていると言われています。

しかし保育所・幼稚園以外に入学するにはヒト語を話せることが大前提でした。

中学以上になると、入学希望者には試験を行い、それにパスしたものだけが入学できるという規律でした。中には試験を行わない中学校もあります。その代わり高校には進みづらくなっているようです。

空間の歪みがつくった不思議な土地。しかしその土地を偶然人間

が発見してしまい、ポケモンだけの学校だったはずが、いつの間にかポケモンと人間の共学校となってしまっていました。

人間とポケモン。

同じ365日でも、実際は少しだけポケモンのほうが先に年をとるのかも知れません。しかし、そんなことを言っていると学年分けが大変面倒なことになってしまいます。

そこですべての学校の長は1か所に集まって会議を開きました。

「ならば、年をくうのが遅いと思われる人間に合わせて学年分けを行おう。」

そして桃色の花が咲く4月に学校が始まり、凍えるような冬が終わり暖かさが増してくる3月に終わろう」と。

「生まれてから6年が経ち7年目を4月〜3月に迎える。その者を小学校に入れる最低の年齢として定めよう」と。

それからです。

小学校は生まれてから7年目以上を、中学校は13年目以上を、高等学校は16年目以上を、大学は19年目以上を迎える者をそれぞれ受け入れるようになったのは。

くくくく

こうして、この世界とこの空間、そしてこの学校は作られたのです。

明後日の試験に出しますよ。ノートを取っていない人は知りません。

せいぜい、頑張ってください。

あと、寝ていた人は体育館裏で待っていなさい。

「はあ!?!」

「怖え、この先公……」

「先輩が恐れる理由がわか」

そこの2名も体育館裏へ御招待します。

来なければ……どうなっても知りませんよ?

「……………」

くポケモンの世界にはく（後書き）

ここの続きで物語が始まるわけではないので安心してください。

読んでくださり、ありがとうございます。

1話 夏、真っ盛りです

ここはカントー、トキワの森。

木漏れ日が射すため、森としてはまだ明るいほうだ。しかし、今日はその明るさも影を潜めている。その理由として、空が分厚い雲で覆われているからだ。

予報によれば、嵐がこちらに向かっていているらしいが、ポケモンたちは予報がなくとも野生のカンが備わっている。そのため、嵐が来ることをあらかじめ予測しており、住処から出てくることは決してしなかった。

しかし今、目の前を小さめのポケモンが2匹、ちょこちょこ歩いている。どうやらイーブイとトゲピーのようだが……。

「ちょっとトゲピー、風強くなってきたよ。早く戻るうよ」

風上に向かって歩いていっているのか、その歩みはとても鈍い。それでも前を歩くトゲピーに追いつくため、一歩一歩確実に進んでいた。

「もう少し、もう少しだけ。ね、ミウ？」

「トゲピーのもう少しはあてになんないの！」

あー、もう！ 森の外に出ちゃったじゃない」

2本の木の間をすり抜けると、目の前には平らな土地が広がっていた。それは住処である森を抜けてしまったということの意味していた。

「あたしの目的は森の外に出ることだったんだもん。
ほら、ミウも早くー！」

渋るイーブイの毛を引っ張り、なおも森の外に出ようとするトゲ
ピー。

しかし、丁度そこに北西からの突風が吹き荒れ、体格が小さく、
体重も軽い2匹はあっという間に空へとさらわれた。

「わー！ ミウ、ミウ！」

あたしたち空にいるよー！！」

「ぜ、絶対離さないでよ、手！」

「うん、わかってるうー」

「ぜ、ぜんっぜん、わかってないっ　　！！」

空を飛べて嬉しそうなトゲピーとは裏腹に、トゲピーと咄嗟に繋
いだ手が離れそうなイーブイは気が気ではない。

どこまで飛ばされるんだろう……、と思う時間もつかの間のこと
で、次の瞬間には風に加護がなくなっていた。

バサバサツという衝撃音と共に体に感じたのは鈍い痛み。落ちた
場所が硬い地面ではなく、木の上であったことがせめてもの救いで
あるう。

「じっ、どっだろ……」

イーブイは軽い身のこなしで木から降りると、キョロキョロと辺りを見回した。しかし辺りが薄暗いせいか、まったく言っていないほど検討がつかない。

「ミウー……、降りられないよー」

聞き覚えのある情けなさそうな声がどこからか聞こえてきた。

見上げると、トゲピーが枝の上に座ったまま固まっていた。その高さ、およそ2m。地面からその枝までの間にトゲピーが7匹は入るだろう。

「トゲピー、ピョンって跳んでおいで」

「ムリ　っ!」

「あたしが捕まえるから。ね?」

「やだー!」

押し問答の結果、トゲピーは泣きそうな表情を浮かべながらも、枝から手を離し、飛び降りた。しかし、なかなかうまくいかないのが、人生である。

「ミウ、大丈夫!」

トゲピーは突如吹いてきた風に煽られ、綺麗に着地。……助けよ
うと駆けてきたイーブイの上に。

「だ、大丈夫」

少しふらつきながらも、立てるイーブイ。

「ここ、どこだろうね？」

「わかんない。でも……海の匂いがする」

イーブイは一度海に行ったことがあるから分かるのだろうが、一度も行ったことがないトゲピーからすると、まったく分からない。そして、夜が近づいて来ているせいも、まわりが先ほどよりも暗くなってきた。そこへ雨まで降りだす始末。

「ミウ、濡れちゃうよー」

「わかってる。早く雨宿りできるところを探さないと！」

慌てふためく2匹。そこへ何かを開く音と人間の声が聞こえてきた。

「お姉ちゃん、雨降って来たよー？」

「じゃあ窓閉めてよ！ 雨入るじゃない!!」

「はいはい……」。

どうしたの、ウインディ？ 何かいるの？

男の子と女の子の声である。

その声の後、パタンと何かが締まる音も聞こえてきた。

「……トゲピー、行くよ」

「うん、ミウ」

2匹は何かを決意したかのように、声が聞こえたその場所へと走り出した。

「椎那^{しいな}、窓開けて。暑い」

「自分で動いてよ!」

ここはマサラタウンにいくつも建ち並ぶ家のひとつ。

住んでいるのは、今年小学校にあがったばかりの男の子と、その子より1つ年上の姉のみ。そしてふたりがパートナー兼友達として連れている2匹のウインディだけだ。

両親は、半年前に交通事故で他界し、唯一の望みであった兄もその後を追うように同じ日に逝ってしまった。以来、ふたりと2匹だけの生活が続いているのだ。

最初は兄が連れていたポケモンであるヨルノズクとホーホーがいたのだが、いつの間にかどこかへと飛び去って行ってしまっていた。

心優しい弟は、姉の言う通りに窓を開けた……までは良かった。強い風が吹くと、雨粒と思われるものが自分の顔に当たったのだ。手を窓の外へと差し出すと、やはりいくつもの水滴が手のひらにたまった。

「お姉ちゃん、雨降って来たよー？」

「じゃあ窓閉めてよ！ 雨入るじゃない！！」

「はいはい……」

自分勝手な姉だと思いつつ、窓を閉めようとする弟・椎那。そこへパートナーのウインディが歩み寄り、顔を窓から出し外を覗くと低く小さな声で唸り始めた。

「どうしたの、ウインディ？」

何かいるの？」

椎那も釣られて窓から外を除き、回りを見渡す。すると家の前を何か黒っぽい小さなものが走っている様子が見えた。

「なんだろう……」

「椎那！ 早く閉める！！」

さすがの椎那もこれには気が立ち、その声に呼応するかのよう^{よう}に音がたつほど強く、乱暴に窓を閉めたのであった。

それから数分後、玄関の扉を叩く音が聞こえてきた。

「椎那、出 ウインディ？」

「警戒……してる？」

かな、と心配そうに姉・胡睦こむつが続ける。それと言うのも、いつもはおとなしいのウインディが今日ばかりは心配そうに、もう一匹のは威嚇して玄関を睨んでいるからだ。

「あたしが出るよ」
「ぼくも行く！」

ふたりは一緒に玄関に向かった。その後ろ姿を警戒している2匹のウインディが見送っている。

胡睦は恐る恐る玄関の扉を奥へと押し、その隙間から外を覗いた。しかし目の前には誰の姿もない。

「あれ……？」

気のせいだったのかな」

ドアを完全に開け、何度左右を見渡しても何も見えないし、誰かがいるような気配もない。

気のせいだと決めつけた胡睦が諦めて閉めようとすると、どこからか幼い声が聞こえてきた。

「ここ！ 下です」

声そのものは小さいものの、凜と響く声であった。そして、胡睦が言われたとおりに下を見渡すと、小さな獣が2匹、寄り添ってこちらを見上げていた。

「今日だけ泊めてください」

先ほどと同じ声 右側にいる四足の生き物が声を上げた。左側にいるポケモンは卵のような形をしているのだが、寒さで震えているようだ。

胡睦がどうしようかと答え兼ねていると、再び同じ声がした。

「お願いします、泊めてください。」

じゃないとあたしたち」

風邪ひいちゃう……。

そう続けた声は、最初に聞いた凜とした声から打って変わって悲しそうな声へとなっていた。

「お姉ちゃん、泊めてあげようよ。
その子たち、中に入れてあげよう?」

姉とポケモンとのやり取りを聞いていた椎那が口を挟む。胡睦はくるりと後ろを振り返り弟の顔を見る。

椎那は小さな2匹に視線を落とし、再び姉と顔を合わせる。その表情は悲しそうにしていた。

「だって、そんなに濡れてるんだよ?
拭いてあげようよ」

胡睦はしばらく考えてはいたものの「そうだね」と答え、その2匹のポケモンたちを中へと招いた。

先ほどの声の主がお礼を言おうと口を開いたようだが、そこから出てきたのはかわいらしくしゃみの音であった。

「大丈夫?」

椎那が心配そうに声をかけると声の主である四足のポケモンは返事の代わりに、再びくしゃみをした。

「……シャワー、かけてあげよう。きっと温まるから」

椎那は姉のその言葉を待ち望んでいたかのように、四足のポケモンを抱いて風呂場へと走って行った。あとに残された胡睦は、小さくため息をつくともう1匹のポケモン　卵のようなポケモンを抱いて風呂場へと向かった。

「寒くない？」

「うん、ありがとう」

数十分後、風呂場から出てきたふたりは、それぞれのポケモンの体から水気を拭き取っていた。

雨風で汚れた2匹の体はそれぞれの色へと戻っていた。四足のポケモンは綺麗な茶色で、首の周りにあったふわふわの毛は白色に、卵のようなポケモンは真っ白へと。

夕食も済ませていなかったため、適当にご飯を炊き、適当なふりかけを選び、計4匹のポケモンたちにはポケモンフーズを与えて夕食としていた。

そして片付けも終わった夕食後。

「泊めてくれるだけでも嬉しかったのに……」

茶色で四足のポケモン　イーブイがポツリとつぶやいた。

「ううん。久しぶりのお客さんだったから嬉しくって。

明日も泊まってく？」

「……うん。お兄ちゃんたちのところに帰らないと」

そんなイーブイのつぶやきを聞き、玄関で会った時とは全く違う嬉しそうな顔で笑う胡睦。

泊まる？ という言葉にイーブイはフルフルと首を振り、残念そうな顔で否定をした。

「お兄ちゃん、いるんだ？」

「うん。トキワの森であたしたちを待ってると思うから」

胡睦の質問に大きくうなずいたイーブイ。

トキワの森？ と椎那は首をかしげ、「遠いねー」と呟いた。

「……思ったんだけど、ここどこですか？」

今更な質問かもしれない。しかし聞かずにいられなかったイーブイは目の前にいるふたりに問いかけた。

椎那と胡睦は顔を見合わせ、そしてふたり同時に言った。マサラタウンだ、と。

「ま、マサラタウン！？

トキワシティぐらいかと思っていたのに！」

イーブイは今更ながらあたふたしだし、顔が真っ青になった。

ちなみに、トキワの森からマサラタウンまでは、大人でも歩いて半日以上はかかる。下手すれば、朝の7時に出てもつくのは夜の9時を回るころだという。

「どっしり……」

イーブイは隣にいるトゲピーと顔を見合わせると、顔を強ばらせた。

「だったら明日送るよ？」

「そうそう。ウインディたちもいるし、早く着くよ！」

そんなイーブイに同情の念を抱き、椎那は優しく語りかける。胡睦もそれに賛成し、パートナーのウインディを呼ぶと毛並みに沿ってゆつくりとなでていた。心なしか、嬉しそうな表情をウインディは作っていた。

「……でも」

「あたしはそれがいい！」

イーブイの言葉を遮り、今まで一言も話さなかったトゲピーが口を開く。それに驚き隣にいるトゲピーを見るイーブイ。

「早く着くんですよ？」

「きつとお兄ちゃんたちにもバレないよ！」

それなら決まりだね、と胡睦。屈託な笑顔をイーブイたちに向けた。

「明日の朝、ここを出よう！」

時計の短針が文字盤の9を指すころ、椎那と胡睦はふとんの中に潜り込んでいた。

寝る間際になり、胡睦はある重要なことを思い出した。

「そういえば名前、言ってなかったね。あたしは『胡睦』」
「ぼく、『椎那』！」

姉に続き、元気に自分の名前を2匹に教える。

いきなりなことで一瞬びっくりしたようだが、イーブイはにっこりと笑って自分に付けられた名前をふたりに伝えた。

「あたしは『ミウ』で、この子は」

「あたしはそのまんま。『トゲピー』だよ」

パタパタと両腕を振りながら話すトゲピー。その動きが遅くなっただと思うと、ツンツンしていた頭がしぼみ、丸くなっていた。やがて、スースーと言う寝息がトゲピーから聞こえてきた。

「明日もよろしくね。ミウ、トゲピー」

その言葉を皮切りに話し声は聞こえなくなった。
代わりに落ち着いた寝息がそれぞれのリズムで聞こえてきた。

これが8月2日・椎那7歳の誕生日である夕方に起こった出来事であった。

明日以後、来年の春までこの住み慣れた家が見られなくなることを知らずにふたりはマサラタウンを旅立つ。

そして、旅立った先でいろいろな経験をし、ふたりはポケモンたちと共に成長していく。

まず目指すのは、マサラタウン北に位置するトキワシティだ。ミウとトゲピーがそれぞれの兄弟と再会できることを祈りながら歩ん

でいくのだ。

1話 夏、真っ盛りです（後書き）

椎那たちの旅が始まります。

2話 避暑のため、涼しい森へ

次の日の朝、椎那と胡睦こむつは旅に出る準備に取りかかっていた。

朝食を食べたふたりは遠足に行くときに使うような、赤と緑のふたつのリュックをどこからか引つ張り出してきた。

そしてその中へ水筒、タオル、ちよつとした着替えなどの日用品から、財布やどこから出して来たのか分からない預金通帳などの金銭物。はたまたトレーナーの必需品であるとも言える傷薬など、ありとあらゆるモノがその中に詰め込まれていく。

全ての準備が終わったのは、朝起きてから2時間後である10時半のことだった。

「疲れたー！」

「お疲れさまです……」

ミウとトゲピーがふたりの2時間分の働きを労う。15分ほど休憩を取った後、ふたりと2匹は家の外に出た。

余所者が入らないよう、玄関の鍵をしっかりとかけて。

マサラタウンに浮かぶ白い雲の下で椎那と胡睦は静かに立っていた。そんなふたりの手には赤と白のまるい何かがギュツと握られている。

そして、ふたりはほぼ同時に斜め上の空へとそれを投げた。

放物線を描いたそれは、そのまま地面に落ちると思いきや、凶形を描いている途中に口を開き、赤い光線が中にあるポケモンのシルエツトを象っていく。

赤色の光が消えた時、そこに現れたのはオレンジと茶色チヤウシヤウの毛色を持つウインディ。2匹とも堂々たる姿でその場に立っていた。そして、まるいものかというと、それを投げた本人たちの所へとひとりでに戻っていた。そう、これこそがあの『モンスターボール』なのだ。

数分後、それぞれのウインディの背には椎那とミウ、胡睦とトゲピーのペアがまたがっていた。

「ウインディ、まずはトキワシティまでお願いね」

胡睦のその声に小さく返事をしたウインディたちは、“伝説ポケモン”と呼ばれるにふさわしいほど優雅な走りですぐ北にあるトキワシティへと2匹並んで駆けて行った。

途中の道路では野生ポケモンたちが時折飛び出してくるのだが、2メートル近くある大型のポケモンが走ったせいか、野生のポケモンとは全く出会わずに進めたらしい。

「ありがとう、ウインディ」

マサラタウンを出発してから約2時間半後、ふたりと4匹はトキワシティに到着していた。

さすがに町中までウインディに乗っていくわけにはいかないので町の入り口でウインディの背から降りていた。

「さて、どこに行こうかな」

胡睦はウインディをモンスターボールに収めながらあたりを見回

す。

「そりゃトキワの森でしょ？」

同じく、ウインディをボールに収めていた椎那が答える。

「……………違うよ。」

もう12時来てるから、お昼ご飯食べようかなって思ってるの」

「ふーん…………。じゃあ、ポケモンセンターは？ あそこにあるし」

椎那が指差す先には、赤い屋根と軒下に描かれた赤十字が特徴的なポケモンセンターが建っていた。

「…………トレーナーっていう証明書持ってないんだけど」

「ポケモン預けたり、泊ったりするときにいるんでしょ？」

「ご飯食べるだけならいらないよ、きつと」

どうやら、ポケモンセンターを利用するには証明書 所謂トレーナーカードが必要らしい。しかし、レストランに限っては所持していなくても良いようだ。なぜかは分からないが…………。

胡睦はしばらく考えてはいたものの、食欲には負けるようで、仕方なくという雰囲気を保ちながらポケモンセンターへと歩いて行った。そして、そのあとを追いかけるように椎那とミウ、トゲピーが小走りで付いて行くのであった。

それから数分後。椎那たちはポケモンセンター内にあるレストラ
ンのある一角で座っていた。

「ねえ、胡睦ちゃんたちはなんでトキワの森に行きたいの？」

ウエイトレスが用意してくれたポケモンフーズを食べながらミウが訊ねる。

それというのも、トキワシティまでの道中で、それらしき会話を椎那と胡睦がしていたからだ。

「もしかしたらヨルノズクとかホーホーとかがいるかと思って」

「ふーん。……ヨルノズク？」

「ヨルノズクって……」

何気なく胡睦が口にした鳥ポケモンの名。ミウとトゲピーはまさか、というような表情で顔を見合わせる。

「何か知ってるの!？」

胡睦が席を立ちそうな勢いでミウに聞いた。ミウは驚き、ケホケホとむせかえった。

それが落ち着いたころ、ゆっくりと口を開く。

「ヨルノズクってあたしのお兄ちゃんの友達なんだ。今、トキワの森にいるよ」

胡睦の顔がパアツと輝く。しかし。

「でも、野生のヨルノズクならどこにでもいるよね」

椎那の冷静かつドライな発言が胡睦を気落ちさせる。

森なら鳥ポケモンがいても何ら不思議ではない。むしろ、普通だ

るう。

「野生……じゃないよね、ミウ？」

「うん。トレーナーさんいたはずだよ。でも、それならなんで森に？」

頭に疑問符を出した2匹はヒントをくれそうな胡睦をジッと見る。しかし胡睦はそれはこちらが聞きたい、という表情で2匹を見ていた。

「そのヨルノズクって、あそこにある学校に行ってる？」

椎那が手がかりとなりそんな質問をミウたちに投げかけると、「うん」と肯定を示す答えが返ってきた。それに飛びついた胡睦は再び質問を投げかける。

「12歳？ そのヨルノズク！」

「え。う、うん」

「椎那！！！」

突如大きな声を上げた胡睦に一步引きながらもちゃんと答えを返すミウ。

希望の光が見えたのか、胡睦の目は輝いていた。そして、大声を出したために周囲から迷惑そうな、いぶかしむような視線を注がれていたが、気付く気配は全くと言ってもいいほど、ない。

「お姉ちゃん、うるさい」

静かにそう言い放つ弟は、どこまで冷静なのだろうか。

昼食を食べ終え外に出たふたりと2匹は、東西南北へと道が分かれた場所に設置された地図看板の前に立っていた。

「ミウ。こつちで合ってるよね、トキワの森」

椎那が指差したのは太陽が登る方向　すなわち東。

「違うよ。こつちでしょ、ミウ」

胡睦が指差したのは太陽が南中する方向　すなわち南。マサラタウンに向かう方向だ

「こつちだよ」

ふたりの方向感覚の無さに呆れ果てたミウが、1匹で歩き出したのは東でも南でもない北の方角。もちろん、トゲピーもそれに倣^{なま}って付いて行く。

「あれー……?」

これには苦笑するしかないであろう。

ミウはと言うと、少し離れたところで振り返って笑うふたりの様子を観察する。そして、待ちくたびれたかのように言い放つ。

「胡睦ちゃん、椎那くん。置いて行くよ!」

「ま、待ってよ。ミウ、トゲピー」

こうなれば、誰が連れて来られたのかも分からない。どんどん先

に進む2匹を追って、椎那と胡睦は駆け出した。

歩き出してから1時間。椎那たちは草木が鬱蒼と茂る天然の森の中にいた。

「ここが、トキワの森？」

まわりをキヨロキヨロと見渡しながら進む椎那。360度、見渡す限り、木、木、木。

初めて見る光景になんの言葉も出ないようだ。

「そつだよ。こつち……だったかな」

ミウは椎那の質問に答えながら、道無き道を探しながら進む。声に焦りが見えるのは気のせいだろうか。

数分が経過した頃、キヨロキヨロしながら歩いていたトゲピーの動きが止まった。どうやら見たことのない景色が映し出されているらしい。

「ミウ。道、合ってるよね？」

トゲピーが半信半疑にミウへ問うと、なんとも分かりやすい答えが返ってきた。

「たぶん」

「え？」

ミウの答えを聞くやいなや、全員の手が止まる。

「あ、合ってるんでしょ、ミウ？」
「分かんない」

再度、ミウに胡睦が問うが、頼りない答えが返ってくる。声のトーンもいくらか落ちていっているように感じる。

「もしかして……迷った？」

椎那の質問に、数秒の空白の後、「うん」と言っただけでもない答えが返ってきた。

「ちょ、ちょっとどうするの、ミウ！？
スピアーに襲われてもしたらあたしたち……」

右も左も、東西南北もわからない森の中で、完全に気を取り乱した胡睦が叫ぶ。

取り乱した姉を抑える椎那だが、自身も動揺しており、完全に落ち着かせることはできなかった。

「だ、大丈夫だよ、きっと」
「何が大丈夫なの、ミウ？」

この場にはいないはずの声かミウの後方ですが、ミウは気付かぬままその質問に答える。

ミウの後ろにいるポケモンに気が付いた椎那と胡睦はそのポケモンに目が釘付けになっていた。

「きつとお兄ちゃん達が見つ付けてくれ……ん？」

ようやくその声に違和感を抱いたのか、ミウが後ろを振り向く。

「お、お兄ちゃん！？」

ミウが振り向いた先にはとげとげした黄色い体のポケモン　サ
ンダーズがミウのことをじっと見つめていた。

大きさ的には自分達より少し小さめだが、それでも後ろ足だけで
立ちあがられると確実に抜かれる。　。　そんなポケモンを前にする
と、足はそれ以上前へ進もうとはしなかった。

「ユウイ。おてんばな妹は見つかったか？」

突如、木々に覆われているはずの空から声がした。

空を見上げて木が邪魔でその正体はつかめなかった。しかし、
どこかで聞いたことがある　　椎那はそう思っていた。

「ああ、いたよ。トゲピーも一緒。

それと……君がよく知っているだろう人間も一緒だよ」

“ユウイ”と呼ばれたサンダーズが空に向かって言葉を返す。

そして「はあ！？」と言う驚きの声とともに、木々に埋もれた空
から舞い降りてくる1匹の鳥ポケモン。

「誰だよ、ユウイが言う人間って？」

「お言葉ながら、僕の目の前にいるけど？」

目の前？ と首をかしげながら視線を別の方向へと落とす先程舞い降りてきたポケモン、ヨルノズク。地上に降り立てばユウイと同じかちょっと上くらいの大きさだろう。

椎那と胡睦を見つけた時、その大きな目に驚きの色が加えられた。

「し、椎那、胡睦！？ なんでお前らがここに！？」

その頃の椎那たちは突然のことに頭がうまく働かず、立ったままその一部始終を眺めていた。

一方ミウとトゲピーはユウイに見つからないよう、ゆっくりとふたりの後ろへと隠れようとコソコソ怪しい動きをしていた。

「おい。何、固まってるんだよ」

「ヨルノズク……」

ヨルノズクが嘴で頭を突いたおかげで、痛かったがなんとか正気を取り戻した胡睦。おぼろげな声でそのポケモンの名を呼ぶ。

「何だよ？」

「何でアンタがこの森にいるのよ！！」

再び絶叫する胡睦。それに対するヨルノズクの答えは。

「スピアーたちが近寄ってくるから黙れ」

質問とは全く関係のないモノだった。

それに少し怒りを感じた胡睦。足下にあった小石をコソソとどこかにけり飛ばしてしまった。

そんな胡睦の行動にお構いなしのヨルノズク。話し相手は後方にいるポケモンに変えられた。

「ユウイ、さつさとこの場から離れようぜ。またスピアーと出くわしたら困るしさ」

「そうだね……。そのふたりも付いて来て。ここはスピアーたちの縄張りだから危ないんだ」

ユウイが不満げに口をとがらせている胡睦と、未だ啞然としている椎那に声をかけた。

「行こう。椎那、胡睦」

「名前、なんで!?!」

ヨルノズクがふたりの名を呼んだのはたったの1回。聞き返すような仕草もなかったはず。

そして何よりも不思議なのが、ユウイがふたりのことを昔から知っているような雰囲気であることだ。何故だか懐かしい目でふたりを見ているのだ。

「ねえつてば。えーと……」

「僕は『ユウイ』。理由は後で話すよ。今は僕らに付いて来て」

自分の名前だけふたりに伝えると、ヨルノズクと共に道なき道を進んでいく。その後ろを先程自分達の陰に隠れてようとしていたミウとトゲピーがちょこちょここと追いかけていた。

わけも分からず、4匹のポケモンに付いてその場から離れる椎那と胡睦。

道こそ分からないが、明らかに森の奥へ奥へと入って行っている

ように感じた。

そしてそのカンは間違いではなかった。

歩きだして10分ほど経った頃。

ちよつとした茂みを乗り越えると、ようやく先頭2匹の歩みが止まる。

最初は迷子になってあたふたしていたミウだったが、この付近には馴染みがあるらしく、自分の体ほどある大きめの尻尾をふわふわと揺らしていた。

トゲピーも尻尾こそないものの、両足でピヨンピヨンと楽しそうに跳ねまわっていた。

ユウイは自分の立っていた場所から少し右に避けると、椎那と胡睦にも目の前の風景が見えるようにする。

そこは太い切り株を中心に、緑色の木々が円形に立ち並び、木々からは木漏れ日が差す神秘的な空間であった。

地面には色とりどりの花が咲き乱れ、先程まで誰かがいたようなそんな足跡も見つけられた。

そんな美しい場所がこの鬱蒼としたトキワの森の中にあつたこと自体が驚きで、気づかないうちに一歩、また一歩とふたりは歩みを進めていた。

その後ろをゆっくりとユウイは付いて行くのだった。

2話 避暑のため、涼しい森へ（後書き）

さて、この場所とは一体何なのでしょう？

ミウ 「……ど……」

ここは後書きの世界です。戻りなさい、ミウ。

ミウ 「はい」

3話 木漏れ日の下で…

「じ、ここは……?」

「ここは僕達が今住み着いている場所。綺麗だろ?」

驚きを隠せない胡睦こむつと目を輝かせている椎那に簡単に説明を加えるヨルノズク。そこへ甲羅を背負った水色のポケモンが東側から駆け寄ってくる。

「お帰り、ユウイ、ヨルノズク。ミウたちは見つかった?」

「うん。椎那や胡睦と一緒にいたんだ」

「え、椎那たちと?」

疑問符を浮かべる水色のポケモン。ユウイがそのポケモンにも見えるようにと後ろへと下がる。と、椎那・胡睦と目が合った。

「あ……、本当だ。椎那たちだ」

でしょ? とユウイが驚いているその顔を軽く覗く。

少し反応が遅く、のんびりしているようにみえるこのポケモンカメールである。その名の通り、カメに似たポケモンで、まるい頭からツンと生えた耳とフサフサの尻尾は長寿の証であるらしい。

「なんで、あんたまでここにいるの?」

「と言われても……」

気の強い胡睦に問われ、困惑した表情を浮かべるカメール。言い返したくても、言い返すのは苦手らしい。

穏やかな口調で諭すように胡睦に言い返す。

「僕はずいぶん前からこの森にいるんだよ？ ユウイたちが来るよりも前から」

「本当だよ。」

あたしとお兄ちゃんが来る前から、カメールはこの森にいたもん」

疑いのジト目でカメールを見ていた胡睦にミウが補足する。ミウの説明でもあまり納得していない胡睦。ふうんと軽く流してしまった。

「でも、縄張りは持ってなかったけどな」

ヨルノズクが「自分は持っている」と言わんばかりに偉そうに付け加えた。だが、その言い方にムツとしたのはカメールだ。

「じゃあヨルノズクは持ってるの？ 縄張り」

「この場所がそうさ。なあ、ユウイ？」

ヨルノズクをキラキラとした、尊敬の眼差しで見つめる椎那。

そんな椎那に懇切丁寧に……とまではいかないが、胡睦の時とは明らかに違う態度で答える。どうやら、胡睦より椎那のほうがだいぶ好みらしい。

そして、褒められたことにより天狗になっているのは言うまでもない。

「僕が見つけた場所だけだね」

「そうだよ。ここはユウイが見つけて縄張りにしたんじゃないか」

忘れていないよな、と鋭い釘を打つユウイと、先ほどバカにされ

たのが悔しかつたカメールが口をそろえて抗議する。ヨルノズクも2匹に言い返され、バツが悪そうに視線を明後日へと向ける。

そんなヨルノズクを軽く睨んだ後、ユウイが思い出したかのように口を開く。

「確か、なんで僕がふたりの名前を知っているか知りたかったんだよね、胡睦」

「そ、そうそう。なんで知ってるの？」

ヨルノズクに聞いたの？」

名前を呼ばれ、ハツとした胡睦が再度、疑問を投げかける。

「違うよ」

「え？　じ、じゃあカメール？」

きっとそうだろう　そう思ったのにも関わらず、否定され困惑の表情を浮かべる。

そしてもう1匹の知り合いの名を出すが、それも首を振って否定された。

「裕弥ゆういだよ。

裕弥から聞いたんだ。何度もふたりのことを話題にして話していたから」

口が開いたまま塞がらない、というのはこのことであろうか。ふたりともポカン、と口を開けたまま固まってしまった。

なぜそこまで驚くのか。

実は、“裕弥”は椎那と胡睦の兄であり、ヨルノズクとホーホー、

カメールをパートナーとしていた人物である。しかしカメールは、ゼニガメから今の姿に進化した時とほぼ同時期に裕弥のもとを離れたらしい。詳しい事情はよく分からないが……。

「じゃあ、ユウイもお兄ちゃんと一緒の小学校に行っていたの？」

あの“抜け穴”の向こうにある学校に」

「そうだよ。まだ通っている身ではあるけどね」

大人びた優しい笑みを椎那に向け、そのまま話を続ける。

「僕も裕弥やヨルノズク、カメールと同じ12歳だし、ね」

お兄ちゃん達と同じ……。

そうポツリとつぶやいた10秒後、「ええ！」と大げさに驚く胡睦。

「な、なんだよ？」

「だ、だって！ ユウイのほうが、あんたよりずっと大人っぽいし……！」

「……悪かったな、子供染みてて」

いきなり大声を上げた胡睦にヨルノズクは不快そうに理由を尋ねる。胡睦とヨルノズクのやりとりを見て、ハハハと苦笑を浮かべるユウイとカメール。その間、椎那はミウとともに傍観していた。

「あ、ユウイ！ 戻ってたの？」

どこからか可愛らしい声が聞こえてきた。名前を呼ばれた本人は、声の聞こえた方向を振り返る。

そこにはまるい体でまるい耳を頭に付けた水色のポケモン マ

リルと、黄色い体で赤くまるい頬を持ったピカチュウが立っていた。

「あ、マリル。ピカも一緒だったんだね」

「うん。ちよっと遊びに行っていたから。ね、ピカ？」

「トゲピーは？」

カメールが2匹の姿を見て声をかけた。『ピカ』と呼ばれたピカチュウは、マリルの問いかけを無視し、別の質問をユウイに投げかける。

「しかも、なんで人間がいるの？ ふたりも」

人間が嫌いなのか、それとも何か嫌なことがあったのか、額にしわを寄せてまで不機嫌さをつのらせている。

「トゲピーはこの辺りでうろろしているよ。」

それにさ、そこまで拒絶しなくてもいいんじゃない？」

ユウイの返事を最後まで聞かずにトゲピーを探しに行くピカチュウ。ガサガサと近くの茂みに入って行った。そんな状態のピカをユウイは困ったようにただ見守っていた。

「気にしないで。あいつ、人見知りなんだ 極度の」

ピカチュウとともに戻ってきていたマリルが椎那と胡睦に話しかける。友達の行き先を気にしてはいたが、一緒に行こうとはせず、その場にとどまっていたのだ。

「ぼく、マリル。さっきまでいたピカチュウ、『ピカ』って言うん

だ。
ピカはね、トゲピーのイトコなんだ」

椎那、胡睦へと戻すと、笑顔で語りかけるマリル。
自分の好みによって口調を変えるどこぞの鳥ポケモンと違い、とても優しい男の子ようだ。

「ここはね、ぼく達の住処なんだ」

マリルは木に囲まれた円状の場所を見渡しながらそう話しかけてくる。

それと同時にマリルの近くの茂みが大きく動き、水色のワニのよ
うな格好をしたポケモンと藍色の背中にクリーム色のお腹をしたツ
ートンカラーのポケモンが同時に出てきた。その後ろから頭から葉
っぱの生えた可愛らしい薄緑色のポケモンがオドオドとしながら、
先頭2匹の真後ろに隠れるように出てきた。

「ユウイが来るまで誰も見向きしなかつたくせにさ。
ユウイがここに縄張り張ったとたん、奪おうとするヤツらが出てき
たんだよね」

ワニのようなポケモンが少しばかり不機嫌そうな表情を作り、そ
の横でツートンカラーのポケモンがうんうんと同意している。

「でも、そいつらはユウイやヨルノズクたちに何度も追い返されて
いるけどね」

呆れたように話しかけてきたのは2本足で立つ白い犬のようなポ
ケモン。尻尾の先は筆の先のような形をしている。そのポケモンの
隣ではフォルムは少し小さいが、全く同じ種類のポケモンが兄と思

しきポケモンの手をギュツと握っていた。

「この森でいちばん素敵な場所をとっているもの。うらやましいんだと思うよ？」

白い犬のようなポケモンの声に反応したのは、頭に赤い花を2つ付け、スカートのような葉っぱを身にまとった緑色のポケモン。その隣には濃い茶色の長い耳を頭に付け、太い尻尾を持った茶色のポケモンが尻尾を使って立っていた。

いきなりたくさんのポケモンが出てきたせいで困惑の色が隠せないふたり。

キヨロキヨロと出てきたポケモンたちを見渡しながら、それぞれの特徴を探していた。

その様子を見て、水色のワニのようなポケモンが声を出してふたりを自分に注目させた。

「ぼくはワニノコ。ね、コラム？」

ワニノコの意味ありげな質問はさて置き、それを皮切りに、次々と軽い自己紹介が始まる。

「ボク、ヒノアラシ！ こっちが妹のチコリータ」

ワニノコと一緒に出てきたツートンカラーのポケモン　ヒノアラシが妹のチコリータの分まで紹介する。チコリータはと言うと、相変わらずオドオドとしていたが、ペコリと頭を軽く下げたのが見えた。

「僕はドーブル。で、この子が弟の、」
「トナです」

白い犬のようなポケモンはドーブル。

ドーブルは繋いでいた手を少し上にあげること弟・トナに自己紹介させていた。ただ、トナの声は細く聞き取りにくかったのとらしい。

「わたしはキレイハナです」

「あたしはオタチ！」

赤い花を頭に付けたポケモンがキレイハナ。その隣にいた尻尾を使って立っていたポケモンはオタチ。

見たことあるようでないようなたくさんさんのポケモンたち。数えてみると、7匹もいるらしい。

背丈も性格もバラバラな7匹の名前だけの自己紹介の後、ミウがぴよこんと椎那と胡睦の前に出ると分かり切っているような補足を付け足す。

「みんな、この場所の住人なの！」

あとね、という言葉とともに後ろを振り向くと、近くにいる兄の姿を横目でチラチラと確認しながら付け足す。

「あたしとトゲピーね、風に飛ばされてマサラタウンまで行っちゃったの。それを椎那くんたちが助けてくれて、ここまで連れてきてくれたんだ」

本当はこれが言いたかったんだな、とワニノコとドーブルはお互

い納得していた。一方のミウはこれで何も言われない、とでも言い
たげに尻尾をふわふわと揺らしている。

上機嫌な妹を見たあと、椎那の方へと顔を向けるユウイ。

「ミウとトゲピーが行方不明になっていた原因は本人からのちのち
詳しく聞くとして」

ミウが変な声をあげると、それを聞いた7匹+カメールは苦笑を
浮かべる。しかし、ユウイは完全に無視して話を続けていた。

「椎那たちはどうするの？」

うーん、と顔を見合わせる椎那と胡睦。

「どうすると言われても、特に何も。ねえ？」

「うん。おうちに居続けるのも無理があるし……」

そう。通帳にお金はあっても、日々の生活には無理が出始めてい
るのだ。

自炊するにしてもガスを使ったり、刃物を扱ったりするので、と
ても危険。これまでも、ガスを使って家が焦げかけたり、包丁が床
に突き刺さったりと散々だったのだ。

この5か月、大怪我をしなかっただけでも奇跡と言えよう。

「そっか……」

ユウイが何やら考え込んでしまったその間に、この場所の住人で
あるう桃色の天使のようなポケモンが戻ってきた。

「お帰り、ピクシー」

どうやらピクシーと言うらしい。

マリルが明るく声をかけるが、ピクシーは見向きもしない。それどころか、近くにいたオタチにちょっかいを出し始める。

「ピクシー、お帰り！」

聞こえなかったのだらうと無理やり思いこんで、再度声をかけるが、完全無・視。相手にする気がないようである。

マリルはあとため息をつくと、オタチとピクシーの間に割り込み、ちょっかいをやめさせた。

「返事ぐらいしてやれよ、ピクシー」

ヨルノズクも呆れて口をはさむが、それでも効果なし。

ヨルノズクも腹が立ってきたのか、徐々に声が荒々しくなる。周りのポケモンたちの「またか……」という呆れた様子からすると、普段からこのような感じらしい。よくケンカが起きないな、と思っていた。

しばらくして、どこからか虫の羽音が聞こえてくるようになった。よくよく聞いてみると、それは何十匹もの数が羽ばたいているような音で、しかも椎那たちがやって来た方向から聞こえてくる。

「なんだろう……」

椎那と胡睦は不安に駆られるが、そばにいたポケモンたちの様子

は違った。不安よりも焦りを感じているようにみえる。

マリルはトゲピーを探しに行った。ピカの帰りがまだなことを心配し、近くから声が聞こえないか耳を^{そはだ}敬て辺りの音を集中して聞いていた。

ジツと羽音を聞いていたユウイはただ一言つぶやいた。来るね、と

いったい、この不穏な空気の正体は何なのか。なぜここまで焦り、落ち着きがないのか。そして、何が来ると言うのか……。

今まで森の中に入ったことがない椎那と胡睦からすれば、その空気が恐怖心でしかない。

そして、その羽音の正体は次のヨルノズクの言葉で知らされる。

「スピアードな」

その場の空気ががらりと変わった。それも、凍てつくような空気に。ただ、しっかり者の兄という立場にいるワニノコとドーブルの2匹は目を据わらせていた。

「ニビに急いで！ 僕はトゲピーとピカを探しに行く。

カメール、ヨルノズク、みんなと椎那たちを頼むよ！」

ユウイはその場に端的な指示を与えると、ピカが向かったであろう方向へと駆けだした。トゲピー、ピカと合流するために。

「みんな、ニビへ行け！ ピカのことはユウイに任せて。早く！！」

ヨルノズクはユウイに与えられた指示を再度叫び、自分は空中へと飛びスピアードの位置を確かめる。

それとほぼ同時にダブルが固まっている年下の仲間たちの背中を押し、ニビシティに向かうよう催促していく。仲間の足が全て動き出したころ、自分もそれに合わせて走り出した。

「椎那、胡睦。こっちだよ」

逃げ道が分からず戸惑っている姉弟に逃げ道を指し示し、自分もカメール一緒に走って走り出す。

それを確認したヨルノズクはスピアーから守るため、ふたりと一匹の数メートル上空を飛びながらニビへと向かった。

空を飛びつつ、後ろを振り向く。そして、先ほどまで自分たちがいた場所に誰もいないのを確認すると、高度を下げ椎那たちの真上まで来ると、そのまま飛び続けた。

4話 旧友との再会

スピアーから逃げるため、走ってニビシティまでやってきた椎那と胡睦の姉弟と11匹のポケモンたち。うち1匹は空を飛んでいたが。

「こ、ここは...?」

荒く息を切らしながら周りを見渡す胡睦。

「ニビシティのはずれさ。何かに追いかけられた時はたいていここに来るんだ」

空を悠々と飛びまわりながら椎那と胡睦を追い立てていたヨルノズクは息が切れるはずもないわけで。先ほどと打って変わらぬ調子でかつ、つまらなさそうな調子で説明を加える。

「まったく、あいつ本当にここに来るんだろっな」

ヨルノズクは今しがた抜けてきたはずの森を睨みつけ、そしてつぶやく。

「どっぴいっこと?」

時間も経ち、だいぶ呼吸も落ち着いてきた椎那がその独り言を疑問に思う。

「別に。ただスピアーたちに襲われて毒喰らってないだろうな、って言うだけの話」

ヨルノズクにしては単なる軽口であろう。だが、他の者もユウイを慕ったり、ピカヤトゲピーのことを本気で心配したりしている者からすれば、それは軽口では済まない。

「じゃあ何？」

ユウイもピカもトゲピーも無事には戻らないって言いたいの？」

ヨルノズクの一言ですぐケンカ腰になったのはワニノコである。キツと鋭い目でヨルノズクを睨みつけている。

「……んなこと言っていないだろ」

「言っているようなもんじゃん！」

ワニノコの言葉に否定を示すが、マリルがその否定に否定をする。ヨルノズクの目に徐々に面倒くささが表れてきた。それと言うのも、ヨルノズクの軽口にいつも最初に飛び乗るのがワニノコだからだ。

はあとため息をつくともヨルノズクは負けじとワニノコとマリルを睨み返す。今にも火花が散りそうな勢いである。

些細なことから大きなケンカになりそうな時、いつもみんなのリーダーシップを取っていたユウイがそれらを治めていた。

しかし、今現在ユウイはいない。

ユウイと同年齢であるカメールは止めようとはするものの、振り払われるか、聞き流される。それ以上強攻手段に出ることはまずない。

同じく同年齢であるヨルノズク本人がケンカしているのだから、止められるわけがないし、自分からやめるわけもない。

そんなとき、いつも積極的に止めようとするのがユウイ達より2つ年下のダブルであった。

「やめなよ、ワニノコ、マリル」

「だって、ヨルノズクが悪いんだよ！

ヨルノズクが謝んなきゃやめない!!」

「ぼくだって！」

「な……！ 仕掛けてきたのはそっちだろ!？」

そっちが悪いんじゃないか！」

双方ともに言い争いが激しくなっていく。

言っても聞かない……。

そう思ったダブルは次の瞬間、言い争いをしている3匹の前に“スケッチ”しておいた“かみなり”を降らせた。

争っていたのは、水タイプのワニノコ・マリルと飛行タイプのヨルノズクであるから、でんきタイプの技である“かみなり”は相性的にも抜群に良く、威力そのものが高い。

突然目の前に振ってきた“かみなり”に怯み、硬直してしまったワニノコ・マリルと違い、ユウイのおかげででんき技に多少耐性があったヨルノズクはダブルに憤りを感じ、キッと睨んでいた。

「どうしたの、ダブル？ 雷が落ちたような音がしたけど」

タイミング良くユウイが戻ってきた。それも、ピカとトゲピーとを連れて。

「ヨルノズクが……」

「ヨルノズクが？」

ドーブルが横目でそつとヨルノズクの様子をうかがうと必死で「言うな」とでも言うような表情でドーブルをじっと見ていた。

何の駆け引きもなく言わないでおくのは面白くない、と思ったドーブル。それを目で訴えると、なんとなく察した様子のヨルノズクはすぐくいやかな顔をした。……が、それも一瞬のことで、それでも構わないという様に頷いた。

そんなことが行われているとは知らないユウイは、近くに寄ってきていたミウを構いながら、ドーブルの次の言葉を待っていた。

「やっぱり何でもない」

「そう？」

不思議に思いながらも一応会話は終了させるユウイ。後でミウが誰かに聞けばいいかというような様子もつかげえる。

一方、ドーブルはというと、ヨルノズクのもとに駆け寄り、先ほどの視線だけでの会話の内容を再確認していた。その結果、ヨルノズクは隠し持っていた例のものをドーブルに引き渡すことになった。

「ドーブルと駆け引きしちやいけないうって自分で言ってたくせに」
「放つとけ」

いつの間にかヨルノズクのそばまできていたカメールがからかいの声をかける。

「そうそう。さっきピカに聞いたんだけど、しばらく森には戻れそうにないうってせ」

ピカから聞いたところ、森の中はスパイ達が大量にたむろっているらしく、森にさえ迂闊に近づけないようだ。

「はぁ？ またここで一夜を明かすのか？」

ドールとの駆け引きのせいもあるのか、いつも以上に不満そうな態度をあらわにしていた。「また」とある以上、以前にもこのようないことがあったのだろう。

「僕たちだけならともかく、椎那たちがいるのに無理だよ」

「じゃあどうすんだよ？」

「え……？」

聞かれて初めて返答に困るカメール。

そう言われれば、どこに泊まればいいのかだろうか。

「ポケモンセンターを借りるんだよ」

ユウイがカメールの心を察したかのように代弁する。

「椎那も胡睦もそんな年齢じゃないぞ」

ヨルノズクの言い返しももつともである。回復をするのにも宿泊するのにも、トレーナーとしての証が必要なのだ。

「大丈夫さ。なんなら彼の家を借りてもいいんだけど……借りるのはあれだし」

“彼の家”と聞いて、何かを察したカメールが声にならない叫び

声をあげるが、それを無視して話を進める。

「つまり……あいつの手を借りて宿を取るわけか」
「あたり」

まんざらでもない顔を友に向ける。と同時に、友の顔は渋くなる。ユウイ、ヨルノズク、カメール共通の知人であることは間違いないようだ。

「僕、パス。なんでわざわざあいつの手を煩わせなきゃいけないんだ」

「僕の場合、借りがある」

そんなこと知るか！ と吐き捨てるヨルノズクを横目に、椎那と胡睦へと話し相手は変わる。

「ケンの家がどこにあるか覚えてる？」

久しぶりに聞いた聞き覚えのある名前に驚くが、姉弟は顔を見合わせて首を横に振る。

「そっか……。困ったな」

「オレがどうかした？」

聞きなれない声があると同時に、パツとその方向へと顔を向ける。その視線の先には体が赤く尻尾に火をともしたトカゲのようなポケモンを傍らに連れた少年が立っていた。

「オレがどうかした、ユウイ？」

再度同じ言葉を放つ少年トレーナー。彼こそユウイが先程話題に出したケンなのだ。

「なんで、ここに……？」

いきなりすぎる登場でその理由を探ろうとするユウイ。

「“なんで”って 森の近くが騒がしいってリザードが言うから様子見にただただだよ。そうしたらおまえらがいたってわけ。でも、珍しいな、森から出てくるなんて」

何かあった？ とさぞかし面白そうにユウイに問うケン。

「おまえん家に泊める」

理由も状況説明もなく、単刀直入に言い切るヨルノズク。

いくら友達とは言え、こんなに大勢を1つの家に泊めることはさぞかし難しいであろう。

それ以前に、態度が悪すぎやしないか。

「何？ いきなり……。」

というか泊めるわけ、ないだろ。お前みたいな態度デカイやつ」

ケンは不機嫌そうにヨルノズクを睨む。

それはリザードと呼ばれたポケモンも同じようだ。

「泊めてくれなくてもいいから、ポケセンで宿取ってくれない？ ちょっと森に帰れない状況になっちゃってね。」

それと……、僕の後ろにいるふたりにいい加減気付かないのか？」

ユウイがふたりの間に割り込み、別の意見をケンに向ける。ケン「ふたり？」と聞き返し、呆れ返っているユウイの後ろを初めて見た。すると見たことがある顔がふたつ並んで現れた。

「おー、もつと珍しい顔があった。久しぶりだな、シイナ、コラム」

ユウイをよけて、ふたりの近くによるケン。その隣をリザードがトコトコとついて行く。

「どうしたんだ？ こんなところまで来て」

「ミウとトゲピーを連れてきたら、こうなっちゃった」

「……え？」

椎那は一生懸命説明したつもりではあるが、ケンには意味が伝わらなかった。

椎那の返答を聞き、さすがにそれでは不備が多すぎて伝わらないなど感じたユウイ。

見事なまでに代弁し、ケンに事のあらましを伝えることに成功した。

「ふーん。そうだったんだ。そういうことなら別に頼まれてもいいよ、イトコだし」

うんうんと頷き、了解した、と言うようにふたりのイトコのほうを向いて笑いかける。

その様子を見たヨルノズクはしめた、と思ったのか、再度同じ言葉を並べた。

「じゃあ、おまえん家にも泊めてくれ」

「だから泊めるわけ、ないだろ。誰が夕飯作ると思ってたんだよ！
どうせ、いつもはこの辺りで寝ているくせに」

「……なんでお前が知ってるんだよ？」

ヨルノズクの言葉を一蹴したケンは、ヨルノズクの疑問に応える
べく、ツンツンと隣にいるリザードを指差す。

「お前の仕業か」

ヨルノズクがジトツとリザードを睨む。

「オレはユウイが来たときに聞いた」

御託をいろいろ並べようとしたが、そばにいた本人ユウイから「けして
言っていない」と軽く一蹴された。ユウイ当人は、興味をリザード
からケンに移していた。

「でさ、誰が作るの、夕飯」

「今日両親ともに帰らないらしいからオレが作らないといけないん
だよ あいつの分まで」

あいつ。すなわち、下にいる兄弟の事である。

仲が悪いわけではないが、自分が夕飯を作って世話しなくては
いけないらしく、そうとうご機嫌を損ねている。

「まったく作っていけっの」

未だにぶつぶつと文句をまき散らすケン。そして、リザードと共

に来た方向へと戻っていく。

ふと途中で振り返り、見送っているような状態にある椎那、胡睦に声をかける。

「宿、取るんだろ？ 付いてきなよ。そこでどうするかまた考えよう」

ケンが来てからもずっと不安そうにしていたふたりの顔がパツと輝いた。そして、小走りにケンのそばへと近づいて行くのであった。

あとに残されるはユウイ率いる森の仲間たち。

この数十分後、今晚の宿を取り終えた椎那・胡睦により、これから始まる旅に付いて行く者と、森に残り木漏れ日の楽園を守る者とは分かれるのであった。

5話 旅の準備 〈トレーナーカード〉

ポケモンセンターに着いた椎那と胡睦とケン。

ケンの中には入ると同時に、ふたりとリザードに「そこで待ってる」と手で指示を出し、自分はスタスタとジョーイ ポケモンセンター内にいる受付担当兼医師である女性。ちなみに桃色のナース服を着ている のもとへと歩いて行った。

よほどの顔見知りなのか。ジョーイはケンに対しにつこりと微笑んでいた。

「あら、こんにちは。回復に来たの？ 賢司くん」

賢司^{けんじ} すなわち、ケンの本名である。

かつてイトコであり、親友でもあった裕弥^{ゆうや}が幼いころからそう呼んでいた名残で、現在でも彼の愛称^{あだな}として定着している。

そしてそれは、年下イトコの椎那^{ふたり}・胡睦からはもちろん、彼を取り巻く人々 両親・弟・親友・クラスメイトなどからも当たり前のように呼ばれており、それが本名だと思いついてしまっている者もいるほどだ。

裏を返せば、本名で呼んでくれる人は数少ない。ニビシテイのジョーイもその数少ないうちのひとりである。

「違いますよ。今日は宿を取りに来たんです」

そう言いながら、腰に巻いていた黄色のポシェットから財布らしきものを取り出し、トレーナーカードと呼ばれる長方形の札をジョーイの前に提示する。

ジョーイはそれを受け取り、何かの機械に読み込ませると賢司のもとへと返した。

「またご両親とケンカでもしたの？」

「今日ばかりは違います」

どうやら、両親とケンカしたときは毎回のようここに泊まりに来るようだ。

そのせいでジョーイと顔見知りとなってしまうたらしく、ときどき雑談や笑いを交えながら早々と手続きを済ませてしまった。

「はい、部屋のキー。失くさないようにね」

「ありがとうございます」

言っておきますけど、あいつと違って失くしたことはないですからね、オレ」

ジョーイの軽口にムツときたのか、鍵を受け取るついでに事実を告げると踵を返して椎那たちのもとへ戻ってきた。

「ほら、キー。失くすなよ」

ジョーイが賢司に言ったように椎那に言いながら鍵を手渡したのは、部屋に入った後だった。

「受付で渡したら怪しまれるだろ？」

「さ、早くユウイたちのところへ戻ろうぜ」

椎那と胡睦が背負ってきていたリュックを下すのを一通り見届け

ると、ひとりドア際まで向かった。リザードは窓の外から室内の様子をうかがっている。

「……ねえ、ケンくん」

「ん？」

ドアノブに手を掛けたまま後ろを振り向く。

そこにはリュックに手を置いたまま、何やら神妙な顔つきをした椎那がいた。

「ぼく、旅に出てみたい」

数秒の沈黙ののち、「はい？」と言う賢司の声が聞こえた。

「だって、家に帰っても仕方がないんだもん！

いつまでも近所の人にお世話になっているわけにはいかないんだもん！！」

まっすぐに賢司の目を捉えて、必死に訴えかけてくる椎那。

両親と兄を失ってからこの半年もの間、いったいどれだけの人に助けられてきたのか。

どれだけの事の面倒見てもらってきたのか。

それは計り知れないだろう。

だからこそ、椎那の訴えは切実なものになる。

「ちよ、ちよっと待って。いきなり過ぎるだろ、それは」

「いきなりじゃないもん。ずっと、ずうっと前から思ってたことなんだもん！」

今までずっとたまっていたものが、今回の一連で一気に破裂したのだろう。

いまなら目の前にしっかりと話を聞いてくれるイトコがいる。そして予想通り、自分たちの思いを受け止めてくれようと働いてくれた。

「だ……、だったら、オレン家に来いよ。それならいいだろ？別に知らない人に迷惑かけているわけじゃないんだから。な？」

誰であつても何の前触れもなく、そんなことをいきなり言われれば慌てふためくだろう。

それも、今年小学校に上がったばかりの子どもが言っているのだから。

普通ならスリルを求めた冒険心の高い子どもが言う冗談だと受け止め適当に返事を返すところだ。

しかし、賢司は違う。

ふたりの身の上を知っているというのもあるが、こういう時に冗談を言うような子どもではないと知っていた。だからこそ力になつてやりたいと言うのがあつた。

自分の家なら、母親も許すだろうし、何より弟も喜ぶ。そう思つての提案だったが、椎那は首を横に振る。

「もう、誰かに迷惑かけるのはイヤなの。自分で何とかしたいの……あたしも。あたしもジリツしたい。ケンくん、なんとかならないかな？」

胡睦まで……。

自分を見つめてくるふたりの目に、今までに見たことのないくらい強い意志が見て感じ取れた。

(これ以上何を言っても無駄だろうな。
兄譲りの意志の堅さがこういう時はものすごく迷惑だな)

兄である裕弥に似たふたりの確固たる意志の強さに賢司は多少嫌な顔をしたが、すぐに元の表情に戻る。　　がしかし、

(　　っておい。ジリツって　自立のことだよな。
オレより先に上に行く気がよ……。あなどれねえ……)

賢司自身、一時期旅に出ていたが、それはジムリーダーからジムバッジをもらうためだけのバッジ集めの旅。

街から街へは相棒の飛行ポケモンに乗せてもらってのお気楽な旅だった。それでも実力はなかなか高いというのだから、不思議と言えば不思議である。

そして、旅中でも家でも自炊なんぞしないし、自立なんてもつてのほか！　というのが賢司の性分。　　だったのだが、親が共働きで帰りが遅くなり出したこの数年。

朝作られた冷たいものを食べるより、下手でも自分で作った方がいいのではないかと考え、現在に至る。そして今、彼の頭の中にはいくつかのレシピが存在している……。らしい。

そもそも自立するなら自分の身の回りのこと　食事云々をすべて自分で賄わないといけないはずだが……。それを4歳も5歳も離れたイトコがやりたいと言っているのだから、どこか劣等感に似たものを持つ賢司。

余談だが、その時の賢司は（『自立』と言う）言葉だけを知っていて意味までは知らないとは露ほど思っていなかった

これではいけないと、軽く腕を組み、とっさに思いついたいくつかの提案を椎那たちに持ちかける。

「じゃあさ、オレと一緒に旅に出る？」

「ううん。お姉ちゃんたちとだけでいきたい」

首を振り嫌だと拒絶する椎那と胡睦。

イトコに拒絶され、どこからか何かがはがれ落ちる賢司。それどころか、『ガーン』と書かれた巨大な岩が賢司にのしかかっている。

なんとかそれらを振り切り、次なる提案を持ちかけた。

「だったらリザード連れてく？」

「いい。大丈夫」

賢司にとって最高のパートナーであるリザードをお供に付けると言いだす。しかし椎那にも胡睦にも軽く拒絶される。

外にいたりザードはほんのちよっぴりショックを受けていた。

その後も1、2個提案を持ちかけたが、すぐさま却下されることが続いた。

何がしたいんだ、こいつら……と賢司は心の奥深くでつぶやいた。

だが、心の中でつぶやいた言葉をはっきりと口にしていたことに賢司は気付かなかった。

口は悪かったが、ヨルノズクほどではないし、自分たちのことを心配してくれていると思った椎那。すぐさまその疑問に対する答えを賢司に教えた。

「ユウイと、ヨルノズクと、カメールたち」
「え？」

うつむき加減で考えあぐねていた賢司は、驚き顔を上げる。

「だから、ユウイたちとなら大丈夫でしょ」

ね？ と姉弟で顔を見合わせ賢司に了承を求める。

「確かにそれは心配いらないとは思っけど……どこで泊まる気？
まさかとは思っけど、野宿だけで過ごす気じゃ……」
「そのつもりだけ……」
「ダメ？」

無垢な表情をふたりして賢司に向けたが、賢司は。

「ダメに決まってるだろ！
風邪ひいたりしたらどうするんだよ！！
それに、街中でも野宿する気か！？」

大声を出し、軽く跳ねのけた。怒りの表情も垣間見られる。それと、同時にふたりの顔はみるみるうちに悲しみの表情で満たされていく。椎那に至っては目に大粒の涙をためているほどだ。

(しまっ……。やっちゃったよ、オレ)

はあ……、と深くため息をつき、先ほど椎那達にぶつけた言い方を反省していた。

その数分後、ふたりを連れ、受付にいるジョーイのもとへと向かう賢司の姿があった。その理由とは。

「ジョーイさん、今からふたり分のトレーナーカード作ってくれませんか？」

どうしても必要らしくて」

先ほど椎那を泣かせてしまったことが堪えたのか、がっくりと肩を落としての発言であった。

要するに、根負けしたのである。イトコふたりに。

トレーナーカード。

先ほど賢司がジョーイに提示して部屋を取ってもらったカードであるが、誰でも気軽に発行してもらえると言うわけではない。

特定の場合を除いて、10歳以上のトレーナーでないと発行してもらえないのだ。

そのため、10歳の誕生日にプレゼントと同封して贈られるのが常である。

しかし、初めて発行してから2年以上経過し、なおかつ一度でも旅をしたことがある者と旅をするのであれば、7歳以上でも発行は可能となる。

賢司も一応ではあるが、旅をしているので椎那たちと共に旅に出ることは可能だ。しかし著しく拒否されている。

もう一度言っておこう。著しく、拒否されているのだ。

「ふたり？ 弟さんの分と……、誰のかしら？」

「あいつのじゃないです。オレの後ろにいるふたりの分ですよ」

その場からは見えなかったのか、ジョーイはカウンターから出てくると、椎那と胡睦の姿を見つける。

それと同時に心配そうな顔を賢司へと向けた。

「どう考えても、10歳になっているようには思えないけど……」

「7歳ですからね」

「賢司くんと一緒に旅をするの？」

「いいえ。ふたりだけで行くらしいですよ」

隠すことなく本当のことをありのままジョーイに伝える賢司。

そんな賢司をジョーイはいぶかしむように見た後、賢司と視線を交わす。

「……賢司くん。」

知っているとは思っけど、10歳未満にカードを発行する場合、経験者が必要なのよ。

発行する時にも、旅に出るときにも、常時そばにいられる経験者がいないとだめなのよ」

ジョーイは分かっているでしょ？ とでも言いたげにただ賢司の顔を見つめる。

しかし、賢司は悲しむとは逆に何か策がありそうな顔でジョーイを見返す。

「もうひとつ、条件がありましたよね。
どこの町でもいい　とにかくジムリーダーに勝てれば、どんな年
齢であっても無条件で発行してくれる、という条件が」

「え？」

これに驚くのは椎那たちのほうだ。

話の内容が分かっていたわけではない。ただ、『ジムリーダーに
勝つ』と言う単語が聞こえたから反応しただけだ。

「え？”じゃないよ。

オレのイトコだし、なによりあいつの妹弟だから、それぐらいの力
があっても不思議じゃないって」

「え、え？」

賢司の言っていることが飲みこめていない椎那。パチパチと頻繁
に瞬きをしている。

椎那の隣にいる胡睦も、お手上げといった様子で集中を途切らせ
ていた。

それに気付いた賢司は苦笑しつつ、話をかみ砕いて説明する。

「だからな。

旅をするのならどのみちトレーナーカードは必要になるだろ。

それを10歳未満でも発行してもらえる条件のひとつが『ジムリー
ダーに勝つこと』なんだよ」

へえと感嘆の声をもらす椎那と胡睦。

「……じゃあ、あたしと椎那、ふたりがジムリーダーに勝たなきゃいけないの?」

「別にひとりでもいいけど。 ジョーイさん、ひとりでも勝っていたら十分ですよね?」

胡睦の質問に適当に答えようとしたが、目の前にそう言うことに詳しい人物がいる以上、そう言うわけにもいかなかった。

「た、確かに十分ではあるけど」

「じゃあ、決まりじゃん。」

シイナかコラムのどっちかがタケシさんに挑戦して勝ってこれればOKだな」

ひとり勝手に納得すると、ジョーイに背を向け、椎那と胡睦の手をとる。

「よし、ユウイたちとこに戻るぞ。 あいつらに協力を要請せねば」

賢司はジョーイの話最後まで聞かずに、椎那と胡睦を連れてポケモンセンターを飛びだした。

その後ろでジョーイは相変わらず心配そうな目でふたりの姉弟を見送っていた。

「旅するにはトレーナーカードも必要だけど、それ以上に も必要よ。」

7歳だと言っていたけど、大丈夫かしら」

ジョーイの心配を知らずして、賢司と椎那、胡睦は近くのショッピングに寄っていた。そこで、旅に出る必需品のうちで重要なものを買えるだけ買っていると、ユウイたちの待つ森の近くへと向かった。

旅はまだ始まっていない。しかし、始まりのベルが鳴り響くのはもう何日も後の話ではないことは確かである。

6話 旅の準備（パートナー）

「つつつわけで、椎那たちに協力してくれないか？」

賢司は目の前で座って話を聞いてくれているユウイにそう持ちかけた。

「いきなりだね」

苦笑を浮かべるものの「僕は別に構わないけど……」と漏らす。

「本当か!？」

「うん。だけど、ここにいる全員を連れてはいけないからね」

自分のことのように喜び、有頂天になりかける賢司だが、ユウイの次の言葉にチツ、と舌打ちをする。

「当たり前でしょ。」

手持ちは6匹が限度だし、椎那も胡睦こむつもウインディを連れている。と言うことはだよ？

僕たちの中で選ぶとしても、最大でも10匹が限度っていうこと」

当たり前前のことを当たり前前に説明するユウイ。そして現在、ユウイを含めその仲間は15匹もいる。少なくとも5匹は強制的に外される運命にある。

ちなみにその15匹とは、ユウイ・ミウの兄妹、ワニノコ・ヒノアラシ・チコリータの兄妹、ダブル・トナの兄弟、ピカ・トゲピのイトコ、そしてカメール、マリル、キレイハナ、オタチ、ピク

シー、ヨルノズクである。

「そこを何とか」

「なるわけないだろ。そう決まっているんだから」

無理に頼みこもうとする賢司を呆れた目で見るユウイ。それに、と続ける。

「一応、僕の縄張りも奪われないようにしておきたいしね」

「……もしかして、そっちが目的なんじゃ」

「さあね」

そんなユウイに「おい！！」と待ったをかけた賢司。ユウイはそれを笑ってごまかす。

「それで、椎那たちは？」

僕らと行きたいと言っただけならいいけどさ、具体的な所は？」

ユウイはまだ聞いていない情報を教えるよう、賢司に要求する。

「いや、それがまだ何も聞いていないんだよ」

「え？」

そこまで聞いたから来たのかと思っていたユウイは拍子抜けした。そして、「どういうこと？」と賢司に聞いた。

「うーん。聞きそびれた、って感じかな。

というか、ユウイがそこまで求めてくるとは思わなかったし。

むしろ、最初の段階で拒否されると思っていたからさ」

ハハハ、と苦笑する賢司。そんな賢司を困ったように見つめるユウイ。そんな時、近くではしゃいでいた椎那と胡睦が目にとまり、呼び寄せる。

「どづしたの？」

何の疑問も持たず、すぐに近寄ってくるふたり。そんなふたりを見ながら自分が椎那たちぐらいのときにはそんなことはなかったな、と思い返していたユウイ。ちよっぴり捻くれていたらしい。今も、だろうが。

「ひとつ聞きたいんだけど、誰をパートナーにしたいの？」

何の前置きもなしに単刀直入にふたりへと話しかける。

椎那と胡睦は顔を見合わせると、「考えてない」と答えを返す。しかし、その後の会話からすると、要望は少なからずあるようだ。

「でもでも、ミウと一緒にいたい！」

「トゲピーと一緒にいい！」

「ヨルノズクはもともとお兄ちゃんがぼくに預けたはずだから」

「椎那はヨルノズク、絶対だよな。あと、カメールも！」

ワイワイ騒ぎながら話す椎那と胡睦。その会話を聞きながら「ふうん」と意外でもないような声を出す。そして、ユウイは考えた。

(ミウ……をひとりにさせたくないし、トゲピーを連れて行くと言えばピカも付いて行くだろうから……僕とミウは椎那と、トゲピーとピカは胡睦のところ、ってところかな)

そしてリザードとヨルノズクにからかわれているカメールへと視

線は移る。

（ヨルノズクは椎那と、カメールは胡睦と、か。カメールの場合、ヨルノズクとはトレーナー違う方がいいか、あの状態だと）

2匹に散々からかわれ、返す言葉もなく意気消沈しているカメールに目が止まる。

彼のどこに弄ば^{もてあそ}ばれる要素があるのか分からないが、リザードと出会えば高確率でからかわれている。それにヨルノズクが乗じるのもいつもの光景である。

後で助けるか、と思いつつユウイは自然とピカやマリルと話しているダブルのほうへと顔を向けられる。

（僕らが抜けるとなると、森の事をまかせられるのはダブルしかない……よね、うん。

だとすると、弟であるトナと離れることはしないだろうから……このふたりは残る、と）

ユウイが考え込んでいる間に、周囲はガヤガヤとうるさくなっていく。たまに「やめて!!」と叫ぶ声も聞こえてくる。

それと言つのも、ピクシーという他人に悪ふざけばかりして嫌がらせをするのが大好きな厄介者がいるからだ。そして現在、そのピクシーに嫌がらせをされているのは紛れもなくユウイの妹であるミウである。

ユウイは知ってか知らずしてか、あえて声を掛けない 無視する という選択肢を選んでいた。なぜなら 。

「ピクシー、いい加減にしなよ! ミウ、嫌がってるじゃん!」

必ず止めてくれる存在がいるから。

「ごめん。なんて言っているか聞こえないんだよね」

「……このっ　　！！」

おどけるピクシーにいらだちを募らせ、飛びかかるひとつの影。それと同時にもうひとつの影が動き、黄色い電気を体から発した。

「でんじは」

浴びせられた本人は、当然体が麻痺して動けない状況に陥り、強制的に嫌がらせをやめさせられることになる。恨みを込めた目で浴びせた相手　ドーブルを睨みつけていた。

ドーブルはと言うと、ため息をつき、呆れたような目で地面に転がりジタバタと無駄なあがきをしているピクシーを眺めていた。

彼は麻痺を治す効果がある“クラボ”の実を手を持っていたりする。いつの間にか隣に立っていた賢司からの譲渡品だ。

一方、飛びかかろうとした影　ヒノアラシなのだが、間一髪のところをそれを避け麻痺することはなかった。

実をいうと、こういう光景が日常茶飯事と言ってもいいくらい頻繁に起こっているのだ。

そんなお馴染みの様子を目にするとまたか、と言う様にため息をつく。

ドーブルのおかげで事なきを得たミウはそんなユウイの隣にピタリとくっつき、ピクシーに引っ張り込まれないようにしていた。

（ドーブルにいつまでもピクシーの面倒を見させるわけにいかない

しなあ。

僕らなら抑えられるし、なんとかなるかな)

隣に座った妹を労わりながらピクシーを眺める。

その正面にはミウが来たことで目を輝かせる椎那がいた。ユウイの隣で座ったミウを抱き上げ、ギュッと抱きしめる。相当お気に入りになったようだ。ミウは若干迷惑そうにしているが。

抱きあげられたミウを心配そうに見ていたが、また元の思考へと戻る。

(後は、キレイハナとオタチの比較のおとなしい子と、ワニノコ・ヒノアラシ・チコリータの兄妹とマリル……か。ん、兄弟……?)

ここで誰かいないと気付く。

「ふたりとも、ホーホーとは一緒じゃないの?」

目の前で妹^{ミウ}を抱き、トゲピーを抱き、何やら楽しそうな話をしてる椎那と胡睦に話しかける。心なしか、ミウの表情には疲れが見えていた。助けて、と言う視線も送ってきているような気がする。

気のせいだ、うん。

そしてホーホーとは。

なんとなく察してくれるとは思いが、ヨルノズクの弟である。もとはふたりの兄である裕弥の手持ちであったが、ひよんなことから胡睦の手持ちになっているはずのポケモンである。

「消えたよ、春に」

「うん。いつのまにか家からいなくなってたよね」

どうしてだろうね、とでも続きそうなくらい平和な回答に口が塞がらなくなったユウイ。

家族の一員ともあるべきポケモンがいなくなったというのに、何をどうしたらそこまでのんびりとしていられるのだろうか。

「え!？」

ユウイの質問と椎那・胡睦の回答が聞こえたのか、ヨルノズクが近くまで飛んでくる。

「ちょ、ちょっと待てよ! 僕がマサラを出たのも春だぞ!？」

どうやらヨルノズクも春からトキワの森に住み着いていたらしい。そして今の今まで弟がいないという事実気付かなかったということとは、様子見にさえ行っていなかったようだ。

「だから、それと同時期に出て行ったと言っているんだろ、ふたりは」

ユウイの理屈に一瞬唾然とした表情を浮かべるが、「ふざけんな!?!」と叫ぶ。

「僕はあいつに“ずっと椎那たちというよ”って言うてあるんだぞ!?!」

それなのに!?!」

自分のことは棚に上げ、そこにはいない弟を非難するどうしようもない兄の姿。

叫ぶヨルノズクに興味をなして「何なに?」と森の仲間が集まっ

てきた。

「ふたたりを放置してこっちに出てきたヨルノズクにも責任があると思っけど？」

今までで一番の冷やかな目で友を見つめるユウイ。その言葉にウツと詰まるヨルノズク。

ヨルノズクこそ、トレーナーだった裕弥に弟達のことを頼まれていたのにも関わらず、放置してきたのだから十分同罪だ。

その時椎那は自分の真横に立ったワニノコを見つめていた。そして何を思ったのかミウを地面に下ろすとワニノコに抱きついた。

その様子に呆気を取られたのは胡睦や賢司だけではなく、その場にいた椎那とワニノコ以外のみんなである。

椎那は周りなんて気にせずにワニノコに抱きつく………というかしがみ付く。一方のワニノコは抜け出そうとしていたが一向に抜け出せず、諦めモードに入っていた。

「ユウイ。ぼくね、ぼく、ワニノコともいっしょが良いな」
「……うん……」

見れば分かるよ、とまでは言えなかったユウイ。しかしこれで誰が誰と一緒にいるかは決まったようなものだ。

「とりあえず、決まりだね」
「？ 何が？」

椎那はワニノコに抱きついたままユウイに尋ねる。

そのままではワニノコが苦しそうなので解放するよう、椎那に求

めたあと（えー……と残念そうにつぶやかれたが解放してくれた）、ユウイは自分が先ほど考えていたことを椎那や胡睦にも分かるように説明した。その声はその場にいるポケモンたちや、賢司の耳にも届いていた。

「なるほどねー。そうやって分けたか。それなら大丈夫なんじゃない？」

最初に反応したのは賢司だ。

うんうん、とどこか満足そうに頷いている　　が、直接的には関係のない人物である。

「ドールに任せて大丈夫なのか？
いつそのこと、僕がカメールが残ればいいんじゃない？」

一方で関係のあるヨルノズクは否定的な考え。足手まといに成り得るカメールが残るか、あまり行きたくない自分が残るか。ドールでは役回りが難しいだろうと断言した。

「あのさあ。

椎那も胡睦もヨルノズクとカメールは連れて行きたいって言っているんだから、それは尊重するべきじゃないのか？」

リザードがやや呆れたように言うが、まともに聞いていない。
というか、明らかに無視している。

「そもそもヨルノズクは椎那のパートナーでもあるわけだしさ」

その態度に怒りを感じながら話し続けるリザード。その言葉には反応を返してきたが、あまりいいものではなかった。

「いいんだよ、僕は認めてないし」

なんとという自己中心的な考え方……。

裏を返せば裕弥トレーナーに忠実かもしれないが、ちよつと忠実すぎる。それに今の彼のトレーナーは椎那になっているはずである。

その様子を見て、賢司が椎那にコソコソと耳打ちをする。それに対して分かった、と言う様に大きくうなづく椎那。賢司が持っていた袋から先ほどシヨップで買ったトレーナーの必需品であるモンスターボールを取り出し、思い切り投げた。

椎那たちに背中を向けており、なおかつリザードの怒りを買った張本人へと。

ヨルノズクにしてみれば、何かが体に当たったような感触ののち、グツとどこかに引き込まれるような感覚を急に覚えるのだから、慌てるのは当然である。

数秒ののち、ヨルノズクを引き込んだモンスターボールは地面へと落ちた。その後、ボールが揺れるのと同時に、ボールのちよつと真ん中にあるボタンに赤ランプが付き、チカチカと点滅する。

そして 赤ランプが消えると同時に動きが止まった。

「ほら」

賢司は先ほどまで動いていたモンスターボールを拾い、椎那の手に渡す。

「出してやれば？」

一部始終を見ていたリザードが、わざと意地悪く言う。

椎那は「うん」と小さくうなずくと、先ほど光っていた部分のボタンを押し、目の前にヨルノズクを展開させる。

当たり前と言えば当たり前なのだが、ヨルノズクはそうとう不機嫌にみえる。

「僕のトレーナーは裕弥だけだ、つてのに!!」

キーキーと喚くヨルノズクはさておき、ゲットの様子を目の当たりにしていたポケモンたち 当然ユウイの仲間である はワイワイと騒ぎたてる。

何しろ、ゲットされる様子を見たのは初めてだったのだから。

みんなが騒ぎ立てる中、ユウイはひとり、ダブルのもとへと近寄る。

「勝手に決めてしまったけど、構わない？」

そう。ダブルに任せると言った縄張りの事の了承を得るために。

「いいよ、大丈夫。絶対に守るからね」

笑顔でそう言い切るダブルにユウイはただ一言、「ありがとう」とつぶやいたのだった。

その後、椎那と胡睦によるパートナー選びが始まった。いつの間にか椎那と胡睦のパートナーが7匹になっていたのは秘密である。

6話 旅の準備（パートナー）（後書き）

椎那：

ミウ（イーブイ） ユウイ（サンダース） ヨルノズク

ワニノコ チコリータ ヒノアラシ ウインディ

胡睦：

トゲピー ピカ（ピカチュウ） カメール ピクシー

キレイハナ マリル ウインディ

小計14匹

居残り組：

ダブル、トナ、オタチ

小計3匹

合計17匹（なお、ホーホーは見つかり次第、胡睦の手持ちとなる）

7話 旅の準備 ～ジム戦前夜～（前書き）

短めです。

7話 旅の準備 ～ジム戦前夜～

パートナーとなるポケモンたちを仲間にした椎那と胡睦。

ひとまず、もう日が暮れるから……という賢司の提案に従って一度、ポケモンセンターへと戻ることにした。椎那はミウを、胡睦はトゲピーを両腕に抱いて。

「街中に入る前に、ソイツら戻しておけよ」

あと一歩でニビシティに入る、と言うところで先頭切って歩いていた賢司が立ち止り、振り返る。

「なんで？」

「“なんで”って、それが普通だよ。」

1、2匹ならともかく、6匹も連れて歩いているヤツ、見たことないし」

片手を腰に置いたまま、渋そうな顔で説明をする。

「だから、戻しておけよ」

再度同じ言葉を放ち、後ろからゾロゾロと付いてきているポケモンたちを戻すよう椎那、胡睦に促す。

「はい……」

意外と素直に指示を聞き入れる椎那と胡睦。ポンポンとボールにポケモンたちを戻していく。

しかし、連れ歩くと決めたミウとトゲピー以外に空に逃げたり避

けたりするやつが数名。それも椎那側に偏っている。

「絶対、戻らねえ！」

「僕も悪いけど、拒否」

そう、ヨルノズクとユウイである。もともと、生涯裕弥のパートナーでありたいと願っているヨルノズクの気持ちは分からないでもないが、ユウイの場合は理解しかねる。

「お前らなあ……」

カメールは素直に戻ったのに、と悪態付きながら拒否を示す2匹を見る。

「別にいいじゃん。

胡睦が片方連れているって考えれば、2匹と2匹でそこまでおかしいわけじゃないし」

「そりゃそうだけど……」

リザードの的を射た発言に納得はいくが、果たしてそれで本当に良いのか考え込む賢司。

「それに、あいつら行っちゃまったぞ」

リザードのびっくり発言にパツと顔を上げる。

見れば、もうすでに角を曲がってしまったようで、その姿が見えなくなっていた。

「置いてくな

！……」

賢司の叫び声が響き渡るが、その時にはすでにポケモンセンター内に入っていたので聞こえるわけがない。人間には。その叫び声が聞こえたであろうポケモンたち。特にユウイ、ヨルノズクは笑いを堪えているかのような表情を浮かべていた。

「明日、ジム戦しに行くんだろ？
どっちが行くんだ？」

近くの店で賢司が買って来てくれた夕飯を部屋で食べていると、ヨルノズクが声を掛けてきた。ちなみに賢司は自宅に戻っている。ヨルノズクの問いに答えるかのように、双方は無言で自分ではない相手を指差す。

「どっちだよ……」

呆れかえるヨルノズク。どっちが行っても同じだろうけど、とも考えている。

「ジャンケンで決めれば？」

ノックもせずいきなり現れた訪問客に驚き、咳き込むふたり。

「ごめん、ごめん」

咳き込んでいるふたりをさすりながら軽く謝る賢司。

「ノックぐらいしてから入ってきなよ」

礼儀を無視して入ってきた賢司に冷たい視線を向けるユウイ。ちなみに、今ボールの外に出ているのはセンターに戻るときにボールに戻さなかった4匹である。

「ノック？　したさ、音は出してないけど」

「何のためのノックだよ！」

「いやー。ユウイやヨルノズクなら扉の前にオレがいるのに気付くかなあ、と」

ケラケラ笑う賢司を「結局してないんじゃないか」と軽く睨むユウイ。

「やっぱりさ、決めごとはジャンケンが一番だよ」

さっさとしろ、とでも言いたげにジャンケンで決めることを強く促す……否、強制する賢司。その押し強さに負けたのか、はたまた他に考え付かなかったのか、仕方なくジャンケンを始めるふたり。

数秒後、椎那の顔には喜びの表情が、胡睦には落胆の表情が浮かび出た　　が、次の賢司の言葉でそれが一変する。

「言っただけで勝ったほうがジム戦な」

翌日の昼前。

ポケモンセンターとそう距離は離れていないポケモンジム　　二
ビジムの前にはふたりの人影とポケモンの影が見える。

ひとりには付き添いとして着いて来た賢司である。そして、もうひ

とりは昨夜行われたプチ・ジャンケン大会の勝者　　椎那である。

「本当にやるの、ジム戦……」

明らかに不安げな表情をみせる椎那。傍らにはミウとユウイも付き添っている。

「だいじょーぶだって！　本来2対2のところを1対1にしてみらうんだから」

そついう問題ではなかつ。

「それに、いわタイプに強いワニノコがいるんだしさ」

そつ。各地にあるジムにはタイプの専門家　　いわゆるエキスパートがいる。

賢司の話から分かるように、このジムのエキスパートは“いわだ。

いわタイプは、“たいあたり”のようなノーマルタイプ、“ひのこ”のようなほのおタイプの技などには強い。

しかし、逆に“みずでっぼう”のようなみずタイプ、“つるのムチ”のようなくさタイプの技には滅法弱いのだ。

ワニノコはみずタイプなので、いわタイプとは相性が良い。しかし、ポケモンバトルはタイプの相性だけで勝敗が左右されるわけではないが……。

「よし！　入るぞ、椎那！！」

目の前にそびえたつ大きな両開きの扉。賢司はそれをグイと押す。

「え、ちよつと待ってよ……」

賢司に遅れてジム内に入る椎那。その後ろをミウとユウイが続いて入る。そして、キイと言う音と共に扉は閉じられた。

じき始まるであろう、椎那の初めてのポケモンバトル。

兄である裕弥が、賢司やもうひとりの幼馴染とバトルしていたのを家の窓から、時には兄の真横から見ている。

だから、どういう風に進めていくのかは分かっている。しかし、見るのと実際にやるのでは感覚が大きく違う……。

少々押し問答があったようだが、今は両者が所定の位置に着き、今まさに勝負が始まるうとしている。

もちろん、試合方式は賢司がジムリーダーと話をつけたためにルールは1対1のシングルバトルに変わった。

不安と焦り、そして緊張の中、どう勝負は進められていくのだろうか。

今、試合開始のゴングがジム全体に鳴り響く。

8話 旅の準備 く初のジム戦く side・i (前書き)

短めです。

そして、タケシ目線で話は進みます。

8話 旅の準備 く初のジム戦く side・1

ニビシティジム、ジムリーダー・タケシは困惑していた。

突然、顔見知りである少年が入ってきたかと思えば、何の前触れもなく「ジム戦をしてくれ」と頼んできたのだから。

そもそもこの少年は、ずいぶんと前に自分を負かし、みごとジムバッチを手に入れている。そして、数年前に開かれていたポケモンリーグに出場し、みごとベスト4入りを果たしている。

それなのにも関わらず、だ。

よくよく話を聞いてみると、そのジム戦は自分がするのではなく、自分のイトコである7歳の少年が挑戦することのこと。

この3年間、10歳未満の少年少女が自分に挑んできたことは、全くと言っていいほどなかった。それ以前なら今、目の前に立っている少年と、その友人ふたりが挑んできたことはあった。しかし、それ以来10歳未満の少年少女がジム戦に来ることはピタリとなくなった。

法律が改正されたこともあるが、最も大きな理由は数年前までは影で暗躍していた秘密組織が、急に日向でも活動を開始し始めたことだ。

しかも、その秘密結社はマフィアの一団だと言うではないか。そういう社会情勢も加担して、こどもたちの両親は自分のこどもを危険な目にあわせるわけにはいかないという理由から、10歳に満たないこどもを旅に出させるのを拒みだしたのだ。なかには10歳になっても旅に出したからない親もいるほどである。

……当たり前と言えば、当たり前なのだが。

「君だって今、社会がどういう風になっているかということぐらい知っているだろう？」

それなのに彼を旅に出させるのかい？」

半端な気持ちで旅に出ると言うのであれば、止めなければならぬい。

ひとりの大人として、幼い少年が事件に巻き込まれるのは未然に防がなければならない。

「大丈夫。あいつ、あの裕弥の弟ですよ？」

それに、あの子の姉も共に行動する。あいつ、ひとりじゃない」

「しかし」

「裕弥の弟の実力、見てみたありません？」

不覚ながら、その言葉に “裕弥” という言葉に反応してしまっただ。

裕弥はものの数分で自分を負かし、そして数カ月後にはポケモンリーグに出場していた。決勝戦まで進んだこと自体がすごいものにも関わらず、準優勝で負けたことを悔やみ、ひとり修業を続けた。

彼が修業をしている間に賢司と賢司の友人がカントー地方の8つのジムを全制覇。そして、彼と共にポケモンリーグに挑戦しに行ったのだ。

裕弥はもちろん優勝。決勝戦の相手は自分自身の友でもあった賢

司の友人だった。賢司自身はその友人に負かされ、結果4位。
この結果だけでも、この3人 裕弥・賢司・彼らの友人がどれ
ほどの実力者か分かるだろう。

そんな彼の弟がジム戦をしたいと言ってきている。これは、受け
るべきなのだろうか。いや、受けるべきだ。
しかし。

「裕弥とあの子とは全く違うだろう?」

「そりゃそうですけど、あの子はあの子で強いはずですよ。
何にしろ、裕弥の隣であいつのバトルを見ていたのだから」

「話を変えるが、あの子はポケモンバトルをしたことはあるのかい
?」

「……それは……」

ない、と言うことか。

「だ、だからタケシさんは普段2対2でジム戦を受けているでしょ
う?」

せめてものハンデと言うことで 「

「1対2、かい?」

「いや、1対1で。たぶんそんなに集中力持たないと思うし」

集中力の問題とききましたか……。

「分かった。その申し出、受けよう」

「本当ですか!?!」

「ただし、1回限り。」

この1回が負けで終われば10歳になるまで再挑戦はさせない。
さっき、口にしていたあの子の姉を連れてきても、ジム戦はしない
からな」

賢司は苦そうに顔をしかめる。

「……最初で最後、ということですね？」

「そういうことだ。」

さあ。分かったらあの子をここに連れて来て、所定の位置に立たせてあげてくれ」

賢司は憂鬱そうな表情をしばらくの間浮かべた。そしてその表情を消すと、扉の前で佇んでいた椎那のもとへ駆け寄り、何かを伝えるような身振りをしてからバトルフィールドへと連れてきた。

「さあ、ジム戦を始めよう。オレはニビジム・ジムリーダーのタケシ。君は?」

「シイナ……」

「シイナ君か。賢司から聞いているとは思っけど、1対1のシングルバトルだ。」

準備はいいかい? 行くよ! 先攻はもちろん君だ!」

シイナ君が不安そうな顔を浮かべたままこの勝負は始まった。彼からすれば後はないのも同然だ。

しかし、ここまですないと旅には出させられない。なぜなら、旅先で何が起こるか誰にも分からないからだ。何が自分たちを危険な目にあわせてくるのかもわからない。

そんなとき、幼い自分たちを守ってくれるのはパートナーたちだけだ。パートナーの力を最大限に引き出したうえで、自分を守るように、的確な指示を出さなければならぬ。

そういうことが出来るかどうかを、このジム戦によって見抜かなければならない。

幼いからと、手は抜けない。逆に抜いてはいけない。抜けば、相手の本当の実力が分からない。分からなければ、見抜くことはできない。

だから、オレはこの勝負

「行け、イワーク!!」

全力で行かせてもらう!

9話 旅の準備 く初のジム戦く side・2

ひとりポツンと入口のそばに立っているのは紛れもない、椎那だ。

「ケンくんが先に入っちゃったから、入ったんだけど……」

見ると、当の賢司は部屋の奥にある台座の上で座っている、焦げ茶で髪がツンツンしている人と話しこんでいる。

「タケシだね」

椎那の心の中を覗いたかのように、ユウイの声が聞こえた。

「タケシ？」

「そうだよ。このジムのジムリーダー、タケシ。君のバトル相手となる人物だよ」

それを聞いた椎那はそれまでも重かった気分がもっと重くなる。そして、へたり込みそうになったところをユウイに支えられるのであった。

「うっ……。なんで勝っちゃったんだろ」

頭を抱え込んでまで悔むのは昨夜のジャンケン勝負の結果。

「でも、勝って喜んでたよ、椎那くん」

「だって、まさか勝ったほうがジム戦をするなんて思わなかったし

……」

ミウに対してまでうだうだ言い続ける椎那。そのそばでユウイは浅くため息をついたのであった。

「椎那！」

椎那がうだうだ言っている間にあちらの話し合いは終わったらしい。賢司が自分のもとへと駆けてくる。

「予定通り1対1のシングルバトルな」

「しんぐる〜？」

「そうだよ。ワニノコだけ出せばいい。以上！」

賢司は言うだけ言うと、椎那の手を引いてバトルフィールドへと向かう。

「この枠から外に出るなよ」

白いペンキで描かれた長方形の枠の中をテシテシと踏む賢司。それに対して頷き返す椎那。

「大丈夫、大丈夫。じゃあオレ、外にいるか　！？」

賢司の言葉が途中で途切れる。痛みが走ったと思われる足先を見ると、ズボンにかすかな焦げ目が付いていた。

「ユウイ、ためー……」

「連れてくるだけ連れてきておいて、自分はどこか違うところに行くのか？」

様子も見ないで？ 信じられないんだけど」

明らかに賢司を挑発させその場に居残らせようとしているのが丸分かりな、ユウイの発言。

「分かったよ！ いればいいんだろ、いれば！」

そんな挑発にも気付かず、まんまと乗せられる賢司も賢司だが。

「タケシさん！！」

審判、オレがする！ さつさと始めようぜ」

タケシの返事も聞かず、勝手に審判の立ち位置に着く賢司。

「え、おい……まあ、いいか。さあ、ジム戦を始めよう！

オレはニビジム・ジムリーダーのタケシ。君は？」

「……椎那」

タケシの元気の良さに圧倒されつつも、ちゃんと自分の名を答える椎那。その辺りはしっかりしている。

「シイナ君か。賢司から聞いているとは思っけど、1対1のシングルバトルだ。

準備はいいかい？ 行くよ！ 先攻はもちろん君だ！」

センコウ？

聞きなれない言葉に頭を悩ましているせいか、顔がゆがむ。

「椎那から攻撃してもいい、って言っているんだよ」

ユウイがその表情の原因に気付いたのか、小声で意味を説明する。

「ぼくから、攻撃……」

椎那がその意味を咀嚼そしゃくしているときにタケシの声がジム中に響く。

「行け、イワーク！」

「……ワニノコ！」

椎那もその声に釣られ、バトル場にワニノコを繰り出す。

「ワニノコ対イワーク！ 勝負、始め！」

賢司が勝負開始の合図を出すとともに、ワニノコは動く。

「みずでっぽう」！

大量の水がイワークの真正面から襲いかかる。

これには巨体であるイワークは避けるのは難しい。見事に水をかぶってしまう。

「……思ったよりやるみたいだね。イワーク、“がんせきふうじ”」

イワークの唸り声と共に、今度は大量の岩がワニノコに降り注ぐ。

「ワニノコ、よけて」

その声に従い、間一髪のところで岩をよける。が、まだ攻撃は続く。

「たたきつける」

大量に降らされた岩のおかげで視界が奪われていたワニノコの目の前に、イワークのしっぽが飛んでくる。

「ワニノコ!？」

避ける暇もなく、ワニノコは先ほど落とされた岩の山の中に弾き飛ばされる。そして、ぶつかった勢いで岩は崩れ落ち、ワニノコの姿を隠した。

(ここまでかな?)

タケシがイワークに戻るよう指示を出そうとしたとき、椎那の声が響く。

「“ハイドロポンプ”！」

それと同時に、先ほどとは比にならないほどの大量の水が岩山から噴き出る。水は否応なくフィールド上にまき散らされた。

その結果、土であったはずのバトルフィールドは泥沼状態に化してしまった。そして、その状況をものすごく迷惑そうな目で見つめ

るイワーク……。

タケシとイワーク、審判である賢司がフィールドに気を取られている間に、ワニノコは岩山から這い出てくる。そして。

「みずでつぼう」!

イワークの顔面に向かって勢いよく水を放つたのだった。大嫌いな水を顔に掛けられた怒りからか、イワークは唸り声を上げる。

「イワーク、“ストーンエッジ”!!」

イワークは自分の周りにとがった岩をいくつも漂わせ、それらをワニノコにむけて放つ。

「よけて!!」

しかし、自分を埋めた岩山から抜け出すために体力を消費したのか、ワニノコにはあまり元気がない。

椎那の叫びに答えることが出来ず、まともにストーンエッジの技を受けてしまうワニノコ。泥沼状態のフィールド上に倒れてしまう。

「ワニノコ……」

「あきらめちゃダメ。ワニノコはまだ動けるよ、一番しぶといから」

自分の負けを自覚した椎那の耳にユウイの言葉がかかる。

「まだ動ける。呼んで、ワニノコを」

自信に満ちた目で椎那と顔を合わすユウイ。その言葉を聞いたとき、椎那の瞳の中に『迷い』というものはなかった。

正面に向き直ると、賢司の判定をかき消すような大声で名前を呼んだ。すると、その声に反応するかのようになり、ワニノコが動く。そして、ゆっくりと立ち上がり、体についた泥をブルブルツと振り払う。

「大丈夫、まだ平気。こんなところで負けてなんていられないよ！」

「ワニノコ……」

先ほど受けた大ダメージをさほど感じさせず、しっかりと立ち真正面から自分を見つめてくるワニノコ。

「椎那だって、旅に出たいんでしょ？」

その言葉が椎那の心を強く動かした。

旅。

それは小さい頃からの夢でもあった。

カントー地方のリーグ大会で優勝したのを皮切りに、立て続けに他地方のリーグ大会で優勝し続けている兄の姿を、いつもテレビの画面を通して見ていた。

椎那と胡睦が一人前のトレーナーになり、旅立てるようになるのは何年も先の話だったのにも関わらず、兄は自分が連れていた2匹のガーディと共に“ほのおのいし”を1つずつ付けて、ふたりに授けたのだった。

そして今、そのガーディはウインディに進化している。2匹同時に。兄がホウエン地方の大会で優勝したのを祝って。

それが今から10ヶ月ほど前の秋だった。

その2ヶ月後、旅をやめた原因でもある体調不良が原因で兄は入院。そのまた2か月後、両親と共に息を引き取ったのだった。

元気な時、いつも言っていた。

『椎那たちが10歳になったら一緒に旅に出よう。』

それまでガーディ（ウインディ）たちの事、よろしくね』、と。

ずっとその思いを胸に秘めて生活してきた。もちろん、兄を失った後も。そして今、その夢が果たされようとしている。

ワニノコの言うとおり、ここで負けるわけにはいかない！

「行くよ、ワニノコ！ “ハイドロポンプ”！！」

ワニノコはかすかに笑みを浮かべたあと、イワークに向かってこれまでにないほど大量の水を口から放ったが、外れた。

初めて外れたことで焦ったのか、椎那は再度“ハイドロポンプ”を指示するが。

タケシはその一部始終を見ることで圧倒された。ダウンしたかと

思ったワニノコが立ちあがり、再び勝負を始めているのだから。しかし、タケシもジムリーダーとしての意地があるのか、負けてはいない。

「大技は当たりにくいんだ！
イワーク、“すなあらし”！！　そして“がんせきふうじ”！」

ジム全体に砂嵐が舞い、見通しが悪くなる。

そのことで躊躇し、技を放つことができなかつたワニノコ。それなのにも関わらず、ジムリーダー・タケシは“がんせきふうじ”を指示。　と同時に岩が降り落ちてくるような音と、水がはじけるような音が聞こえた。

「ワニノコ！？」
「イワーク！」

お互いにバトル場に立つポケモンの名を呼ぶが、それ以降進展はせず、両者互いに指示をしないまま砂嵐が止んだ。

「……イワーク戦闘不能。よって勝者、椎那」

審判である賢司の声がジム内に響き渡る。

見通しの悪い砂嵐の中、何が起きたのか分からない。しかし、目を回し倒れていたのはワニノコではなく、イワークだった。

「ふわ……、勝っちゃった？」

「みたいだね」

「ねー」

椎那のポケーつとした言葉にユウイ、ミウが続ける。

「ワニノコ　　! !」

フィールド内で座り込んでいたワニノコに駆け寄り、抱き締める。その間、タケシは目を覚ましたイワークに労いの言葉を掛け、モンスターボールへと戻っていた。

「良かったじゃん、椎那」

いつの間にか隣には賢司が立っており、見下ろす形で椎那に声をかけていた。

「けっこう長引いたよなー。砂嵐の中、何をしたんだ、ワニノコ？」

「その話はオレも聞きたいな」

タケシも会話に交じり、ワニノコに問いかける。

「えー……、 “ハイドロポンプ” 放っただけだよ。時間差になっちゃったけど。」

“ がんせきふうじ ” の岩も水流に巻き込まれてイワークに当たったんじゃないかな、きつと」

おまけに、とワニノコは続ける。

「いきなり砂嵐は吹いてくるし、それでイワークの姿隠れちゃうしな。」

おまけにぼく自身すごく疲れちゃってたし。大変だったんだから」

「要するに、『偶然の産物』と言うことか」

「それだけで済まさないでよ」

賢司の要約のしかたに文句を言うワニノコ。とりあえずは元気そうだ。

「タケシさん、バッジは？」

文句を言っているワニノコを差し退け、苦笑を浮かべていたタケシにバッジを出すよう催促する賢司。

「ああ、今取ってくるよ。待ってて」

「準備してなかったんですか？」

「いきなり訪ねて来て、ジム戦を開始させたのはキミだろ！？それにジム内にいるからと、常時持ち歩いているわけでもないし」

正論なのか言い訳なのかよくわからない言葉を述べつつ、扉の奥へと入っていくタケシ。それに続いて入っていくこととする賢司に、扉に張つてある張り紙を見せつける。

「……前はこんな注意書きなかったような気が」

「勝手に奥までついてくる厄介者がいるからね。最近つけたんだよ、賢司君？」

「『厄介者』ってオレの事？」

君以外にだれがいる、という言葉を残し奥へと姿を隠したタケシ。その場に残された賢司はと言うと、不服そうな表情のまま椎那たちがいるところへと戻って行くのであった。

「あの中、何があるの?」

「タケシん家。ジムバッジもそこにあるんだ」

今までのさん付けは何処へやら。不服な気持ちがそうさせるのであろうが、入れなくなったのは自業自得というものだ。
それよりも。

「勝手に他人の家に入るのはどうなんだ?」

「うるせー!」

不法侵入者として捕えられても仕方がない行動でもある。そして、他人の住まいを勝手に覗くのも如何なものか。

そんな中、タケシが手に長方形で平たく黒い箱を持って奥から戻ってきた。

「あれ、タケシ……さん、それ何?」

「さっき、思いっきり呼び捨てにしていなかったか、賢司?」

「え、聞こえてた!?」

焦る賢司を横目に椎那を呼ぶ。そして、彼の前でその箱を開く。その中には。

「おー、ジムバッジじゃん。……って、オレらの時、そんな箱なかったぞー！」

「うるさい！ 仕方ないだろ、年々規則が変わるんだから」

ちょうど耳元で叫ばれたため、左手で耳を押さえながら抗議する賢司を鎮める。

「これがジムバッジ？」

椎那の目に映ったそれは灰色で、岩のような図形をした直径3cmほどの鈍く光るものだった。

「磨けばもつと光るんじゃない？」

椎那の横からバッジを覗く賢司。顎に手を当て考える仕草をする。

「そういうお前は磨いたことがあるのか？」

「そんな面倒くさいこと、誰がするんです？」

「だったら言うな、と軽く頭をしばく。」

「シイナ君。これがニビジムのバッジ、グレーバッジだよ。絶対失くさないようにね」

タケシは椎那にジムバッジを手取るよう促す。そしてそれは賢司が持つてきていた（合成）革製の巾着袋の中に入れられた。

「これなら失くさないよな」

賢司が椎那の顔を見ると、椎那はにっこり笑って返すのだった。

「ありがとう、タケシさん。これで旅に出る準備が整った」

賢司は椎那、タケシと共にジムの外に出ていた。空は紅色に染まりかけていた。

「あとはトレーナーカードを発行してもらっただけらしいな。数日はかかると思うけど……」

「その辺りはジョーイさんに頼んでなんとかしてもらっつもり。戻ろう、椎那」

賢司は椎那の手を引いて歩きだそうとする。

「うん。……タケシさん」

椎那はふと後ろを振り返り、自分と手合わせた人物の名を呼んだ。

「何だい？」

「勝負してくれてありがとう」

「賢司の頼みだったからね。10歳になったらまたおいで。今度は2対2でやろう!」

「うん!!」

満面の笑みで頷いた椎那は、賢司以上に軽い足取りで帰途に着いたのだった。

10話 旅の準備 ～最後の準備～ (前書き)

短めです……。

10話 旅の準備 ～最後の準備～

ポケモンセンターに戻った椎那と賢司、それからユウイ、ミウ。部屋の中で待ち受けていたのは、いい具合に機嫌を損ねた胡睦（トビ）の姿であった。

「どうしたんだよ、胡睦？」

「こんなに時間かかるなんて聞いてない！」

「ああ、ヒマだったのか。来れば良かったのに」

荷物をベッドの上に置きながら話す賢司。

「ヤダよ、外暑いのに」

「ジムの中は涼しいの。冷房かかっているから」

「ここだって涼しいもん。玄関のあたりとか」

季節を忘れがちではあるが、今は8月の前半。太陽が最も強く照りつける季節である。そんな中、椎那と胡睦はマサラタウンから歩いて（ウインディにも乗って）やってきたのだ。

「まさか、オレたちが戻ってくるまでずっとそこにいたとか言うんじゃないだろうな？」

“玄関” エントランスホールと聞き、多少顔を引きつらせながら胡睦に問いかける賢司。

そんなことはない、と言い張る胡睦ではあるが、その場にいたポケモンたちも口止めをされているのか、真実を話してくれないため、真相は分からないままである。

「ねえ、ご飯食べに行こう？ お腹すいてきちゃった」

甘えたような声で賢司の腕を引っ張るのはほかでもない。胡睦である。

「自分らで払えよ？」

「じゃあ、ケンくん家で食べる」

「来るな！ っていうか、作んねえぞ！！」

冗談じゃない、とでもいうかのように全力で拒否をする賢司。しかし、そんなことはお構いなしに話を続ける椎那。

「明日はね、今朝、持ってきてくれたサンドイッチ！ あれがいい
ー！」

「だから、誰が！ いつ！ 持ってくるって言ったよ！？」

そう。朝は賢司が気を利かせて家からサンドイッチを持ってきたのだ。それも手作りのものを。

「ねえ、ケンくん。おねが〜い！」

「絶対ヤダ！ そんなにサンドイッチが欲しけりゃ明日の朝来いよ」

「いいの？」

「どうせ、明日はひまつぶしにどこかに行かなきゃならないからな。お前から来てくれたほうが有難いよ」

目をキラキラと輝かせて自分を見つめる4つの瞳。それを見てため息をつく賢司。

「じゃあ、オレ帰るよ。夕飯はふたりでどうにかし」

出入り口に向かって歩きだそうとすると、両腕がいきなり後ろに引っ張られる。

「なんだよ!」

振り向くと、椎那と胡睦が自分の両腕を行かせまいと引っ張っていた。そして、下心のない純粹な表情のまま、こう言うのである。

「おごつてよー。ね、ケンくん」

大切なイトコ達のお願い(?!?)であるから聞いてあげたいのは山々なのだが、残り少ない小遣いから3人分になるであろう食費を出すのは心もとない。かといって、掃除をあまりしていない家にイトコ達をあげるのもどうかと思う。

たったそれだけのことだが、ここまできたら突き放すわけにもいかず、頭を悩ませる賢司。

数分前までは突き放すことしかしていなかったが。

「ねえ」

いつまでも甘えた声で賢司を陥れようとするふたり。その声に折れたのか、はたまた言葉の綾なのか、賢司は不覚にも承知してしまった。

「分かったよ。おごればいいんだろ、おごれば！」

やけになってそう言い放った後、遂に言ってしまった……という様子でがっくりと肩を落とす。その真後ろでは上機嫌でハイタッチをするふたりの姿があった。

次の日。

太陽が南の空高くに昇ったころ、3人の姿はポケモンセンターの中にはなかった。

部屋で朝食を食べたのち、賢司は椎那・胡睦を連れてポケモンセンターの受付へと向かい、トレーナーカードの発行手続きをした。

本来1週間近くかかるものを少し早めの4、5日で発行してみるとも請け合ってくれた。

そして今、3人はニビシティの北のはずれにあるニビ博物館にいたのである。

この博物館には宇宙から降ってきたと言われている“つきのいし”や、竜神さまと拝まれている“プテラ”の化石、両手にある鋭い鎌で獲物を襲っていたと思われる“カブトプス”やアンモナイトに似た形の“オムスター”などの化石などが展示されている。

また、樹液の中に虫が入ったまま地中に埋まり固まることでできた“琥珀こくろく”と呼ばれる化石も置いてある。

古代の世界に存在していたポケモンたちの化石を見るたびに、ふたりの表情はキラキラと輝く。

触れてはいけないはずの展示品に危うく触れそうになってしまったり、立ち入り禁止区域に入っていていこうとしたりと危なっかしい場面もあるが、それなりにとても楽しんでいた。

幼いころからたびたび連れてこられていた賢司としては、見るものすべてに目新しいものがなく退屈でしかたがなかった。それでも嬉しそうにはしゃぐふたりの姿を見て、来てよかったと感じるのであった。

「ケンくん。明日はどこに行くの？」

「明日？ うーん、どうしようか……」

その日の夕刻。博物館を出ると同時に椎那に聞かれた言葉だった。

ニビシテイは“石の街”と呼ばれるほど、石に関する建物すなわち博物館等が多い。しかし、ニビ博物館以外はそれほど面白いと言える場所ではなく、逆にニビ博物館以外には人の出入りがひとりとしてないと言ってもいいほど、はやっていない。

そんな町で何をして暇をつぶせと言うのか。大人しく、家で引きこもって遊んでいるほうが楽しいとさえ思う。

「何しようか……」

「ケンくん家、行く！」

「頼むから来るな」

今朝も昨日と同じく賢司が朝食を持ってきたので賢司の家に行くことはできなかった。

と言うのも、9時半を過ぎても一向に現れないふたりに痺れを切らし、ポケモンセンターまで起こしに行ったというのがその理由である。

「思ったけど、ぼく、ケンくん家知らないんだよね」

「行こうと思ったけど、行けなかったんだよー」

朝食を食べ終えた後の発言がこれだ。さすがの賢司もこれには頭を悩ませ、博物館に行く前に自分の家に寄りアピールをしてから目的地へと向かったのだった。

「そつだな。……森に戻ってみるか、ユウイ？」

隣を歩いていたユウイに声をかける。

彼ももちろん博物館内にも一緒に着いて入っていた。ミウヤトゲピーも一緒だ。しかしヨルノズクだけは椎那たちが見て回っている間もひとり、今と同じように悠々と大空を飛びまわっていた。

「なんでまた……」

「あれから数日は経ってるじゃん。様子見に行かない？」

「行かない」

賢司の言葉をその場で軽くあしらうユウイ。そのそばには「んなこと言っただって、行くところなんてほかにないじゃん」とふてくされる賢司の姿がある。

「要するに、ひまつぶしが出来ればいいんだろ？」

「そつだよ。ニビにどこかいいとこあるのか？」

「おまえん家。けっこう広がってるんだろ、不要物が」

ヨルノズクの言葉にひとつの怒りを感じつつ、無視を決めこんだ賢司であった。

結局ポケモンセンターに着いてもいい案が思い浮かばず、次の日も、その次の日も何をすることもなく、まったりとセンターの借り部屋で一日を過ごしていたのだった。

それから数日後。

椎那が朝起きると、賢司が茶封筒を片手に嬉しそうな表情をしていた。片側のベッドの上では、胡睦が同じような封筒を持って、やはり嬉しそうな表情をしている。

「椎那。届いたぞ、トレーナーカード」

そつ言っただけ茶封筒のひとつを椎那に渡す。椎那はそれを両手で受け取ると、数回封筒を振ってからその端をビリビリと破り、中に入

っていた紙とカードを取り出した。

カードを片手にポーツと眺めていると、賢司が補足説明を付け足した。

「そのカードと、6日前に買ったジムバッジが証明書となるからな。バッジもカードも絶対失くすなよ」

この日、椎那と胡睦は晴れて、あこがれのポケモントレーナーとなれたのだった。

outside・i

椎那と漢字と春秋と(前書き)

【春秋】しゅんしゅう

こころでは、「年齢・とし・よわい」の意。

例の如く短めです

「ねえ、椎那くん。“シイナ”っていつ字、どう書くの？」

「え？」

トレーナーカードを受け取る数日前、ミウにこう尋ねられた。

「胡睦ちゃんも、“コラム”っていつ字、どう書くの？」

「え」と……」

隣を振り返り、胡睦の目を見て話すミウ。

「教えてよー」

「えっと……」

ふたりは困ったような顔をして、互いに顔を見合わせるのだった。教えてあげたいのは山々ではあるが、自分たちの名前をいつもひらがなで見ていたせい、どんな漢字だったのか思い出せないのがある。

そんな時、タイミング良く扉をノックする音が聞こえてきた。

「おーはよ。なんだ、今日は早いんだ？」

「ケンくん、おはよー」

「はよー」

そこから現れたのはイトコである賢司と、そのパートナーであるリザード。

イトコである賢司なら自分たちの漢字を知っているかもしれない

……。否、知っているはずだ！

そう予想立てして問いかけてみたが、返ってきたのは思いもよらないような言葉だった。

「……あれ、漢字どんなんだっけ？」

ずいぶんと頭を悩まし、漢字を思い出そうとするが、一文字も思いつけそうにない。結局のところ、賢司もふたりも漢字を覚えていないというのである。

「じゃあ、ケンくんの漢字は？」

「オレの漢字？」

「うん」

にっこり笑って頷くミウ。

賢司はしばらく考えると、部屋を出ていき、数分後にまた戻ってきた。手に紙とボールペンが握られているところを見ると、受付からかっぱらってきたのだろう。

「オレの漢字は」

貰って来た紙をテーブルの上に置き、そこに横書きで大きく“賢司”と書いた。

「それで、この字はこうとも読むんだ」

そう言いながら“賢”の下にひらがなの“い”を書き加える。

「……何て読むの？」

「かしこい」

「どこが？」

すかさずヨルノズクとリザードが突っ込む。その突っ込みに対し苦笑を浮かべるユウイとカメル。今日はユウイとヨルノズクの話し相手として、カメルもモンスターボールの外に出ていたのだ。

「な！？ どこからどう見たって賢いし、オレ！」

「寝言は寝て言おうな」

そう言いながら賢司の背中をポンポンと叩くリザード。

パートナーとは言えど、リザードも賢司と同じ年。ユウイやカメル、ヨルノズクと同様にリザードも賢司と同じ学校に通っているのだ。だから、賢司の成績を知っていても不自然ではない。

しかし、それに納得しないのは賢司である。

「うるさいな。天才の脳はあんな紙ごときに反映されないんだよ！」

なんとも無茶ないいわけである。それに意地悪く突っ込んでくるのが長年の相棒、リザードである。

「天才っていうんなら主要4教科のうちどれかひとつには長^たけているんだろ？ 何に長けているって言うのさ、ケン？」

ちなみにここで言う主要4教科とは、国語・算数・理科・社会である。数学・外国語共に中学からなので、数学ではなく算数であり、5教科ではない。

「……今はまだ反映されないのさ」

苦しすぎる言い訳……。本人もそれは分かっているのか、視線を天井に向けている。これ以上からかうのは面白くないのか、それとも飽きたのか……。とにかく脱線していた話を元に戻すリザード。もちろん、賢司と同じように丁寧な説明がなされ。

「で、右側^{ミドリ}の字は“つかさ”とも読む。意味は知らん！」

ず、投げやりな説明で終わった。

“賢司”という漢字に付いての説明が簡単ではあるが、一通り終わりかけたころ、リザードから借りたペンで紙の隅に何かを書く仕事をするユウイの姿があった。

「何、書いてんの？」

その様子を真上から覗くヨルノズクと賢司。そのペンで書かれた文字は。

「確かさ、こんな字じゃなかったっけ？」

“ 椎那 ” “ 胡睦 ” の4文字であった。

「そうそう、確かそんな字だった気がする！
……てかさ、なんでユウイが知ってたんだ？」

また裕弥経路か？ という疑問はあえて口に出さない。聞くだけ野暮だろう。しかし、そんな質問であっても律儀に返すのがユウイのいいところである。

「裕弥に聞いたことがあるから」

やはり、期待通りの答えがユウイの口から出されるのであった。

「それじゃ、この漢字で間違いないんだね？」

念押しで椎那・胡睦と賢司に再度聞き、3人が頷くの見届けるユウイ。

「間違いない。確かにこの漢字のはずだ」

賢司が自信を持って断言するが、あまり頼りにならないのか、軽く流す御一行。本当に友達なのか疑いたくもなるような光景でもある。

「お兄ちゃん。この字、何て読むの？」

初めて見た漢字に興味をそそられるミウ。

テーブルの上に飛び乗り、それを書いた本人であるユウイに尋ねる。

「“これ椎”が“こしい”で、“こ那”が“こな”。

“こらむ”は“こ胡睦”で“こらむ”と読むんだ」

ユウイはペンを差し棒にして、ひとつひとつ丁寧に教えていく。

「“こ胡”の下に“こ桃”を加えると」

そう言いながら“こ胡”の下に“こ桃”を書き加える。

「“こくるみ”と読むんだ」

「“こくるみ”って、木の実の？」

そう、と言葉を返し、堅い殻につつまれた木の实だよ、と説明を付け足す。

ミウは興味深そうにふーん、と言いながら、なおも書かれた漢字を見続ける。

「なあ、ユウイ」

「何？」

ふと、賢司が考えながらユウイに問いかける。

「ミウ……って何歳だっけ？」

「2歳だよ。ね、ミウ」

うん、と元気よく答えるミウに、だよなあ……と独り言を漏らす賢司。その傍らで目を見開くものもいる。

「ミウって、まだ2歳なの!？」

「5歳ぐらいかと思ってた!！」

椎那と胡睦である。

「まだ2歳だよ。3月の後半になると3歳にはなるけど」

ユウイはふたりの仰天ぶりに多少驚きながらも返事を返す。

「3月……何日？」

「28だよ」

遅っ！！ と声をそろえて叫ぶマサラのふたり。

「ほとんど4月じゃない」

胡睦の言葉にまあね、とユウイは苦笑する。

「4月は僕の生まれ月だし、ね」

「え、お兄ちゃんと同じ……。何日？」

「13だよ。4月の13日」

「あれ、確かお兄ちゃんは」

「14、だよな？」

クスクス笑いながら胡睦の言葉を取るユウイ。

「1日違いなんだよ、僕と裕弥は」

「じゃ、じゃあトゲピーは!?!?」

胡睦は枕のそばで寝ていたトゲピーを抱きあげ、ユウイに見せる。その反動でトゲピーは何事かと目を覚ましてしまったが、抱きあげた本人は気付いていない。

「トゲピーは1歳。もうあと数カ月も経てばミウと同じ年になるんだよね？」

「うん」

トゲピーは天使のほほえみとも言えそうな笑顔をユウイに向ける。それにつられ、ユウイも思わず笑みがこぼれてしまう。

「……カメール、ヨルノズクはともかく、その他のみんなは!？」

「キレイハナ、ワニノコは除外するとして、オタチ、チコリータは3歳で、ヒノアラシは4歳。

ピクシーとトナ　ダブルの弟は5歳で、ピカ、マリルは9歳。ダブルは10歳だよ」

ああ、ダブル10歳来てたのか……とひそかにつぶやく賢司。どうやら賢司自身もユウイ軍団の年齢層を知っていたらしい。

「……なんでケンくんも知ってるの？」

「ん？　こいつだよ、こいつ」

胡睦のジトーと言う目に答えるべく、ツンツンと隣にいるリザードを指差す。なるほどね……と賢司に向けた目をそのままリザードへと移す。

「別に知っていたっていいだろ？　減るもんじゃないし。

だいたいオレらのほうがユウイたちとは付き合い長いんだぜ？」

「じゃあ、いつからの付き合いだって言うのよ？」

腕組みしながら、しかもジト目でリザードを見続ける胡睦。

「えーと……3、4年前かな。なあ、ケン？」

「まあ、それぐらいか。小2か小3の頃だし、な」

椎那は不思議そうな目をふたりに向ける。

「1年生のときじゃないの？」

「いんや。小2か小3さ。それまでユウイと仲良くはなかったし」

「え〜〜！」

「うそでしょ!?!」

いや、本当だって！ と苦笑しながら事実を肯定する賢司。しかし、それを嘘だとしか思えない椎那と胡睦は否定しかない。

ユウイと言えば、自分のことなのににも関わらず、中間的存在聞かれてもさあ？ としか答ええないのだ。

「ねえ、何でキレイハナとワニノコは除外なの？」

ミウが不思議そうな顔でユウイに尋ねた。

「ああ。それは」

ユウイが答えようとする前に椎那と胡睦が先に答えた。

「キレイハナはぼくと同じクラスなの！」

「ワニノコはあたしと同じクラスなんだ！」

目を見開くミウ。

今の今まで知らなかったらしい。

こうして、この日もまったりと話しながら日が暮れていくのであった。

outside・1 椎那と漢字と春秋と（後書き）

ここまでで発覚した誕生日。

椎那：8月2日

裕弥：4月14日

ミウ：3月28日

ユウイ：4月13日

同じ誕生日の人がいたら教えてください（笑）

11話 最初の目的地まで

ふたりがトレーナーカードを手に入れた次の日、賢司はポケモンセンターの正面玄関前で椎那・胡睦こむと待ち合わせをしていた。しかし、何分待っても一向にやってくる気配がない。

そして、待ち合わせの時刻から30分が過ぎたころ、ようやくユウイが姿を見せた。

「おはよ。悪いけど、もう少しだけ待っててくれる？」

「はあ！？ 何やってんの、あいつら？」

「……ちょっとね」

そう言って顔を背ける。それで降話は発展せず、痺れを切らした賢司は一緒に来ていたりザードに声をかける。

「……リザード、GOー!!」

「GOー!!」じゃねえよ！ 自分で行け」

「パートナーはトレーナーの指示を聞くのが大原則だろ？」

「知るか、そんな原則！」

ポケモンセンター前という人通りが激しい場所なのにも関わらず、言いいいを始めてしまうひとりとは1匹。それがエスカレートしただし頃、ようやく待ち人がひとり、ヨルノズクと共に現れた。

「ごめん、ケンくん。ちょっといろいろと探してたの」

「広げてないのに、何を探すんだ？」

「うるさいな！ とにかく失くしたやつを探してたの！」

「だから昨日、寝る前に準備しとけて言ったのに、聞かないからだぞ！」

「1時間近くケンを外で待たせてさ」

胡睦はヨルノズクのその言葉にウツと言葉を詰まらせる。

「と、とりあえず、ごめんね。ケンくん」

「別にいいけど……椎那は？」

「さあ？ まだ荷物入れているのかな」

「“さあ？” って……。オレ見てくるから中で待つてて」

言つが早いか、賢司は走って椎那のいる部屋へと向かう。

「どうしよ……。見つからない」

その頃の椎那。未だに何かを探しているようだ。

「何探してるのー？」

見かねたミウが椎那に声をかける。

「あれ！」

“あれ” って？

「あれ” はあれ！」

「分かんないよ……」

ミウも椎那の探しものに協力したいのだが、肝心な言葉が“あれ”で示されるのだから探しようがない。

困り果てたとき、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「椎那、いるか？」

「あ……ケンくん」

泣きそうな顔で、入ってきた賢司を見る。

「何探してるんだ？」

「あれ！」

“あれ” ってどんなやつ？」

「電話できるやつ。お兄ちゃんもケンくんも持ってる赤いの」

赤い、電話。

そう言っ て賢司は下を向いてしばし考え込む。そして、思いついたように顔をあげた。

「もしかしてポケギアか？」

「そう！」

ポケギア　ポケモンギアを略したものである。

機能はそこまで多くはなく、タウンマップを見られる、お互いに登録し合った相手に電話を掛けられることのみしかできない。ただし、カントー地方・シオンタウンとジョウト地方・コガネシティにあるラジオ塔で、ラジオカードなるものを手に入れたならば、ラジオを聴くこともできる。

椎那と胡睦のそれは、一昨年の誕生日の時に両親がプレゼントしてくれたものである。その当時、旅に出ていた兄の声を　機械を通してではあるが、聞くことが出来たのである。

ラジオカードは挿入されていないためラジオを聴くことは出来ないが、それでも離れた場所にいる兄の声を聞くことが出来る、という事だけでとてもうれしかったそうだ。

「失くすようなものじゃないだろ……」

「でも、無いんだもん」

賢司は、はあとため息をつく。

「胡睦は椎那のポケギアの番号、知っているのか？」

「うん……」

「ちょっと待ってる」

そう言うと、賢司は部屋を出て行った。そしてその数十秒後、ポケギアの呼び出し音が部屋中に鳴り響いた。

その音を頼りにあたりを見回して音の出所を探る椎那とミウ。そして。

「あつたあ!!」

ベッドの下で鳴り響いているポケギアを見つけた。もちろん、電話を掛けてきた相手は胡睦である。椎那は急いで通話ボタンを押す。

「もしもし、お姉ちゃん？」

「椎那、見つかったんだな？　なら、荷物持って出て来いよ。早く行こう」

電話に出たのは賢司だった。

数分後。ポケモンセンターのレストランには椎那、胡睦、賢司とそのパートナーたちの姿があった。

今から歩いてみてもすぐ昼が来るからあまり遠くまで行けない、とのこと。先に昼食を取っている次第である。

「で、どこに行くんだ？」

「おつきみ山のむこうに行くの」

「ハナダシティか？」

「ううん。そのもうひとつむこう」

「……………」

ハナダシティの東は山か海かのどちらかのはずなのだが……。

「黄金に輝く土地、ってこと」

椎那が思い出したかのように言葉を付け足す。それによって、謎の都市名が判明した。

「ヤマブキ……………だな」

ぼそりとつぶやくは賢司のリザード。それにこたえるかのようにユウイが言葉を返す。

「……………ヤマブキはやめたほうがいいよ。あの組織がうるうるしているはずだから」

「だよなあ。オレたちが旅していたころからいたからな、あの連中」

あの組織 謎に包まれた紺色の服を着た連中のことである。

うわさではポケモンを捕まえては売りさばいたり、虐待に近いトレーニングを積ましたりしているとのことだが、どこまでが真実でどこからが偽なのかは定かではない。

しかし、近づくとは危険であることは確かである。

今までも少しづつかってしまったり、会話をしながら歩いていた

りすると、すぐにガンを飛ばしてくるといふ情報が絶えないからだ。

「とりあえず、そういうことだからヤマブキに行くのはやめような」

「じゃあ、ハナダかタمامシ」

「ハナダがここからだが一番近いけど、どうやって行くつもり？」

「ケンくんのメタモンに乗って」

抜かりはない、とでも言つかのよつに自信満々に答える胡睦。しかし、賢司はそれを一言で一蹴する。

「アホか。自分らの足で歩いて行け。オレはどういう道程ルートで行くんだ、と聞いているんだよ」

「ルート？」

はあと賢司はため息をついて、持ってきていたバッグからカントー地方の地図を取り出し、指で指し示しながらルートを説明している。

「例えば、ここのおつきみ山を通って普通にハナダに行くルートと

「

「こつちにあるデイグダの穴を通って12番道路に出てからクチバに行き、9番道路にある地下通路を通ってハナダに行くルートがある」

それを聞いていたヨルノズクとユウイは苦い顔をする。

「後者はものすごく遠回りだけだな」

「デイグダの穴、ねえ」

「ユウイは行きたくないよなあ」

「ハハハ……。デイグダとダグトリオしかないからね」

「トーン、低いぞ」

しゃべるごとに声のトーンを落としていくユウイ。でんきタイプであるユウイはじめんタイプが最高に嫌いなようだ。

「ぼくもこっちの道がいい」

「あたしも。ねー、トゲピー？」

こつこつと、全員一致のおつきみ山を歩いて八ナダシティに行く、というルートが取られたのである。

「でも、歩きたくない……」

椎那の心の叫びが声となって発せられた。

外の気温が30を超え、この真夏のさなかに外を歩くのは、誰であつたって嫌である。

「歩け。公共交通機関なんて大都市にしかないんだから」

「11時きよ……?」

「公共交通機関。バスとか電車とかだよ。ああいうのはヤマブキとタマムシにしかないの」

なんでー? という表情を賢司に向ける椎那であるが、公共交通機関が小都市 いわゆる普通の町にない理由なんて賢司も知るわけがない。

「湿度がないだけでしたよ。湿度があつたらもつと暑いんだから」

ユウイの発言にそうそう、と頷く賢司。

「湿度があつたらそこから中、キノコだらけだろうし」

そんなバカなことがあるわけないだろうが、純粹な子どもはそれを信じるのが常である。

キノコだらけの町を想像したであろう椎那・胡睦、それにミウ・トゲピーは一瞬のうちに、「湿度がなくてよかった」という安堵あんどの表情を浮かべていた。

それから数十分後。

レストランで十分涼んだ椎那一行は、当初の待ち合わせ場所であるポケモンセンターの玄関前に来ていた。

「さてと。いってらっしゃい」

「え〜!?!」

途中まで一緒に来てくれるのかと思いきや、ここでお別れすると
の発言。あまりにも唐突すぎる。

「え〜」じゃないし。これ以上行きたくな……痛っ!？」

賢司が恐る恐る足元を見ると、黒く焦げた跡が……。そのそばに
はもちろんユウイの姿もある。

そしてその隣にはケラケラと笑っている自分のパートナーである
朱色のトカゲの姿も見えた。

何かにブチツと来た賢司は、リザードの頭をむんずとつかむと強
引にモンスターボールの中に入れさせた。一仕事済んだとでもいう
かのようにパンパンと手をはたくと、ユウイのほうに向きなおる。

「お前、また……」

「町の出口まで一緒に来ないの？」

「……分かった。出口までな」

断ると必ずまた（軽めではあるけれど）電撃を喰らうはめになる
……。

長年の付き合いからそのことを重々承知している賢司はしげしげ
だが、了承した。

こういうわけで、途中で雑談をはさみながらニビシティのおつき
み山方面の出口まで付き合わされることとなった賢司。しかし、実
はここでもお別れができないと知るのもう少し後になってからだ

った。

「着いたぞ」

賢司のその声の先には「ここから先3番道路」という看板が立てられていた。つまり、ニビシティを抜けた、ということである。

「え〜……。もう少し一緒に行こうよー」

「そうだよ。ハナダシティまで行こう?」

またかよ、という表情を浮かべつつ、ダメと言い切る賢司。

「ここまでって最初に言ったし。これ以上は行きません!」

賢司は腕組みをしてそっぽを向き、絶対に行かないという意思表示をする。と、足に再び例の痺れが来る。

「い!?!」

「行こうよ。それがハナダまで乗せてくれない?」

足元を見るといつの間にかユウイがいる。そして例のごとく黒く焦げ跡が着いていた。

「お前なあ……………」

「もちろん、最初からこのつもりだよ。」

二ビからハナダまでが一番遠いんだ。おまけに人気も少ない。そんな中を歩いて、熱中症になられても困るし、ね？」

さらりと言い放つユウイ。そして、とどめの一言。

「どつせ、ヒマなんですよ。この夏は」

しばらくの後、3人の姿は上空にあった。

賢司のパートナーであるメタモンがカイリニューに変身して、背中に主とそのイトコふたりを、隣で並走ならぬ並飛するヨルノズクの背には、ミウとトゲピーを、それぞれ乗せていた。

この間、ユウイはモンスターボールの中に戻るようになった。

「ハナダまでだからな。絶対にそれ以上は行かないからな。クチバやタマムシには自分らの足で行けよ」

愚痴の様に何度もふたりに言い聞かせる賢司。しかし、椎那も胡睦もその言葉には一切聞く耳を持たず、空の旅を満喫していた。

そして数十分後。山を越えた先にあるハナダシティに到着したのだった。

12話 モンスターボールの不思議

「バイバイ、ケンくん」

「また会おうねー」

そう空に向かって叫ぶのは胡睦こむつと椎那の姉弟。

空飛ぶ大きなポケモンにまたがり、その声に答えるかのように片手を大きく振り、去っていくのはふたりのイトコである賢司。

ふたりの姉弟は1週間ほどの日々を経てトレーナーカードを入手し、今、最初の目的地であるハナダシティに到着したのである。

本来なら数日はかかる道のりを、たったの数時間で。

「行っちゃったね……」

「うん」

自分たちをこの地まで送ってくれた人を懐かしむかのように、寂しそうな瞳で空を見上げる胡睦。……心の中では全く別のことを考えているのだろうか。

「どうせなら、タマムシシティまで連れてってほしかったな」

と言っている間に本音がポロリと出てしまったようだ。

「胡睦。いくらなんでもそれは無理だ」

胡睦のちょうど真上を旋回しながらヨルノズクが答える。その言葉にムツとしたのか、口をとがらせる胡睦。

「どーしてよっ！」

「だってなあ、ユウイ？」

話を振られたユウイはうーんと考えるように、ヨルノズクと同じく困ったような表情を浮かべる。

「……ユウイ、いつの間に出てきたの？ 椎那、出してないよね？」

違う方向に疑問を持ち始めた胡睦。その横でうんうんと頷く椎那。というのも、空を飛んでいた間、モンスターボールに入れていたユウイが気付かないうちに出てきているのだから。

「ああ。中からでも開閉は出来るからね、一応」

え？

「ヨルノズクがいつの間にか外に出て、ひとりで放浪の旅に出ていることがあったのはそのせいだし」

え、え？

「裕弥が言っているのを聞いたことない？」

“またヨルノズクがいなくなってる！！” っつて

記憶をよく思い返してみれば、兄・裕弥がたまにそんなことを言いながら騒いでいたような気がしなくてもない。

「まあ……。内側からでも開けられることを知っている人間ひとは少な

いかな。

でも、僕らのなかだと、そういうことは知れ渡っているからね」

最後に「すごいでしょ？」といたずらっぽく笑った。

ふたりとも驚きのあまりしばらくの間、ぽけくと聞いていただけだったが、胡睦はハツとして慌てて疑問を投げかける。

「で、でもなんで開くようになってるの!？」

開いたら困るんじゃない？」

「……だってさ、元氣のあるポケモンにいきなりモンスターボールを投げて捕まえようとしても、捕まらないだろ？」

例え中に入ったとしても、すぐ飛び出してくるだろ？」

中から飛び出せるってことは中からでも開けられるってことじゃん」

ヨルノズクが何の疑問も持たずさりと行ってしまふ。

いきなりそんなことをさりと言われても、ちんぷんかんぷんで頭にも入らない。記憶にも残らない。もっと言えば、聞いた言葉がその場で右から左へと抜けていく……。

そういうわけで今度は内容が理解できず、頭が真っ白になってしまい、再び、ぽけくと聞いているだけになってしまった胡睦と椎那。それを見ていたユウイは苦笑しながら、かみ砕いて短い文にした説明を補足する。

「言うなれば、野生ポケモンがトレーナーに捕まえられるのを避けようとしてやっていることを、捕まえられたあとの僕たちもやっているっていうことだよ」

その説明で大まかではあるが、ようやく意味を理解したふたり。そんなふたりのそばで、見ず知らずの少年がモンスターボールを空へと投げる。

もちろん見慣れた赤い光をまとってポケモンが出てくるんだろうな、とぼんやり考えながらボールを目で追う。

「!!!!!!?」

ボールを追っていたふたりの目が見開き、驚きのあまり「え、え?」と「え」を連続させる。

そんなふたりの様子を知らない少年は空に向かって「さよならポッポ。元気でな」と、声をかけていた。

いざ振り向いて帰ろうとしたら、驚いた表情で自分を見る4つの目に気付いてしまった。

「な、何?」

後ろを振り向くと同時に一歩、後ろへと退いた。

自分が何か変なことでもしたのかと、その少年は考えるが思い当たる節がない。しかし、よくよく見てみると、そのふたりは自分と空を交互に見ているのだ。

「ああ」

少年は何か気付いたかのように、ぼんと手を鳴らす。

「さっきの青い光かい?」

あれはポケモンを逃がしたときに出るんだよ」

そう。モンスターボールから出るのは赤い光だけだと思っていたふたりだから、青い光がモンスターボールから出たせいで、ひどくびっくりしていたのだ。

「逃が……す？」

「そう。ポツポを逃がしたんだ。野生に帰したとも言っけどね」

さも当たり前かのように話す少年に、胡睦は小さな怒りが湧いた。

「ど、どうして！？ 捕まえたんでしょ？」

「いや、あいつは捕まえたというより……保護していただけだから。翼に怪我をしていてね、それが治るまで世話していただけなんだよ。もう自由に空を飛べるまでに回復したから、自然に帰したんだ」

ポツポが飛んで行った空を見つめながら思い返すようにゆっくりと話す少年。そんな少年に向かって空から急降下してくる1つの小さな影が……。

「ポオ ツ！！！」

それは少年の目の前まで来ると速度を落とし、ゆっくりと彼の頭の上に着地する。

「ポツポ！ 戻ってきたのか」

「ポオ」

一声嬉しそうに鳴くポツポ。

少年の顔にも笑みが戻り、「お帰り」とポツポに告げる。

「これで何匹目だろ。世話していた子たちが戻ってくるなんて……」

少年は指を使って数えようとしますが、10本の指では足りないらしい。

「まあいいか。帰ろう、ポツポ。じゃあね、ふたりとも」

そういつて、頭にポツポを乗せた少年はもと来た道を歩いて戻っていく。

「逃がしたポケモンが戻ってくる?」

「来るだろうな。情が湧いたら」

去っていく少年の後姿を見つめながら、ぼそりとつぶやく椎那。その言葉にヨルノズクが反応する。

「それにしても……よほど大切に世話していたんだな。そうでなければ情も湧かないよ」

「ああ」

ユウイとヨルノズクも後ろ姿が見えなくなった少年をその目に映す。最近はそのような人間をあまり見かけなくなったのか、珍しそうに眺めていた。

「ねえ。トゲピーとミウがないよ?」

先ほどからあたりをきよろきよろと見回していた胡睦。どうやら、ちびっこ2匹の姿が見えなくなっているようだ。

「いないの？」

「うん。さつきから探しているんだけど……」

ユウイも軽く周りを見渡すが、それらしい影は見当たらない。空を飛べるヨルノズクに協力してもらい、空からの搜索も加わった。

しかし、一向に見つかる気配がない。それどころか、どんどんと日が暮れていき、見通しが悪くなるばかりである。

二手に分かれて捜していたが、日が山の陰に隠れ出すころには元いた場所に2組とも戻ってきていた。

どこの方向をどこまで探したか……。そういうことを報告しあった結果、ハナダの町全体を軽くではあるが探し終えた、ということが判明した。

それからほどなくして、探し始めからユウイの心中で渦巻うずまわいていた「まさか……」という予感が確信へと変わりつつあった。

「……ふたりとも先にポケモンセンターに行つて。

僕、道路のあたりまで探してくるから」

いつになく真剣な表情で胡睦と椎那を見るユウイ。言い終わると、町の南側 5番道路に向かって走っていった。

「ユウイ、どうしたんだろっ……？」

「やっぱり、自分の妹だから気になるんじゃない？」

椎那、ポケモンセンターに行こうよ。夜になったら戻ってくるって、絶対」

「うん……」

胡睦はなかなかその場から動こうとしない弟の背中を押しながら、ポケモンセンターへと向かった。

そんなふたりの後ろを、ヨルノズクが低空飛行で付いて行っていた。

その日の夜。

ふたりが夕食を食べ終えても、眠くなる時間になってもユウイはもちろん、ミウヤトゲピーは戻ってこなかった。

そしてふたりが寝静まった頃、ヨルノズクも窓から外へと飛び出し、捜索に出かけたのである。

空には月が出ており、明るく静かに夜の八ナダシティを煌々と照らしていた。

13話 ユウイの行き先（前書き）

ユウイ目線で話は進みます。

13話 ユウイの行き先

賢司にハナダシティまで送ってもらった日の夕方、椎那と胡睦のふたりから離れ、単独行動をとったユウイ。彼が向かった先はハナダシティの南にある公道、5番道路。

その道路を道なりにまっすぐ進むと、ヤマブキシティへと辿りつく。

ヤマブキシティ。

海から吹く、塩気を含んだ穏やかな風がゆったりと流れるマサラタウンとは違い、そこはビルが立ち並ぶ大都会で、カントー地方の中心と呼ばれる街だ。その街の中心部には『シルフ・カンパニー』

『シルフ』と省略されることが多い と呼ばれる大会社のビルがそびえたつ。

シルフはその昔、悪の組織の本拠地となっており、ヤマブキシティやその周辺の町に住む人々を脅かす存在であった。しかし、長い年月が経つに連れ、その組織自体の影が薄まり、現在ではその組織に関わりのない一般人が会社を経営しているとまで言われている。

そう、あくまで「言われている」だけだ。

実際はそうではない。知っている人は知っているのだが、知らない人は全く知らないのである。その理由のひとつには、普段は普通の一般人のように会社の外でふるまっていることが挙げられる。だからこそ、なおのこと分かりにくいのだ。

シルフでは、会社の外では会社の話をしなというのが鉄則で、会社の関係者全員がこれを厳守している（もちろん、そこで働くポケモンも含まれている）。

だが、クラス会などでどうしても話さなくてはいけなくなった場合にも問題はない。関係者全員が口裏を合わせ、同じ嘘をつくのだから。

と、僕は聞いたことがある。少なくとも昔のシルフのことを知る人 人間にかかわらずポケモンも聞いたことがあるだろう。

これ以降は友達から聞いた情報だけど、確かなもの。それは。

『そんな会社だからこそ、表での顔しか大半の人は知らない。しかし、裏の顔はとんでもない輩たちである』

と云うことと、

『ムリヤリ捕まえた大半のポケモンたちを、地下に造られた訓練場一（陸上競技場みたいなどころらしい）で半日以上、ほぼ休みなく訓練させられている。』

そして、その訓練している様を監督しているのが、先に捕らわれた先輩であるポケモンたち。自分たちが先輩にされた腹いせに、後輩となるべき新入りをいじめ通すのが彼らの流儀となっている』

と云うこと。そして、

『その捕まえられるポケモンのほとんどは、おつきみ山を抜けた先にある水の町であるハナダシティ、かの有名な豪華客船が年に一度停泊する港町であるクチバシティ、大きなデパートやゲームセンターという名ばかりの賭博施設で知られるタマムシティ、

そしてポケモンタワーが有名なシオンタウンといった街の周辺で集められている……らしい。』

4つの町は全てヤマブキシティの東西南北に位置している。だからこそ、集めやすい」

と言うことの3つ。

（僕らポケモンにとってみれば）結構重要なことではあるけれど、知っている人はシルフを出入りしている人ぐらいたと思う。

言いかえれば、僕にそういう友達がいるわけで……。

「ユウイ？」

近くの茂みから僕を呼ぶ声が聞こえてきた。それも、何度も聞いたことのある懐かしい友達の声。その方向を振り向くと、いた。

「あ、やっぱりユウイじゃん。どうしたんだ、こんなところまで？」

茂みから姿を現したのは胴長でイタチみたいなポケモンと、白を基調とし小さな白い羽を背中から生やしたポケモンの2匹。ふたりとも僕の友達で、そのシルフの関係者でもある。

だからと言って、悪いやつらではない。先の情報を提供してくれたのは彼らなのだから。

「ミウとトゲピーを探しているんだ。見かけてない？」

「トゲピーって……」

まさか、という顔をする白いやつ。それを見て、深くうなずきその次に来るだろう言葉を予想して言葉を返す胴長イタチ。

「うん。聞かずともお前の妹だな、チック」

チツク。

それが白いやつの愛称。ただ、誰からにでもそう呼ばれるのは嫌いで、自分が本当に友達だと認めた相手にしか呼ばせない。認めてもないのにそう呼ぶと、ひどく怒る。なぜかは知らないけれど。

「……自分の妹ならここを通った時にわかる。」

ここは通っていないと思うよ、少なくとも30分ほど前までは」

妹がいないと聞き、少し不満げな表情になったけれど、知りたい情報を教えてくれた。提示してくれたその時間は、僕らがハナダシテイで妹たちを探していた時間より短かったから、きつとそれより前にここを通ったんだろう……。きつと、ヤマブキに向かったに違いない。

お礼を言い、その場を離れもう一度ふたりに行こうとしたとき、チツクに「ちよつと待てよ」と呼び止められた。

「少し情報があるんだ。なぜか知らないけど、ヤツら、イーブイを集めているらしいよ」

チツクは（短い）腕を組んでちよつと いや、すごく危機的情報を僕に教えてくれた。急いで見つけないと、ミウが危ない！

それにしても「ヤツら」が「集めている」ということはシルフで何かやっているのだろうか？ 仮に、（あまり考えたくないけど）すでに連れて行かれているとすれば、連れ戻す方法は……。

「そうそう。それと、その話とは別になるんだけどな、とあるバカ組がちびっこ捕まえてはいびつているらしいよ。」

それがタمامシの南にある林のこと。だから、行ってみる価値は

あると思うよ」

これまた危なっかしい情報を入手。つくづくありがとう。バカ“組”、ということは数人でできたグループなのか。

まあ、当たり前か……、シルフ自体、ペア以上で行動するのを基本としているところだし。

でも、どちらに転んだにせよ、危険であるのに変わりはない。

早くミウとトゲピーを見つけないと……、ふたりが危ないのには間違いない。

ふたりと情報交換をしているうちに月が空高くに上ってきていた。そろそろ出発しようかと思った頃、北の方角から一羽の鳥が飛んできて、僕らの真上で空中停止した。

「ユウイ、こんなところにいたのか……」。

一応、24、25番道路やイワヤマトンネル、おつきみ山のほうまで見てきたけど、それらしい影はなかったよ」

声と姿からしてヨルノズクのような。椎那と胡睦が眠った後、探しに出てくれたんだろうな。あの時も、そうだったな。椎那と会う前の日も。夜遅くまでトキワシティや周辺の町まで探しに行ってくれた。人一倍、仲間思いなところがある彼らしい行動だと思う。そんな彼にお礼を言う。

「ありがとう、ヨルノズク」

「じくろつさん」

イタチのようなやつの声がしたとき、「ん？」というような表情をしたヨルノズク。目線を僕からずらして、少し下のほうへ向けたと、同時にものすごく嫌な表情になった。

「なんでお前らがここにいるんだよー！」

その声はすごく大きくて。

驚いているのもあるけれど、非難している意味合いのほうがとても強い。ヨルノズクはこのふたりのことがものすごく嫌いなのだ。

「“なんで”って」

「いこう、タオ。放っておけばいいさ。」

じゃあな、ユウイ。悪いけど、オレの代わりに見つけてやって」

そう言ってチツクは、イタチ もといタオの背中を押しながら茂みの中へと消えていった。ヨルノズクはというと、清々した、とてもいっような表情でふたりの進んだ道をいつまでも睨みつけていた。

「なあ、ユウイ。なんで平気であいつらといられるの？
騙される可能性だっけなくはないのにさ」

ふたりが完全に行ってしまったあと、ぼやくように僕にそう尋ねるヨルノズク。

少なくとも、僕の同年代であのふたりを好いている人・ポケモンはあまりいないと思う。賢司ケンでさえ、ふたりと会えば少なからず一瞬は嫌な顔をすると思う。

でも、ふたりはそんなコト 騙すようなことなんてしない。僕らが傷つかないようにするために軽く嘘をつくときもあるけれど、それは僕らのことを思っているからのことであって、つきたくてついているわけではないし。

『R』と聞くだけで拒絶反応を起こす者のほうが多いかもしれない。なぜなら、殺しもしているというウワサだから。だけど、同じ組織内でもそれを止めようとしている者もいる。

その一部がチックとタオであり、僕らが明日出会うであろうイーブイでもある。

「あのふたりは本当のことしか言わないよ」

だって、初めて会ったとき、お互いに進化していない時代に会ったときにちよつとしたことで大ゲンカした仲でもあるし、それ以来、互いに気の置ける友達になったのだから。

ヨルノズクと仲良くなる前から彼らとは仲が良かったんだ。そんなふたりがいとも簡単に僕を裏切るとも思えないし、ね。

「ヨルノズクは相手のことをよく知らないのに、悪く言いすぎだよ」

「そんなこと言ったって、あいつら、あの組織のメンバーなんだぜ？それに、幼いトゲピーとオタチとを置き去りにしてさ」

ほら。

なぜ組織のメンバーになっっているのか？

なぜ妹を置き去りにしたのか？

その理由が分かっているじゃないか。

表面しか見ていないんだ、みんな。どうしてもその奥を見ようとしていないだろう……。

「……ユウイ。お前、これからどうするんだ？」

「僕はタمامシに行ってみる。ヨルノズクはハナダのポケモンセンターに戻って。明日になったら、椎那たちをタمامシまで連れてきて例の道を使って」

「……分かった。気をつけるよ？」

「うん、ありがとう。じゃあ……」

僕は再び妹達ふたりを探しに走った。

大切な自分の妹と、大切な友人の妹を探しに……。

どうか、無事でいますように。。。

13話 ユウイの行き先（後書き）

次はミウ&トゲピーのちびっこ中心で話が進みます。

14話 誘拐と救いの手（前書き）

大半はミウ目線となります。

そして新たな登場人物が……。

14話 誘拐と救いの手

「あー、もう!! うるさい、こいつ! こいつだけ、ここに置いていこうぜ!？」

こんなのいなくてもこっちがいるし。しかもイーブイだぜ? シルフに連れて行けば、絶対褒賞金ほしょうきんくれるしさ」

「そうだな、こっちは置いていくか。よし! あそこに行くか」

「行こう、行こう! あ、お前、そのイーブイ引っ張ってこいよ?」

「ええっ!! オレがかよ!？」

「当たり前じゃん。頼むぜ、言い出しっぺさん」

そういうわけで、あたし、イーブイことミウは知らない人に引っ張られています。

こうなってしまったのには、ちょっとした原因がありました……。
そう。あれは昨日の夕方のこと。

ちょうど、椎那さんと胡睦ちゃんがモンスターボールについて延々と話していたころかな。

長〜い話を聞いているのもヒマだったから、近くにあった草むらでお昼寝でもしようかなと思っていた時、トゲピーがちょこちょこどどこかに走って行っているのが見えたんだ。だから気になって、

あたしはトゲピーのあとを追いかけたの。

「トゲピー!!」

「トゲピーってば!!」

「ねえ、トゲピー!!」

なかなか追いつけなかったから何度も呼び止めようとしたんだけど、それに全然気付いてくれなくて。……ムシされていたのかもしれないけれど。

何十分もトゲピーを追いかけているうちに、大きな建物がたくさん建っているきれいな町に着いたの。

トゲピーはというと、大きな建物の下からずっと上を見上げていたんだ。

「何してるの?」って聞いたら、「どれくらい高いのかなあ」だって。

ずっと追いかけてきたあたしの身にもなっほしいよ、まったく。

「トゲピー、帰るっ?」

そう言ったとき、ふと思ったの。「ここは、どこなんだろう」って。キョロキョロと周りを見渡してみるけれど、知っているものはひとつもない。

それどころか、どんどんお日様が赤く染まっっていくの。お昼から夕方へ、夕方から夜へ……。時刻ときが変わっていくのをずっと眺めているしかなかった。それも知らない町で。トゲピーと一緒に……。

「君たち、迷子?」

お日様が沈んでから30分ぐらいたったのかな？

ふと声をかけられて横を見ると、知らないヒトたちが立っていた。びっくりしてしばらく黙っていたら、同じヒトがもう一度、同じことを聞いてきた。

「迷子なのか？」

「この時間帯になっても家に帰っていないんだったら迷子だろ」

勝手に迷子だと断定されてしまったけど、3つ目の違う声が聞こえて来た。

「いや、「家出」ってのもあるぞ」

「……家出、ではないです。と思っていると、4つ目の声とひとつめの声が聞こえてくる。」

「んなバカな。んで……、そろそろ答えてくれないか？」

君たちは迷子なのか、そうじゃないのか」

「迷子だったら家まで送り届けてやるけど？」

「……実際マイゴなんだけど、知らないヒトに着いていくのはタブーだし……。」

たとえ、それが人間であっても、今のようにポケモンであっても。

だから、あたしはだんまりを決め込んでいたのに、トゲピーが「マイゴなの」って言っちゃったから、そのヒトたちに連れてこられたの。

屋根があつて、壁もあつて、入口もあるお家に。でもそこは、ハナダシティではない場所。

送り届けてくれるんじゃないかなかったの？ あんまり信じてはいなか

ったけど。

「ねえ、お兄ちゃんたち。ここ、どこ？」

トゲピーが何の疑いもなく、ここに連れてきてくれた4人組に声をかける。

「ここか？　ここはヤマブキシティの空き家だよ」

「暗くなったから動くのもあれだしな。

明日になったらハナダシティまで連れて行ってやるよ」

その声と言葉について安心をおぼえて、あたしとトゲピーは次の日までぐっすりと眠った。そのヒトたちがしていた怪しげな会話を聞くこともなく……。

その日の夜。

外に出ていた例の4人組。寝ている2匹を起こさないためか、小さな声で会話をしていた。

「お前、本当に小さい子騙すの、うまいよなあ。なんか感心しちゃうぜ」

犬みたいな姿で前後肢に灰色のリングをしたポケモン　デルビルが純粹に感激する。

「だろ、だろ？」

だいたいこういう子らは優しい言葉づかいすれば何の疑いもなしに

付いてくるんだぜ」

お腹にある時計回りの渦が特徴的な水色のポケモン　ニョロゾ
が自慢げに両手を腰に当てる。

「……でもさあ。イーブイだったっけ　、最初警戒してなかったか？

ほら、俺らが声かけたとき」

頭にシルクハットを被っているように見える漆黒の色をした鳥ポケモン　ヤミカラスが記憶を探りながらそう話す。

「そう言えばそうだよな」

ニョロゾが腕を組み、空を仰ぐように考えるしぐさをする。

「『知らないヤツに付いて行くな』って言う風に言いつけられていたんじゃないのか？
それだったら筋が通るし」

頭に緑色の葉っぱをつけ、長い鼻が特徴のコノハナというポケモンが石の上にちょこんと座ったまま、もっともらしいことを言う。

「かなあ？

でもまあ、どっちにしろ俺たちに付いてきてここにいるんだから、
「意味ないよな」

その言葉を境に4人組は「ハハハ」と笑い出す。

しばらくして笑いが収まったころ、コノハナが誰かの耳には入るようにポツリと言う。

「明日はどつすんの？」

「明日あ？」

「決まってるだろ。タマムシまで行くんだよ。そこでいつものように……」

クククと怪しげな笑いを残し、その夜は静かに更けていった。

次の日の朝。

あたしが目を覚ますと、そこは草むらの上だった。隣ではトゲピ
ーがまだぐっすりと眠っていた。でも、あたしが昨日寝た場所は、
小屋の床の上だったはず……。

「お目覚めかい、イーブイちゃん」

はつとして前を見ると、昨日あたしたちを小屋まで連れて行って
くれた4人組の姿があった。

「ここは、どこなの？」

何か理由を知っているだろうと思って、場所を尋ねてみると、と
んでもない答えが返ってきた。

「知ったって仕方がないだろ？」

今から俺たちと遊んでもらうんだから」

「そうそう。意識失ったらちゃんとな安全な場所に連れて行ってあ

げるし。なあ？」

アソブ？ 意識ウシナウ？ な、何それ？

でも、危険なことには変わりはない。今すぐこのヒトたちから離れなきゃ……。

恐怖心がわいたあたしは、隣で寝ていたトゲピーを揺すって起こした。

「ねえトゲピー、起きてよ。トゲピーったら！」

何度かゆすると、ようやく起きてくれた。その間、あの4人組はにやにやと気持ち悪く笑ってて、ものすごく不気味だった……。

「ミウ？ こじ、どじ？」

トゲピーは目をこすりながらあたりを見回す。けれど、そこは知らない風景。もちろん昨日寝た場所とは違う場所。

「……お兄ちゃんたち。こじ、どじなの？
ハナダシティまで連れてつてくれるんでしょ？」

ああ、と思い出したかのように4人組のひとり、デルビルが口を開く。

「お前、本気で俺たちがハナダまで連れていくって思ってたのか？
自分らの足で来たんだったら自分らの足で戻れよな」

「ま、昨日の時点だったら出来たかもしれないけど、今日になったから、そんなことはできないと思うけど」

そう言い終わると、あたしたちを見ながら不気味に笑うヤミカラス。ただでさえ色が黒くて怖いのに、そんな笑い方されたら余計に怖さが引き立つ……。

「……連れて行ってくれないの？」

眠気の覚めきっていないポヤンとした顔で、もう一度質問するトゲピー。その間、あたしはずっとデルビルを睨みつけていた（さすがに、ヤミカラスをにらむ勇気はあたしにはありません）。

「そうさ。だいたいお前、ここがどこかわかってないだろ。」

一応教えておいてやる。ここはタمامシ。そして、この場所はタمامシの南側にある林だ」

「もうひとつ言うと、お前らが眠っている間に連れてきたのさ。それにハナダとは結構距離があるし、簡単には逃げられないからな」

クスクスと含み笑いをしながらヤミカラスが言う。

「うそつき!!」

トゲピーはここにきてようやく騙されていたことに気づく。

「だって、これがおれたちのやり方だし？」

「騙されるほうが悪い。あの町に親切なヤツなんていないよ。ま、来たばかりのお前ら　あ、迷子ちゃんだったっけ？　にはわからないだろっけだな」

自分たちがやっていることが当たり前かのようにふるまう4人組。さすがにそろそろ許せなくなってきた。

「あたしたちを元の場所に帰して!!」

そう叫ぼうとしたら、隣で泣き声が聞こえた。そう、トゲピーが泣き出したの。

知らない場所で騙されて、もっと知らない場所に連れてこられて。悲しくならないほうが不思議だもん。あたしだって泣きたいよ……。

「あーもう、黙れよ!」

「うるせえな!」

トゲピーの鳴き声は、4人組を苛立たせるのに十分な威力を持っていた。

そういう成り行きで、あたしミウはコノハナに引っ張られて違う場所へ連れて行かれたの。

そこであたしはタオルが何かで目隠しされて、周りを見えなくさせられた上に、何かで身動きが取れないようにされた。まるで生きているお人形さんのように。

そんなあたしは格好のいい的で、いろんな方面からいろんな技が飛んできた。目が見えないからどこからきているのかもわからないし、たとえわかったとしても動けないから避けることもできない…

…。

そんなことが何時間か続いた。向こうもずっと技を放ち続けるのも疲れるみたいで、何十分かおきに休憩をとりながらやっていたみたい。だって、数分間、何にもされなかったことが何回もあったもの。

それでもほとんど休むことなく何度も何度も攻撃されて、意識がモウロウとしてきたころ、聞いたことのない声が聞こえた。

「ちょっと、お前ら何してんの!？」

それはすごく驚いている声で、それでもってあたりによく響く少し高めの声。

「……か」

思いもよらぬ人物のお出ましまいで、デルビルは軽いため息をつく。

「どっする、デルビル？」

「どっする、って……」

「……相談するヒマあったらさっさとヤマブキに戻ってくれない？
人手が足りないんだってさ」

考えさせるヒマも与えず、それも不機嫌そうに命令しているような口調の誰か。その口調のせいであたしは不安を覚える。また同じ

ことをされるのかな、と。

「ふん。ウソばっか。どうせそれもタワゴトだろ、？」

「今度ばかりはホントだよ？ 疑うようなヒマがあるんだっただら戻りなよ」

「へー、へー」

デルビルたちは気のない返事をする、そそくさとその場を立ち去っていく。

4人組の足音が遠ざかると、先ほど来たヒトが深くため息をつく。そして、あたしに向かってこう言った。

「待っててね。それ、解いてあげるから」

言い終わるか終えないかのところで、近くに寄ってきた。そして、不慣れな手つきであたしに巻きついていていたモノと目隠ししていたモノをとってくれる。

「大丈夫？ これ、食べて。元気になれるから」

そう言っであたしに差し出したのは青色で丸い小さな木の実にオレンの実と呼ばれるものだった。

あたしがなかなかそれをうけとらなかつたから、少し強引に受け取らせられた。持たされたオレンを不安そうに見ていると、うん、と力強くうなずかれた。まるで、採れたてだから大丈夫、とでもいうかのように……。

あたしが木の実を口にすることを見届けると、安心したのかそのヒトはポロリとつぶやく。

「……まったく、相変わらずひどいことばかりする連中だよ。分かっているとは思うけど、あんなのに近づいちゃダメだよ?」

「近づきたくって近づいたんじゃないもん」

オレンの実のおかげで少し元気が戻ってきた。

「そう……なの? あ。僕、フィフィって言うんだ。キミ……は?」

“キミ”と言われて初めて前を向いたの。あたしを助けてくれたのは、あたしと同じイーブイ。でも目は黒色ではなくて茶色っぽい色で、優しく微笑みかけてくれていた。

「あたしは……」

気が付いたらいつの間にか自分の名前をしゃべっていた。

「ミウ」

「ミウって言うの? よろしくね」

フィフィはあたしの目を見ながら、もっとずっとやさしく微笑みかけてくれた。

そう、それは闇を覆い隠すオレンジ色のお日様のように……。

その後も、フィフィはあたしが元気になれるまでずっとそばで座

っ
ていてくれた。

あたしはなぜこうなったのかということと、途中で離ればなれにさせられたトゲピーのことをファイフィに話した。もしかしたら、トゲピーを途中で見かけたかもしれないと思って。でもファイフィはトゲピーの姿も泣き声も知らないみたいで……。

「ごめんね。だいたいで場所が分かったら連れてきてあげられるんだけど」

ファイフィのせいではないのに……。悲しそうに謝ってくるの。

お昼が近づいたころ、ファイフィはどこからか小さなパンを取り出していた。

「食べ……るよね。半分あげる」

そう言って、ちぎって半分にしたパンをあたしに渡してくれた。あたしが素直に受け取ったのを見ると、自分はパクンと食べた。と同時に嫌そうな顔になった。

「……甘あ……」

どれくらいの甘さなのか分からなかったから、あたしも毒見感覚で一口食べてみる。でも、思ったほど甘くない。例えば、ちょうどモモンの実くらいの甘さ。

「甘くないよ？」

「僕、甘いのが好きじゃない。というか、このジャム嫌い……」

あまりにもぶっっちゃけたことを言うから、つい笑っちゃった。

「わ、笑わないでよ！」

「だって……っ」

あわてているのがおもしろくって、おかしくって。なかなか笑いがおさまらないの。

そんなあたしをフィフィは少し呆れた風に見ていた。

「ミウ、笑いすぎだよ……」

「ごめんねー」

あたしの笑いがおさまったところ、フィフィはだいぶ呆れていた。でも、やっぱり口元とか目元とかは笑っていて。

どちらからとも言わず、もう一度話そうとしたとき、ちょうど真後ろにあった茂みがかサカサと揺れた。

警戒して真顔になったフィフィは、ぱっと立ちあがってあたしの前に立つ。

茂みから現れたのは……。

「ミウ!?!」

あたしのことをずっと探してきてくれたお兄ちゃんだったの。

14話 誘拐と救いの手（後書き）

はい。ユウイとミウが合流しました。

そして、フィフィの登場です。

デルビル・ヤミカラス・ニヨロゾ・コノハナ好きの方、
ごめんなさいでした。

15話 タムムシの林で（前書き）

再びユウイ目線です。

15話 タمامシの林で

チツク、タオと会った日の夜遅く、ユウイはすでにタمامシシテイ内に入っていた。

あまり知らない町を深夜にうろろろするのは危険だと考えた彼は、町のとある一角に身を置き、そこで浅い眠りに就いた。

次の日の朝。

太陽が東の空から現れたところにユウイは目を覚ました。そして、待ち合わせ場所として一番わかりやすいであろう、ポケモンセンターの近くへと移動する。それから待つこと数時間。ポケモンセンターの前にヨルノズクが椎那、胡睦こむつを連れて現れた。

「おはよー、ユウイ」

「おはよ」

軽く朝の挨拶を交わすふたりと2匹。時刻は10時になるうとしていた。

「ユウイ、ミウとトゲピーは？」

当然近くにいるものと思って、辺りをきよるきよると見渡す椎那。しかし、それらしき影は見当たらない。不思議に思っ、ユウイと視線を交わす。

「まだ探し中。でも、大体の居場所はわかったから大丈夫」

「そう……なんだ」

がっくりとうなだれる椎那。胡睦もそれを聞いて、どことなく残

念そんな表情をする。しかし、居場所がわかっているのなら、連れてくるのは早いだらうと思っただらしく、すぐ立ち直っていた。

「大丈夫。昼が来る前に見つけるから。」

それまで中で待っていてよ。暑いでしょ、ここ」

そう言って、到着したばかりのふたりと1匹を半強制的にポケモンセンターの中へと追い込むと、自分は炎天下の中へと駆けだして行った。

昨晚、チツクとタオから情報を得た場所　タمامシシティ南側にある小さな林に着くと、ユウイはミウとトゲピーの名前を呼びながら探す。それと同時に辺りの音も注意深く聞く。もしかすると、ミウやトゲピーの声が聞こえるかもしれないからだ。

「…………ふえ〜」

しばらく歩いたところ、どこからか聞こえてくる小さな泣き声をユウイの耳はとらえた。泣き声のするほうへとユウイはゆっくり近づいていく。

聞き澄まさなくても聞こえるところまで近づいたとき、誰の声かすぐに分かった。泣き声の主の名を大声で呼ぶと同時に、その子がいるであろう場所へと一直線に走る。

「トゲピー……………！」

茂みをくぐると、そこには白く小さなポケモンがヒクヒクとしゃくりあげる姿があった。その姿こそ、ユウイが昨夕から探し続

けていたふたりのうちのひとりの姿であった。

ずっと泣き続けていたせいだろうか。トゲピーを囲う感じで周りの土が濡れてしまっている。こんな所にひとりでいて、どれほど不安で心細かったことだろう……。トゲピーを見つめるユウイの目が自然と優しくなっていた。

トゲピーはというとユウイの姿をようやく発見したようで、今度は安心感に包まれたのか、再び泣き出す。ユウイはそんなトゲピーのそばに寄り添い、あやす。

そして、ポケモンセンターで待っている椎那と胡睦のところへと連れていくのだった。

「トゲピー！ 良かったあ……」

ユウイの姿を見て玄関から外へと出て来たふたりとヨルノズク。両手を広げて向かってくる胡睦に、ユウイはトゲピーをそっと引き渡す。ユウイから受け取ったトゲピーをぎゅっと抱きしめる胡睦。今後、二度と離ればなれにならないよう、願いを込めて。

「ユウイ。トゲピー、どこにいたんだ？」

その横でヨルノズクがユウイに問いかける。

「林だよ、南の方角にある」

「林い？ なんでまたそんなところに……」

理解できないとでもいうかのように首を振るヨルノズク。

「なんでも連れて行かれたらしいよ、寝ている間に」

ユウイはポケモンセンターまでの道すがら、この半日以上の間で何があったのかを軽く聞きだしていた。その中には、昨夜、例の2匹から聞いた情報と一致するような奴らの影も見え隠れしていた。

「ふうん。で、ミウは？」

「今からまた探しに行くんだよ」

当然とでもいうかのように、ヨルノズクの目をまっすぐに見つめる。その視線から逃れる様に、ヨルノズクは別の方向を向いた。そこには、現在の時刻を知らせる時計が見えていた。

「……もう12時来るぞ」

「いいんだ」

そう言い残すと、ユウイはまた林へと向かったのだった。

ヨルノズクらと別れて数分後、トゲピーを見つけた付近に辿りついたユウイ。その場で立ち止まり、数十分前に聞いた記憶を思い返す。

(トゲピーがいたのはこのあたり。そして、トゲピーが言うには…)

ユウイはぐるりと南東の方角を向く。

(こっちの方向に連れて行かれた、か)

トゲピーが言うように、そこには背の高い木が生えていた。そして、その近くには低木樹であるモモンの木が2本並んで生えている。

「とりあえず、この方向で探してみるか……」

誰かに言うでもなく、ひとりつぶやく。そして決めた方向へと歩き出し、徐々にそのスピードを上げていった。

それから十数分。林のかなり深いところまで入ったユウイは、かすかに聞こえてきた話し声に気付く。それまで走っていたスピードを緩め、歩きだすとゆっくりその方向へと歩を進めた。

徐々に声が大きくなるのにつれて、それはふたり組の声だと認識し、その片割れは紛れもなく自分の妹 ミウのものだと確信する。片方が妹ならば、もう片方は誰なのか。聞こえてくる声の様子からして、明らかに楽しそうにはしている。危険だと感じたヒトとは絶対に話そうとはしない妹のことだから、相手はミウとトゲピーをさらった奴とは違うというのはわかるのだけれど。

(誰と一緒にいるんだろう。チックやタオではないし……)

そう思いながら茂みをかき分け進むと、少し開けた場所があるのに気づく。きつとそこにいるのだろうと、予想立ててその茂みのそばによる

かさりと音を立てて茂みを抜けると、目の前に見知らぬイーブイの男の子が現れ、もう1匹のイーブイをかばうかのように立ちはだかっていた。

「お兄ちゃん！」

数秒後、後ろにいたイーブイが声を上げる。その声でかばわれていたイーブイが誰なのかとはたと思い出す。かばっていたイーブイも驚いて後ろを振り向いていた。その表情には焦りと驚き、そして困惑の色が浮かんでいた。それをチラリと見てしまったユウイは、どうしてもその子が悪い子だとは思えなかった。

「ミウ」

妹が見つかり安心したのか、ユウイの表情は安堵の色を浮かべた。

「えーと……」

先ほどまでかばっていたはずのイーブイ もといミウが“お兄ちゃん”と叫んだことにより、当然の如く気まずくなってしまう男の子イーブイ。どうしたものかと必死で考えているところが、かわいらしい。

「フィフィ、フィフィ。お兄ちゃんきてくれたから、あたし帰るね」

自分の表情とは裏腹に天真爛漫な笑みを浮かべて兄、ユウイの横にピタリとくっつくミウ。明らかに自分の居場所ではない、ここは……、と黙っていても不思議ではない。

「あー……、うん」

気まずそうな表情のまま、軽く返事だけするフィフィ。

(フィフィ?)

ユウイはどこかで聞いたことがあるのか、軽く首をかしげる。

「お兄ちゃん、いこ?」

隣では妹、ミウが早くみんなのところに戻りたそうにジイっと自分の目を見つめてきていた。

「うん……あ。フィフィ、でいいんだよね」

突如自分の名前を呼ばれ、驚くフィフィ。

「……うん。そうだよ」

「ミウを助けてくれてありがとう」

ユウイは感謝の意を込めて微笑む。しかし、フィフィの顔は少し険しくなった。

「……僕、助けたなんて一言も言ってない。

それにこの場所、普通は誰も入りこんでこないから危険なんだ。このあたりの地面、結構な量の赤い液体を吸っていると思うよ。誰のものかもわからないけど」

ミウと話していた時とは一変して、声を低くし警告するかのよう
にしゃべる。

「でも、助けてくれたのはキミでしょ？」

ユウイも少し困ったような表情になり、ミウは何が起こっているのか分からず、困惑し始める。先ほどまでの優しい声の主はどこへ行ってしまったのか？

「どうだろ？」

あなたが来なければ何かあったかもしれないよ、この子に」

「っ……」

挑戦的な態度でなおも放ち続ける言葉の数々。それにはユウイも言葉を失った。しかし突然、ファイファイはくるりと後ろを向く。そして。

「僕はファイファイ」

「Rという頭文字の付く組織に属し、なおかつそこに所属するポケモンたちのまとめ役でもある」

「簡潔に言つと、最高位に近い存在なんだ」

それだけ言つと、パツと前に向き直り「どう？ 驚いた？」とでも言いたそうな表情でユウイたちを見る。

しばらくはその張り詰めた空気に抑え込まれ、話すことができなかった。

「じゃあ、そのまとめ役さんはなぜここにいるの？」

空気が徐々に消え失せていくころ、ユウイは言葉をしばらく選んでいたが、わざと茶化すように話を持ちかけた。相手がどう反応を返してくるのを見るために。

「それはね、」

フィフィは今までの表情とは一変し、ムスツとする。

「散歩の途中だったんだ」

思いもしなかった言葉にユウイの少し表情が揺らぐ。フィフィはそれに気付かず、言葉を紡ぎ続ける。

「ここは、あいつらがいろいろとやらかしてくる場所なのを知っているから、わざと通り道にしているんだ。

やっているのを見たのは初めてだけど、ホントろくなことしかしないよ」

最後のほうは吐き捨てるかのように下を向いて言う。

「あいつらがこんなことをしなければ、僕は全く違うところを散歩しているもの」

そうとう腹が立っているのか、口調が今までで一番荒い。そして、どんなに上の立場にしようと、表情や感情は年齢に相応しく子どもらしい。そういうところが話しているときに垣間見え、ついクスリとなってしまう。

「僕、変なこと言った？」

焦って、しかし少し不機嫌さを醸し出しながら言う。

「いや、そうじゃないよ。なんとなく、無理して大人っぽく振舞っているような気がただけだから」

「……」

図星なのか、少し視線をそらすフィフィ。しかし、視線を元に戻し「そんなことない」と言い張る。

「フィフィって、結構意地っ張りだったりするの？」

その質問の後、数拍間が開く。返って来た言葉は、ユウイの言葉を否定するもの。

「……まさか。僕けっこう素直だよ？」

「素直、ねえ。けっこう意地っ張りな気がするけど……」

ユウイが言葉を返すと、それに噛みつくようにフィフィも言葉を返す。そんなことが数分間続いたときには、双方とも完全に打ち解けてしまっていた。

「ねえ、フィフィ。フィフィはよくここに来るの？」

「うん。このあたりの道はだいたい知ってるよ」

先ほどとは打って変わって明るい声で質問に答えてくれるフィフイ。

「じゃあさ、タマムシのポケセンまで案内してくれないかな？」

「ポケモンセンター？」

少し意外そうな声で反応を示すフィフイ。

「なんでまた……」

「僕たちのトレーナーをそこに待たせているから、だから連れて行ってくれないかな？」

再度、フィフイに道案内を頼む。

そんなユウイを見てミウは不思議そうに首をかしげる。

「お兄ちゃん、そこから来たんじゃないの？」

「そう言われてもねえ……」

苦笑して言葉をはぐらかすユウイ。さすがに妹に迷子になったとは言いがたらしい。

それを見て、理由にだいたいの見当が付いたフィフイは二つ返事で引き受けることにした。

「この辺りに来るの、初めてなんでしょ？」

案内するけど、その代わりに 「

「……その代わりに？」

「僕も旅に連れて行ってよ」

「はい？」

数秒間、沈黙の空気が流れた後、ひとりにこやかに笑っていたファイに聞き返す。

「言ったじゃん。僕、組織から抜け出したいんだって。」

「丁度いい時だし。ね、いいでしょ？」

ファイは座ったまま、めったに降らない尻尾をふわふわと揺らす。それは胸が弾むほどうれしい気持ちを表すかのように。

「僕はいいけど」

「あたしもいい！」

話を続けようとしたときにミウが割り込む。そのせいで一拍置いてから話を本題に移した。

「僕はいいんだけどね。なんというかファイファイがいる組織のことを相当嫌っているのがひとりいるんだよ。それが一番の問題だと思うよ」

今までにないほど困った顔を出すユウイ。ソイツのことだけが相手がかりなのが目に見えるほどに。

「隠しておけば大丈夫でしょ。」

それに僕、ヒドイ事をしているわけじゃないもの」

自信たっぷりに胸を張るフィィ。それとは反対にもっと深刻そうな表情になるユウイ。

「バレなければいいんだけど……」。

ソイツ、その組織のこと問答無用に嫌いだから、気づかれたら後がしつこい。

いつまでもネチネチ言ってくるから」

ソイツのしつこさはユウイも分かっているようで表情を暗くする。しかし、「行ってみなきゃわからない」というフィィィに後押しされ、いつの間にか林を抜け、ポケモンセンターが見えるほど近くまで来ていたのだった。

借りた部屋の中にはユウイとミウの帰りを今か今かと待ち望んでいる椎那、胡睦、トゲピー、そしてヨルノズクの姿があった。

16話 合流。そして

「ユウイ、遅い!」

ミウとファイファイを連れて戻ってきたユウイが聞いた第一声はこれだ。昨日の夕方からずっと探しまわっていたのだから、少しは労っていたきたい。

「別にいいじゃん。ミウ、見つかったんだし。……で、ソイツ、誰?」

見知らぬイーブイを見つけたヨルノズクは表情を不愉快そうに歪ませる。

ユウイが林の中で言っていた“組織のことを相当嫌っている”者というのは、ヨルノズクのこと間違いはないだろう。

「この子はファイファイ。ミウを助けてくれたんだよ、ね?」

ユウイに名前を呼ばれ、頭を下げて軽く会釈をする。と、同時にポケモンセンターの奥から水色の生き物が飛び出してきた。入り口前の3つの階段をジャンプすると、その勢いそのまま「久しぶりー」と言いながらファイファイに飛びついた。

「わ、ワニノコ!」

普段はクールを装っているファイファイも、この時ばかりは驚きのあまりに表情を崩した。

「びっくりした? ね、ファイファイ、びっくりした?」

そんなフィフィの様子には目もくれず、「びっくりした？」と連呼するワニノコ。その気迫の良さに圧倒されながらも、とりあえず「うん」とだけうなずき返す。

「ワニノコ、知り合いか？」

いぶかしげにその様子を見つめるヨルノズクの声に「もちろん！」と強く反応するワニノコ。

「知り合いじゃなきゃ、こんなことしないよ」

そりゃそうだ。

「前にトキワの森で会ったんだよ。ね、フィフィ？
そう言えば、あの時追いかけていたけど、大丈夫だったの？」

再会の喜びの表情から一転して心配そうな表情になるワニノコ。

「ん〜……。あんまり大丈夫じゃなかったけど、平気だよ」

僕ここにいるし、と笑いながら話す。その言葉の奥には「死んでいない」という意味が少し含まれているのだろうが、ユウイを除いては気づく者はいなかった。

「ねえ、ワニノコ。いつトキワの森であったの？」

すっかり傍観者になってしまっていた胡睦がやっとのことで口を開く。

「去年かな……って、胡睦もフィフィのこと知っているはずだよ。僕たちと同じ年なんだから」

「え？」

いきなり同年代だと言われても、あまりピンとこない。その上、知っているはずだと言い切られても、目の前にいる茶色い目のイーブイのことは全く記憶にない。次第に混乱しだす始末である。

「同じ学校なのに。ねえ、フィフィ？」

「でも僕、ほとんど行ってないからなあ……」

そんな様子を見てわざとらしく大きくため息をつくワニノコ。それを聞いて、フィフィは苦笑を浮かべる。

「ウソだあ。聞いたことないもん」

同じ学校と聞いて、ウソだと断言してしまう胡睦。でも、無理はない。なぜなら。

「当たり前だよ。僕、入学式とその後の1カ月しか行ってないもの」「何だよ!？」

フィフィが言い終えるか終えないかのタイミングでツツコミを入れる胡睦。

「行かせてもらえなかったんだよ」

ハアと残念そうに、そして悲しそうに瞳を向けた。同情を誘うかのような目でもある。

「そのわりにトキワの森には行かせてもらえないんだな」

冷たく、何の感情も入れていない言葉をヨルノズクはフィフィに向けて言い放つ。

「見張られていたところを勝手に抜け出したから、追いかけられたんだよ」

何の悪気もない、ただ遊びたかっただけなんだ、とも付け足す。

「じゃあお前、何なの？」

何にもしていないヤツが見張られるの？

何かしたから見張られるんじゃないのか？

それって、おかしくないか？」

明らかにフィフィの素性を探るような物言いである。

初めから彼の^{フィフィ}のことを信用していないヨルノズクだからこそ、そういう風なことを言えるのである。

しかし、少なからず好意を寄せている者からすれば、とんでもない発言と捉えられるのは間違いない。

なぜなら、彼は危ない^{フィフィ}目に会っていたミウを助けた英雄なのだから。

「変なこと言わないでよ、ヨルノズク！」

「そうだよ！ フィフィ、ミウを助けてくれたんだよ！？」

ヨルノズクが言った全てのことを否定するかのように、胡睦と椎那は叫ぶ。それに反して、ワニノコとフィフィはお互いに目配せを

する。

恐らく、ワニノコはすでにフィフィの素性を知っているのだろう。だからこそ、「どうする？」という視線を焦りながら送っているのだ。

「だって、考えても見ろよ。

あんな迷いそうな林に、誰が自ら入りに行くんだ？

おかしいだろ!？」

『助けた』んじゃなくて『危害を加えようとした』ならまだ説明付くけどな」

ヨルノズクはフィフィを見下すように視線を向ける。

その冷たい視線を受けて、フィフィは下を向いて完全に黙り込んでしまう。そして微かに、本当に微かに震えていた。

その様子を見たユウイは軽いため息をついて目を伏せる。そして、開いた。

「仮にそうだとして、ミウがそんなフィフィに寄り添うと思う?」

ヨルノズクの話すべて聞いて、おかしいと思ったところを追求し出すユウイ。

「実際に迷い込んで、困っていたとしたら？

それはおかしくないだろ？

むしろ普通だろ。違う?」

森の中で自分が見聞きしたことは伏せて、言及していく。そして。

「自分の予想だけで全てを言いくるめないで。それに、フィフィがミウを助けたのは確かだ。この僕が見たんだから」

謝れよ、といつも以上にきつい目線をヨルノズクに向けた。

「……ユウイ、ありがとう」

ユウイが多少強制的にヨルノズクを謝らせたあと、フィフィがポソリとつぶやいた。

「いいよ、毎回のことなんだから。あの疑り深い神経、どうにかならないかな」

本当に毎回のことなのだろう。本気で困ったような表情をしていた。

そんなユウイの横からワニノコが顔をのぞかせる。

「そういえばさ。去年までは追いかけていたのに、今は追いかけていないのって、何で？」

何も知らないワニノコは興味津津の様子で、目を輝かせながら聞いてくる。

ヨルノズクが近くにいる今、その理由を話すのはとても危険極まりない。

もし一言でも聞かれたら、また先ほどのような質問攻めにされる

だろうし、一緒に旅をするなんてことができなくなるに違いないだろう。

それらだけは何としても避けたい。

「あとでもいい？ 僕、少し疲れたよ」

そこまで不自然ではないような言葉を口にしつつ、フィフィはユウイに付いてポケモンセンターの中へと入る。

「えー……。ちょっと待つてよ。じゃあさ、部屋の中で教えてよ」

どうしても理由を知りたいワニノコ。

自分も部屋に行くと言い切ると、部屋を知らない2匹のために先導して借りた部屋へと案内する。

「しつこいなあ……」

「当たり前じゃん。」

ようやく再会あえたのに様子が変わっちゃっているんだもん。誰だつて知りたくなるでしょ」

いたずらっ子らしい目をフィフィに向けながらトコトコと宿舎の廊下を進むワニノコ。 が、突然開いたドアに激突して廊下に転がってしまった。

「ごめーん。」

当たるとは思わなかったんだよ」

後ろからヨルノズクの謝る声が聞こえてくる。 どうやら念エスパーの力でドアノブをまわし、扉を開けたらしい。

「開けるのなら近くで開けてよ!!」

ぶつかったところを手で押さえながら立ち上がるワニノコ。目元がかすかに光っているのは気のせいだろうか？

「だからごめんって。僕もさ、フィフィの話聞いていい?」

羽ばたくのをやめ廊下に降り立つと、話す本人であるフィフィには聞かず、聞く側であるワニノコやユウイに質問の回答を迫る。

(だから付いてきたのか……)

ユウイはヨルノズクを厄介そうに見る。

下手に断ると「なんで?」とうるさくしつこいのもあるが、フィの所属場所を感じかれてしまう恐れもあるからだ。

「フィフィ、どうする?」

ワニノコは話し手になるフィフィに尋ねる。

普通ならそれがセオリーというものであるが、ヨルノズクはそれを否定する。

「僕は、フィフィじゃなくてワニノコに聞いているんだ。ワニノコが答えなよ」

そして、不満そうに目を吊り上げる。

「そんなこと言ったってさ、話すのはフィフィじゃん。フィフィに聞くほうが普通でしょ?」

自分より年上なんだから、そういう理解力はあるはずだろ？

イラツとした口調で睨みつけながら堂々と言い放つ。そして、再び後ろを振り返り、ファイフィと目を合わせる。

「ね、ファイフィ。ヨルノズク入れてもいい？」

「だーから！」

そんなワニノコに再び不満の声をあげるが、ユウイの声によってさえぎられた。

「答えないってことは、イヤだってことですよ。諦めなよ」

「イヤ”って、なんでだよ？ 理由でもあんの？」

挑戦的にファイフィへ鋭い視線を向けるヨルノズク。

それをファイフィは自分の前に立っていたワニノコのおかげで直視することはなかったが、それでも威圧感はひしひしと伝わってきた。

「理由……？」

「僕に話聞かれるのがイヤなのなら、それなりの理由があるわけだろ？」

「答えるよ、それを」

やっとのことで振り絞って出した声だが、簡単にヨルノズクの声で押し返されてしまう。

だが、今度はそれに負けずと今まで普通に喋っていた声で答える。

「理由……、かあ。強いて言うなら、知らない人だから　　かな」

「　　知らない？」

意味がわからないという風に首をかしげ、深い説明をフィフィに求めた。

「だって、今さっき会ったばかりだもん、ヨルノズク……は。それに対して、ワニノコはもちろんだけど、ユウイだって今そこで初めて会った、というわけじゃないもの」

でしょ？　と首をかしげてヨルノズクの様子をうかがう。

ヨルノズクはそれに賛同するべきかどうか、少々うなりつつ考えあぐねていた。

そこへユウイが割り込む形でフィフィとヨルノズクの間に入り、フィフィを進行方向へと押し出す。

「ほらほら。フィフィだって拒否しているんだから来ないですよ。聞き耳も立てないこと！」

はあ！？　と叫ぶヨルノズクをその場に残し、ユウイはワニノコとフィフィと一緒に部屋へと向かった。

ヨルノズクを置いたまま、部屋に到着した3匹。

最後に部屋へと入ったユウイは廊下の様子を見届けてから扉を閉めた。どうやらヨルノズクは追いかけてきてはいないようだ。

「ねえ、フィフィ。ここでなら話してくれるでしょ？
どうして今は追いかけていけないの？」

ワニノコが待ちきれない！ という様子でフィフィに迫る。そんな友の様子にフィフィはタジタジになる。

「ちょ、ちょっと落ち着いてよ。
そんなんじゃない、話したくても話せないよ」

必死になだめ、なんとか自分が話せる雰囲気を持っていこうと奮闘するフィフィ。

「だってさ、1年間？ ほどで何が変わったのか知りたいじゃん！」

と、わくわくした様子がなかなか収まらないワニノコ。それでも部屋に入った当初から比べるとまだ落ち着いたほう……かもしれない。

「ユウイ……」

困り切った表情でそばにいる新しい友達に助けを求める。

「少しは落ち着きなよ、ワニノコ。フィフィ、困ってるよ」

ユウイも仕方なくワニノコをなだめにかかる。

ワニノコの興奮状態がとかれたのはそれから10分以上たってからのことだった。

「はあ……」

話す前になだめることに疲れてしまい、床に座り込むフィフィ。その横で「ゴメン、ゴメン」と謝りながら反省の色を浮かべるワニノコ。ユウイは少し離れた場所でのその様子を眺めていた。

「話してもいい？」

「うん。ホント、ゴメンね」

ワニノコは再度申し訳なさそうに謝る。その様子を見てフィフィはフウと軽いため息をついた。

「あのね」

「ここからフィフィのおよそ1年間の苦勞が明かされることになるのだ。」

16話 合流。そして (後書き)

次話はフィフティメインの話になります。

17話 フィフィと1年前(前書き)

「それじゃあ、話すね。この1年間の事を」

17話 フィフィと1年前

「僕があの時追いかけられていたのは、ヤマブキシティから出てきたからなんだ」

「ヤマブキって……この町の東にある街でしょ？
何で、出たらいけないのさ？」

驚いて問いかけてきたワニノコに、困ったように笑いながら答えを返す。

「だって僕、シルフから出るなって命令されていたんだもの」

その言葉に軽くシヨックを受け、言葉をつなげることが出来なくなったワニノコは下を向いて固まってしまふ。

僕はそんな様子のワニノコから目をそらし、何も無い天井へと視線を変えた。

「でもさ、出るなって言われていてもやっぱり出たくなるじゃない？
ワニノコと出会った日はね、3回目の脱走が成功した日なんだよ？」

と笑い、視線をワニノコへと戻す。ワニノコはその笑いにつられて微笑みが戻る。

「でね、ワニノコと出会ってたくさん話して、シルフに連れ戻らされて思ったんだ。
やっぱり自由に生きたい。」

こんなところで縛られてばかりいるのは嫌だ、ってね」

へえ、とワニノコは感嘆の声を小さく上げる。フィフィはそんなワニノコを見ながら別の事を考えていた。

それに、あのコみたいな大切なヒトをもう失いたくないし。

「　　イフィ。フィフィ？」

「…………え？」

気づくと、ワニノコが心配そうにこちらを眺めていた。

そして「大丈夫？」と声をかけてくる。

一応「大丈夫」だと返したけれど、あまり信用されていないらしくさっきと同じような顔を見せられた。

「大丈夫だよ、気にしないで」

わざと明るく言ってみるけど、ワニノコの表情は暗いまま。

それどころか余計に心配そうに目を向けられる。

「だって、すごく悲しそうな顔してたよ…………？」

ヤマブキに戻った後、何かあったんだよね？」

「今もそういう顔してるけど……………」と最後にポソリとつぶやいた声が耳に届く。

それには「うん……………」としか言うことはできなかつたし、それ以上話が続かなくなった。

何分か経ってワニノコがようやくまとも座ったころ、ユウイがさっきと同じ質問をしてきた。そう、答えることを忘れていた質問を。

「上のヤツからだよ。」

とは言っても、父親の配下のヤツだろうけど」

“父親”という単語とともに不機嫌になる自分ができる。それほど嫌なヒトなのだ。

「父親が嫌いななの？」

僕の表情の移り変わりがどのタイミングで変わったのか観察していたらしく、回り道せずにストレートにユウイは聞いてきた。

「嫌いさ。僕を殺そうとしているんだもの……。」

まあ、父親自身はもういないみたいだけど」

その発言にはさすがのユウイも驚きの表情を表す。

そりゃそうだよな。

実の父親が自分の子どもを殺そうとするなんてまともじゃないもの。

そして、その信念を父親の配下の者が受け継いだらしく、僕はいまだにソイツ達に狙われている。

「フィフィ、“いないみたい”って何？

生死が分からないの？」

ワニノコはユウイとは違つところに疑問を持つたらしく、それを質問してきた。

「分からないというか、一度だけしか会つたことないからね。でも、そう言うウワサが流れていたんだ」

そう。あくまでウワサ。

不確かなものであることには違いない。

「ただ、そうであつてほしいと願う僕は、マトモではないのだからか？」

「それじゃあさ、どうして今は狙われていないの？ 殺されそうになつているようには見えないけど……」

「言つてないっけ？」

ワニノコと会つてから僕の世界は中^{シルフ}じゃなくて外に変わったんだ」

一呼吸置くと、でもね、と続けた。

「父親と会うまでに持つていた僕の高い地位は父親に剥奪されたからシルフの外には出られなくなつたんだ」

「ただど　！」

「その地位に近づくことが出来れば、僕の自由は守られる。階級制だもの、シルフは！」

「そうさ。年功序列じゃなかったことだけがせめてもの救い。」

そして、その高めの地位に今！ 僕はいる。

だから僕より下の地位のヒト達は僕に逆らうことが出来ないんだ。

「……ハクダツとかカイキュウセイとか分かんないけど……。
要するにどういうこと？」

ちんぷんかんぷんの状態で話に着いてこようとするとワニノコ
どう説明すればいいのか迷っていた時、隣から声が上がった。

「要するに、元の地位に近いところまでたどり着けているんだね、
ファイファイは」

そついうことです。

「もつと言つと、シルフは地位が高くなればなるほど外の世界が広
がる、ということでもいいのかな？」

「そつだよ。」

だから例え年齢が高かろうが低かろうが、ある程度の地位を持つて
いないと外に出ることはできないんだ。

とは言つても、年齢があまりいつていない子のほうがあまり高
い地位は持つていないんだけどね」

そこまで言つたところでなぜかユウイがクスクスと笑いだす。
何で！？ と思つたらこついうことらしい。

「ファイファイ、本当に今の地位にいるのがうれしいんだね。
すごく目がキラキラしているよ」

自分では気づかなかつたけれど、すごく興奮していた気がする。
今更だけど、なんだか少し恥ずかしい……。

「でも、1年でどれだけ地位を上げたの？
それも気になるんだけど……」

ユウイがそう言うのだけど、えーと……それは。

「機密事項ですので、お教えできません！」

「何それ！」

ワニノコが声をあげて笑う。聞いてきたユウイも堪え切れずに笑
いだす。

……なんか、こういうのって久しぶり　いや初めてな気がする
よ。

何も教えないままって言うのもなんかアレだし……。

「じゃあ、僕のいるところが何をしているのか教えとくよ。
たぶんユウイはそれを知りたいんじゃないのかな？」

当てずっぽうなんだけどね……。

『鎌を掛ける』という感じでもあるのかな？

「ついでに教えてもらうよ、その情報」

……失敗したけど。

ワニノコは何の事？　と疑問符を掲げているし。

「シルフにはね、人間が働いている場所とは別に、僕たちポケモンだけで動いている場所もあるんだ。人間たちが狙っているポケモンに直接僕らが話しかけることで、相手の警戒心も和らぐし、何よりこちら　シルフのほうに誘い込みやすいから」

「けっこう卑怯と言えば卑怯なんだけど。」

「あと、あそこに見えるゲームセンター。」

「まあスロットしか置いてないんだけど、あの地下にアジトあるんだよね。」

「というか、あの場所自体シルフの持ち物だし」

「そんなこと話していいの!?!」

「あ、ワニノコが食いついた……。」

「驚いたせいで目が丸くなっている。」

「うん。僕には関係ないし、アジトがある以外は何の変哲もない遊技場だし」

「ヘンテツ?　ユウギジョウ?」

「聞きなれない言葉を聞き、難しそうな顔をしているワニノコは置いておく。」

「『イーブイを集めている』って知り合いに聞いたことあるんだけどね。」

「何か知ってる?」

先ほどは苦笑していたユウイが真剣な顔つきで聞いてきた。
妹ミウがいるせいもあるんだらうけど。

「うん、僕はその実験台。」

だから5種類の色タインに自由に進化できてこの姿にも戻れるんだ。

その実験をほかの子イフイでもしているみたいだけど。

でも 集めてるって誰に聞いたの？」

それ関係の話は僕とか、僕と同等以上の階級のヒトでないと知らないはずなんだけど……？」

結構真剣な目で尋ねたけど、「また今度話す」と軽く流されてしまった。

ちょっと腑に落ちないけど、仕方ないと思っていたら、思いがけないことを話してくれた。

「話してくれたのはね、僕の昔からの友達だよ。僕と同年の。ファイファイも知っているはずだよ」

顔を見ると、普通に微笑んでいたし……裏があるとも思えないし。

というか、シルフにいる僕がこういうこと思ってるってどうなのだろうか？

「シルフってさ、人間が何をしているのかはだいたいの想像はつくのだけど、

ポケモンたちは地下で何をしているの？」

なぜかワニノコが「え!？」という表情をユウイに向ける。

僕は最初それに何の疑問も持たずに話す。

「えーとね、ヒドイよ……。」
そこら辺から捕まえてきたポケモンたちを無理やりトレーニングに
駆りだすの。

地下がちょうどそのトレーニング場になっていて　って、え？」

だけど、話している途中でおかしなことに気付いた。

ワニノコがああいう表情をしたのはこういう事か……。

「ユウイ……。」

何でシルフに地下があってそこにいるのはポケモンたちだけだって
知ってるの!？」

一応1階は立ち入り自由だけど、見学可能なのは3階まででそれ
も一部のはずだし　。

配られているパンフレットにも『地上12階建て』としか書かれ
ていないはず……。

まあ、感づいている人たちもいるのだけ。

地下に誰がいるかは僕たちみたいにシルフに出入りしているポケ
モンと、過去にそうだったポケモンの一部しか知らないはず……。
あとはウワサが独り歩きしているだけ……。

え、ユウイって何者!？」

「ユウイ!」

ちよつと大変　　ちよ、やめるバカ!

冷たいっての……やめろって言ってるだろ!!」

何やら外が騒がしい……。窓からのぞくとプチ乱戦状態。

ユウイを呼んだ声の主はたぶんあのピカチュウで、そのピカチュウにバケツか何かで水をかけているのはピクシーかな。

その近くで止める術がないのか、おろおろとさ迷っているのはカメルだし、遠くのほうで見ているだけのあの子たちはチコリータとヒノアラシと……トゲピーだろう。

あ、チコリータに水の被害が……。

と思ったとたんワニノコが窓から外へ飛び出す。

「ピクシー！！ あ、おい！！ 待ってっ！」

ワニノコが逃げるピクシーを追いまわし始める。

地面はすでに水浸しでドロドロのため、ふたりともドロドロ……いや、あのピカチュウもか。

……あのチコリータ、妹なのかな？

種族違うけど。

そう言えば、似たような兄妹ペアがシルフ内にもいたな　　というか
ワニノコの兄弟だったような？

違うっけ？

「うわぁ……」

小声だけど、悲鳴みたいな声が真横で聞こえた。

外を見ると、濃淡はあるもののほとんど茶色一色だけで彩られたポケモンがいち、にい、さん……5匹？

「部屋こに入れられないな」

ユウイが後ろを振り返り、チリとかホコリとか1つも落ちていな
さそうなきれいな部屋を見渡す。

誰だつて想像したくあるまい。この部屋があの色になるのは

「どっしょうか。」

「……どうすればいいと思う？」

「僕に聞かないでよ」

苦笑して返すけど、内心どうしようもないよと思っている僕。

それを知ってか知らずしてか「だよねえ」と呟くユウイ。

「あきらめる？」と聞くと、しばらくの無言ののち「それはでき
ない」とのこと。

「そっだよねえ……。」

チエックアウトするときには部屋のクリーニング代払わされるのが
落ちだるうな、うん。

トントンと扉をたたく音が聞こえたあと、誰かが入ってきた。

「ユウイ、外すごい事になってるよ」

人間の男の子。確か名前は。

「しいな……知ってる。止めてくるよ」

「そっだ、しいなって名前だったな。」

ミウをぎゅうと抱いているところから見て、ずっと外の様子を見ていたのかな。

ユウイが窓枠から手を離れたとき、僕も窓枠から床へと降りた。そして、ユウイが扉を開けて廊下に出ようとするとところまで僕は付いて行った。でも、それ以上は付いていけなかった。

なぜならこっそりと耳打ちされたから。

「フイフイって、確か6歳ぐらい離れたお姉さんいたよね？」と。

そんなこと僕はこの部屋で話してはいないし、あの林の中でも話していないはず　！

恐怖におののき、動きが止まる僕を見たユウイはクスリと笑って、ぱたんと扉を閉めた。そしてそのまま廊下を走っていったようだ。

はつきり言って、怖いんだけど。
シルフの地下の事を知っているのも、僕に姉ちゃんがいるという事を知っているのも含めて、怖い。

ユウイって、本当に何者なの……？

17話 フィフィと1年前（後書き）

なんだかんだ言って実はユウイが黒幕

（嘘）

18話 フィフィとピクシー（前書き）

再びフィフィ目線でお届け。

18話 フィフィとピクシー

ユウイが外に出てから5分は経ったころ、怒鳴り声が聞こえた。

「お前、何してんだよ！！」という様子の怒鳴り声。

顔を見ずとも誰の声か分かった。数時間前、僕に因縁をつけてきたあの鳥ポケモン　ヨルノズクの声である。

僕は「うるさー……」という程度にしか思っていなかったのだけれど、一緒に部屋にいた椎那は顔を強張こわばらせていた。

再びヨルノズクの声が聞こえてくると、もっと強張らせる。

「椎那くん？」

抱っこされていたミウが心配そうに上を見上げる。しかし、椎那と目は合わない。

「椎那くん、大丈夫？」

よほど心配なのか、何度も声をかけるミウ。それでも椎那は窓の向こうを見たまま目をそらせない。

それどころか、ヨルノズクの声がするたびに顔が硬直していつていた。

さすがに僕も気になってくる。

ミウの声が聞こえていないというわけではないのに、どういっわけかヨルノズクの声だけにやけに反応している。

やっぱりニンゲンってよく分からない　ニンゲン？

ああ、もしかして。

「ヨルノズク、ピクシーに怒鳴り散らしているだけだから気にしなくたっていいよ」

さらりとそう言ってみる。すると、椎那はもちろん、ミウまでもが僕のほうに顔を向けたのを感じた。

目を見ると、驚きと一緒に「どうして？」と訴えているのが分かった。

「どうして、わかったの？

ぼく、何も言っていないのに」

僕はそれに「なんとなく」とだけ返す。

本当に“なんとなく”だしそれ以外の言葉なんて見つからない。

それでも椎那は僕に向かって話しかけてくる。

「ぼく、ポケモンの言葉わかりたいよ。

ヨルノズクが怒っているのって声でわかるんだけど、なんて言っているのか分からないんだもん」

そう。

ヨルノズクは僕らの言葉、所謂ポケモンの言葉で怒鳴り散らしていたのだ。

だから、何と言っているのかニンゲンの椎那には分からなかった。

ただそれだけの事。

椎那はポケモンの言葉を分かりたいと言っているけれど、僕らが

何を言いたいかなんとなく感じ取れるだけでも十分だと思う。
それに、僕らの言葉を完全に分かるニンゲンなんて僕は会ったことないし、聞いたこともない。

まあ、この広い世界のどこかには居るのだろうけれど。

「ぼくのお兄ちゃん、少しは分かってたんだよ。
ポケモンたちの話す言葉。
だからすごいなって、ずっと思ってたの」

「分かった」って今は分からないの？」

僕はその質問に椎那はふるふると首を振った。そして続けた。

「ぼくのお兄ちゃんね、2月に死んじゃったの……」

それはとてもとても悲しそうな声で。
できれば認めたくないというような声で。

反射からくるものなのか分からないけれど、自分でも気付かないうちに「ごめん」と僕は口に出していた。
それきり会話は続かなかった。

それからしばらくして、ユウイが部屋に戻ってきた。
本当に疲れたという様子で。

「ピクシーは？」

ミウが椎那の腕から抜け出してユウイのそばによる。

椎那がその様子をただ茫然と見ているだけのところからみて、恐らく「（ユウイにミウを）取られた……」という風に思っているのかもしれない。

「今胡睦むいが洗っているよ、外で」

ユウイは窓のほうへと視線を移す。

耳を澄ますと水をかけている音が聞こえてきた。

外にホースでもあるんだろうな、と思っっているとなぜか水が部屋の中に入ってきた。そしてどういうわけか、床ではなく僕がびしょ濡れになっていた。

「ファイファイ……」

「だ、だいじょうぶ……？」

ミウと椎那はいきなり災難に見舞われた僕を心配してくれる。ユウイは開いていた窓を閉めてこれ以上被害を受けないようにしていた。

その間、僕は一步も動かなかつたし、動きたくもなかった。

ブルブルと体を振って水気を切ってもよかつただけど、そんな気分でもなかった。

「椎那、タオル持ってる？」

そばにいて、なおかつ物を持っていそうな椎那にユウイは声をかける。

「うん」と頷いた椎那は、自分のリュックを漁ってそこからタオルを出してきた。

「はい、フィフィ」

「……ありがとう」

「ふいてあげるね」

「……うん」

「ごめん、椎那。こんな返答しか出来なくて。」

ある程度水気が取れたころ、フウとため息をついた。

そしてイラツとした。

なぜ、僕に水がかからなくちゃいけないかったのか。その真相を知りたい。

「あ、いたいたー。」

「ねえ、ねえ。水入ってきたでしょ？」

突然バタバタと誰かが入ってきた。

その正体は先ほどピカチュウに水をかけまくり、ワニノコに追いかけまわされていた張本人・ピクシー。

「なぜ知っている？」と思ったけど、自分の口からさらけ出してくれた。

「あたしが入れたんだよ。」

なんか見かけぬ茶色い影があったし。

「それ、キミだったんだねー」と。

怒りがピークに達しようとした時、そのピクシーは結構とんでも

ない言葉を口にする。

「それで、キミ、誰？」

ミウが「ファイファイだよー」と言うけど、明らかにわざとに2、3度間違えた。

ミウはその度に「違うよー」と言って訂正するが、どう考えたって僕とミウとをからかっているとしたか思えない。

ミウは平気なのか？ 僕はすごくイライラするけれど。

「ふーん。ファイファイって言うんだー。」

あっ、目茶色ーい。

なんで、なんで？

この子と会って10分も経っていないけれど、この子の性格がだいぶ理解できた。

どう考えてもヨルノズクより嫌なヤツだ。間違いない。

「ねえー、何でー？」

こういう子とはあまり話したくないけれど、答えなかったらきつといつまでも言い続けるタイプだろうと思う。

そして簡単に逆ギレするタイプ。

基本、相手にしたくないね。

「何でって聞いているじゃん。答えてよー」

「うまれつきだよ」

仕方なく答えたものの。

「えー、何ってー？」

無視していいですか？

「ねえ、何て？ 何て言ったの？
もう一回言っつてよー」

「“うまれつき”だつて言ったんだよ、ピクシー。
胡睦はどうしたの？」

ユウイが話を持って行つてくれたおかげで助かった気がする。

「コラム？ ……つてあの子か。
ワニノコとピカと一緒にいるよ。濡れてたけど」

あははー、と笑いだす。

ユウイはギョツとした顔を見ると、椎那にもう1枚タオルをもらつて外へと出て行つた。

胡睦のところへ行つたのだと思うけど……。大丈夫かな、胡睦。

「ねえ、“濡れてた”つて何で？」

まさかとは思うけど、聞いてみる。

「えー、水かぶつたからだよ。
そんなことも分からないの？ バカだー」

また、アハハと笑いだす。笑える冗談じゃないだろ。

「水かぶったって、誰かがかぶせたの？」
「うん、あたしが」

明らかに、椎那とミウの表情が変わった。
僕は努めて冷静でいようとすけど、無理かもしれない。

「なんでそんなことする」
「ピクシー、おまえ何て事してんだよ！！」

窓が開いて、そこからヨルノズクが姿を見せた。そうとうご立腹の様子。

「胡睦、泣いてるぞ！！」

「え？」

本人にしたら冗談のつもりだったのかもしれない。
でも、された被害者からしたらそんなのは冗談で済むものではない。

しばらくして部屋に戻ってきた胡睦は、しばらくの間、どんなに手を尽くしても泣きやむことはなかった。
自然と泣きやむのを待つしかなかったし、泣き終えたらそのままベッドに入って眠ってしまった。

それから数時間。ピクシーはヨルノズクとユウイにそうとう絞られたらしい。

ワニノコに言わせると、こんなことが1週間に1度あるかないか。2週に1度は必ずあるらしい。

それも標的は女の子ばかりだとのこと。

ミウなんて格好の的らしく、何度も泣かされているらしい。それでも態度は変えていないらしいけど、自分から話を持ちかけることはいらないらしい。

椎那と胡睦は昨日、旅立ったばかりらしい。

それなのにこんな目に遭うなんてかわいそう過ぎる。

ピクシーをトキワの森に置いてくることも可能だったみたいだけれど、そんなことしたら面倒見のいいドール？ が報われないんだとか。

そう言うわけで旅に同行させているみたいだけれど、目が行きとどかないことも多いらしいし、どんなに怒られてもケロッツとしていくというから、とんでもない問題児。

とにかく気をつけたほうがいいよ、と忠告された。

とは言われても、現時点で目の前にいるの　ピクシーなんですけど……？

涼みにポケモンセンターの裏まで来たのは良いんだけど、後をつけられていたみたいで……。

ハア。僕もまだまだだなあ。

「もう、なんであれだけの事で泣くのかなあ？」

意味分かんない」

「ミウだったらまだいいのにさ」

「ねえ聞いてる？ フィファイ」

泣くだろ、あんなことしたら。

“ミウだといい”って何がいいんだよ？

聞く気ないし、答える気もない。 というか、何で僕の目の前にいるのさ？

「フィファイも何かしゃべってよー」。

あたしだけしゃべってたらかわいいそうじゃないん

泣かされた胡睦はかわいそうじゃないとでも？

「まったく。ユウイもヨルノズクもあそこまで怒らなくってもいいのじゃ」

「怒られて当然だろ？ 自分、何したと思ってんの？」

今まで口をきかなかった僕が、いきなり口をきいたものだからキョトンとしているようだけど、これだけは言わせてもらわないと気が済まない。

「自分は悪くないとか、思ってないよね？
悪いに決まってるだろ、ヒト泣かせといて。
都合良すぎ」

目が点になっているけど無視。

「ピクシーさ、このままだと誰にも相手にされなくなるよ？
一人で残りの人生過ごすの？
それもありだと言ったらありだけど、悲しいだけじゃん」

何を言われているのかようやく分かってきたようで、ピクシーの
目が据わってきた。

「今日会ったばかりのあんたにそんなこと言われる筋合いなんて
ないし！！
何様のつもり！？」

……ああ、会ったばかりだったね、うん。
なんか前から知っているような感覚に陥っていたよ。

「そっちこそ何様のつもり？
今度ミウとか胡睦とか泣かしてみなよ。僕が相手になってやる」

一瞬、ピクツとした顔になったけどすぐ元に戻った。

「ふん。あんたこそあたしに手をかけてみなよ。
返り討ちにしてやる！！」

「言っとくけど僕、負けたことないから。
言っただよ？」

今度泣かせたら相手になってやるって。
覚えといてね、ピクシー？」

“負けなし”と聞くとちょっとぴり顔色が変わり、いそいそとどこ

かに行ってしまった。部屋に戻ったのだろうか。
それから当分先、ピクシーのいたずらが控えめなものになったの
は言っまでもない。

というか、控えめになったとは言え、いたずらには懲りてい
ないということか。

いつ、なくなるのだろうか……。
それ以前に、なくなる日があるのだろうか……。

僕は空に浮かぶ、か細い月を見ながらそんなことをぼんやりと考
えていた。

o u t s i d e ・ 2 胡睦 く 雑記とピクシーの件く (前書き)

初の胡睦目線。

今までの大まかなあらすじが主です。

弟の誕生日だった日の夕方。その日は朝からとても風が強くて、夕方になると雨まで降りだした。

そんな日に、小さな2匹のポケモンたちが私たちの家に迷い込んできたの。2匹のポケモンはトゲピーとイーブイで、イーブイはミウという名前だった。

2匹を家の中へと入れて、雨でびしょ濡れの泥だらけになってしまっていたから、お風呂場で体を洗ってあげた。弟とふたりで。

お父さんもお母さんも、お兄ちゃんも数か月前に死んでしまっただけで、家にはあたしと弟の椎那のふたりしか住んでいない。

うつん、あと2匹　兄妹のウィンデイがいたんだった。

2匹とも、もともとはお兄ちゃんのポケモンだったけど、ある時私たちにくれたの。「仲良くしてあげてね」って言うて。その時は2匹ともガーディだったから、進化に必要な“ほのおのいし”も一緒にくれたんだ。

いつか、一緒に旅に行けたらいいね。

いつもそう言っていたのに。そう言っていたのに関わらず、死んじゃった。

3人のお葬式の後、町の人たちはあたしたちのヒキトリでいろいろモメていたみたい。あたしたちは知らないんだけど、ケンくんがそう言っていた。

近所の人たちは「イトコの家に住めば？」とも「シセツに行かせれば？」とも言っていたみたいだけど、ケンくんのお母さんと、お

兄ちゃんが通っていた剣道場のシハンが反対していたみたい。なぜかは知らないけれど、そうケンくんから聞いた。

ミウ達の話の聞いていると、そのことをなぜだか思い出した。ミウ達が住んでいるところがトキワのもりで、そのすぐ近くにケンくんの家があるニビシティがあるからかな。

その日の夜、ミウとトゲピーはあたしたちの家に泊った。

次の日、あたしたちはミウ達を送り届けるために、そしてニビシティに行くためにウインディに乗ってトキワのもりへと向かったの。

トキワのもりでいろいろあったけど、ミウ達は兄弟に会えたし、あたしはニビシティに来られたから良かった。それに、バカヨルノズクとケンくんとも会えたから。

ケンくんには会えなかったらどうしようかと思った。家の場所も覚えていなかったから。

野宿するわけにも、ケンくんの家に泊まるわけにもいかないみたいだから、ケンくんがポケモンセンターで部屋をとってくれた。

そこで、初めて椎那の本音を聞いた。

「ぼく、旅に出てみたい」

あのおとなしい椎那があんなこと言うなんて思いもしなかった…

…。

でも、なんとなく、わかる気がする。

お兄ちゃんが家に帰って来るたびに聞かせてくれた旅の話を、一番わくわくしながら聞いていたのはあたしではなく、椎那だったか。

椎那の本音を聞いたとき、あたしも賛成した。もう、迷惑かけっぱなしは嫌だもん……。

2日に一度、シハンの家の人がおかずを持ってきてくれていたけど、それも7月の終わりくらいからなくなっていたし……。

だからって自分で包丁持って作るのもやっぱり怖いし。だって一度、包丁が床に刺さったから……。

これは、後から聞いた話なんだけど、シハンの家の誰かが入院して大変だったみたい。

だから　　というのもおかしいけど、あたしも旅に出ることにした。

トキワのもりで出会ったポケモンたちの中から旅のメンバーを決めてパートナーになってもらって、椎那がじゃんけんに勝って、次の日にジムバッジをもらいに行ってくれた。

その間、涼しいロビーで待っていたんだけど、いろんな人と話が出来て楽しかった。

あたしたちの年齢からして、野宿はあまり勧められないけれど寝袋は持っていたほうがいいとか、連れて歩くポケモンは6体までがいいとか（10歳未満の場合7匹以上連れ歩いて大丈夫みたい）、ポケモンのタイプの相性の事とか、いっぱい教えてもらった。

いつまでもロビーにいても仕方ないから部屋に戻ってからしばらくしたら、ケンくんが椎那と一緒に戻ってきた。もちろん、ジムバッジも一緒に。

ついでにトレーナーカードの発行も、ケンくんが次の日に済ませてくれた。

それから5日ぐらい部屋でのんびりしたり、博物館に行ったり、旅に必要なものを（もちろん寝袋も）買ってもらったりした。

こんなに楽しかったのは久しぶりかな。

トレーナーカードが届いた日、ケンくんがメタモンになったカイリユーに乗せてくれて、ハナダシティまで送ってくれた。ほとんどユウイがキョウハクしたような感じだけど……。

だけどその日、ミウとトゲピーがまたいなくなっちゃって……。

ユウイがひとりで探しに行ったんだけど、夜になっても朝になっても帰ってこなくて。

椎那は心配ばかりするし、ヨルノズクは朝から機嫌悪いし。

でも、「タمامシティでユウイと待ち合わせしている」とだけ話してくれたから、朝ごはん食べた後にタمامシティまで行ったの。“抜け穴”を通る最短コースで。

あたしたちがタمامシティのポケモンセンターに着くと、ユウイはもう来ていた。

それに、「外は暑いから」と言ってあたしたちをポケモンセンターの中へと追いやって、自分はトゲピーとミウを探しに行ったみたい。

その間にあたしはポケモンセンターで部屋をとって、のんびりと待っていた。

椎那は椎那でユウイと会えたことで少し落ち着いたみたいだった。ヨルノズクは相変わらずぶつぶつ言っていてうるさかったけど。

1時間か2時間ぐらいしてユウイが戻ってくると、背中にはトゲピーが乗っていた。

もう12時近かったのに、今度はミウを探しにまた走って行った。今度は1時間ぐらいして戻ってきたんだけど、ミウ以外にもう1匹、イーブイが一緒だった。

そのイーブイはワニノコの友達で、目が茶色かった。名前はファイというみたい。

同じ学校みたいなんだけど……知らないです。会ったことないし。それに、どういうわけかヨルノズクはファイを質問攻めにしていたみたいだし、そのせいでヨルノズクとユウイは険悪ムードになっちゃうし……。何がなんんだか、さっぱり分かんない。

そのあとワニノコはユウイとファイと一緒に部屋まで行くんだけど、その後をヨルノズクが付いて行った。結局、追い返されたみたいで戻ってきたけど。

横を見ると、椎那はミウ達と一緒に遊んでいるし、あたしも久しぶりに思いつきり遊んでみたくなった。だからウインディ以外のポケモンたちをみんな出した。それは椎那も同じ。追いかけてこしたり、日陰でのんびりしたり、かくれんぼしたり……。

……そういえば、こういう時にコセイが出るんだって、お兄ちゃん、言っていたなあ。

みんなで思いつきり遊んでいたら、ピカがいつの間にかびしょ濡れの泥んこになっていた。ピクシーがどこからかバケツを持ってきて、それに水を入れてピカにかぶせたみたい。そうになると、遠巻きでしか見ていられなかった。

カメラルはおろおろするだけだし、ヨルノズクはいつの間にかどこかに行っちゃうし……、止めてくれる人がいない。

見る間にそれはどんどんエスカレートしていつて周りの人　と　　とか手持ちのポケモンたちを巻き込んでいく。そして、無関係なチコリータにまで水と泥がかかった。そうかと思ったら、ワニノコが部屋の窓から飛び出してピクシーを追いかけ始めた。

気づくと、隣にいたはずの椎那とミウがいつの間にかいなくなっ

ていた。きつと、ユウイのいるところまで助けを求めに行つたんだろうな……。

その後ユウイが出てきて、いつの間にか戻ってきていたヨルノズクがピクシーを怒鳴ってそれは止んだ、と思った。

おとなしくなった泥んこのピクシーを洗うために水道場に連れて行つただけで、洗い終わって拭いてあげた直後にホースをとられて、開いていた窓から水を流しいれていた……。

さすがにそれは水道の水を止めてやめさせたんだけど、その後でまさか　まさかあたしにまで水をかけるなんて思わなかった。

いきなりすぎて、ビククリして、それに冷たくって、だからつい泣いちゃって……。その後のことは全然覚えていない……。

ピカとワニノコの声があったのは覚えているけど、それだけ。

気が付いたら夜の7時が過ぎていて、ベッドの上に寝ていた。服も、リュックの中にあつた服に変わっていた。椎那に聞くと、ジョーイさんが着替えさせてくれたみたい。

部屋にはあたしと椎那とミウとトゲピーとワニノコとファイフィしかいなかった。ほかのポケモンたちは椎那が戻してくれたみたい、ピクシー以外は。

外でヨルノズクとユウイにこっぴどく怒られている、とワニノコとファイフィが話してくれた。そして、ピクシーがトキワのもりメンバーの中で一番の問題児だという事もワニノコが教えてくれた。

今日みたいなことは初めてじゃないし、ピクシーがユウイとヨルノズクに怒られるのだってほとんど毎日のように起こっている事だとも言っていた。

その日の夜。

あたしたちがジュースを買いに行っている間、外に出ていたファイはピクシーに絡まれたみたいだけど冷たくあしらったらしく、セキチクシテイに着くまでの間だけおとなしかった。

どういふ風にあしらったのかはワニノコしか知らないみたいで、たまにファイとその話をしてはクスクスと笑っていた。ヨルノズクとユウイからしたら、ピクシーが突然おとなしくなったのにもものすごく驚いていたし、逆に警戒もしていた。

でも、おとなしかったのは次の町に着くまでの1週間ぐらいだけで、1ヶ月という効き目はなかったし、もちろん3ヶ月という効き目もなかった。

効き目が切れた後、ファイがどれだけ脅しても、その効果はその時にしか現れなくなっただけで、ワニノコやファイ、ユウイとヨルノズクがかわりばんこにピクシーの事を見張るはめになってしまっていた。

見張るほうは大変なんだろうけど、見張られていてもいつもと同じように他人にちょっかいを出せるピクシーがすごいなと思うし、どうして怒られてもへこまないのかとてもフシギだった。

この先、ピクシーのいたずらで困らない日が来ることがあるのかなあ。

毎晩、そつ言つ風に思いながら寝ることが習慣づいてしまったころに、ちよつとした事件は起こるもの。

というのは小説とかだとよくあるパターンみたいだけど、実際に

起こられたら本当にびっくりするんだよ、これが！

でも起きちゃったよね、1カ月後に……。ジヨウト地方に行っ
たときに。

19話 とんだサイクリング(前書き)

ファイファイが同行することに決まって数日後、
ようやくタマムシシティを出発し、再びホーホー探しに踏み出しま
す。

19話 とんだサイクリング

ミウと再会を果たし、ファイイという仲間も増えた数日後。
椎那一行はタمامシシティを後にし、次なる町へと新たな一歩を
踏み出していた。

「……溺れるかと思った」

「あはは。ごめん、ごめん」

「笑い事じゃないから!!」

ここはサイクリングロードの南側ゲート。椎那たちが次に選んだ
町はタمامシシティから南に下ったところにあるセキチクシティと
いう町だった。

セキチクシティにはサファリゾーンという観光施設があり、そこ
では野生のポケモンたちの暮らしを生で見ることが出来るというの
で、ホーホー探しのついでに寄ってみようという話になった……の
だ。

「いきなり急ブレーキなんかかけないでよ!
落ちるだろ、僕が!!」

「だって、かけなかったら柵にぶつかってたもん。
仕方ないでしょ?」

どうやらサイクリングをしていた最中に胡睦こむつとファイイの間に一
悶着あったようだ。

「だ・か・ら、最初に言っただじゃん。
あんまりスピード出さないでよって。それを無視したのは」

「謝ったんだからもういいじゃん。」

椎那、行こ」

「な!？」

言い合いが面倒になった胡睦はフィフィの事を無視し、傍観していた椎那の背中を押して自動ドアに向かわせる。

その後ろをフィフィの事を気にしながらもちよこちよこことミウが追いかけていき、そしてヨルノズクはわざわざフィフィのそばまで飛来する。

何かをポツリとつぶやくとミウの後を追うように出て行った。

残されたフィフィはというと、一瞬ポカンとした顔になったがすぐにいつもの澄まし顔に戻り、みんなの後を追った。

ただいつもと違うのは、その澄まし顔の中には少なからず怒りも含まれていることだ。

事の発端は2時間ほど前に遡る。

その頃の椎那一行はサイクリングロードの北側ゲートまでもう2kmという地点に達していた。

「やい……くりんぐ?」

「そ。自転車に乗ってセキチクシティの近くまで行くの。
きつと楽しいよ」

わくわくしながら話すのはもちろん胡睦。椎那はそれに対して難しい顔をしていた。
なぜなら。

「ぼく、自転車乗ったことないんだけど……」

そう。

小学校入学と同時に買ってもらはずだった自転車は、両親と兄に起きた悲劇により叶わない夢となったのだ。

しかし胡睦は心配ないともいつかのように首を横に振る。

「大丈夫。」

あんたがこっそりあたしの自転車に乗っていたことは知っているから

冷やかな視線を向けられた椎那は「バレてたの？」と小声で白状。

「で、サイクリングするよね？」

あんたもあたしも乗れることだしさ」

弟の同意を得るためにギュツと両手をつなぐ、もちろん弟と。

姉がいきなり起こした行動に疑惑を抱く椎那ではあったが、そんな気持ちよりも久しぶりに自転車に乗れるという感情が勝つたらしく、気が付くと「うん、行く」と一言で了承をしていたのだった。

「で、なんで僕はかごの中？」

「一度やってみたかったんだー。」

ちっちゃいポケモンをかごの中に入れて思いっきり坂道下るの！！」

目をキラキラ輝かせてレンタル自転車のかごの中に茶色のポケモンを入れる胡睦。

かごはそのポケモンが後ろ足で立てると、前足をかごのふち部分につけられるほどの深さであった。

つまりは胡睦が思い描いていた図式とぴったりなのである。

「何も僕じゃなくても、トゲピーとかピカとかいるじゃん」

「トゲピーは落ちちゃったら可哀そうだし、ピカに言ったらすぐダメって言われそうなんだもん。だから」

「……僕がちょうどいいって？」

「うん！」

満面の笑みで頷く彼女を見て茶色いポケモン　フィフィは「はあ……」と深いため息をついた。

それは彼が諦めた証拠でもあるし、また瞳をキラキラ輝かせていた彼女の願いが叶うという意味でもある。

こうして、フィフィが胡睦の自転車のかごの中に収まることになり、また椎那のかごの中には「自分も乗りたい！」と駄々をこねたミウが収まることに決まった。

もちろん、ほかのポケモンたちはモンスターボールの中である。

空を飛べるヨルノズクを除いては。

「うわぁ、気持ちいい〜」

「お、お姉ちゃん速いよっ！〜！」

サイクリングロードは海を臨む坂道で、タムムシ セキチク北から南方面へなら漕がずとも勝手に車輪が回る下り道である。

常人ならそのスピードを楽しみつつ、ブレーキをかけながら進むであろう。椎那も論外ではない。しかし胡睦の場合。

「ちょ、ちょ　っ!？」

スピード緩める　　!！」

フィフィが風に負けないよう必死でかごの中に収まるうとしているのにも気づかず、とにかくビュンビュン飛ばして坂道を下る。

念のため言っておくが、これでもブレーキはかけているつもりなのだ、本人は。

「え〜?　なんか言った〜?」

かごの中がどういふ状況なのかを見られないのはともかく、フィフィの声さえ聞き取れていないというのは如何なものだろうか……。

「だから、スピード!

スピード落としてよ!！」

「だーからあ!

聞こえないのー!！」

そんな押し問答の最中、突然真横から声が聞こえた。

胡睦がとつさにハンドルを握りなおしていなければ自転車ごと真横に倒れるところだった。しかし、その声は転ぶのと同等かそれ以上の危機を知らせていた。

「胡睦、止まれ！ ぶつかる」

ヨルノズクであった。

好き勝手に飛んでいたヨルノズクは胡睦の進む先にはガードレールが、そのまた先には広い海が広がっているのを見つけていた。

そこまでに距離があったら左右どちらかに避けるだけでよかったのだが、胡睦がいた所からは150mと離れていなかったため、急いで注意を促したのである。

運よくガードレールにぶつかる直前に自転車が止まったので大事には至らなかったものの、急ブレーキをかけた時の反動でフィフィが空中に投げ出されそうになったのである。

当の本人は自力でまたかごの中に戻れたから良かったものの、一歩間違えばガードレールを飛び越え、海の藻屑となりかけていたのである。

「『落ちればよかったのに』……ねえ。

ヨルノズクがそんなことを言ったの？」

「うん！」

ここはセキチクシティ内にあるポケモンセンターの一室。

そこに2匹のポケモンの影があった。他のメンバーは海を見に浜へと出かけている。

レンタル自転車を受付に返した椎那と胡睦は、たまたま居合わせた親切的な若い夫婦に車でセキチクシティまで送ってもらった。

そのおかげで予定より半日ほど早く目的地に着いたのだった。

そして、今話しているのはユウイとフィフィ。

フィフィは南側ゲートを出るときにヨルノズクに言われた一言を、ユウイに愚痴っている最中なのだ。

「いくらなんでもヒドイでしょ！

あんな所からいきなり海に放り出されたら溺れるっての。

こっちは命かかってんの！

軽々しく言っなって感じ！！」

「……………まあね……………」

フィフィがひとりでぷんぷんと怒っている間、ユウイは苦笑いを浮かべていた。

愚痴は聞いてあげられるものの、どう言葉を返してあげれば落ち着くのか分からないのだ。

あれやこれやと考えている最中、自分の事を呼ぶ声が聞こえた。

「どうしたの、フィフィ？」

「ユウイ、この前言っていたよね」

「え？」

てつきり愚痴の続きを聞かされるものだと思っていたものだから、すっかり拍子抜けしてしまった。

「な、何を？」

「ほら、初めて会ったときだよ。

姉ちゃんの事、知ってるって言っってなかったっけ？」

~~~~

「フィフィって、確か6歳ぐらい離れたお姉さんいたよね？」

~~~~

「ああ……。その事？」

何日か日が経っていたせいですぐには思い出せなかったものの、そんなことを言った記憶がある。

思い出したと同時に、少し意地悪な笑みを浮かべてユウイは言った。

「本当の事を言うと、君の事も知ってるんだよ　フィフィ」

は？

開いた口が塞がらないというのはこういう状況の事だろうか。
フィフィはタمامシシティでの出会いが初対面だというのに、ユウイはそれ以前に会ったことがあるというのである。

「別にたいしたことじゃないよ？」

「変な考え、持ってるだろ」と言わんばかりの表情でユウイはフィフィを見る。

「僕にも姉さんがいる。

それも、君のお姉さんと同じ年の、がね。
たったそれだけの事なんだ、フィフィ」

ユウイはにっこりと微笑むが、微笑まれた相手は納得がいかないような表情でユウイの目を見返す。

その視線に「仕方ないな」とため息をつく、記憶を思い返すかのようにゆっくりと話しだす。

「何年前、僕の家　　というか住処すみがに姉さんが友達とその弟を遊びに連れて来たんだよ。

その友達って言うのが君の姉さんで、弟が君　　ファイイの事なんだけど」

記憶にない？　と尋ねるかのようにユウイは首を軽くかしげた。

「あ、有るかないかって聞かれたらないよ。

だって僕、トキワの森に行ったの、ワニノコと会った時が初めてなんだもん」

返答を聞いて「あ」と何かに気が付いたように声を上げると、「言い忘れていた」と言葉を繋ぐ。

「僕の住処は確かにトキワの森だけど、でもあれは最近の話だよ。半年ほど前にトキワシティから森に移ったんだ。

だから、ファイイがお姉さんと遊びに来たのは、僕がトキワシティにいる時だよ」

トキワシティかあ……とファイイ。

それらしい記憶を探しているようだが、なかなかピンとこない。

「まあトキワシティとは言っても、本当に町はずれなんだけどね。

西のはずれにある古い洋館で僕は両親や兄弟と一緒に暮らしていた

んだ」

ユウイは懐かしむかのように言葉を紡ぎ続ける。しかし、懐かしむだけでなく、愁いの表情も垣間見えた。

そこにピリリ……と甲高い電子音が鳴り響いた。

音源を探すこと十数秒。どうやらフィフィの腕に付けられた時計のようなものから聞こえてくるようだ。フィフィが止めようとしたため、今もなお鳴り続けている。

止めないの？ と尋ねると、「どっしよつ」とフィフィは言葉を濁した。

「ヤマブキに戻らなきゃいけないかも……」

泣き出しそうな顔でユウイを見る。

そして下を向くと、時計のようなものに付いていたボタンを押した。

そのとたん、「遅い！！」という怒号が時計もどきから聞こえてきた。どうやら電話のようなものらしい。

「仕方ないじゃん、出たくなかったんだから」

とフィフィ。しかし。

「んなの、言い訳にもならん」と先ほどと同じ怒号で返されていた。

「いつまで油売ってるつもりだよ！

さっさとヤマブキに戻ってこい」

その電話主は叫ぶ。フィフィは「やっぱりか」と落胆していた。

そうして話す事数分、フィフィは電話を切った。

はあと重いたため息をつくとき、ユウイのほうに向きなあった。それも悲しそうな顔をして。

「そう言うわけだから僕、ヤマブキに戻らなきゃ……」

重い腰を上げ、部屋を出て行くこととする。

そんな彼をユウイは引き止めた。

「どうしても行かないといけないの？」

「……うん。上の命令は絶対服従だから」

振り返らずにそれだけを答え、ドアを開ける。

出ていくその背中にひとつの言葉をかける。

「またおいでよ」と。

フィフィは足を止めて振り返り、ようやく笑顔を見せた。

19話 とんだサイクリング（後書き）

「*~*~*」間の内容は回想です。

20話 海へ

ユウイがファイファイと別れてから数十分後、椎那と胡睦こむつたちのサフアリパーク組が部屋に戻ってきた。

「どうやらそうとう楽しかったようで、周りの事など気にも留めずにふたりだけでワーワーと騒いでいた。」

寝る間際になってもいまだ興奮が収まらない様で、いつも寝ていた時間を超えてもふたりでずっと話し続け、電気を消し部屋を暗くしても話し続け（この時点でミウとトゲピーはすでに夢の中）、月が真南に向くころになっても話し続けていた。

最終的に、苛立ちを通り越し呆れ返ったヨルノズクがふたりに軽く催眠術をかけるまで話し続けていたそう。

「そう言う事でふたりはファイファイがいないという事実気づかぬまま、朝を迎えたのである。」

か細い「おはよ」という声の後に微かに「あれ？」という言葉が聞こえた。

ユウイが声の聞こえたほうを向くと、ベッドの上に座ったままきよきよとあたりを見回している胡睦の姿が目映った。ユウイと目が合い、そのまま話しかけてくる。

「ユウイ、ファイファイは？」

「昨日、僕たちが帰ってきた時からいないっつうの。」

ヨルノズクが代わりに答える。それも寝不足か何かで機嫌が悪そうな声で……。

そんな声色を気にも留めず、そうだっけ？ と昨夕の記憶を思い返してみるが、もちろんその記憶の中にフィフィは存在しない。存在していたのは椎那とふたりで長々と話していたことだけである。いくら思い返しても、記憶の箱には椎那以外出てこない。それに比例して表情が険しくなる。そして。

「あたしたち、いつ寝たっけ？」

「僕が催眠術かけて無理やり寝させたんだよ」

「……なんで？」

「“なんで”ってこつちが言いたいわ！！

何が楽しくて何回も何回も……」

突然キレたようにみえるヨルノズクだが、それもそのはず。

胡睦が起きるよりも先に起きた椎那から全く同じ質問をされていたのだから。もっと言うと、トゲピーとミウにも同類の質問をされていた。もっとも2匹はふたりよりも先に寝ていたのだが、フィフィがいらないという事実には朝起きてから気づいたのだ。

ヨルノズクが不機嫌なのはこの繰り返しのせいなのである。

「で、ユウイ。フィフィ、どこに行ったって？」

この質問をユウイにするのは4回目だ。

「あとで話すよ。それにそのうち戻ってくるし」

ユウイはいつもの表情で淡々と言うが、無論この返答も4回目否5回目である。誰かに尋ねられる前に、ヨルノズク自身もユウイにそう質問していたのだから。

同じ言葉に飽き飽きしたヨルノズクがおい、と言いつ返そうとした

時、カチャリと扉が開く。

「あれ、お姉ちゃん起きてたんだ。おはよー」

開いた扉から顔をのぞかせたのは椎那である。その足元からちつこいのが2匹、タタツと先を争うかのように自分の足元へと駆けてきた。

「おはよー、こらむちゃん」

「おはよー！」

寝起きだからか、2匹の幼くちよっぴり高めの声が頭に響く。

少しくラクラしながらも小声ではあるが「おはよ」と律義に朝の挨拶を返す。

「“おそよう”の間違いだろ。もう10時過ぎだぞ」

「起きてから初めて会ったなら“おはよう”でもいいんじゃない？」

胡睦に向けられたヨルノズクの意地悪な言葉をユウイが軽く受け流す。その後、みんなが知りたがっていた情報をついでに、という感じで流す。

「フィフィならそのうち戻ってくるから気にしなくていいよ。」

明日には戻っていると思うし「

「だからさ。どこ行ってるんだよ、あいつは」

ヨルノズクの不満げな声に椎那は「戻ってくるんなら別にいーじやん」と能天気と言葉を返す。なぜなら。

「それより海に行こうよ！ あそぼー！」

遊ぶことのほうが、何よりも最優先なのだ！

2階のレストランで朝食兼昼食を食べ、一呼吸置いた椎那たちはまっすぐ浜辺へと向かった。

ポケモンセンターから南に15分ほど歩けば、ごっごつとした岩に囲まれた砂浜に辿りつく。

遠浅の海なため、少し砂浜から離れただけではそう簡単に波にさらわれることはないのである程度までは安全だ。

「わあ、あおーい、きれーい」

「広ーい、まぶしいー」

太陽がちょうど真南にある時間帯なので、波が光に反射してキラキラと輝く。

空も海も蒼く澄んでいて、海水浴には持ってこいの天気ではあるが、なぜだか人っ子ひとりいない。砂浜全体が貸し切り状態である。なぜならば。

「この辺メノクラゲが多いから気をつけてね」

「はあーい。……え！？」

思ってもみなかった注意事項に目を丸くさせるふたり。

メノクラゲの触手には毒針が付いており、刺されるとけっこう痛い。

しかも、そのクラゲくんたちはこの遠浅の海を好み、大量に泳いでいる。そのうえ、水中にいるクラゲくんたちの姿は見えにくく、刺されるまでそばにいることに気づかないそうだ。

おまけに、干潮時には潮に乗ることが出来ず、砂浜で干からぶクラゲくんの姿を見ることが出来るらしいが、好んで見たくはないだろう。

その事を知っている地元の住民、旅人などはこことは別にあるクラゲくん達が少ない安全な海にまで泳ぎに行くのだ。

逆にその事を知らずにバシャバシャ泳いでいると病院送りになるのは言うまでもない。

海を臨む町に住んでいたため、メノクラゲの怖さを十分に知っている姉弟は無言で顔を見合わせる。

その表情からは「どうする?」「帰る?」という負の気持ちが読み取れる。その様子を見たユウイは情報をひとつ付け加える。

「海の中に入りさえしなければ大丈夫だよ」、と。

当たり前と言ってしまうは当たり前なのだが、その事に気づかないのもまた当たり前なのだろう、と言ってみる。

ユウイの言葉に安心をおぼえた椎那と胡睦は手持ちのポケモン全てをモンスターボールから外に出す。遊ぶためにはたくさんの仲間が必要なのだ。

いくつものモンスターボールから出る赤い光線とともに何匹ものポケモンたちの形が形成されていく。

モンスターボールから出てきたポケモンたちの目の前に広がるのは、蒼くキラキラと輝く大海原。十人十色、みせる反応も様々のようだ。

「へえ、海……」とあまり関心がなさそうに呟くのはピカチュウのピカ。

そんなピカとは正反対に「うわあ、久しぶりに泳げる！」と、喜びの感情を示すのは水辺が好きなマリル。

「……おつきい水たまり」という天然・チコリータに、「いや、海だから」とツツコミを入れるのは兄であるワニノコ・ヒノアラシの役目！
であるらしい。

最初から外に出ていたのにも関わらず、「何？ これ何？」という勢いに乗せて興味津津で危険なクラゲ様に近づくのはトゲピーで、それを間一髪で止めるは一応胡睦メンバーで最年長なカメール。

「こちらも最初から外に出ていたのにも関わらず「キヤーキヤー」と若干危なげに浜辺を走り回る妹をちよっぴり遠くからハラハラと見守るのは、もちろん兄のユウイで。

何故ポケーツと海の真上で羽ばたいているのか分からないヨルノズクに水をかけちよっかいを出し、ヨルノズクの怒りを買ういつものピクシー。

それを「またか」という諦めきった目で見つつ、日向ぼっこに精を出すのは海よりも太陽が大好きなキレイハナ。一番日当たりのよい場所に移動し、2匹の行く末を見守ることにしたらしい。

人間ふたりは日が当たるか当たらないか、小波が到達するかしないかのギリギリのところでテシテシと砂山を作っている。

それをピクシーにいたずらに踏まれてもまためげずにテシテシと作り直す。しかし、ピクシーが何度も何度も邪魔をするため、最終的にモンスターボールに戻される羽目になっていた。

勝手にボールから出てきては同じことを繰り返すのがピクシーではあるが、今回も例外ではないらしく、様子を見かねたヒノアラシが“かえんほうしゃ”を繰り出すまで砂山を崩し続けていた。

海辺ではカメールの背に乗ったり、マリルの尻尾につかまって浮かんだりして遊ぶミウとトゲピーの姿や、ワニノコの手につきずられアプアプ言いながら無理やり海を渡らされるピカの姿があった。

そう言う様子を見る限り、人間にとっては大ダメージであるクラゲくんたちの触手はポケモンたちにとってはそうでもないのかもしれない。しかし実際は、ピカがわずかに放電しているため、クラゲくんたちが近づけないだけなのである。……ワニノコたちは大丈夫なのだろうか。

そのうちどこからか漂流されてきたビーチボールを使い、全員と浜辺で遊ぶようになった。

数時間後には遊び疲れて眠りこんだ年下の子たちのそばで寝そべり優しく見守るユウイ、カメールの姿があった。

みんながみんな、自分たちが見ている目の前でおとなしく寝ているものだと思っていた、ヨルノズクが来るまでは。

「なあ。チコリータとヒノアラシがないんだけど、知らねえ？」

え？ という表情で顔を見合わせる。

目の前をよく見てみると、頭に葉っぱが生えている薄緑の子と背中からも炎を出せる藍色の子がいなかった。その場をカメールに任せ、ユウイはヨルノズクと共に辺りを探しに出かけた。

昨夕の事である。

椎那一行と離れたフィフィはひとり、例の抜け道を通りヤマブキシテイへと戻っていた。そして、町の中心に堂々とそびえたつ大きな建物・シルフカンパニーの中へと姿をくらました。

「で、何の用？」

椎那たちと一緒に行動していた時とは打って変わって不機嫌そうな声で、目の前にいるポケモンに自分を呼びだした理由を尋ねる。

「そう怒らないですよ。」

オレだって好きで呼び出したわけじゃないんだからさ」

目の前にいるのは自分より1つ年上のサンダース。ユウイより幾分か小柄に見えるのは気のせいではないだろう。

「はいはい、重々承知していますよ。」

で、何？」

全然分かって無いじゃん……とぼやきながらも渋々説明を始める小柄なサンダース。

「一緒にいる女の子のイーブイいるじゃん？」

あの子を」

「実験に使う気？」

自分に背を向けているものの、顔だけこちらに向けキツと凄みをつけて睨むフィフィに怯みながらもコクリとうなずく。そして、続ける。

「お前の耳に付いているヤツあるじゃん？
それをその子にも……って上がニンゲン」

「……って言っていたわけ？
嫌だつて言ったら？」

「だいたいあの子、平均的なイーブイよりも小さいんだよ？
身体からだに余計な負荷がかかるじゃん」

マシンガンかのように言葉を羅列し続けるファイファイ。そういう彼の両耳には耳の色と同化して分かりにくいのが、1×2cmほどの小さく黒い人工的な物体が埋め込まれていた。

「それでも？」

「それでもその子を使うわけ？」

「僕と5歳も離れているっていつのに？」

「ホントどういう神経してんの？」

怒りが収まらない様子で目の前にいるサンダースに全てをぶつける。

「ぶつけても仕方がない事を知りながら。彼もそれを知っているから仕方なく聞き入れる。ただ、一方的に打ち負かされるのはツライように、視線だけはそらしているが。」

「彼だつて本当は、そんなこと言いたくはなかったのだ。」

「トモダチだから。」

「組織の中でファイファイが心を許している数少ない友人だからこそ言いたくなかったのだ。」

悔しい。

でも、その思いの捌け口が見つからない。ただギュツと歯を食い縛ることしかできない。

「フィフィ、そろそろ解放してやったら？」

「結構ツラそうな顔してるぞ、ソイツ」

苦笑しながら一方的な会話に乗り込んできたのは、10日ほど前の夜にユウイと話していた白く小さな羽付きと胴長短足の2匹組。相変わらずの不機嫌そうな表情でそちらを向くフィフィ。

「何？」

「お前が戻っていると聞いたから、ちょっと教えておきたいことがあつてな」

「つつつか、その前に機嫌直せ。話しづらい」

そっぽを向くフィフィ。それと同時に何かを言おうとする。

無理、と言いかけたフィフィの頭を、白いのがパコンと軽くはたく。

「何すんの!？」

痛いじゃん、トゲチック!」

「何すんの”、じゃないだろ。まったく」

突然の事に驚くフィフィを横目に深くため息をつく白いヤツもといトゲチック。

「いい加減、頭冷やせつての。話さねえぞ」

ううとかなんとか言いながら、どうにか気持ちを落ち着けようとする。

取り乱したものがようやく落ち着いたころ、それを確かめるかのように胴長イタチ もといオオタチがゆっくりと話し始める

「お前、ヨルノズクに弟がいるのは知ってるよな？」

そしてユウイ達がソイツの事探してんのも」

「ちょうど昨日、ちょっとした情報入ってね。

オレら、ジヨウト地方に行っていたんだけど、その自然公園にそれっぽいのがいるってさ」

フィフィの表情がコロリと変わり、少しばかり嬉しそうな表情になる。

「直に確かめたわけではないから、ちょっと不確かかもしれないけど、有力だよ」

「ヨルノズクの弟だからどこにしようとか関係ねえんだけど」

「ユウイが探しているんなら別だし。お前に教えておくよ。ジヨウトの自然公園な」

トゲチックとオオタチの言葉に素直に「ありがとう」と伝えるフィフィ。

しかし、あれ？ と少し不思議そうな顔をする。

「どうしてそんなこと知っているの？」

椎那たちがホーホー探してるって」

「シイナって言うんだ、アイツの弟……」

ポソリとオオタチがつぶやく。

(アイツというのはともかく。

僕、ユウイの事この2匹ふたりに話したっけ?)

いや、話してなどいないはずだ。

1週間ほど前に戻った時だって「しばらく戻らない」とだけしか言っていないはずだし。

「……なあ。オレらが何でそういうこと知ってるか知りたい?」

突如声をかけられる。……そういうこと?

「ファイファイってホント分かりやすいよな!」

何考えているかがすぐ表情かおに出る」

クスクスとおかしそうに笑うのはトゲチック。

ケラケラと馬鹿にしたように笑うのはオオタチ。同じ笑われてい
るでも、オオタチにはなぜだか腹が立つ。

「そうそう。なんでそういうことを知っているか、だよな」

「ユウイの友達なの、オレたちは」

あのユウイと!? なんで……?」

「この前タムムシに行ったときに偶然会ってな。

その前にも一度会ってはいただけど、ヨルノズクに邪魔されたし、ミウとトゲピーとを探している途中だったしで話せなかったんだよな」

トゲチックは頭の中でその時の事を回想しているらしく、自然と目と頭が軽く上を向く。

「ユウイのほうもこの前会った時の事でお礼言いたかったらしくってさ、丁度良かったみたいなんだよね」

「で、何で知っているか。
その時に旅の理由とか全て聞いた。
お前とのユウイ達との間に起こった事も、な」

「もうひとつ。何故ユウイと友達か。
同学年だし、小1のときにケンカしたから」

ケンカって。なんでまた……。

どうやらまた顔に出ていたらしくトゲチックがクスクス笑う。

「どうせこの時間だろ？
寝るときに話してやるよ」

そう。外を見るといつの間にか月が出ていたのだ。
夏の夜は遅いというのに……。

「コムギもどう？」

「このまま別れても気になるだけだろ？」

凶星だったのかウツというような表情をする。

ずっとそばで何も言わずに聞いていたのだから、続きを聞いてもおかしくないと思う。

でも、“ユウイ”という名前をきいたときに表情が変わったのは僕の気のせいなのだろうか。

コムギもユウイと同じサンダーズだからどこかで見かけたことがあるのかもしれない、とその時はそう軽く考えていた。

数日後、ユウイにコムギの話をしたときに『イトコ』という単語が飛び出した時には正直、ものすごく驚かされた。

20話 海へ(後書き)

ようやく種族名が出たオオタチとトゲチツクです。
この後も頻繁に出てくる予定。

21話 発見

「いたか？」

セキチクシティの一角でヨルノズクとユウイがはち合わせる。

「いいや。一度、カメールのところに戻っ」

「大丈夫。」

さつき通りかかったときに椎那たち連れてポケセンに戻つとけ、って言ったから心配ない」

それよりも と言葉を濁し、空を見上げる。

「一雨来そうだぞ」

見ると、西の空に雨雲がかかっており、少し薄暗くなっていた。

それから数十分後、雨がポツポツと、やがてザーザーと音を立てて降り出した。

「……ポケセンに戻ろう、ユウイ。」

僕たちが風邪ひいたら元も子もないよ」

そんなヨルノズクの申し出にフルフルと首を横に振る。

「どこかで雨宿りしてるよ。戻ろう、な？」

ヨルノズクの自慢の翼からは、雨のしずくがポタポタと滴り落ちしたた

ていく。それを恨めしそうに見つめながら話を進めるヨルノズク。
ユウイももちろんびしょ濡れであるが、お構いなしである。

「セキチク全体を探していないのなら、」
「いないのなら、どこかの家で世話になってるよ。だからさ……」

ユウイの言葉を借り、自分にとって良いようにつなぎ合わせる。
ヨルノズクとしては、濡れてしまった翼を少しでも早く乾かしたいのだろう。

その気持ちを組んだユウイは「自分ひとりで探す」と言い、そのまま違う場所へと駆けだす。

その場に1匹残されたヨルノズク。
ハア、とため息をつくとき、ユウイを追いかけるような素振りを見せず、ひとり、ポケモンセンターへと向けて飛び立った。

「すごい雨だな」

一方、こちらはヤマブキシティ内のシルフカンパニー。

この建物で一晩泊まったファイファイはトゲチック、オオタチとともにエントランスホールにいた。

建物の中にいるのにもかかわらず、激しい雨の音が聞こえるのだから相当降っているのだろう。

「セキチクに戻るんだろ？」と言うオオタチの問いかけに対し、うんと頷く。

「あつちも結構な雨みたいだぞ」

「こっちに長居するわけにもいかないから」

そう苦笑を交えつつ、2匹に別れの挨拶をしてシルフから外へと出ようとするフィフィの耳にちよっとした会話が聞こえてきた。

「今頃あの兄妹どうしてるかな」

「セキチクも雨降ってんだろ？ 丁度いいんじゃないか。
あの場所なら雨はしのげるって」

「そりゃそうだけどさあ」

「風雨はしのげるし、人には見つからないし、丁度いいんじゃない？」

クスクスと笑いを交えながら少しとんでもない事を暴露していく
3匹組。

その様子を少し離れた所から見つめるフィフィら3匹勢。

「だいたいおかしいんだよ。」

チコリータとヒノアラシが本当の兄妹な訳ないじゃん」

「兄にワニノコがいるってのも変な話だしな」

「もしそれが本当ならば、父親不倫しっぱなしじゃん？」

「サイテーだよな」

フィフィらの目の前を笑いながら横切り、エレベーターへと向かう。

3匹の言った兄妹が気にはなるものの、とりあえず外に出るか、という気持ちで入口を見ると、そこから見知った顔が走りこんできた。

「チツク!！」

そう、叫びながら。

「ユウイ？」

どうしたんだ、そんなに慌てて

「つつか、びしょ濡れ……」

驚いているトゲチツクとは正反対に、オオタチはその無様な姿に苦笑を浮かべる。

毛並みがどうかとかという問題ではなく、あらゆるところから水が滴り落ちているのだから、意識せずとも苦笑いぐらいは出るだろう。

しかしユウイはそんなオオタチの言葉を気にも留めずに、シルフに來た理由を話す。

「ヒノアラシとチコリータがいないんだ!

セキチクのどこにも……。心当たり、ない?」

最後の声はほとんど聞こえなかったが、2匹のポケモン名を聞いてはっとする。

「タオ。さっきのヤツら……。チコリータとヒノアラシって言うってたよな?」

目が自然とエレベーターの階数を表示するところに向く。

「フイフイ、ちょっとユウイとそこで待ってる。

オレらもセキチクに行く」

それだけ言うと、トゲチックとオオタチは階段を使ってエレベーターが止まったと思われる階まで登りだす。もっとも、トゲチックは空中を移動しているのだが。

「ユウイ、浜辺の岩陰だ！ 急ごう！！」

数分後。

どうやって聞き出したかは分からないが、階段から姿を現したトゲチックの声を合図に再び外へと出た。トゲチックに数分遅れはしたものの、オオタチも階段から姿を現し3匹の後を追いかける。

いつの間にか雨脚はだいぶ弱まっており、雲が薄い所からは日の光が差し込むほどだった。

「雨、止んだね」

「止んだな」

ポケモンセンターの窓際でポツポツと言葉を交わすカメールとヨルノズク。椎那、胡睦のふたりとその他のポケモンたちはこの日2度目のお昼寝中である。

「…………ユウイは？」

「まだ探してるんじゃない？」

「どうして？ どうして、戻ってきたの？」

僕なら、一緒に探す」

「だったら行けば？」

ほら。雨止んでるんだろ？」

そういつて外を翼で指し示す。カメールは黙り込んで下をうつむく。

「何で行かねえの？ お前が言いだしたんだろ？」

行けば？」

「だって、ユウイがどこにいるかわからないし……」

ヨルノズクはふん、と鼻を鳴らしてそっぽを向く。しかし、目だけはカメールのほうへと向けている。

「意気地なし。相つ変わらざる意気地なし。」

ひとりでも行きゃあいいだろっが」

下を向いているため表情はうかがえないが、下唇を軽く噛んではいるようだ。

「悔しいの？ 悔しかったら行動してみれば？」

行けよ、ほら」

いつまで経っても行動に移さないカメールをいつまでも罵倒し続けるヨルノズク。

いつもなら。

「ユウイ、いないからな。

助けてくれるヤツなんかいないよ?」

「……分かってるよ」

「ユウイの事気になるんだろ? 行けばいいじゃん。

その辺、走り回ってるよ、」

たぶん、と言いかけたヨルノズクの視線の先に、黄色い体の生き物が浜辺に向かって走っていく様子が映った。

その後ろを白い小さめな生き物と胴の長い薄茶とクリームの生き物、そのまた後ろに濃い茶色の小さな影が続けて走っていた。

「……ユウイなの、か?」

「え?」

ユウイという言葉に反応して顔を上げ、窓の外を見る。しかし、その時にはすでに走り去った後だった。

「僕、行くよ」

カメールはそう呟くと部屋から廊下へと出た。

「チツク、このあたりなの?」

先頭を走っていたユウイが足を止める。その場所は昼間みんなで遊んでいた浜辺。

「ああ。でも、もうちょっと向こうらしい」

右手で“もうちょっと向こう”を指し示すと、それが示す場所めざしてユウイが歩を進める。

「岩陰がどうか””って言ったよな？」

「あー。確か、大きめの岩を洞穴の入口に押し込んで出られなくしたんだと」

フィフィが隣を歩くオオタチに話しかけ、彼はそれに答える。ただそれだけ。

彼らより先を歩く2匹は最低限の会話しか交わさない。

それは閉じ込められた2匹の声を聞き逃さないようにするためなのか、それとも単に話す内容がないためなのかは分からないが。

「ユウ……イ」

突如、自分たちが歩いてきた後ろから自分を呼ぶ声が聞こえた。

「カメラルじゃん。どうかしたのか？」

その姿を見て、いち早く反応したのはトゲチックだ。

「僕もヒノアラシ達探すよ」

「無理しなくっていいぞ」

理由も聞かず一蹴するのはオオタチ。

カメールはえ？ と今にも泣き出しそうなほど悲しそうな顔を向ける。フウ、とため息をつくとその理由を手短に伝える。

「だってさ、あんまりオレらに関わりたくないだろ、お前。それで一度、ヒドイ目に遭ってるもんな」

その言葉でカメールの中に少し前の嫌な記憶が甦^{よみがえ}る。しかし、寄せ付けまいと首を横に振って追い払う。

「別に来たいんなら来てもいいけどさ。なあ、ユウイ？」
「うん。行こうよ、カメール」

トゲチツクが受け入れ、ユウイが誘った。
その誘いにとてもうれしそうに飛びつくカメール。

そんな様子を高い空からぼんやりと眺めているヨルノズクに気づく者はいなかった。

「なんだよ、みんなして。そんなにあんなヤツらが好きなわけ？」

トゲチツクとオタチに置いていた視線を、そのすぐ近くを歩く茶色い小さめのポケモンに移す。

「フィフィ……。あいつもあいつらと同じ組織のメンバーなのか？」

しばらくさまざまな考えが頭の中で浮かんでは消えを繰り返したが、これだけははっきりと言えるというものが見つかった。

「カメールのヤツ、またいつかヒドイ目に遭うんだろうな。」

あいつらに関わったせいで」

そうつぶやき上空へと再び舞い上がると、仲間が寝ているポケモンセンターへと引き上げていった。

「このあたりのはずなただけだな」

トゲチックが足を止めると、後ろから付いてきていたメンバーも足を止めた。

ただ、カメールはそれに気づかず、前を歩いていたオオタチにぶつかってしまふ。

「う、ごめん……」

「いいよ、別に。ただ、ちゃんと前見とけ」

慌てて謝るカメールに笑いながら言葉を返すオオタチ。しかし1秒後、真剣な顔になる。

「なあ、何か声……聞こえね？」

耳をピクピクと動かしながら音のもとを探る。

本来オオタチは群れで生活しているため、見張りをしているときにそういう仕草をするという。とすることは、ある程度耳は良いのだ。

「どんな声だよ」

あまり耳が良いほうではないトゲチックがポツリと不満を漏らす。それをそれと置いていないオオタチはすすり泣くような声だと返した。

「すすり泣くう？」

明らかに怪訝そうな声と表情で相棒の言った言葉を繰り返す。

「ふたりぐらい。たぶんけっこう幼い感じの
場所は？」

そこまで聞けば十分だ。

こんな岩だらけの海岸に来るような子どもポケモンはそういない。とすれば、どこかの誰かに無理やり連れてこられたであろうチコリータとヒノアラシぐらいだろう。

ちょっと待てと手で合図すると、聞こえる声に意識を集中させる。そして、あそこだと若干出っ張った感のある岩を指し示す。

その怪しげな岩のすぐそばまで来ると、トゲチックの耳にもすすり泣くような声が聞こえてきた。

本当ならすぐにも助けてあげたいのだが……。

「ふうん。思った以上に大きいな、これ」

「どうやってどける？」

「さあ？ 壊すか？」

「こ、壊すって……とあまり乗り気ではないオオタチに、トゲチックはけっこう無茶苦茶な提案を挙げる。

「だったら、お前ひとりでどかせよな」

その発言に顔が引きつるオオタチ。

天秤に掛けずとも、もう出すべき答えは決まっている。

「こ、壊そつか。な、チツク？」

2匹がそんな会話をしている間、ユウイとファイファイ、そしてカメルは大岩の向こうに居ると思われるチコリータとヒノアラシに声をかける。

「聞こえる？ ふたりとも」

「聞こえたら返事してー」

「チコリータ、ヒノアラシ？」

何度か呼びかけるうちにすすり泣く声が徐々に聞こえなくなり、代わりに「聞こえるよ」やら「助けて」などと言う声が聞こえるようになった。

「少し入口から離れていて。」

岩、壊すって言っているから

微かに2匹分の「はぁーい」という声が聞こえたのを確認すると、ユウイは後ろを向き、すでに壊す気満々でいる2匹と視線を交わり、頷く。

それに気づいたトゲチツクとオオタチもコクリと頷き返した。

「じゃ、一度一斉に技をぶち込んでみますか」

意気揚々とそう言うのは、つい先程まで反対派にいたオオタチである。

「分かつてはいると思うけど、NOT物理攻撃で。カメール！ “こうそくスピン”とか無しだからな」

言われた本人は苦笑しつつ「分かつてるよ」と答えた。そして「でもさ」「と何かを心配するように続ける。

「ファイファイってそういう技使えるの？」

「心配ご無用。なあ、ファイファイ？」

トゲチックにうんと元気よく満面の笑みで頷く。

「オオタチは、やっぱり何でもない」

「何？」

「き、気にしないで！ ね？」

名を呼ばれ、振り向くオオタチに何もないと両手を振り焦って否定する。

名を呼ばれたほうは、気にはしたもののそこまで否定されると追撃をかけづらい。ふうんと軽く受け流すその様子を見て、カメールは密かにほっと溜息を付いていた。

（だって、“あんなこと”してるのに「特殊技使えるの？」なんて聞けないよ……）

横目でオオタチのしている“あんなこと”自分で作り出した 複数のシャドーボールをお手玉のように弄もてあそんでいる姿を見て、そう思った。

「さてと。準備いい？」

数分後。

大岩から数メートル離れた場所に横に並んだユウイ達の姿が合った。トゲチックの呼びかけにうんと、頷き返すほかのポケモンたち。それを合図にトゲチックが「せえの」と掛け声を出す。

「シャドーボール”！！”」

「10まんボルト”！！”」

「みずでっぽう”！！”」

「シャドーボール”×2！！”」

「おま……。「マジカルリーフ”ッ！」」

雷と水のコラボレーション。その外側を複数のシャドーボールとマジカルリーフが囲むように岩へと迫っていく。

岩にぶつかるのと小さめの爆発が起き、岩は砕け散った。

「よっしゃ！！”」

「じゃないだろ。何だよ、「×2””って……」

トゲチックは呆れたようにハアとため息をつく。

「え〜。だってさ、「シャドーボール”2発出したんだぜ、オレ」

自分が持ちかけた話なのにも関わらず「あっそ」とつぶやくと、再会を果たしていたユウイとカメール、フィフィのもとへと駆け寄る。

「怖かったよお。真っ暗で何も見えないんだもん」

「た、助かった……」

岩が砕けてそこから走り出てきたのは紛れもなく、自分たちが数時間探し続けていた2匹であった。

一方は涙で目を赤く腫らしたまま助けくれた主のところへ駆け寄り、もう一方は再び日の光を見ることが出来たことに安堵しへたり込んでしまった。

「もう、大丈夫だから。ね？」

助け出された後もなお泣き続けるチコリータに優しく声をかけ、安心させようとするユウイ。

カメールはへたり込んで立てなくなったヒノアラシのそばへ近寄り、「だいじょうぶ？」と声をかける。

チコリータが落ち着き、ヒノアラシが何とか立てるようになったころ、2匹は自分たちの身に起きたことをようやく話し始めた。

「ちょっとチコリータと一緒にこのあたりまで探検しに来てんだ」

「そしたらね、変な3人組がね」

「声かけてきたんだろ？」

で、勝手にふたりが話したことをウソツキ呼ばわりしてあの場所へ閉じ込めたんだよな？」

聞いたことのない声にふと疑問を持ったチコリータ。くるりと横を向くと。

「……だれ？」

いまさらかよ！？ と突っ込みたいのを抑えて、名前だけを教えるトゲチックとオオタチ。

その直後、ヒノアラシが何のためらいもなく暴露する。

「確か、トゲピーとオオタチのお兄ちゃんだよな」

一瞬時が止まり、1匹の叫び声が聞こえた。

「ええ！？ そうなの？」

トゲピー達、ずっと探してたんだよ」

チコリータの問いかけに、やや面倒臭そうに「知ってるよ」とだけ返すオオタチ。

その様子を見て苦笑しつつ、しかし会話に混じりたくないという風なトゲチック。

なぜ2匹がそういう風な態度をとるのかを知っているユウイはただ心配そうに見守るだけ。

ファイとカメール、そして騒ぎのもとを作ったヒノアラシはその騒ぎを外から傍観するだけだった。

22話 兄だから。そして再びユウイと

「ねー、なんでふたりと一緒にいないの？ お兄ちゃんなのにー」

先程からやたらとトゲチックとオオタチに突っかかるチコリータ。当然と言えば当然なのだろうが、突っかかっているほうはいい迷惑である。

「ねー、つてば！ ねーえ？」

「うるさい。知らなくていい」

来た道を戻る途中、自分たちの真後ろにひつついてくるチコリータにそう怒鳴る。

一瞬怯みはしたものの、全く折れないチコリータにはため息しか出ない。

「ねー、教えてよー」

「だから、知らなくていいって言ってるだろー！！」

今度は後ろを振り向き、先ほどの声とは全く違う大きさを怒鳴りつける。その表情と声とに驚き、再び目に涙をためるチコリータ。

「オオ、やめとけ。怒るだけ無駄だ」

泣かしてしまったことでバツが悪くなり、再び前に向き直るオオタチ。そんなオオタチにトゲチックが諭すように言葉をかけた。

「無駄つて、なんで？」

「無駄は無駄だよ。話しても分からないだろうから」

涙をぬぐったチコリータが再び質問を投げかけるが、トゲチックは軽くあしらう。バカにされたように感じ、ムウと頬をふくらます。

「分かるかもしれないじゃん」

「分からないよ。幼い上に、年の離れた妹や弟のいない君には」

分かるもん！ と断言するチコリータにじゃあ、と質問を投げかける。

「君に、そうだな 7歳ぐらい年の離れた妹がいるとします。

自分のせいでその妹が危ない目に遭おうとしています。どうしますか？」

「え？」

そんなこと言われても、よく分かんない。

あたしには妹も弟もないし、それにまだ3つだよ？

どうするって言われても。

「助ける」

「どうやって？」

自分が近づいたらもっと危ない目に遭うかもしれないのに、近づける？」

い、意味分かんないよっ！

助けるためには近づくしかないのに、近づいたらもっとアブナイの？

近づいたらいいの……？

考え続けて頭がパンクしかかっているチコリータを見てヒントと言つよりも、答えのようなものを差し出す。

「で、オレたちがとっている行動が『今』さ」
“離れる”ってこと？」

チコリータのそばで話をずっと聞いていたヒノアラシが口を挟む。その答えに、そうそうと頷くとゲチック。

「は、離れるって、どういうこと？」

「はい、オシマイ。分かんなかっただろ？」

明確な答えを出さぬままパンと打ち切ってしまったとゲチックに「意味分かんない」とぼやくチコリータ。最初から明かすつもりなどなかったのだろう。

「じゃあさ」

ギクツとして声の主を確かめると、意外と近くにいた。ヒノアラシである。

「じゃあさ、どうして“タオ”って呼んでるか聞いていい？ “オオタチ”なのに」

微妙なところ付いてくるな、とゲチックが苦笑する。

「オレらは幼馴染なんだよ。だから特別なの」

「あれー、変だな？」

ユウイもトゲチックの事“チック”って呼んでたよ？

僕には呼ばせてくれないのに」

ファイフイ
お前まで混じんな、という目つきでオオタチが睨む。一方のトゲチツクはややしこしいとこ付くなあ、と相変わらず苦笑していた。

「僕はね、このふたりとはけっこう古い付き合いなんだ。ヨルノズクやカメールと会う前から仲が良いんだよ」

4匹の数歩後ろを歩いていたユウイが助け船を出す。その答えに「いつから？」とチコリータから疑問の声が上がる。

「うん。確か小1 だったよね？」

「だな。大ゲンカしてからだな」

そう答えつつ、オオタチは「最近、どっかでもそう話したような……」という気がしてならないようだ。その答えは昨日だ、オオタチ。

「だから、何でケンカしたの？」

「お前には昨夜話しただろが！！」

「いや、何で話してるんだよ！？」

ファイフイの問いにオオタチが突っ込み、今度はそれにユウイが突っ込む形となった。

しまった、という面持ちになるオオタチに反して、ファイフイは素知らぬ顔でその場をやり過ごす。ファイフイの得意技である。

「し、仕方ないだろ！ そう言う風にチツクこいつが持って行ったんだから」

「オレだけのせいにするな。お前もノリノリだっただろ」

「……うるせー！」

近くにいた共謀者を指差しその場から逃れようとするが、簡単には逃れられず。拳句、逆切れと来た。最低なヤツである。

「チツク、どんなことを話したの？」

逆切れしたオオタチに詳細を聞くよりも、隣で冷やかな目線を送っているトゲチツクに聞いたほうが賢い。

「ん？ そんなたいしたことじゃないぞ。

強いて言うなら、原因だな。ケンカした原因。それだけだよ」

止まっていた足を再び動かしながらそう答える。その動きにユウイが続き、話の続きを促すが、それ以上は話そうとしない。

「ねー、何でケンカしたの？」

話から置いてきぼりになっていたチコリータが口を挟む。その隣を歩いているヒノアラシもうんうんとうなずいていた。

「関係ない」

「またそれー？ 教えてよー」

この年齢nkjの子どもはやたらと知りたがるのだが、それがとてつもなく鬱陶しいと感じる今日この頃。自分の妹もちょうど彼女と同じ年齢のため、面倒だなあと思うのは自然なことなのだろうか。

「言わねー。絶対言わねー」

断固拒否！ の態度をとり続けるオオタチ。それほどまでに知ら

れたくないことでもないとと思うが、誰かのメンツに関わることもあるのだろうか。

「ポケセン見えてきたし、そろそろ帰るよ。じゃあな」
「え」

あまりにも唐突過ぎるトゲチックの行動と言葉。言葉よりも先に行動していたのは気のせいだということにしておこう。

それよりも、話している間にポケモンセンターから100メートルと離れていないところに立っていたことのほうにわずかな驚きを覚える。

「ちよ、チックク!? 待てよ、おい!」

先に帰ってしまう友の後を慌てて追いかけるオオタチ。問い詰めていた2匹はその様子をポカンと見つめていたが、その表情が次第に驚きの表情へと変わっていく。

「逃げたよね、あれ!」

「あんな逃げ方ありなの!?!」

逃げられたことを悔しがり、わめき立てるチコリータとヒノアラシ。

その声を聞きつけたのか、ポケモンセンターの自動ドアが左右に開く。

「ヒノアラシ、チコリータ!」

そこから出てきたのは、自分たちが閉じ込められる原因となった

ポケモン。すなわち、チコリータとヒノアラシの兄と称するワニノコである。

「お兄ちゃん！」

数時間ぶりの再会を喜び合うチコリータとワニノコ。ヒノアラシは同調こそしないが、先ほどよりもずっと安心した表情になっていた。

「ユウイ。僕、言い忘れたことがあるんだけど……」

現在は夕飯を食べた後。またもや部屋の中でふたりきりの時に、ファイイが少し不安げな顔をしてそう切り出した。

その他大勢は町中にあるちよっとした高台に行っているらしい。どうやら夏の風物詩である花火を見に行ったようだ。

「何？」

ユウイが落ち着いた表情でそう返す。

それに安心感を覚えたファイイは昨日の昼、トゲチックから聞いたことをそのままユウイに伝えた。

ユウイは少し驚くが、すぐいつもの表情に戻り「そっか」とだけ返す。そしてちよっぴり微笑むと「お手柄じゃん」と褒め称えた。

「これで次の行き先決まったね」

「うん。でも、どうやっていくの？」

ファイイの疑問にうーんと、考えるユウイ。その様子を見てフィ

フィは自分ならするだろうということ提案として挙げてみる。

「抜け道、通る?」

「それじゃあ面白いくないよ。せつかく違う地方に行くんだから」

笑って返された言葉は否定を示すもの。少しがっくりと来たが、それでもめげずに他の意見を考える。

「じゃあ、歩く!」

「歩くのはきついよ。何せ旅始まってから歩いたのってタمامシからセキチクに来た時だけだし」

それでも自転車に乗っていた時間のほうが多いぐらいだよ、と笑いながら付け足す。

その答えに少しギョツとする。それもそうだ。マサラタウン出身とは聞いていたけども、まさか歩いたと言えるのが自分と出会ったあとで、しかもほんの数キロだけだったとは。

「ほ、他は!? マサラからトキワとかニビとか……あとハナダも通るじゃん」

「トキワシティまではウインディに乗って来たみたいだよ。さすがに森までは歩いたらしいけど。」

ニビに行くのにも歩いたけど、森からだとも10分もかからないからね。

ハナダまでは知り合いの手を借りたし」

まさかの答え、その2。

フィフィの顔がどんどん引きつっていくのが目に見えて分かる。

「あ、敢えて聞くけど、ハナダからタمامシ……は?」

確か、ユウイは先にタマムシに入っていたんだよね？」

「そうだよ。すぐ来てもらいたかったから、“抜け道使って来て”と言った」

うそだ……と意気消沈するフィィ。

「本当に歩いてないんだ、あのふたり」

「そうなんだ。野宿はできないからね、あのふたりには」

その答えでなんとなく何かを察するフィィ。ああ、と嘆く声を漏らす。

「あの荷物に入るわけないもんね。重いし」

ベッドのわきに置かれた“あの荷物”に視線を置く。きっと、着替えと地図とちよっとした食料等が入っているのだろうと、小さなふたつのリュックを見て考える。

「それだけじゃないよ。野宿したせいで飢えられても困るし」

けっこう辛口を叩くユウイ。

聞いたほうはギクツとするが、言った本人はそうでもないというような表情。むしろ、いつもと同じ表情をしていると言ったほうが正しい。おまけにフィィがそんな表情をしていることにさえ気づいていない様子である。

しかし、その後冗談だと言ってくれたことで、フィィの気分はいくらか落ち着いたようだ。野宿が出来ないのにはまた別の理由があるらしいのだが、その時にはそこまで聞くことが出来なかった。

花火大会が始まったのだろうか。火薬の花が開く音が遠くから聞こえてくる。その音に紛れてドアをノックする音が聞こえた。

「入りますよ」

「どうぞ」

どこの診察室だ！？ と突っ込むのはやめておく。

ドアが開き、そこから現れたのはカメール。椎那たちと一緒に花火を見に行ったはずだが……。

「行かなかったの？」

「行ったんだけど……」

ユウイから発せられた疑問に言葉を濁して答える。

「ちょっと……は、はぐれちゃってさ。先に戻ってきたんだよね」

なんとも情けない話である。本人もそれを自覚しているらしく、視線を合わさずにひとり言のように話す始末。開き直らないだけマシかもしれない。

「あーあ。じゃあ花火見てないんだね」

「ううん、一応……半分ぐらい見た、かな？」

フィフィが残念そうに言うが、答え方に突っ込みどころがある。
ぎる。

「全体は見てないんだね？」

その質問には「うん」と簡潔に答えてきた。そして、ちよっぴり

悔しそうに「見たかったな」と呟く。

「屋上に行ったら見えるんじゃないかな？」

「いいんだ。なんかヨルノズクつんけんしていたから一緒に居づらかったし」

「どうやらヨルノズクもカメールが部屋（こ）にいる原因の一部らしい。そんな彼と一緒に見ているのも楽しくないと言うところだろう。」

「あおさ。ちょっと聞いてもいい？ ヨルノズクのこと嫌いな？」

爆弾発言と言うか、ストレートにそう尋ねるフィフィ。

その質問に少し表情を暗くしたカメールを見て、慌てて「ごめんと謝る。」

「いいよ、別に。」

「嫌いって言うか……ヨルノズクのあの態度には僕にも原因あるし」「どっぴいっこと？」

しんみりとした空気が部屋の中を漂う。

その中でただひとつ陽気なものと言えば、花火が立てる音のみである。

「ほら。その話は後ですればいいだろ？」

カメール、ホーホーがジョウトにいるって言う話なんだけど、どう行けばいいと思う？」

先程フィフィと話していた話題を振ることで、しんみり感を跳ねのけようとする。

うまくカメールが乗って来てくれればいいんだけど、と心の中で

静かに思っ通りユウイらしいと言えばユウイらしい。

思いのほかカメルはその話題に「そうなの!？」と驚きの感情をプラスして飛び乗った。そして、うーんと考える。

「歩く……のは遠すぎるし、抜け道通つても楽しくないし……」

先程ファイファイが出したものと同じ考えを示すが、両方とも否定しているところを見ると、ある程度までふたりの事を理解していると言える。

しばらくすると、他の意見が彼の口から飛び出す。

「クチバから船に乗らない？ 確かワカバタウン行きの船が出ていたはずだし。」

クチバまでは抜け道を使って行けばいいんじゃないかな」

その意見にはすぐに2匹の賛同が得られる。

もっとも最終的に決めるのは現在花火を見に行っている人間2名であるが。

「早くホーホーに会いたいな。ヨルノズク押さえてくれるし」

「弟だよね!？」

「怒りの矛先がカメルには向かなくなるだけの話だよ」

久しぶりに再会できるかと思いきやカメルに、何かおかしいだろ!？ と突っ込むファイファイ。そして、またもや辛い言葉をするりと吐くユウイに、ファイファイは「え？」と表情を引きつらせる。

「まあ、そうなんだけどね。それだけでもずいぶん楽だよ、僕」

ユウイの辛口には全く動じず、それどころか今までどおりに話を進めるカメール。さすがは友達と言ったところだろうか。

（僕がおかしいのかな）

2匹を見ていて、ふとそう思ってしまったファイファイ。大丈夫だ、たぶん。

それから数十分後、花火大会から帰ってきた椎那と胡睦むつにホーホーが見つかったこと、クチバシティから船に乗ることなどを話すと快く了解してくれた。

それどころか船に乗れるということではしゃいでいたほどである。

「ホーホーに会えたらどうする？」

「しばき倒す」

わくわくした様子で誰に聞くでもなくそう話す椎那に、本気ほんまにヨルノズクが言うものだから弱い“でんきショック”という形でユウイが制裁を加えた。

椎那や胡睦からは見えない位置からだったため、いきなり飛びあがったヨルノズクがさぞかし滑稽に見えたとか。

その夜、椎那と胡睦は胸をときめかせながら眠りに着いた。

22話 兄だから。そして再びユウイと（後書き）

「英字と意味が気に入った」と言うことで採用した小説タイトル。まぬけな話、私自身が読めませんでした（）

アドベンチャラス

adventurous:

? 冒険好きな・大胆な

? > 旅などがく危険な・冒険的な・勇気のある

? 冒険に満ち溢れた

タイトルの意味にふさわしい冒険ものにしていきたいと思います。

23話 ジョウト地方へ

翌日、椎那と胡睦こむつの姿はポケモンセンターの外にあった。

そのそばにはお馴染みの6匹のポケモンたち ユウイ・ヨルノズク・カメール・ファイファイ・ミウ・トゲピーの姿も見られた。

「昨日の雨がウソみたいだな」

「え、雨なんか降ってたの!？」

真まつ青な空と白い雲を見ながらポツリとつぶやくヨルノズクに胡睦こむつが驚きの声を上げる。そんな胡睦をジト目で見ながら、「お前らが昼寝してる間にな」と嫌みたつぷりに付け足す。

「で、ジョウトのどこに行くって?」

「“しぜんこうえん”だよ。コガネシティの北にある」

「……僕が生まれた所だな」

「そうそ え?」

隣にたたずむユウイに行き先を尋ねる。問われたほうは昨日ファイイから聞いた情報をそのまま伝えることにする。

ヨルノズクがそれに答えを返すが、危うく「そうそう」と頷いてしまつところだった。

「そつなの!？」

近くにいたカメールが驚きの声を上げる。

一緒に暮らしていたものの、出身地は知らなかったらしく、椎那と胡睦も目を丸くさせている。

ヨルノズクとはいうと、面倒臭そうに「どうでもいいだろ」と言

うと、最寄りの“抜け道”がある場所へと翼を羽ばたかせて飛んでいってしまった。

「あ、待ってよ！」

その後ろを椎那とトゲピーを抱いた胡睦、ミウが姿を見失わないように追いかける。その様子に軽くため息をつくとカメル、ファイとともにトレーナーの後を追った。

「……久しぶりだなあ。学校」

そうつぶやくのは椎那。

ちょうど長期夏季休暇　またの名を夏休み　真っ只中と言うこともあり、椎那らが通う小学校の校舎と校庭は静寂に包まれていた。

「静かだね」

さみしそうな声でトゲピーが同調すると、

「でも、音が聞こえるよ。ほら！」

明るい声でそんなことないという様に首を横に振る胡睦。

胡睦の言う通りに耳を澄ませると、近くの学校から吹奏楽である楽器の音が聞こえてきた。

「トランペット？」

多少楽器に知識があるのか、ファイファイが小声で楽器名を当てる。その様子を静かに見つめるのは紛れもなくミウである。

「音だけで分かるの？」

「ん？ うん。トロンボーンとフルートも聞こえるよ　あ、ホルンも」

「金管ばかりだな」

ミウにすごいね、と言われ、ちよっぴり頬を赤らめるファイファイ。

ヨルノズクの皮肉には何の反応もしない。

なんの面白みも感じられなかったヨルノズクは「ふん」とそっぽを向くと、再び一匹で先へと進んでしまう。（ちなみに、フルートは木管楽器である）

どうせクチバ港で待っているだろうと思い、追いかけるということはその場にいるもの全員がしなかったとか。　だが10分後、バツが悪そうな顔をして戻ってきたらしい。

「お兄ちゃん」

ヨルノズクが行ってしまった後、ミウが不思議そうな表情でユウイに話しかける。

「まっすぐ歩かなくなたって、Uターンすればいいんじゃないの？」

「……」

南北に進めば学校が、東西に進めば抜け道の出入りに着く。

確かにわざわざ東（or西）から西（or東）に進まなくとも、東（or西）からでて東（or西）に戻ってもセキチクシティからクチバシティ間は移動可能である。　が、

「無理だよ。僕、1回試したもん」

フィフィによると、出てきたところから戻っても反対側から出てくることになるらしい。

よって、学校区域から外の世界に出るためには直進をしなければならぬらしい。

「だけども、学校終わって帰る時は出てきたところからでも戻れたよ？」

カメールの疑問にフィフィは「そうだよね」と肯定する。しかし「でも、」と続いたことからそれはまた別の問題らしい。

「一定時間この場所にいたら逆戻りしても大丈夫みたい」「いっていいじゃん？」

ミウとトゲピーの声が重なる。

そう、とフィフィはこくりと頷く。

「だいたい4時間半ぐらいかな。」

小学校の午前授業が終わるぐらいの時間だったよ」

それを1匹で調べたというのだから余程暇 否、ある程度自由だったのだろう。

「つまり4時間半未満だと直進しないといけない、と？」

「そ。この歩いている時間は無駄じゃないんだよ」

話しつつ前へと歩を進める。

その数秒後に舞い戻ってきたヨルノズクと正面からぶつかるとは、

その時には思いもしなかった。

「船って、あれ？」

椎那が指差す先には3色で彩られた大きな客船が見えた。船体の側面にはオレンジ色で“サントアンヌ”と英字でつづられている。

「あれはサントアンヌ号。今の時期にクチバに停泊とまるんだ。

世界を回る豪華客船だよ」

「よって、あの船じゃない」

ユウイの説明の後、話をぶった切るのはヨルノズク。

何かのご不満らしく、イライラが負のオーラとしてヨルノズクの周りを漂っている。

「どっしたんだよ？」

ヨルノズクの様子を気にしてユウイが声をかけるが、そんな心配もお構いなしにそっぽを向く。

しかし、どうしても腑に落ちないとするとユウイに声をかけるといふ、あくまで自分主体のヨルノズク。

「船賃あんの？ こいつら」

「知ってた？」

子ども2名の場合は2人目が半額になるんだよ」

近くで船の当てっこをしているふたりを目の端に置き、質問を質問で返すユウイ。だが、そうしてしまったことで、もともと機嫌が

悪いヨルノズクの機嫌をますます悪くしてしまった。

まあ、機嫌が悪い理由はなんとなく想像がつくのだが。

「あの、あの。僕、謝ったよね？ ごめんって言ったよね？」
「知るか」

どうやらまだ根に持っているようだ　　フィフィが彼にぶつかってしまったことを。

「そろそろ許してあげなよ。わざとじゃないんだし」

「余所見して歩くか、普通」

「……ごめんなさい」

ヨルノズクをたしなめようとするが失敗に終わる。

フィフィは何度も謝るが、相手は耳も貸さず、しまいにはふいとそっぽを向いてしまう。

謝ってダメなら、どうしろって言うんだよ……。

そんな思いで、他所を向き自分と視線を合わせようとしないうるノズクを恨めしそうに見つめるフィフィ。やがて深いため息をつき、落ち込んでしまう。

「ユウイ！」

そんな頃、椎那や胡睦の中ではあまり聞きなれない声がユウイを呼ぶ。

名を呼ばれた本人やカメール、ヨルノズクはその声の主が誰なのかがすぐに分かったらしく、こちらに向かってくる朱色のトカゲの

ような体をした声の主を見つける。

「ほら、ケンからの預かりもん。」

とは言っても、実際はその母親からなんだけど」

近づいてきたポケモンはリザード。

それも、ニビシティで賢司とともに行動をしていたあのリザードだった。

「ありがと。ケンによろしく言つといて」

「焦るわ！」

久しぶりにポケギアに連絡来たかと思つたらその内容が

「“金貸して”だろ？ 僕でも焦るよ」

「言つてきた本人が言つな！！」

仲が良さそうに自然と語らうユウイとリザード。というか。

「ポケギア、お姉ちゃんの使つたの？」

「え、椎那のじゃないの？」

「そつち！？」

金銭の貸し借りのほうじゃないの！？」

突っ込みどころが若干ずれている人間ふたりに突っ込むカメール。そんな様子を見て多少元気を取り戻すファイファイ。クスクスと笑いがこみあげてくる。

笑い声に気づいたりザード。ファイファイの存在を初めてそこで知ることになった。

「このイーブイ、誰？」

「新しい道連れだよ。ファイファイって言つんだ」

「そうなんだ。この先、苦勞するんだろっな……」

フィフィを憐れむような目つきで見るリザード。

その目に答えるように「もう苦勞してるよ」と冗談半分で返す。すると、「だろっな」と言うようにヨルノズクを見ると、

「こいつ、新参者嫌うから」とさも当たり前前の事かのように話した。

そうなんだと、フィフィは今までの事を納得する。

なんとなく感づいてはいたものの、改めてそう言われると深く納得してしまうのは自然の摂理なのだろうか。

「ま、1ヶ月ぐらい経ったら普通に話してくれるよ、たぶん。

あ。オレ、ユウイ達の同級生だから。別に怪しくともなんともないからな？」

「冗談っぽく言っているのはフィフィの警戒を解くためでもあるの
だろう。そういう陽気な性格のリザードに対し、フィフィはまたも
クスリと笑う。」

「……僕ね。さっき余所見してヨルノズクにぶつかっちゃったこと、
根に持たれちゃったみたい」

相手が知らないヒトだからか、するりとそう言う言葉が口から滑
りだした。

「僕、謝ったんだよ。でも」

ちらりと一度ヨルノズクの姿をうかがうと「許してくれなくて」

とつなげる。

いきなり見ず知らずのイーブイから相談を持ちかけられたリザードは、別段困ったような顔をするでもなく、その相談に乗る。ただ、少しばかり難しそうな顔をしていた。

「そつか。ほかにも理由あるのかもな」

「理由？」

「うん。そのうちユウイから聞くかも知れないけど、ヤマブキの例の組織の事が関係しているから。」

カメラと一緒にいた時にちよつといろいろあつたらしい。

それで、それ以来カメラとふたりきりであることも嫌ってんだ」

そばにいるミウとトゲピーには聞こえないように、小声でそつと耳打ちする。

“例の組織” 。まさか自分の入れられている組織の事まで関係してくると思わなかった。隠し通せているのか不安になる。

「ま、お前だけに原因があるわけでもないだろうし。あまり気にするなよ」

不安そうにしていたフィフィを気遣い、優しく言葉をかけポンポンと背中を叩く。

もつとも、フィフィが不安になっていたのは別の事ではあるのだが、話さない限り分からないだろう。

「……ありがとう」

久しぶりに目に熱いものがたまる感覚が甦る。実際のところ、そうなっているのだが。

フィフィのそんな様子に「うわ」と驚き焦るリザード。フィフィ

は泣きながら「大丈夫」と言うが、それではあまりにも説得力がなさすぎる。

結局リザードは、フィフィが落ち着くまでそばにすることを決めたという。

一方のユウイ。

賢司との連絡に使ったポケギアが自分のものとさらけ出す。そして、証拠だとも言うつように首にかけていたポケギアをはずしてふたりの目に見えるところに置く。

椎那のポケギアが赤、胡睦のポケギアが白を基調としているというのならば、ユウイのそれは薄い黄色を基調としている。もちろん、体の黄色と混じるので目立つわけではない。

「えー。何で持ってるの？」

「トキワに住んでいた時に拾ったんだよ。所有者は僕になっているし、問題ない」

……多少、あるんじゃないか？

「これを捨てた人がリセットボタン押していたから、落としものではないし」

ポケギアにはリセットボタンなるものが付いている。それを押すとそれまで登録していた番号や、地図データなどが消される。早い話が初期化 買ったときの状態に戻るのだ。

「拾って、壊れていたところを直してもらって、所有者の名義を僕に変えてもらったんだよ」

「誰に？」

「どこの誰が壊れているポケギアを直せるのだろうか。」

「ポケモンがポケギアの所有者となるのも変な話ではあるが、敢えて触れないでおく。」

「ポケモンセンターだよ。」

「そこからポケギアの修理会社に送ることができるんだ」

「ポケモンまで持って行って行ってくれたのは裕弥だけだね、とこっそりと付け足す。」

「へえ。」

「あ、ねえねえ！ 誰の番号、登録してるの？」

「ユウイの付け足しが聞こえたのか否かは定かではないが、椎那が興味津津な様子で聞いてくる。」

「教えても害があるわけでもないか、と考えたユウイは、それに登録している友人ふたりの名前を椎那に告げる。どういうわけか、ふたりの兄の名前はそこにはなかったという。」

「ケンくんと、ショウくんかー。ユウイでも仲良いんだ」

「失礼な言葉を淡々と口にする椎那。おそらく自分の言った言葉の意味をきちんと理解していない。」

「だからユウイは気には留めなかったが、それと同等のことをユウイと同年代の者が言っていれば、無視では済まさなかっただろう。」

「なあ、何時の船だっけ？」

リザードはファイファイが落ち着いたのを確認すると、ちよつと椎那と話し終えたユウイに近づき、尋ねる。

「確か2時半のだけど……ってもう2時か」

クチバシテイに着いたのが1時10分前。

昼食はセキチクシテイを出る前に済ませていたため、クチバシテイに着いてからは船着き場以外の場所には行っていない。

晴れていた空もクチバシテイに着いた時には薄曇りになり、風もある程度吹いていたため、そこまで暑いとは感じなかった。だからこそ、1時間以上も日向で語らうことが出来たのだ。

「じゃあ、もう乗船できるんじゃないの？」

「残念ながら乗船は出航の10分前からだよ」

「ならチケットは？」

「ちよつと前にカメールが胡睦連れて買いに行った。あ、戻ってきた」

ユウイの視界の端にカメールと胡睦が映る。その手には2枚の乗船切符がしっかりと握られていた。

「ユウイ、切符買ってきたよー」

「間違えて大人用買ってないだろうな？」

ヨルノズクの軽口にもつとするカメール。滅多に言い返さないの

だが、今回はなぜか言い返す。

「2枚とも小人だよ！ 部屋番号もちゃんと書かれているんだから」

隣で「そうだ、そうだ」とカメールに同調する胡睦。しかし、それだけの軽口だけでは飽き足らないのがヨルノズクである。

「ふうん。ベッドは？ シングル？ ダブル？」

「ツインだろ。」

もうあと10分もしたら乗れるから、船探してそこに行こう」

ヨルノズクがカメールに対して軽口を叩き始めたら切りがないことは前々から知っている。

そのため、ユウイが会話に割り込む形でカメールに対する嫌みな突っ込みを終了させ、場所を移動しようと持ちかける。

「船、どこだよ」

「……えーと」

切符を買いに行ったカメールにヨルノズクがその場所を尋ねるところがカメールからは曖昧な返事しか返ってこない。

「見てきてないのか、お前」

言いにくそうに「うん」とだけ頷くカメール。ちょっと抜けているところがあるのは知っているけども、昨日の事もあり未だイライラしているヨルノズクは「役立たず」と貶す^{けな}。言われた本人はビクツとしてその場に縮こまり、「ごめん」とつぶやく。

貶したほうはというと、ユウイやりザードから非難の声を浴びていた。

いつもならカメールの状態に気づくとすぐ謝っていたヨルノズク。だが、今回ばかりは無性にイライラが募り、謝るところかユウイやりザードにまで罵声を浴びせることになってしまった。それに対し黙っている2匹ではないわけで。

そのせいで、ちょっとしたケンカのような騒ぎにまで発展してしまふ。

「船の場所、分かったよ」

少しばかり荒い呼吸をしているフィフィがその中に割り込む。

出航時間が刻々と近づいている中、いつまでも言い争っているわけにもいかない。そう言うわけで割り込まれると同時に言い争いは収まる。

「本当に合ってるのかよ？」

イライラした口調のままフィフィに問いかけるヨルノズク。問われたほうは「うん」と力強く頷く。

「地図見てきたんだ。それに、早く行かないと10分切っちゃうよ！」

ボケギア時計を見ると、すでに2時20分を経過していた。

余計な時間を食ったと言わんばかりに、カメールを睨むヨルノズク。

そのせいでカメールはますます萎縮し下を向いてしまふ。その数秒後、リザードが背中を押し、周りを見てみると目で合図を送る。

辺りを見回すと近くには誰の姿もない。あのヨルノズクでさえも。だが、少し離れた場所に走っている椎那の姿を見つけ、慌てて追いかける。そんなカメールの後ろ姿をリザードが心配そうに見つめていた。

カメールを除くユウイ一行はファイファイを先頭にし、ジョウト行き
の船が止まっている場所へと案内してもらっていた。

ちょうど、列の最後の乗客が船員に切符を見せ、船に乗ろうとしているところだった。椎那と胡睦はミウとトゲピーを抱いて慌ててその後ろへと並ぶ。

ユウイとヨルノズクをモンスターボールの中に収めたとき、ようやくカメールがそこに追いついた。

「大丈夫？」

よほど急いできたのだろう。荒い呼吸をしているカメールにファイが声をかける。

「な、なんとか……」

「あ。カメール戻って」

「え」

ファイファイへの返事も、疑問の言葉もまともに言えないまま、カメールはモンスターボールへと戻される。もちろん、トレーナーである胡睦によって。ファイファイはその様子をただ呆然と見ていた。

「はい、どござ」

切符を見せて通されたのは船内へと続く階段。

船舶の外側が青と白の2色に彩られていたのに対し、内は白色だ。ただ、真っ白と言うわけではないところから何年も前から使われている少々古い船だということが分かる。

船に乗り込んだふたりの姉弟。

初めて乗った船に感動し、抱いていたミウとトゲピーを危うく落とすところになるほどだった。

後ろをついてきたファイフィに「部屋に行こう」と促され、ようやく歩き始めた。その時タイミング良く汽笛が鳴り、船が動き始める。

「甲板に行かない？ リザードが見えるかも！」

わくわくした面持ちでそう提案する胡睦。しかし、すでに船は動き出しているので、早く行かないと見えなくなってしまう。

急いで甲板に上がり港をみると、朱色の生き物がこちらを見て片手を振っていた。

「リザード〜。またねー！」

「ありがとう」

大声でそう叫ぶ椎那と胡睦。同じように甲板に出ていた人々が何事かと振り向くが、今回はかりはお構いなし。

なぜなら、リザードが切符代を持ってきてくれなければ、ふたりは今ここにはいないのだから。

リザードの姿が小さくなり、そして港が見えなくなる。

それでようやく気がすんだのか、船内にある自分たちの部屋を指してファイフィとともに姉弟は進む。

ワカバタウンの港には明日の昼ごろ到着予定だが、ホーホー探しの旅はまだまだ先が長い。

マサラタウンを出発してから16日目、ニビシティを出発してから8日目の事である。

o u t s i d e ・ 3 賢司の借り（前書き）

この小説に幾度か出てきた賢司^{けんじ}。
さて、賢司とユウイの“貸し借り”とは？

とある日の夜10時ごろ。

ピリリリ！ と機械調の呼び出し音がした。

音の発信源はオレの左手首に付けられている赤いポケギア。

発信者はオレのイトコと旅しているあいつ。

ポケモンなのに、ポケギアを持っているあいつ。

旅立つ前にオレの事を散々いたぶりやがったあいつ。

「はい、何？」

『ケン？ 今、大丈夫？』

ケン。それがオレの長年の呼び名 つうかあだ名。

本名は賢司^{けんじ}だけど、どこその同い年のイトコが省略して呼び出したのが事の発端。

そして、今でもそれがあだ名として定着している。

「大丈夫だよ。どうかした？」

『うん。ちょっと相談なんだけど』

どうやらヨルノズクの弟であるホーホーがジョウトにいるらしく、イトコ達もジョウトに行くという。

そのため、移動に船を使いたいのだけど、おそらく船賃が足りないから（全額）貸してくれ、ということらしい。

「……マジか。いつ行くの？」

『た』

「え？」

『だから明日!』

あの一……。昼に言ってくるのならまだ分かるけど、今、夜ですよね?

『悪いけど、明日クチバの港まで持ってきて』

「……………何時の船だよ?」

『それも調べてくれたらうれしいな。本当にごめんだけど』

マジー?」

それまでオレ任せ!? ということは、まさか……………。

「もしかしてさ、運賃も調べてくれとか言わないよ……………な?」

『……………ほんつとうにごめん。なんとかしてくれない?』

「……………ごめんって……………」

分かってはいたけど、どうするものかな。

……………おそらくあの時の借りのふたつ目だろうな。

「ちょっと待ってる、調べてくる。その間リザードと話していて」

オレはそう言うと、隣で今まさに寝ようとしている相棒にポケギアを預ける。

そして、調べ物をするために“ぱーそなる・こんぴゅーたー”なるものを置いてある1階へと降りた。

『……………はい。代りましたが?』

「あ、リザード。……………機嫌、悪い?」

『寝ようとしてたんだよ！ 眠いんだ、オレは！』

どうやら寝ようとしていたリザードにポケギアを預けたらしい。こちらは僕とカメル、ヨルノズク以外は寝ているのだけだ。あ、……ファイファイも起きているな、あれは。

「ごめん、ごめん。ちょっと頼みごとがあつてさ」

『ケンに、だろ？ 頼むから寝させてくれよ』

そう懇願されても困るんだよね。何せ、かけなおすの面倒だし。

『なー。そつちからかけなおせよ。切るぞ』

「ちよつと待ってよ」

『面倒とか言うなよな』

バレたか。

『あー……』

でも、お前がケンにした貸しの事話してくれたら、繋げたままにしておくけど、どうする？』

そう来るか。

話しても構わないけど、でもなあ……。

『あ、嫌なの。分かった、切るな？ じゃあ』

「話すから！ 話すから切るな！」

ポケギアの向こうから微かに「ヤリー」と言っけっこう上機嫌な声が聞こえた。

そう言われると話したくなくなるんだけど、まあこの際仕方ないか。

それにしてもどれだけ面倒がつてるんだ、僕。

「僕がケンにした貸しって言うのはね」

「え、マジでかよ!？」

お前もよく了承したなあ、それ。オレなら喋りまくるし」

『それで今回の貸しが発生したんだよ。』

いつ返すのかなあと思っていたんだけど、意外と早く返って来た』

ユウイが電話口で笑っている声が聞こえてくる。

そうこうしているうちに誰かが階段を上ってくる音が聞こえてきた。その旨をユウイに話し、ドアが開くとともに戻ってきたケンにポケギアを突き出す。

「あ、ありがとう」

やけに驚いた表情をしながらポケギアを受け取る。
オレ、そんなにおかしい表情してるか？

「お前、何でそんなににやけてんの？ 珍しい」

………そういつわけか。

「気持ち悪い いゝ!？」

『え!？ ケン、どうしたの?』

気持ち悪いって何だよ、気持ち悪いって!

怒るの、当然だし!

「おまつ！ 何、トレーナーに“ひのこ”吹きかけてんだよー！」

『え……大丈夫、ケン？』

「ああ。一応……」

オレを睨みつけながらユウイと話すケン。

“ひのこ”なんて、炎タイプにとっちゃ“初歩の初歩”の技だぜ？
それで済んでよかったと思うべきだな。

「てめえ、あとで覚えてろ」

「ヤダね。今忘れた」

「……………。ユウイ、悪いけど数分待つててくれない？

うん、ごめんな」

『……………！！……………！！』

電話の向こうからケンがリザードを怒鳴る声が聞こえる。

『痛っ！？ 何すんだよー！！』

『うるさいー！ “ひのこ”してきたお前が悪いー！』

『もとはと言えば、お前が“気持ち悪い”とか言っからだろー！？』

あ……………。僕どうすればいいのかな？

音からして、リザード拳骨もらったみたいだし、なあ。

『あ、ユウイ。悪い、手短に話すな』

「うん」

なんとかケンの怒りは鎮まったらしいけど、イライラが口調から伝わってくる。

『まず、運賃。』

小学生以下ならふたり乗ればひとり半額になるらしい』

「うん。で、値段は？」

『その前にひとつ問題が。』

どうやら、クチバからアサギを經由してワカバに行くという意味が分からん航路をとるらしい』

ケンの呆れた声が聞こえたらしく、隣でヨルノズクがつめく声がする。

そりゃそうだ。

寄り道せず、まっすぐワカバに向かえば数時間だけ船に乗っていればいいだけの話なのだから。

「最近、そういうの多いよね。」

アサギからまっすぐクチバに来ればいいものを、わざわざハウエンを經由してくるとかさ」

『だよなあ。で、どうする？』

アサギで降りんのと、ワカバまで乗るのとじゃけっこう値段が違うんだけど』

「ワカバって言ってしまったからワカバ着で」

『なら、えーと……部屋代込みだから……』

ガサガサと紙をあさる音が聞こえる。

おそらく、何枚か印刷してきたんだろう。

『これじゃね？ この1万5千つての。これがアサギまでだから』

『

『あ。そうそう、それ。ユウイ、合計で1万5千』
『ヒトの話聞け!! それはアサギまでだ!!』

リザードも調べてくれていたらしいけど、なんだろう。
……何かとてつもなく不安だ。

「えー。じゃあ、結局いくらだよ?」

オレは調べるのを放棄する!

つまりは、パソコンから落とししてきた紙の束をリザードにすべて譲渡する。ジヨウト地方なだけに。

「お前……。」

この下にアサギからワカバまでの運賃が書いてあるのが見えんのか
「!」

ふん。どうせオレの目は節穴だよ。

「あー、なるほど。1万5千と1万を足せばいいのか!」

「それが小学生ひとり分。」

ふたり目以降はそれを足したものの半額で、百の位は切り上げ、と書いてある」

ということとは……。

「いちいち電卓使ってるじゃねえ!!」

「だまれ。いちまん……にせんごひゃく、か。切り上げるから1万3千、と」

電卓使ったほうが早えじゃん。

何を言うか！ と思いつつ、計算結果の合算をユウイに伝える。

『……どうも。時間、は？』

心なしか反応が冷たく感じる。気のせいかな？

その時のオレは、会話が全て筒抜けだということに気づいていなかった。

「リザード、時間」

「14時半のは？」

それより早かったら朝の8時。1日2便だけみたいだな」

「OK。ユウイ、14時」

『14時半で』

あまりにも反応が早すぎる。

多少不可解な気分になるが、まだ筒抜けだということに気づいていないオレ。

到着時刻も聞いてきたから、それにも答えておく。

『ケン、ありがとう』

電話だから表情は見えないけど、きっといつものように静かに微笑んでるんだろうな。

『あと、リザードとの会話、全て聞こえてたよ。最後の最後で放棄するなよなあ』

意に反して、苦笑しているであろう声が聞こえてきた。

マジ？

あ、だから反応冷ややかだったのか。だから即答したのか。

ちよつとボーとしていたオレの服のすそをリザードが引っ張る。

「何だよ？」

「誰が、誰の、金を持ってくの？」

「あ……」

んな大金、出せねえよ。小学生のオレが！

……でも、もう半年過ぎれば中学生か。

早えな、1年って。

「母さんに出してもらおうよ。」

ユウイ。明日こいつが金持ってくから、クチバまで

『わかった。港で待ってる』

そう言つてユウイは電話を切つた。

時計を見ればもう夜中の11時近い。

というか、オレの部屋の時計10分ぐらい遅れているから、11時
回つてんのか……。

そうだ。母さんに椎那たちの事、話に行かないと。

「え、椎那くんたちジョウトに行くの？」

「うん。だから運賃貸してくれってさ」

「いいわよ」

案外即答。

少しは反対されるかと思っただけ……。まあ、今思えば椎那たちが“旅に出る”というのを伝えたときもドライだったっけな。

「いつ行くの？」

「明日」

母さんの思考が止まる。

当たり前か。この時間だし。

「き、急ね」

「うん。3万8千いるんだけど……」

「高速艇で行くんじゃないのね？」

「船中で一泊するやつ」

「あ……。あの世間を騒がせている迷惑な船に乗るのね」

そ、そうなんだ……。

迷惑な船だったんだ……。勧めちゃまずかったかな？

「3万8千円いるのよね？ 4万預けておくね。ちゃんと渡すのよ？」

「はい」

そう言っつて、母さんは財布以外のあるところから万札を4枚出してきて、オレに預ける。

渡すのはリザードだけ。

オレは明日、シヨウと遊びに行くんだから。

「それと、椎那くんたちに“家の事は心配しなくていい”って言う
ておいてね。」

私がきちんと管理してるからって」

「うーい」

やべ。ユウイにかけなおして椎那に伝えてもらうか。
夜更かし好きのあいつならまだ起きている時間だろうし。

『何？ もう12時回ってるんだけど』

むっっちゃ機嫌悪い！

「あ、あのさ。母さんからの伝言なんだけど……」
『うん』

お、怒ってる。怒ってる、完全に。

『僕の機嫌が悪いの、気にしないで。』

こんな時間に寝ようとしてるほうが悪いんだから』

「ごめんなさいっ!」

いや、それって明らかオレのせいじゃん!?

『……うん。それで?』

あ、ちょっと機嫌直った……。

「あのかな」

『ふうん、分かった。椎那と胡睦こむつに伝えておくよ』

「おう。ありがと。起こしてごめんな」

『いいよ、もう気にしてない。じゃあね』

母さんに言われたことをそのまま伝えると、そう言って電話を切られた。

……もう気にしてないってことは。

ごめん、本当に。

なんか、目が冴えて眠れそうにないな……。
もう少し起きとくか。

リザード、すでに寝てるけど……。

「ゲホッ。そ、そう言ってことでごめんな、シヨウ」

『おう……。風邪うつされちゃかなわねえし。また今度な』

「ごめん。本当ごめん ケホッ」

『いって。ちゃんと治せよ？ じゃあ』

そう言って電話は切れる。

現在のオレの所在地は、部屋ん中のベッドの上。

理由は。

「夜更かしして、風邪ひいて、熱出す。って、超バカだな」

リザードがオレをいたわるどころかからかってくる。
少しぐらいいたわれっての。

だけど、事実だから否定はできない。

「……………うるせえ」

そう。オレが寝たのはあれから約3・5時間後のこと。うとうととしていたら、いつの間にか眠ってしまった。窓全開のまま寝てしまったせいで風邪までひいてしまった。

……………ついてない。

ドアをコンコンとノックする音が聞こえる。

返事をする、母さんが入ってきた。

「ケン、調子どう？」

母さん仕事に行ってくるけど、ちゃんと寝ていなさいね。

お昼は作っておいたから。

あと動き回ってヒカルにうつさないように」

オレより弟の心配しているようにも聞こえるのだが。とりあえず、「へいへい」と返事しておく。

「リザード。」

悪いけど、お金、椎那くんたちに届けてあげてね」

は〜い、と間延びした返事をするリザード。

その返事に満足したかのように微笑み、リザードの頭をなでる母さん。

まんざらでもなさそうに嬉しそうな表情を浮かべるそいつにイラストくる。

「それじゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」
「行ってら〜」

“行ってきます”の声にいち早く反応したのはリザード。
オレは熱のせいでまともにも言う元気が失われつつあるため、省略した。

玄関の扉が閉まる音がしたころ、オレは再び睡魔に襲われていた。

次に目が覚めると昼が過ぎていて、ジヨウト行きの船も出発し終わった時間になっていた。

恐らく見送って帰ってきたと思われるリザードが心配そうにオレを見ていた。

「ようやく目え覚めたみたいだな。もう3時だぜ？」

「はいはい。椎那たちは？」

「無事行った」

その言葉をきいて正直安心した。

椎那たち、ホーホーに会えるといいな。

「でさ、ケン」

真面目腐った顔で、寝ているオレを覗きこんでくるリザード。

「お前、トキワのもりで迷子になった上にスピアーに追いかけられたんだって？」

え。

「ぐは！？ お前、な、何故それを……」

ゆ、ユウイとオレとしか知らないはずなのに！

ユウイに口止め料として借りを2個取られたのに！！

何で知ってんの！？

「何故って……ユウイに聞いた」

おい、こらユウイ。

貸し借りの意味ねえじゃんか。

よりによって一番知られたくないヤツに言ってるし。

「黙つといてもいいよ？」

その代わり、貸しが発生する」

……くそ。

こいつの頭にツノが3本生えているように見える……。

あ、1本は本物が。

「さて、どうする。 賢司くん？」

ユウイ、話したこと覚えてるよ！！

忘れたとか、言わせねえからな！！

「なあ、ケン。おまえ、スピアーに追いかけたんだって？」

……シヨウ……。何でお前まで知っている？

オレ、もう誰にも借り作らないほうがいいのかな？

なんか、いろいろと信じられなくなってきたぜ……。

そう話すシヨウの隣ではリザードとフシギソウがケラケラと笑っていた。

“ ショウ ” が漢字ではないのは、ケンと同じく省略されているから
です。

24話 船の旅(前書き)

賢司に手を貸してもらい、ジヨウト地方行きの船に乗ることができた椎那一行。

24話 船の旅

「ねー、いつ着くの〜?」

「うるさいなあ。まだだつて言ってるだろ?」

「ねえ、いつ着くの?」

「うるさい! まだだつてんでらる!」

質問者はそれぞれ違うが、回答者は同一人物 ヨルノズクである。ちなみに最初の質問者は椎那、2回目の質問者は胡睦むむである。

「あのさあ。なんであたしと椎那と言い方違うの?」

「自分で考える」

「考えて分かる問題じゃないじゃん!」

この場所が船室ならいいものの、実際の場所は甲板である。夜と
いうこともあり、月や星、夜の海を見ようと何名かの乗客がこぞつ
てそこに集まっていた。

そんななか聞こえてきたのは、鳥ポケモンと言い争うひとりの幼
い少女の声。何事かと思い、そちらを振り返るものもいる。

「ちよつと、ヨルノズク! どこ行くの!」

「部屋に戻るんだよ。お前と一緒にいると注目ばかり浴びるから
な」

「どつという意味よ!」

「周り見れば?」

ヨルノズクにそう言われ、後ろを振り向く胡睦。すると、甲板に
いた人たちの目が自分たちに向けられていた。

慌ててヨルノズクのほうに視線を戻すが、そこにはすでにいなかった。

暗い中、目を凝らして探すと、船室へと続く自動ドアを抜けていくところを発見する。胡睦はその後を追いかけるようにして甲板を出て行った。

一方の椎那はというと、その後もしばらく甲板にとどまり、ワニノコやチコリータ達と共に優雅に星空を見上げていた。

次の日。

青い空には白い雲がモコモコと浮かんでおり、太陽がサンサンと輝いていた。

ジョウト地方に足を踏み入れるのには絶好のお天気日和である。

「もうすぐで着くからね」

ユウイが船室でそう言ったのは到着の15分ほど前。ちなみにアサギシテイに着いたのは今から3時間以上も前の午前7時ごろの事だ。

初めて見たジョウト地方の町並みに興奮したふたりは、船が出港した後でもキヤーキヤーと騒ぎたてていた。そして、ワカバタウンに到着するのを今か今かと心待ちにしていたのである。

「アサギ、かあ」

3時間前。

遠ざかるアサギシティを甲板から懐かしそうに眺めていたのは、ワニノコである。

「行ったことあるの？」

ワニノコと同じように遠くなる町並みを眺めながら質問するファイ。

「うん。ぼくらが生まれたの、ジョウト地方だから
“ぼくら”？」

不思議そうに聞き返すファイと目を合わせ、「うん」と肯定する。そして、再び海に視線を戻すとますます懐かしそうにアサギシティを眺めだすワニノコ。

そんな表情をするワニノコに「なぜ？」と聞き返すことが出来ず、ワニノコが話し出すまでただただ海を見つめていた。

アサギシティが見えなくなってようやく気がすんだ様子のワニノコは、やっとファイの疑問に答える。

「ぼくと、ぼくの兄弟たち。ウバメのもりで生まれたんだ」
「ウバメのもり……」

聞きなれない地名を復唱するファイ。
「どういうところ？」とワニノコに再び質問する。

「トキワに比べて少し暗いかな。
背の高い木が空を覆い隠している感じなんだ」
「暗いんだ……」

ワニノコの言葉をヒントにどういう風景が広がっているのか、頭の中で想像する。

暗がり好きなホーホーやヨルノズクなどの鳥ポケモンに、コンパンやモルフォンなどの虫ポケモン。
森だというのだから、邪魔されると見境なしに攻撃してくる凶暴なスピアーなどもやはりいるのだろうか。

考えるだけでもワクワクし、行ってみたい、いや行きたい！という小さな夢が生まれた。

そう言う風にさまざまな想像をしているフィフィのそばで、ワニノコはそれとは全く違うことを考えていた。

(両親、か……)

そう。

ワニノコの弟と妹は自分とは違う種族のポケモン。
ワニノコの進化系であるオーダイルの母親からはワニノコしか生まれないのだ。同じように、メガニウムからはチコリータが、のバクフーンからはヒノアラシが生まれる。
父親はそれぞれの母親と相性が良ければ誰でもいいのだ。

しかし、彼らは兄弟だと言っているのだから父親は同じなのだろう。

所謂「腹違いの兄弟」と言うことである。勘の良い方なら父親が誰であるかは想像が付くかもしれないが。

(……ヒノアラシの母さんから聞いたただけけど、平気で他人母さん達を騙していたんだな、父親は)

昔聞いた話をぼんやりと思い出す。

自分たちの父親はそれぞれの母親と同じ姿をして近づいたらしいということ。

もしかしたら自分たち5匹の兄弟以外にも兄弟がいるかもしれないということ。

そして、父親が正体を暴かれたその時、自分は実の母親ワニノコに見切られてしまい、(弟である)ヒノアラシの母親になるマグマラシに育てられているということ。

チコリータの母親は独り手で2匹の子どもを育てる自信がなく、仕方なく末の子どもをマグマラシに預けたということ。それが妹のチコリータである。

最終的に、ヒノアラシの母親であるマグマラシは自分の子どもを含め、4匹もの子を育ててきたという。

(元気かなあ、あのふたり。

今、どこでなにをしているんだろう……)

たったひとつの町を見ただけでたくさんの思い出がよみがえり、それに完全に浸ってしまうワニノコ。

そんなワニノコを横目にファイファイはファイファイでワニノコとは違う考えを巡らせていた。

(そういえば、結局連れて行ってもらえなかったな。

でもまあ、ワニノコにまた会えたいし良いか)

どうやらファイファイは誰かにどこかへ連れて行ってもらうという約束をしていたらしい。

ワニノコという言葉が出てくるのだから、場所は恐らくトキワの

もりなのだろう。

(マグマラシもベイリーフも、トゲチック達と仲良いもんなあ。
僕がワニノコと一緒にいること、もう知っているんだらうな)

ファイフィの思いに出てくるマグマラシは、ワニノコの母親代わりをしてくれたマグマラシとは全くの別人だということを合わせて言っておく。

何せ、性別も年齢も全く違うのだから。

(ジョウトのどこかにいるはずのふたりに会いたいなあ)

(今度シルフに戻ることがあれば、ふたりに会えるといいな)

無論、ワニノコが考える“ふたり”と、ファイフィが考える“ふたり”は同一人物である。

「ひ・ま・あ」

「つまんなーい」

2つのベッドが置かれた船室で文句を言うのはミウとトゲピー。
お昼寝も、かくれんぼも、鬼ごっこも、全て昨日のうちに一通りやり終えてしまい、他の遊びが思いつかないのである。

「あと2時間ぐらいで着くから、ね？」

我慢して、という意味を暗に含めた言い回しでユウイがなだめるが、効き目はいまひとつ。

そのとき、ようやく甲板からファイフィとワニノコが船室内へと戻

ってくる。

「え、どうしたの？ あれ、椎那たちは？」

船室に入るなり不機嫌な様子のおちびさんたちに会い、ちょっとばかり焦るワニノコ。椎那も胡睦も部屋にはおらず、どこに行ったのだろうと考える。

「ちょっとね……。」

椎那たちも甲板にいるはずなんだけど、会わなかった？」

「そうなの！？」と驚くワニノコに対し、「そういえばなんか見た気が……。」とファイファイ。

それを聞き半信半疑になったワニノコに苦笑を浮かべるファイファイだった。

「お兄ちゃん、ヒマ!!」

「楽しくない！」

再び暇だと連呼する妹たち。

ユウイが助けを求めるような視線を、今しがた戻ってきたばかりの2匹に送る。ワニノコはその視線から逃れようとするが、そう上手いかなかった。視線がかなり深く突き刺さってくるらしく、仕方なくその視線を受け止めていた。

しかし、受け止めたのは良いものの、何をして暇をつぶせば良いかが思いつかない。

暇つぶし道具を探すために辺りを見回していたファイファイが、ふつとテーブルの上を見る。そこには簡単なメモ用紙と1本のボールペンが置かれていた。恐らく、船内サービスのひとつだろう。

「ね。それ、もらっていい？」

フィフィはテーブルの上にある2種類の物を前足で指し示す。
ユウイは「え？」と驚いたものの、テーブルの上にあったものをくわえてフィフィへと渡す。

「何するの？」

「内緒！」

そう言うとフィフィは器用にボールペンを前足で握り、何かをメモ用紙に書きだした。

ときおりメモ用紙から顔を上げ、目の前にいるミウとトゲピーを観察してはまたメモ用紙になにかを書く、という作業を繰り返す。

そうして15分が経過する頃、ようやく手が止まった。そしてメモ用紙に書いたものをその場にいる皆に見えるように裏返す。

「うわぁ！」

「すごーい！」

「うわ……」

「上手いね」

感嘆の声がそのメモ用紙に投げかけられた。

メモ用紙にはミウとトゲピー、2匹の笑っている姿が描かれていた。彩色はされてはいないものの、絵描きの腕は相当なものだと判断できる。

「本当にぼくと同い年なの？」

「同い年だよ」

怪しむワニノコに対し、苦笑いしながら答えるフィフィ。小学2年生が描けるような絵ではないのだろう。

「普段は何で描いてるの？」

「いつもは鉛筆とか色鉛筆かな。ボールペンで描くことはあまりないよ」

フィフィが描いた絵をじっくりと見ながら質問するユウイ。紙から顔を上げると、別の質問を彼へと投げかけた。

「いつから？ いつから描いているの？」

その質問には小首をかしげつつ、難しい顔をして記憶を遡るフィフィ。そして「5歳ぐらい」と返す。

「ご、5歳って……。え、その時からこんな絵描いてるの？」

「まさか！ 最近だよ、こつこつ風になんか描けるようになったの」

顔を引kitsつらすワニノコに苦笑するフィフィ。その答えを聞いたワニノコは顔の引きつりが少し和らいだとか。

「ね、もっと描いてよ」

「え」

いきなりのお願いに目を点にするフィフィ。

「おねがひ。もっとフィフィの絵、見たいの」

「可愛く頼むのはミウ。」

何気に上目遣いも加わっている。とは言っても、フィフィの身長がミウよりいくらか高いので仕方ない部分もあるのだが。

「うーん……そう言われてもなあ。何描こつ……」

今度は絵描きの対象物を探して辺りを見回す。そして、目に止まったのは。

「……僕？」

自分を指さし少し焦った表情になっているユウイ。そんなユウイにはお構いなしに「うん」と頷き返すフィフィ。

「僕の知り合いと似てるの。今度会ったら見せるんだ」

ユウイの絵をね、と無邪気に笑うフィフィ。

一方、その答えのせいでいろいろと考え焦るユウイ。まさか自分が模写されるとは思ってもよらなかったのだから。

「フィフィ、知り合いって誰？」

きょとんとした表情で尋ねるワニノコ。あくまで興味のうちである。

「『コムギ』って言うの。ユウイと同じサンダースなんだ」

「『コムギ』!?」

フィフィの言葉で表情を変えるユウイ。どうやら聞きおぼえがあるらしい。

「知ってるの？」

今度はファイファイがきよとんと首をかしげる。

「知ってるも何も イトコだよ、僕の」

一拍間を置き、「え〜！？」と言う4匹分の声が船室内に響き渡る。

「いや、ミウは覚えてるでしょ？」

苦笑して妹の発言を否定する。これでノーと答えるなら驚きの声にも納得が行くが。

「うん」

まさかの肯定。そして。

「4月に会ったヒトだよな。」

お兄ちゃんよりちょっとちっちゃいヒトでしょ？」

いや、ミウのほうがもっと小さいからな？ という心の声を押し殺し「そうだよ」と肯定するユウイ。

「あのヒトもファイファイと一緒にこのヒトなの？」

その疑問はユウイではなくファイファイへと向けられた。

ファイファイは困ったように返す言葉を失う。否定するとウソになる

し、肯定したらショックを受けるかもしれない。その思いがフィフイの言葉を詰まらせていた。

だが、数十秒後。

「そっだよ」

ユウイが隠しもせず、ありのままのことを伝えた。

そのことに驚きを感じるフィフイとワニノコ。何故、という表情でユウイを見つめる。

「隠したって仕方ないし、あいつも別に好きでいるわけじゃないわけだし」

それに。

「悪そうな子じゃなかったろ？」

出会った当初の印象を妹に尋ねる。そして、思った通りの答えが妹の口から飛び出す。

「うん。おもしろそうだった」

悪いに対して面白そうと言う返答は如何なものかとも思うが、そこは御愛嬌。自然にまた会いたいな、と繋げているのだから悪い子ではないのは確かである。

「ユウイって、変」

「“変”って」

「変わってる……。そこまでおおっぴらにするトト、初めて」

苦笑を浮かべたユウイだが、フィフィの戸惑っている表情を見ると、目を細め優しい表情に変わる。

「別に、悪いヤツだらけって言うわけじゃないからね。

あの“ふたり”だって、そうだろ？」

「だから、どうして内部に詳しいの？ それだって変だよ……」

フィフィの耳が垂れ、落ち込みの感情を示す。

(下手に刺激しないほうがいいだろう)

そう思っ黙っていたのが仇になったようで、フィフィは落ち込んだまま船室の外へと出ていってしまう。その後を慌ててユウイが追いかけていく。

「あのふたり”って誰？」

「さあ」

部屋に残された3匹の間でそんな会話があったとか。

“ふたり”のなかに自分の兄が含まれているなどとはトゲピーは思いもしないだろう。

ジョウトでの旅が終盤になるころにはその“ふたり”の謎も解ける。しかしそれは、だいぶ先の話である。

なにしろ、今はまだ「始まりの町」とも言われるワカバタウンにさえ着いてもいないのだから。

もう40分もすれば船内放送も流れるだろう。そんな昼時の話である。

24話 船の旅（後書き）

単語解説 その1

ヒト：自分以外の他人。対象はポケモンであったり人間であったりします。

人：ニンゲン。

こつという意味合いで表記に違いを出しています。

25話 始まりの町と(前書き)

ようやくシヨウト地方に到着です。

25話 始まりの町と

「ワカバタウンに到着しました。お降りのお客様は」

「着いた　　！！」

アナウンスの音声がかき消されるほどの大声で椎那と胡睦こむつが叫ぶ。それに賛同するかのように、ミウとトゲピーが飛び跳ね、嬉しさを体全体で表現する。

「落ちつけよ」

ふたりと2匹をなだめるようにヨルノズクがただ一言言い放つが、それだけで落ち着く4名ではない。

「外でよ、外。みんな、戻って」

「え、おい」

ギョツとするヨルノズクの言葉さえ聞かずにボールへと戻してしまう椎那。近くにいたユウイとワニノコもついでに戻してしまう。

「さ、行」

後に残ったのはミウとトゲピー、それから呆れかえり呆然としていたファイファイだけだ。ベッドの上で飛び跳ねていたトゲピーを胡睦が捕まえ、船内へ出ようとドアの目の前まで進んでいたミウを椎那が抱き抱える。

そして、リュックを背負い、「よし」と確認の掛け声をあげると、ドアを開け船の出口まで歩いて行く。その後ろをはぐれないように

早足で着いて行くフィフィ。その口には船室のカギが光っていた。

「わぁ！」

船から降りると同時に歓声をあげる椎那。目の前には見知らぬ土地が何百メートルも何千メートルも先まで広がっていた。

「涼しい〜」

両手を広げ、体全体に風を受ける胡睦。

ワカバタウンは『始まりを告げる風が吹く町』として知られ、それがこの町のキャッチコピーとなっている。その風を全身で受けているのだから、旅はきつと幸先のよいものになることであろう。

「ねえ、どこ行けばいいのかな？」

近くの店で売っていたジョウト地方の地図を広げる椎那。自分たちが今いる町がワカバタウンだということは分かるのだが、地図上でその地名を見つけだすことが出来ないでいる。

「……………さあ？」

広げられた地図を覗きこむような格好で胡睦がそれに答える。もちろん（というのもおかしいが）、胡睦も地図が読めない。しかし、地図上でワカバタウンという地名をかるうじてではあるが見つけたらしく、その場所を指で指し示す。

「ここだよね、今いる場所」
「そうなんだ」

どっちへ行けばいいの？ という熱い視線を胡睦に向ける椎那。
その思いは次の言葉で儂く散ることになる。

「椎那が決めて」
「え？」

目を点にして目の前にいる姉の顔を見つめる椎那。

「ほら、早く。日が暮れるよ」

ちなみに現在時刻は15時。夏で、しかも8月の中旬ということから、日暮れまでは少なくともあと4時間はあるはずだ。

ただし、4時間を子どももの足で歩くとなると距離は相当限られる。日暮れすぎに次の町である“ヨシノシテイ”に着くことになるだろう。道さえ間違えなければの話だが。

「フィフィ〜……」
「どうしたの？」

近くでミウヤトゲピーを連れて風景画を描いていたフィフィに助けを求める椎那。フィフィが動くのと同時にミウとトゲピーもそれに付き添うかのように歩いてきた。

「次の町ってどうやっていくの？」
「“どうやって”って、」

歩くんじゃないの？

話の流れを知らないものならこう答えるであらう。しかしフィフイは。

「あっちに行けばいいよ。看板出てる」

即答でヨシノシテイへの道筋を教えたのである。カンが鋭いのだろうか。

「あ、本当だ！ お姉ちゃん、あっちに行こう」

フィフイの指し示した方向へと駆けだす椎那。数歩ほど走った時、首から下げていた水色のポシェットが不自然に揺れ動いた。と同時に、赤い光と共にヨルノズクが目の前に出てくる。

「道、分かるのか？」

いきなりの登場ではあるが、彼なりに心配して出てきたらしい。

「うん、フィフイが教えてくれた」

笑って答える椎那とは逆に、フィフイという存在を軽く睨みつけるヨルノズク。突然の事で少しタジタジになるフィフイだが、無理して笑ってみる。

彼のそんな反応が面白くなかったのか、ふいと横を向いてしまうが、それと同時にフィフイはホツとため息をついた。

それから歩くこと数十分。

急に椎那たちの動きが止まってしまふ。否、先頭にいた椎那の歩みが止まった。

「どうした？」

ちょうど椎那の上空を飛んでいたヨルノズクが見かねて降りてくる。

「疲れた」

口元をへの字に曲げ、声をかけてきたヨルノズクにそう訴えるが、ヨルノズクは「なんだ」とだけ言い、再び空へと戻ってしまう。

「ねー、休もうよ」

空にいるパートナーにそう声をかけるが、返事はなし。もう少し歩けということなのだろうか。

「好きにすればいいんじゃない？」

すぐ下から声が聞こえる。

足下を見ると、上を見上げていたフィフィと目が合った。

「椎那たちの旅でしょ？」

椎那たちが好きにしたらしいじゃない。縛るものなんてないんだから

あるとすれば『時間』だけど。

そう付け足すと目を細め、太陽を眩しそうに眺める。

椎那と胡睦はフィフィのその言葉に納得し、適当な大きさの日陰を見つけると、その中でしばしの休息を取るのであった。

「いい加減起きないと日、暮れるぞ」

その声によって起こされた椎那。

“起こされた”と言っただから、いつの間にか眠ってしまっていたらしい。

「何時い〜?」

寝ぼけ眼で時間を尋ねる椎那。その声に反応してミウや胡睦、トゲピーが目覚めます。

「5時」

淡々とした口調で時刻を告げる鳥　否、ヨルノズク。

5時かぁ。どおりで涼しくなっているはずだ。　って、

「5時い!?!」

「もっと早く起こしてよ!?!」

「起こしただろうが、今。文句言っただったら自分らで起きてみる
「よ」

冷めた視線を胡睦に向けるヨルノズク。

その言葉にウツと詰まる胡睦。目線をそらしつつ、「よいしょ」とその場を立ち上がる。

「あれ、フィフィは？」

椎那が辺りを見回すと、1匹のポケモンの姿がない。木の陰にでも隠れているのだろうと思いのぞくが、そこにもいない。

「ねえ、フィフィ知らない？」

そうヨルノズクに問うが、返ってきた答えは「知らない」というもの。これでは探しようがない。

「ヨルノズク、探してきてよ」

心配そうな目をして訴えかける椎那。

しかし、ヨルノズクはそんな気を最初から持ち合わせてはいない。当然の事かのように拒否をする。拳句の果てに「フィフィは置いて行こう」と提案してしまう。

「なんで!？」

「一緒に行こうって言ったじゃん!」

「勝手にいなくなるのが悪いんだろ? 放つところぜ、そんなやつ」「ヒドイよ!」

そう叫ぶと椎那はポシエットからモンスターボールを取り出し、そこからユウイを出す。そして、フィフィを探して、と懇願した。

「ちよ、ちよつと待ってよ。何がどうなってるの?」

突然の事で困惑するユウイ。

何の説明もなしにお願いだけされたら、誰しもがこうなるのだろ

う。

「あのね」

疲れたから日陰で休んでいたこと。

その間にうたた寝をしまい、気が付いたらこの時間帯だったこと。

そして、いつの間にかファイファイだけがなくなってしまっていたことをユウイに告げる。

「そっか……。うん、分かった。僕が探すよ。」

だからふたりは先にヨシノに行きなよ。見つけたらそっちに行くから」

迷惑そうな顔をひとつもせず、笑って引き受けるユウイ。

しかしこれでは、ハナダシティでミウとトゲピーがはぐれてしまった時とまったく言ってもいいほど同じ光景。

果たして、ユウイひとりにファイファイ探しを頼んでもいいのだろうか。また夜になっても戻ってこないのではないか。

いろんな想像が椎那の頭の中を駆け巡る。結局、これ以上にいい案は思いつかなかつたのだが。

「ユウイ、ごめんね……」

「いいから早く行きなよ。日が暮れたら道が分からなくなるよ?」

申し訳なさそうにヨシノシティへの道をテクテクと歩いて行く椎那と胡睦。その後をトコトコとミウとトゲピーが着いて行く。

ヨルノズクもそれに続こうとしたが。

「ちょっといい?」

ユウイに引きとめられた。そして、

「少し時間くれる? 聞きたいことがある」

さっきまでの表情とは裏腹に、少し厳しい目つきでヨルノズクを睨んでいた。

「何だよ?」

「フィフィと何か話していたよね? 何を話していたの?」

単刀直入に本題から入るユウイ。どうやらボールの中からそういう光景が見えたのだと言う。

「……さあね」

「言えないこと?」

「……」

黙り込むヨルノズクにユウイはなおも聞き出そうとする。もっともユウイは何かを確信してそう言っているのだが。

「フィフィはどこ? 行き先ぐらい見てるよね?」

「あつちだよ。もう良いだろ?」

早く追いかけないと、あいつら迷うから

そう言い放ち、その場から逃げ出したヨルノズク。その後ろ姿をユウイはずっと睨んでいた。

しばらくして、ヨルノズクがさした方角へとフィフィを探しに行つたのである。

椎那と胡睦たちが寝てしまったころ、フィフィはひとり黙々と写生をしていた。

そうしていればヨルノズクは声をかけてこないだろうと思ったのと、久しぶりに感じた自然の空気に促され絵を描きたくなつたという、ふたつの理由があつた。

しかし前者の理由はあつけなく崩されるのだが。

「なあ」

絵を描き始めてから数分後、ヨルノズクから声がかつた。

最初のうちは聞こえないふりをしていたのだが、それが2回3回と続くと無視を貫き通すことが出来なくなった。

「なあに？」

あなたの呼び掛けに今気づきました、と言わんばかりの表情でヨルノズクと視線を交わす。

「1回で返事しろよ。」

……お前ってなんで僕らに着いてこようとしたんだ？」

無視していたのに気づかれていたらしい。

それよりも、後半の質問の意図がどういうものか気になった。単純に理由を聞きたいのか、それとも。

「“なんで”って……前にも言わなかつたっけ？」

単なる興味だよ。それでいいでしょ？」

再び写生に没頭しようとするフィフィ。

ヨルノズクは諦めたのか納得したのか分からないが、空へ移動していた。そして、翼で青色の丸い塊を作ると、フィフィめがけてそれを放った。 “エアスラッシュ”である。

「うわ!？」

いきなりの事で避ける暇もなくフィフィは前のめりになって倒れてしまう。その拍子に写生に使っていた紙が飛ばされてしまった。

「い、いきなり何するの!？」

空にいるヨルノズクに向かって声を荒立たせるフィフィ。しかし、それには何の反応も示さずに、ふたつ目の青い塊をフィフィに向かって再度投げつける。

「ひ、ヒトの話聞け　!!」

それを軽く交わしながらヨルノズクに向かって叫ぶフィフィ。

軽く避けられたことが気に入くないのか、同じものを数個作り同時に放つ。しかし、それらもたやすく避けるフィフィ。

それなりにバトル経験があるとみていいだろう。

「てめ……いい加減当たれ!!」

「当たるもんか、そんな技」

フィフィの言葉で何かが切れたのか、ヨルノズクは“エアスラッ

シュ”の攻撃をやめる。そして自身をまばゆい光で包みこませ始めた。

「……もしかして“ゴッドバード”？」

先程まで余裕の表情を醸し出していたフィフィだが、この高威力の技を見るとそうもいかないようだ。タラリと冷や汗を流している。

「そうさ　喰らえ！！」

“ゴッドバード”用のパワーがたまったところで、一気にフィフィへとぶつかりに行く。対するフィフィは避けることも、防御することもできないで立っている。　否、違う。

「まもる」

その瞬間、フィフィは透明なバリアに包み込まれ、それが“ゴッドバード”からのダメージを“0”にした。

技を防がれたことに対し、腹立たしげに舌打ちをするヨルノズク。

「んな技使えるのかよ……」

「連続しては使えないんだけどね」

「へえ？　じゃあもう一度“ゴッドバード”すれば確実に当たるってことか」

そう言うと再び“ゴッドバード”の準備をするヨルノズク。

その様子を横目で見るフィフィ。そして軽くため息をつくとき、黒く丸い影の塊を口の前で作り出す。そう、“シャドーボール”を。フィフィの十八番である。

「今度こそ、喰らえ!!」

パワーチャージが終了したのか、ヨルノズクの声が上空から聞こえる。それと同時に光り輝く物体がファイファイめがけて突っ込んできていた。

先ほどと同じく微動だにしないファイファイ。だが、あと1メートルでぶつかるところで、黒い塊 “シャドーボール” を地面に向かって放った。

数日間続いている晴天が地面の砂をサラサラにしていたため、“シャドーボール”の風圧でそれらが空中へと舞い上がり、ちょうどいい目隠しとなった。

「ゲホツ!? な、何しやがる……」

「それはこっちのセリフ。何なの一体?」

舞い上がった砂を見事に吸い込んでしまったため、せき込むヨルノズク。技は失敗したと見ていいだろう。

それに対して、少し離れた場所からその様子を傍観するファイファイ。“シャドーボール”を放った直後、後方へと跳んだので砂の被害には巻き込まれていないのだ。

「お、まえ ゲホ。あ、あの組織の一員なんだろう?」

吸い込んでしまった砂のせいで、ヨルノズクは切れ切れに言葉を紡ぐ。それでも言いたかったことは言いきったようで、あとはケホケホとせき込んでいた。

「……」

「こちらはフィフィ。予想はある程度していたものの、素直に答えていいものかどうか迷っているようだ。」

「共に旅する以上、隠し事はなしで行きたいのだが……。」

「黙っていたって無駄だぞ。ユウイはお前の味方だろうけど、僕は違うからな。」

「それに、お前がああ2匹と一緒にいるのも見ているんだからな！」

「“ああ2匹”って、誰の事？」

「トゲチックとオオタチだ！」

「吸い込んだ砂の被害もだいぶ収まったようで落ち着いて話すヨルノズク。ただし、口調はけっこうきつい。フィフィが少しでもとぼけるようならば、それすら許さない。そんな口調である。」

「いつの、話……?」

「セキチクにいた時。ちょうどヒノアラシとチコリータが迷子になった時さ」

「言いながらフィフィのそばへと近づいてくる。フィフィの目の前に立った時、こう言い放った。」

「もう、付いてくるな。邪魔なんだよ！」

「どうして? 僕、何もしてな」

「してる、してないの問題じゃねえよ! 迷惑なんだ!

「お前んとこの組織の厄介事に巻き込まれたくないんだよ!」

「ヨルノズクの気迫に圧倒され、少しずつ後ずさりするフィフィ。その足も震え始めている。」

「何もしてないのに、被害だけ被るのなんてゴメンだぜ、僕は！」
言いたいことだけ言うと、フンと後ろを向いてしまう。
足だけだった震えが全身にまで到達したのを見られずに済んだの
だが、ファイファイの目は焦点を定められず、あちこちというんな方向
を向いていた。

(怖い……。一緒にいたくない……)

恐怖だけがファイファイを支配していた。
そして、その恐怖の根源から逃れるために、その場から走り出し
た。行くべき方向とも、やって来た方向とも違う、別の方角へと走
って行った。

ヨルノズクはその後ろ姿を冷めた目でずっと見送っていた。

26話 フィフィの苦悩(前書き)

もしかしたら今までで一番長いかも……。

26話 フィフィの苦悩

「な、なんなんだよ　っ！！」

椎那たちから離れたフィフィは29番道路を北に進んでいた。

その最中、何を思ったのか10数匹のスピアーたちが走る彼の後を追いまわすこともあった。

無論、黙って逃げ続けるだけの彼ではない。数回シャドーボールを放つことで彼らをたやすく解散させている。

「こ、これで何回目……？」

そう。ただの1回ではないのだ。何回もおいかけているのである。

悲しそうにこの場所へと迷い込んだのが全ての間違いだったのか。今のフィフィの状況はまさに『泣きっ面に蜂』ならぬ『泣きっ面にスピアー』である。

「もう、嫌……だ」

幾度となく同じ言葉をつぶやくと、近くにあった大木でできたウロの中に入る。

逃げ回ったために疲労した体を休ませていた。

「シルフに戻ろうか……いや、戻りたくない。

戻ったらまたロクでもないことをさせられるだけだし……。

これからどうしようかなあ」

夕暮れ時で赤く染まった空を見上げながら、これから自分が進む

べき道を自問自答しながら模索する。時折、考えを打ち消すかのよ
うにブンブンと首を激しく左右に振ることもあった。

そうこうしているうちに赤かった空は次第に薄暗くなり、星明か
りが目立つほど暗くなってきていた。

「……ここで寝よつか。誰かがいたっていう形跡なかったし……大
丈夫でしょ」

やけに独り言が多い気もするが、ここは敢えて無視しておく。

野宿をすると決め込んだファイファイは、そのあたりで見つけた少量
の木の実を食べると、すうと眠りの中へと引き込まれていった。

余程疲れていたのだろう。軽く寝息を立てたかと思うと、ぐっす
りと眠りこんでしまっている。

「ふい。ファイファイ、起きて。ファイファイってば」

「う……ん？」

誰かに呼ばれる声でファイファイは目を覚ます。完全に開ききってい
ない目の先には例の黄色いポケモンがぼんやりとした輪郭で見えた。
空はまだ暗い。月の位置からしてだいたい11時ごろだろうか。

「ユウイ？ ……どしたの？」

「ファイファイ、戻る。椎那も胡睦こむつも心配してる」

「いいよ、もう。僕、疲れちゃった」

ユウイの誘いをやんわりと断り、再び眠りに着こうとするファイフ
イ。それに気付いたユウイは何度も彼の名前を呼ぶが、それきり目
を覚ます気配はなかった。

「ふう……」

熟睡モードに入ってしまったファイフィの顔を見つつ、ヨルノズクがファイフィを追い出すために言ったのであろう言葉を考える。

「ヨルノズク、きつとどこかでセキチクでの事を見ていたんだろうな。

だからファイフィにきつく当たるんだ……」

シルフに出入りしているポケモンたちの全員が全員、悪事を働いていると言っわけでもないのに。

「理解する気 が起こるわけないか。

あんなことがあったんだから、仕方ないんだろうけど」

「“あんなこと” って？」

「！？ ファイフィ……寝てたんじゃ……」

突如として独り言に乱入してきた彼を見つめるユウイ。それは紛れもなく先程まで熟睡していたはずのファイフィである。

「僕、眠り浅いんだ」

「いや、熟睡してただろ……」

ファイフィの意見を即座に否定するユウイ。ある意味、お馴染みの光景だと思う。

ユウイがフツと笑みをこぼせば、ファイフィはクスクスと笑う。そんな穏やかな光景だ。

「リザードにね、この前言われたんだ。

僕のいる組織とヨルノズクとの間にいろいろあるんだって」

下を向き、土を前足でいじりながら抱えていた悩みをポツポツと話し始めた。

「船の中にいる時もその事考えてたんだ、ときどきだけど。」

それに、僕……ヨルノズクに知られちゃったみたい。ユウイ達が言う“例の組織”の一員だって。

もう絶対仲良くなんてしてくれないよ……」

下を向いているため表情は分からない。しかし、悲しく苦しそうな声でそう話すフィフィを見てユウイはまたため息をつく。やっぱり、と。

「僕、どうしたらいい？」

視線がユウイへと向けられる。

ユウイと目が合うと、フィフィはまっすぐに見つめ、悲しそうに言葉を紡ぐ。

「もう椎那たちと一緒にいられないよ。」

一緒に、旅が出来ないよ　っ！！」

今にも涙が落ちてしまいそうな目のまま、ユウイをまっすぐに見つめる。

ユウイが何も返答できずにいると、再び下を向いてしまい、同じ言葉を繰り返す。　もう少し一緒にいたいよ、と。

「フィフィ……」

何度も何度も同じ言葉を言い続けるフィフィにユウイはそつと寄り添った。

妹であるミウが泣いているときにしているように。

「……ユウイ。どうして組織の内部に詳しいの？」

トゲチック達がそこまで話すとは思えないんだけど……」

ある程度気持ちは落ち着いたフィフィは、出会った当初から気になっていたことをストレートに尋ねた。

これで答えてくれなかったら、もう一度さっきと同じ言葉を繰り返そう、そう小悪魔的な考えを持ちながら。

「うーん……」

ユウイは隣にいる茶色い小悪魔 もといフィフィを観察しながら返答するべき言葉を考えている。

答えなかつたらややこしい事になりそうだな、と密かに思いながら。結果的にそのカンは当たっているのだが。

「ねえ、いいでしょ？ 教えてよ、ユウイ」

隣から返事を催促する声がかかる。普段よりちよっぴり高い、子どもらしい声で。

「　　いいよ。話すよ、理由」

「あと、ヨルノズクとカメールに関することも教えてね」

突然の追加メニューに驚き横を振り向くと、満面こあくまの笑顔で笑って

いるフィフィと目が合う。

言葉では言い表せないような変な重圧に苦しんだ末、その疑問にも答えると約束してしまったのである。

「それで、何で詳しいの？」

先ほどとあまり変わらない笑みを浮かべて、質問の答えを要求するフィフィ。対するユウイはどこから話せばよいのか分からず、「何が知りたいのか」と逆に質問を返していた。

「何って言われても……」

紺色に染まった空を見上げ、自分がおかしいと思った場面を必死に思い出すフィフィ。

何かを思い出したのか「そうだ！」と声を上げる。

「コムギの事！」

「こ、コムギ？」

突然イトコの名前を出され、首をかしげるユウイ。それを見たフィフィはさらに場面状況を追加していく。

「船の中のことだよ。コムギかばってた。

コムギだけじゃないね。僕とか、オオタチやトゲチックとかかばってくれる。

あれは何で？」

ユウイも思い出したのか、ああと小さく声を上げる。

「“何で”って言われてもねえ……」
「話してくれるよね？」

茶色い瞳をキラキラと輝かせながら 某CMで有名だったあの小型犬かのように 次の言葉を待つフィフィ。勿論、わざとである。

そんなフィフィの期待を裏切るわけにもいかず、無理やり理由を考えるユウイ。ユウイからすれば、かばうのはとっさの事なので理由がないことの方が多いのだが。

「大切な友達だし……。
そういうヤツらをちゃんとした理由もなく悪く言われるの、好きじゃないから」

もっともらしい事を理由として述べるユウイ。

小声で「そこまで考えたことないけど」と付け足すがフィフィの耳には届かなかつたらしい。

「トモダチ……かあ。いいなあ」

一方のフィフィは自分の友達であるワニノコを思い浮かべていた。1年前に偶然出会い、それ以来親友となったワニノコを。旅を始めてから一緒にいることが一番多い気もする。

「他には？」

まだあるだろう、と言う顔でフィフィを見るユウイ。
フィフィはもちろん！ という表情で次なる質問をぶつけた。

「えっと、コムギが僕のいる組織にいたこと、知っていたの？」

コウイは深く考えずに肯定の返事をする。それをきいたフィフィが過剰に反応するとは思わずに。

「し、知っていてやめさせようとか思わなかったの!？」

ポカンとしていたフィフィの表情に焦りがみえた。自分なら絶対引き離すとも言うように。

「思わなかったわけじゃないけど。そのとき、すでにチックとかタオとかが組織内にいたからコムギの事、頼んだんだよ。

無茶なこととかケガとかはさせないで、って」

“心配”という言葉を感じさせない、逆に2匹を信頼しているということを隠すこともせず堂々と述べる。

「だからさあ……どうしてそこまで仲良いの？」

「“どうして”って言われても……」

「リザードに聞いたよ。」

ヨルノズク、カメールと一緒にいるときに僕のところの組織に襲われたんでしょ？

だから僕とかトゲチックとかオオタチの事、嫌っているんでしょ」

「“いろいろ”の内容まで話したのか、あいつ」

苦虫を噛み潰したかのような嫌な顔をする。

そして本日何回目か分からないが、今日の中で一番深いだろうと思われるため息をつく。

「……あれ、そうなの？」
「え？」

純粹無垢に首を傾げるフィフィ。そんなフィフィを不可解な表情で見つめるユウイ。

フィフィの次の言葉には想像を絶するものがあつた。

「僕、冗談半分で言ったんだけど……。
何て言うんだろ？」 『鎌を掛けた』というか、なんとというか」

前足の片方を口元に当て、ぴったりな言葉を探すフィフィ。

そんな彼のそばで未だにピンと来ていないユウイ。ただ、嵌められたということだけは理解したらしく、口の端がわずかに痙攣けいれんを起こしていた。

「……ってことはさ、リザードは何もしゃべっていないと」
「うん、未遂だよ」

鎌を掛けられたことで少しプチッと来たのか、フィフィの肩を軽くはたいていた。はたかれた方はと言うと、無邪気に笑っている。

そしてそれは、組織内にいる時には決して見せない表情モウであつた。

「フィフィ、ヨシノに行く。ヨルノズクの事は無視しておいていい

から」

「え〜……。ユウイ、まだ話してくれてないよ、ヨルノズク達の事」
話をそらすことが出来たと思っていたらしいユウイは、ファイフィの不満そうなその一言で目をそらし、誰にも 自分にさえも聞かえないように軽く舌打ちをしていた。

その時の表情はいつもの澄まし顔と比べ、いくらかかけ離れていたのだとか。

「それで、知ってどうするの？」

「うーん……」

普段の表情に戻ったユウイは軽く疑問に思ったことを尋ねる。

しかし、それを知りたいと思った本人も何故だか分からない様子である。

「それを種にヨルノズクを追いこむと言うのなら話さないけど」

「そんなことしないよ！」

ただ、ただ知っておきたいだけなんだ。過去に何があったのかを……。

それで僕自身の身の振り方を決める」

まっすぐな瞳で悪用なんかしないと訴えるファイフィ。

ユウイ自身、同年代の他のポケモンたちに比べいくらか精神年齢は高いのだが、それはファイフィも同じらしい。

彼と同年であるワニノコだと台本を見ないと言えないような台詞を、ファイフィは口について自然と出てくるのだから。

「分かったよ」

フィフィの熱意に根負けしたのか、初めに交わした約束を果たすためか、それともその両方かは分からないが、あの2匹の過去に起こった出来事を目の前に佇んでいる4つ下のイーブイに話すことを決心したのである。

因みにその頃のリザードはというと、未だ風邪で寝込んでいる主人である賢司のそばで幾度かくしゃみをしていただとか。当の本人は賢司の風邪がうつったんじゃない、と気に病んでいたらしい。

「確かあれは僕らが小4のころかな」

「え、じゃあ2年前なの？」

フィフィの質問に静かにうなづく。

「ちょうど、裕弥 椎那と胡睦の兄なんだけど、その人がヨルノズクを含めた他のパートナー達と一緒にカントーのどこかの林で修行していたらしいんだよね」

「そのユウヤって人、何で修行してたの？」

「もう一度カントーリーグに出て今度は優勝する、という目標が彼にはあったからね」

懐かしそうに笑うユウイ。続けるよ、と一言言っと、待っての聲がかかる。

「“もう一度”ってことは一度出てたの、リーグに……」

「そ。小3の3月だったかな。」

次に開かれるカントーリーグが次の年の3月だったからそれに間に

合わせるつもりだったんだ。……十分間に合うと思うんだけどね」

へえ、と相槌を打つと再び質問。

「2回も同じリーグに出ているの？」

「別にダメという決まりはないみたいだよ、優勝者以外は。」

優勝者は数年ほど間を開けないと出られないみたいだけどね」

要するに、優勝者のみ連続出場は禁止と言うことらしい。

続けてもいい？ と尋ねると、今度はOKの返事。ユウイは話を再び始める。

「ある日、ヨルノズクはたまたまその場に居合わせたカメールを連れて裕弥のもとを離れたみたいなんだ。カメールとふたりだけで何か話をしていたらしいんだけど……」

もともと友好的じゃないからなあ、と呟くと誰の事かを安易に推測したファイファイは賛同するように苦笑した。

「ちょっと口論になったらしくって　まあお察しの通り、ヨルノズクの一方的な、ね」

ユウイの付け足しに今度は声を立ててクスクスと笑う。

それと同時に、その頃からそうだったのかと驚き、いつからそんなのだろうと不思議に思っていた。

「それでまあ、うん。その口論が聞こえたんだろうね。」

誰かが近づいてきたらしいんだ。トレーナーだったみたい　そちらの組織の」

意味ありげに目配せするユウイに、ああ、と先が読めたかのような返事を返すフィフィ。

「イライラしていたらしく、気を落ち着かせるために林の中にいたようなんだけどね」

「その邪魔をヨルノズクがしたっていうこと、だよな？」

うん、と首を縦に振る。

「邪魔された側はでんきタイプを出して エレブーらしいんだけど、トレーナーが“かみなり”を命令したらしく、それは避ける暇もなかったふたりに命中した。

なんとかその場から逃げて裕弥のもとまで戻ったらしいけど、その後も電気技を何度か受けたらしくってさ……。2、3日で治るようなケガではなかったらしい」

「……ふたりとも電気苦手だもんね」

苦手な技でなおかつ強力な技を連続で受けたらどうなるか。まれではあるが大怪我で済まないこともある。 苦手な技だけでも限らないが。

しかし、理不尽と言えば理不尽かもしれないヨルノズクの行動。突如として襲ってきたその者だけを拒めば済みそうなものだが、その者がいる組織に関係するもの一切を拒んでいるという。

こんな言葉が諺ことわざにある。『坊主憎けりや袈裟けそまで憎い』と。まさにそのような状態だろう。

だが、影で暗躍している悪の組織が自身に近づくの拒むのは道理ともいえる。

「でも、それってさ。それって……なんか変だよな。僕、絶対そんなことしないのに」

「……でもね、いきなり襲撃されたわけだし　トラウマになっているんだよね、ヨルノズクは。」

だから、組織の事に敏感。それ以前から敏感だったんだけど、それまでよりもずっと敏感になった」

悲しいのか驚いているのか、双方が入り混じった表情をフィフィは醸し出す。そんなフィフィを物悲しそうに見つめるユウイ。

「ホント、フィフィが悪いわけじゃないのにね」

「トゲチックだって　トゲチック達だって、僕らを助けてくれるのに」

「　悪い組織だと知っているヒトは、それに関係する全ての人やポケモンを拒んでる。ヨルノズクに限らず、ね。」

中にはね、助けようとして手をさしのばしたのに拒まれて、助けられなかったこともあるみたいだよ」

自分の所属する組織が憎らしくて仕方がないフィフィ。ギユツと下くちびると噛んだまま、うつむいてしまう。

「フィフィも初め、僕の事拒んでいたでしょ？」

自分に近づく組織以外のヒトが、自分を受け入れてくれるなんて思っていないかったから」

それを聞いておおよそ1週間前のユウイとの出会いを思い出す（意外とそんなに時間は経っていないのだ）。

“ 助けたなんて一言も言ってない ”

“結構な量の赤い液体を”

“あなたが来なければ何かあったかもしれないよ”

今更ながらさうとう無茶苦茶なことを言っていたものだと感じる。自分の身を守るためだけとはいえ、こんなことを言われれば誰しもが引く。自分で自分に言ったとしても。

そして極め付けが。

“Rという頭文字の付く組織に属し、なおかつそこに所属するポケモンたちのまとめ役でもある”

どこの小学生!? どの子どもがそんなこと言うんだよ!!
っていうか、最初のっけからおかしすぎるだろ!?

いや、確かに頭文字は“R”だけどさ、その表現は怖いっての!!

思い出すたびに顔が火照っていくのを感じるフィフィ。

ユウイはと言うと 声押し殺して笑っている。

「あ、あのさあのさ。あの……」

「なにかな?」

「ぼ、僕がああいうこと言った時、どう感じた?」

頬は赤く染まったままだが、真剣な目で尋ねてくる。フィフィには悪いが、その表情さえ笑いの引き金になってしまっているのが事実。そして、とうとう声を押し殺すことが難しくなった。

「ユウイってば! そんなに笑わないでよ!!」

「じゅめん、待って」

「ゆ、ユウイ~~~~ツ!!」

まあ、ユウイのその行動が答えと言えは答えである。なんせ。

「ごめん。ずっと心の中で笑ってた」

恥ずかしくて意識が飛んでしまいそうなフィフィに追い打ちをかける。

「ミウに名前聞いたときになんとか知っている子だと思っていたし、」

なおも追い打ちをかける。フィフィがヤメテ、と言っているのを気づかないふりをして。

「小2であそこまで言うもんなあ。ある意味、感心したし、」

そして最後の言葉。

「よほど、組織にいることにコンプレックス抱いてるんだなあ。楽しませてもらった」

フィフィは完全に耳を塞いでおり、わけのわからない言葉をつぶやいて聞くまいとしていた。そして追い打ちが終わったのを確認すると、一言こつ言った。

「ユウイってさ、けっこ意地悪？」

「今頃気づいた？」

ユウイがどういう表情をして言ったのかはご想像にお任せする。

あと、ユウイはそういうヤツではない、きっと。多少、笑い上戸ではあるが。

その後、日が昇るまでゆっくり休んだという事である。

26話　フィフィの苦悩（後書き）

あの、ユウイスじゃないんで、たぶん。……たぶん。
……私が思いたくないだけかな。

27話 ヨシノシティの夜

ユウイがファイファイを探しているころ、またファイファイが疲れて眠ってしまったところと同時刻のヨシノシティ。

空には煌々と光る、弓なりの月が出ていた。

町にある家々からはオレンジや乳白色などの暖かい色をした光が窓から漏れており、その中でも一段と大きな白い明かりを放つ建物が町の中央にあった。

ポケモンセンターである。その宿泊棟の一室に椎那たちはいた。

「ユウイ、まだ帰ってこないね」

「ヨルノズクのせいだぞ。ファイファイに変なこと言うから」

開けた窓から夜の世界を眺めながらぼやく椎那。その隣でワニノコがヨルノズクをキツと睨んでいた。

「なんでだよ。少しからかっただけだぞ」

「ヨルノズクの少しは少しじゃない！」

ファイファイ、戻ってこなかったらどうするんだよ!!」

「知るかよ。」

放っておけばいいだけの話だろ、もともと野生なんだし」

睨み合っているワニノコとヨルノズクの間火花がバチバチと散り出す。

それから数秒のちに激しい言い合いが勃発した。

「そんなのだから友達できないんだ!!」

「いきなり意味わかんねえこというな！
ていうか、友達ぐらいいるっての！！」

低次元の言い合いを繰り返すワニノコとヨルノズク。

そんな2匹を横目に、椎那は自分と同じように窓の外を見ていた
カメールに話しかける。

「ユウイ、戻ってくるかな」

「大丈夫だよ。」

戻るって言ったのなら絶対戻ってくるよ、ユウイは

「そうかな……」

不安そうにつぶやく椎那にカメールはそうだよ、と力強く言い切
った。

そして部屋にかけられている時計で現在時刻を確かめると、まだ
寝そうにない椎那に言葉をかける。

「戻ってきたら起こすから、寝ちやいなよ。」

ミウ達も、もう寝てるしさ」

後ろを振り返り、ベッドの上ですやすやと眠るミウとトゲピーに
視線を落とす。

それはもう、これでもか！ と言っぐくらい幸せそうに眠っていた。

「そつする……。おやすみ、カメール」

「おやすみ、椎那」

椎那がもぞもぞとベッドの中に入り浅い眠りに着いたころ、姉で
ある胡睦が部屋に戻ってきた。

「どう？ 道分かった？」

カメールの問いにフルフルと左右に首を振る。

眠そうに欠伸をひとつすると、左手に持っていた地図を目の前にいたカメールの手に押し付けた。

「もう眠いから寝る、おやすみ」

「……うん、おやすみ」

カメールは胡睦から無理やり手渡された地図を片手にため息をつく。

次に目指す町は“キキョウシティ”と言う名前らしいのだが、進むべき道が分からない。

地理に強いユウイは現在いないし、ヨルノズクは非協力的。数年前までジョウトに住んでいたというワニノコモヨシノシティからキキョウシティまでの道筋は知らないらしく、申し訳なさそうにごめんと謝られていた。

そのため、胡睦が地図を片手にジョーイさんに道を尋ねに行ったのだが、その問題が解決することはなかった。

「どうしようかなあ」

未だにワーワーと騒いでいるヨルノズクとワニノコに視線を向けるが、双方ともそれに気づく気配はない。

浅くため息をつき、再び窓の外へと視線が戻る。

「トゲチックとかオオタチが先導してくれたらなあ」

「オレたちが先導したら妹たちに気づかれるだろ……」

「それもそうか……って、え!？」

いきなり入った相の手に大げさに反応するカメール。
声は開けていた窓の外から聞こえたらしく、顔を外に突き出して
辺りを見回す。

「ど、どこにいるの!？」

「下見ろ、下。オレらの背丈からして左右にいるわけがないだろ」
「あ……」

忙しなく左右をキョロキョロと見渡していたカメール。
助言通りにおとなしく下方を見ると、いた。例の白いのと薄茶色
いのが。

「よっ」

そう言っつて片手を上げるのは薄茶色のオオタチ。
白いトゲチックはその隣で軽く腕組みして、こちらを見上げてい
た。 なんかカッコいい。

「数日ぶりだな」

「そうだね。どうしたの、今日は」

何の気兼ねなく話せる友人に再び出会った喜びで会話が弾む。

「たまたまこの辺をうろついていたんだよ」

「そうそう。」

途中の林でスパアーに追いかけられている阿呆を見たからさ、この
町に寄ったわけ」

ヨルノズクがいると思われる部屋の中を安易に覗くわけにもいかず、部屋の中から聞こえてくる音だけで誰がいるのか判断しようとするトゲチック。

聞こえてくる音の中に阿呆ファイの音が含まれていないのを確認すると、ファイは？ と尋ねてきた。

「戻ってないんだ。ユウイが探しに行っているんだけど……」
「……何かあったのか？」

声を潜めるオオタチ。その目には心配の色が映し出されていた。

「うん。実はさ」

今日の夕方にあつたことを目の前にいる2匹に大まかに伝える。話し手のカメル彼自身、椎那や胡睦から伝え聞いた内容のため、いろいろと不明な点も多いのだが。

「なるほどね」

「セキチクにいた時に見られた、ってか」

真剣に心配する様子もなく、ただ単に話を聞きそれに対する意見を述べるだけという感じの2匹。

自分たちの仲間がちょっととしたイジメに合っているというのに、ちょっとドライすぎやしないか。

「ファイファイが心配じゃないの？」

「なんなら声聞いてみる？」

そう言ってオオタチが差し出したのはポケギアに似た小さな薄茶

色の四角い物体。首にかけたり、腕に付けたりするための紐やバンドまで付けられていた。

「何それ……？」

「一応、通信機。」

あ、そんな目で見るけど、一応高性能なんだぞ！

あの名高いシルフの試作品だけ」

“シルフの試作品”と聞き、ちよっぴり嫌な顔をするカメール。目で“本当に大丈夫か？”と訴えている。

「シルフカンパニーをバカにすることなかれ。」

会社としては一流だぜ 内部はいろいろ危ないけどな」

「ホウエン随一の会社、デボン・コーポレーションとかとも共同開発も進めているんだよ、表向きは」

「はあ……」

シルフカンパニーの長所をポンポン上げるが、分かったような、分からないような いまいちの表情をするカメール。

「んじゃまあ、試してみる？」

「何を、だ……」

いきなり現れたちよっぴり低い声。その声の主はきつい目でキッとこちらを睨んでいた。

「よお、ヨルノズク。元気？」

「何を試すんだよ？」

とりあえず仲よさそうに声をかけるオオタチだが、いとも簡単に

一蹴されてしまう。

それどころか睨み方が先ほどよりも幾分かきつくなっていた。

「なんだよ、それ」

「これ？ ただの通信機。」

ファイファイにかけてみようかな、と思つてさ」

なあ、とトゲチックと目配せする。

その様子のどこが気に入らなかつたのか分からないが、ヨルノズクはふわりと窓から空に舞い上がると“エアスラッシュ”を2匹に向かつて放つた！

「まもる」

“まもる”……つてオレもしたいけど出来ないっ！

自分の周りを透明なバリアで囲い身を守るトゲチックに対し、オオタチは“でんこうせっか”で“エアスラッシュ”の射的範囲外へと退いた。

「いきなりだなあ」

ヨルノズクの攻撃が終わるとほぼ同時にトゲチックは“まもる”を解く。見れば、不満そうに腕組みまですている。

「あいつもお前も“まもる”かよ！！」

「“あいつ”つてファイファイの事か？

あの子に“まもる”教えたのオレだしさ、そんなオレが使えて当然じゃん」

トゲチックの二つ二つの言葉に怒りを覚えるヨルノズク。

攻撃しようとして再び青い球体状の物を翼の先端で作り出すとする。

「 シャドーボール」！」

小さな黒い影の球をいくつか地面へと投げつけたオオタチ。

その風圧で土が舞い上がり、砂での目くらましが簡単に出来る。

「……まさかそのやり方をあいつに教えたの、お前か？」

“ あいつ ” がファイファイだって言うんなら正解だけど、何か？」

まさか同じやられ方で日に2度も砂を吸い込むとは思っていないかったヨルノズク。

怒り心頭と言ったところか。

あふれる怒りに任せ何度何度も“ エアスラッシュ ” をトゲチツクやオオタチにぶつけようとするが、当たらない。

2匹が特別素早いというわけでもないのだが、どういいうわけか全く当たらない。

「諦めたら？」

「ファイファイにカスリもしなかったんだったら、オレらにも絶対当たらないって」

「うるさい！！」

軽口を叩きながらも華麗に避け続けるトゲチツクとオオタチのコンビ。

気まぐれに“ まもる ” を使ったり、自分の技と相殺させたりと明らかに楽しんでいる様子もある。

「やめとけって言うのに、まったく」

避けるのに飽きたのか、オオタチがその場で立ち止まる。目の前にはヨルノズクが放った“エアスラッシュ”が迫ってきていた。

「アイアンテール」

向かってくる風の刃をわけもなく相殺する。そして今回はそれだけでは済まさなかった。

「ふいうち”っ!!”」

今まさに“エアスラッシュ”を放とうとしているヨルノズクの後ろに回り込み跳びあがると、長い尻尾で彼自身を叩きつけた。

その衝撃で“エアスラッシュ”は不発となり、ヨルノズクは地面に向かって急降下。要するに落ちているのである。

「……………くそっ!!」

落ちた先の地面の上で悪態をつく。そして悔しそうに2匹を睨むとどこかへ飛び去ってしまった。

「あゝあ、行っちゃった。どうすんだよ、タオ」

「うーんと……………、オレの勝ちと言うことで」

「なんだよ、それ」

イエイ、とVサインを作るオオタチをいつものように呆れた目で見守るトゲチツク。

これでなかなかいいコンビなのがある意味で不思議かもしれない。

「なんかゴメンな。騒がせちゃって」

「ううん、大丈夫だよ。ふたりとも、強いんだね」

「まだまだだよ、オレたちは。もっと強い、いるからな」

トゲチックが謝罪するが、カメールが否定しつつ尊敬のまなざしで彼らを見る。

しかし、今度はオオタチが首を振ってそれを否定した。

カメールはその言葉に驚く。

自分よりも明らかに強いと思われる2匹よりもさらに強い奴ポケモンがいるのか、と。

「ねえ」

蚊帳の外にいたワニノコが彼らに声をかけた。

トゲチックはそれに「何？」と優しげに問いかける。

「あのさ、あのー……」

「どした？」

どもるワニノコにイラつき催促を求めるオオタチ。それでもワニノコはどもるばかりで一向に話が進まない。

オオタチのイライラが最高潮に達しそうになった時、ワニノコはようやく次の言葉を紡ぎ出した。

「セキチクで弟と妹と助けてくれたのって、もしかして……」

「ああ……それは」

「オレ達だな」

「……ヒトの台詞取るなよ!？」

横入りしてきたトゲチツクに不満を漏らすオオタチ。

当の本人は素知らぬ顔でワニノコからのお礼の言葉を受け取っていた。

「ぼく、船の中でそのこと初めて聞いてさ、びっくりしたんだ」

「何に？」

「うーん……。ユウイにふたりみたいな知り合いがいたってことかな」

「オレ達みたいな知り合いってどういう意味で、だよ？」

「え？ えーと……」

ワニノコが話すたびにトゲチツクまたはオオタチが交互に突っ込みを入れている。

彼もそこまで突っ込まれるとは思ってなかったらしく、答えを持ち合わせていなかった。そのため頭をフル回転させ、一生懸命答えを探し出す。

しかし、先程はイライラしながら待っていたオオタチだが、今回はそのような感情を見せず、静かにただ答えが出るのを待っていた。

「……けっこつふざけるタイプの知り合い？」

「ふーん。ふざけ……ふざけるう!？」

「ふざける、なあ」

疑問詞のままのワニノコの答え。

それにオオタチは絶叫し開いた口が塞がらない状態。一方のトゲチツクは苦笑こそしているものの、どこかそれを認めている様子であった。

「カメール　おまえ、何笑ってんの？」

窓の向こうでクスクスと笑い声が聞こえていた。その音源にオオタチは口の端を少しピクつかせ、若干怒りのこもった声を上げる。

「ご、ごめん。そんなつもりじゃ……」

「じゃあ、どんなつもりだったのかなあ？」

「えっと……」

窓枠に手をかけこちらをまつすぐに見つめてくるオオタチ。

そんな彼から目をそらし、必死でトゲチツクに助けを求める視線を向ける。それに気付かないトゲチツクではない。

が・ん・ば・れ。

トゲチツクは口の動きだけでカメールに言葉を伝えた。その意味を明確に理解したカメールは落胆し、がっくりと肩を落とす。

「で？　どういつつもりだったのかなあ？」

「怖いよ、オオタチ」

答えを求めてくるオオタチに苦笑し、その場から逃れようとするカメール。しかし、その魂胆は誰から見ても丸見えな訳で……。

「ユウイが戻ってくるまでに吐かせてやるから覚悟しろ」

「ちょっと、寝させない気!？」

「ばーか。こつちが寝ない気にいるんだよ」

「そ、そんな無茶苦茶な……」

再び肩を落とし落胆するカメール。

そんなカメールにオオタチは自分たちがここにいるもう一つの理由を話し始めた

「あれ、近道知りたくないのか？」

ここからキキヨウまで普通に歩いて3日以上はかかるぜ？

しかもそれを子どものもので、だろ。1週間はかかるんじゃないか？」

具体的な数字を出し、いかに遠いかを伝えるオオタチ。

初めは冗談かと思っていたのだが、彼の隣でしきりにうなずいているトゲチックを見る限り、本当らしい。

「まあ、近道してでも2、3日は優にかかるんだけどな。

その子らを野宿させるわけにはいかないんだろ？」

トゲチックは窓から身を乗り出し、寝ている椎那と胡睦を覗き込む。

カメールもまたふたりの寝顔を確認めると、静かにコクリとうなずいた。

「だったらその子らが反対してでもあの道を通るべきだと思っぞ」

「“抜け穴”のこと？」

「それ以外にあるか？」

オオタチの声にカメールはフルルと首を横に振る。しかし、下をうつむくと、でも……と何かを危惧するように小さな声でつぶやいた。

「でも」、何だよ？

あの子らを危険な目に遭わせるわけにいかないのなら、言うこと聞いたほうがいいぞ？」

彼らなりに心配をしてくれているのはものすごく分かる。分かるのだけど……。

「でも、一応あの子達からしたら“旅”でもあるし“冒険”だもの……」

「だからってわざわざ危険な目に遭わせなくても良いんじゃないか？」

カメールの言う“旅”や“冒険”には確かに危険リスクや事故アクシデントが付き物。しかし、まだ10歳も来ていない幼いふたりにそこまで求めなくてもいいのではないか、と言うのがトゲチックとオオタチの意見のようだ。

「じゃあさ、椎那と胡睦が決めればいいじゃないかな」

対立する2匹と1匹にワニノコが新たな意見を出す。それと同時に6つもの目が同時に自分へと向けられ一瞬たじろいだ。

「危険を承知の上で普通の道を進むのか、それとも比較的安全な“抜け道”を通るのか選んでもらえばいいんじゃないの？」

「話、聞いてた？」

カメールが何か言おうとしたが、トゲチックが割り込み、ワニノコの意見を一蹴する。

「その子らを野宿させるわけにはいかないの。夏でも夜だと風邪とか引きやすいし。仮に引いたとしてどこで診てもらおう？」

それにウツと言葉を詰まらせ、一步後ろへと下がるワニノコ。

「危険だからと言うだけで反対しているわけじゃない。

ケガとか病気とかするのも旅の上では付き物なのも分かってる。

だけどな、まだ自分の事もまともにできない子どもが、自分が病気になった時の対処法を知っているのか、っていう意味で言っているんだよ、オレは」

「チツクはな、この子達だけで旅することに何も言わなかった大人達に疑問を抱いているのさ」

掘り下げられしは心配のたねの中身。

追加されるのはトゲチツクの抱える疑問のたね。

トゲチツクの意見はもっともなもので、ワニノコはそれ以上何も言おうとはしなかった 否、できなかった。

27話 ヨシノシテイの夜（後書き）

オオタチとトゲチックの出現頻度が高くなってきた……。

ヨルノズクはどこへ行ったのやら（苦笑）

28話 "お兄ちゃん" (前書き)

トゲピーに関するちょっとしたお話
そして、まだヤツらが出てきます

28話 "お兄ちゃん" ;

翌朝、早朝。

椎那たちが寝ている部屋の窓を叩く音がした。カメールが起きて外を見ると、昨晚帰ってこなかった例の2匹の姿があった。

「朝帰りですか、旦那様」

「え？」

そこにいるはずのない者の声を聞き、ユウイは疑問の声を上げた。

「フイフイ、お帰り」

「旦那様、遅いお帰りで」

窓から顔を出したのはオオタチとトゲチック。どうやら昨夜のノリで泊まったらしい。

「旦那」

「それ以上言うなら怒るよ」

からかわれることをあまり好まないユウイはピシヤリと言い放ち、その先の言葉を言わせないように仕向ける。

案の定、トゲチックはそれ以上言うことはなく、他の話題に切り替えてきた。

「ユウイ、夜の間どこにいたんだ？」

「29番道路の林だよ」

「ああ。その阿呆がスパアーに追いかけていたところか」

そう言いながらオオタチはフィフィをじろりと見る。
その視線のやり方にフィフィは当然のように違和感を感じる。

「もしかして“阿呆”って……僕の事？」

「お前以外に誰がいる？」

「……見てたの？ 僕がスパアーに追いかけてられているのを」

その問いに神妙に深くうなづくオオタチ。

「しつかりとこの両の目で見させてもらいましたとも。

お前がコクーンの巢に迷い込んでいるのも、な」

「前さえ向いていたらあんな場所に迷い込んでなかったら……」

可哀そうな目でフィフィを見るトゲチック。しかし、口元は笑っている。

「全くだ。助ける気も起きなかったぜ」

「助けてよ!？」

それまでは穏やかだったフィフィがそれには激しく反応し、それに合わせて声も大きくなった。

部屋にいるオオタチは慌てて左右を見るが、今の声でふたりと3匹が起き出す気配はなかった。フウと安堵のため息をつき、そしてフィフィを軽く睨んだ。

「お前な、時間考えろよ。まだ寝てんの、こっちは」

「ごめんなさい……」

トゲチックに怒られ、素直に謝るフィフィ。耳が垂れているのを

見る限り、相当しょげているようだ。

そんなフィィイを見てカメールは「まだ子どもなんだ……」と改めて感じ　　うっかり口に出してしまった。

同じ部屋にいた2匹はその言葉を責めるどころか、共感して頷いていた。

「まだ8歳だぜ、こいつ」

「少し子ども離れた知識は持っているけどな」

……もしかして怪しい薬飲んで背が縮んだ？　とあり得ない話を思い浮かべるカメール。

「一応言って置くけど、どこのアニメの主人公もどきではないからな」

「わ、分かってるよ」

鋭い指摘をしたトゲチックに少しばかりもった返事を返すカメールに4匹はクスクスと笑い声をもらした。

「さてと。寝ているのが起きる前にお暇するかな」

「そうだな」

グーンと背伸びをすると、開けられていた窓から外へと出ようとする。

外の窓際にいたユウイとフィィイは左右に避け、2匹が降りる場所を作った。

「そうそう。この先の道程けっこう長いから、“抜け道”通ることをお勧めしておく」

「あと、ヨルノズクの事なんだけどな……」

外に出たオオタチが顔だけをユウイに向けながら、1日で目指す町に着く方法を教える。

その後、トゲチツクが空に浮かびながら昨夜いなくなったヨルノズクの事を話題に出した。

「ヨルノズクがどうかしたの？」

「昨日の夜、ちょっとケンカふっかけられてさ。」

オレは避けることに徹していたんだけど、タオがなあ」

「タオ？」

もう1匹の友人の名を聞き、軽く首をかしげるユウイ。ケンカをふっかけられたということにはあまり興味がないようで反応を示さない。むしろ、それ自体がいつもの光景なのだろうか。

「ごめん。負かしちまった」

パンと自分の目の前で手を合わせ、目をつむりユウイに謝罪するオオタチ。

「ちょっと避けんの面倒になつてさ、“エアスラッシュ”を相殺させた後、“ふいうち”かけたんだよな」

「そうしたら、ヨルノズク地面に落ちちゃってさ、そのままどこかへ行っちゃったんだよ」

申し訳なさそうに事のあらましを伝えるオオタチに、やれやれという感情を手振りで表現するトゲチツク。

その内容に少しばかり驚くユウイ。

「で、今ヨルノズクはどこに……?」

「それが分かっただら苦労しないさ。」

キキヨウに行っている気もするんだけどなあ、あいつの事だし」

いつもの表情に焦りの色が見えだす。

ユウイとしては今すぐ追いかけていたいところだが、寝ているトレーナーのもとを離れるわけにはいかない。

「そう言うわけで、本当にごめん。」

オレが探してもいいんだけど、見つけると同時に逃げられると思うしさ……無理なんだよな」

「分かった」

オオタチの謝罪を受け取ると、仕方ないなとユウイは軽くため息をついた。

「じゃ、オレらヤマブキに戻るから」

「頻繁に来るだろうけど、気にしなくていいからな」

そうユウイに伝えると、手を振ってどこかへと駆けて行った。

「なんでいたの、あのふたり」

去っていく影を見つめながらボソツとつぶやくフィフィ。

「何でも、道教えに来たんだとか」

「要するに暇だったんだろ」

軽く流すユウイをクスクスと笑うカメール。そんなカメールに顔を向けると「それで？」と何かの続きを求めた。

カメールは何のことか分からず、疑問符を頭の上に浮かべる。

「昨日のあの時間にあの場所を出たんだろ？
何時ぐらいにここへ着いたの？」

記憶が正しければ、あの場所からここまでだと歩きで3時間以上はかかるはず。

大人で3時間なら、子どもが歩いたらそれ以上の時間はかかるだろうと言つのがユウイの質問の意図だ。

「えーと……7時前だったかな」

「……何でそんなに早いんだよ……」

カメールの答えにユウイは疑問を抱くと、答えた主はその疑問に対する答えをいとも簡単に出してくる。

「ほら。椎那も胡睦もウインディ連れてるじゃない？

彼らに乗ってここまで来たんだよ」

「その手があつたか……」

ものすごく単純な答えにユウイは何で思いつかなかったのか、という思いと一緒に苦笑を浮かべていた。

フィフィはというと、いつの間にか部屋の中に入りこんでおり、寝ている5名の寝顔を見ていたのだと言う。

やがて、4名の起床時間となった。残り1名は未だに夢の中である。

「あれ、ユウイいつの間に帰ってたの？」

「お帰りー」

「お帰り、ふたりとも」

「ファイファイもいるー」

各々起きると同時に昨夜帰ってこなかった2匹の姿を見つけ、驚きと喜びの声を上げた。

ワニノコに至っては心配をし過ぎた反動なのか、ファイファイの事をギョウツと抱きしめるほどだ。

「心配したんだからね！」

「うん。ごめんね、ワニノコ」

「もう勝手にどこかに行かないでよ？」

「……それは約束できないや」

何度目かの再会を果たすファイファイとワニノコ。「約束できない」というファイファイに「何で!？」と驚き大声を上げた。

「どうしてさ？ 約束してよ」

ワニノコの願いにフルフルと首を左右に振り否定するファイファイ。

そして「どうしてもできないんだ」と、悲しそうな表情を浮かべる。その表情を間近で見せられたワニノコは何も言い返すことが出来ず、がっくりと肩を落とすその願いを諦めざるを得なくなった。

ワニノコとファイファイが話している間、椎那と胡睦はユウイとカメールの話にじっと耳を傾けていた。時折じゃれてくるミウの相手もしながら。

「と言うわけで、キキヨウシティに行くのにふたつの選択肢があるんだよね」

「うん」

「ひとつは『ウインディに半日近く乗って夜の初めごろに着く』こと。

もうひとつは『“抜け道”を通過して1時間以内に着く』こと。決めるのはふたりだから、ここを出るまでに答え教えてね」

柔らかく優しい口調でふたりにキキヨウシティへの行き方を話すユウイ。話を聞いていた胡睦が不安そうに口を開く。

「あのさ……ウインディに乗って行くとしてもね、道、分からないんだけど……」

昨晚、地図を片手に何の収穫もなしに部屋へと戻ってきた胡睦。気まずそうに不安を明かす。

しかしユウイは心配ないと口に出した。

「僕が知ってる。僕が先導するよ」

「ユウイ、カントーに住んでたのに、道分かるの？」

「少しはね。どちらかと言うとホウエンの方が詳しいけどね」

ふーんと、流しそうになった胡睦。途中で気が付き、驚きの声を上げる。

「ホウエンって、ホウエン地方!？」

お兄ちゃんが去年の今頃ポケモンリーグに出てた場所!？」

胡睦の変わりように少し身を引きつつ、そっだよと答える。

「どっして？」

「どっして知ってるの？」

驚きのあまり気が抜けストンとベッドの上に座り込んでしまった胡睦の代わりに椎那が尋ねてくる。目は呆けてしまった姉へと向けられている。

「僕、ハウエンで生まれたから」

それだけ言うと続きはまた今度、と言い残しドアを開け廊下へと出ていってしまった。

「ハウエンかぁ……。どんな所なんだろう」

「行ってみたいよね。僕もポケモンリーグに出てみたい！」

「出場者には年齢制限があつたはずだよ」

カメールが意気込む椎那を阻止するためにルールをひとつ思いだす。

しかし、それはふたりからの反発を食らう種となってしまうた。

「でもお兄ちゃん、9歳のときにカントーリーグに出てたよ」

「そっだよ。9歳の春にゼニガメもらってその年の夏の大会に出てたはずだよ」

「3月の大会にも出てた！ だから僕も出れるもん！！」

「どう考えたって出られないだろ」

話の途中でワニノコが水を差す。

現在椎那は7歳。兄が出たのが9歳と言うのなら少なくともあと

2年は待たないといけないはずだ。

「年齢、サギっちゃうからいいもん」

何気にすごい言葉が椎那の口から飛び出した。その言葉に啞然とするカメールとワニノコ。

そんなカメールを横からツンツンと控えめにつつつく者がいる。

「どうしたの、ミウ？」

「裕弥^{ゆつや}くん、何回大会でてるの？」

もっともな疑問だと思う。

ワニノコもそれに気づき、何回？ とカメールに尋ね始めた。

「4回……。」

カントーリーグで2回、ジョウトリーグ、ホウエンリーグでそれぞれ1回……だったかな」

「どうしてカントーリーグ、2回も出てるの？」

説明するのが面倒になったのか、はたまた理由を知らないのかミウから視線をそらすカメール。

しかしミウはカメールの視線の前に立ちはだかる。

そしてまたカメールが視線をそらす、ミウが立ちはだかる……。その繰り返しだ。

「もう！ 教えてよ！！」

待ちきれなくなったミウが、大声で叫ぶ。その声がかきつけとなり、寝ていたトゲピーがようやく目を覚ました。

そんなトゲピーに「おはよ！」と明るく声をかけたミウだが、聞こえたのかどうかはまいち分からなかった。

「お兄ちゃんが……、近くにいた気がする……」

寝起き直後特有の寝ぼけ眼でどこかを見ながら、ぼんやりとした口調でぼつりとつぶやいた。

フィフィやカメル、ワニノコはトゲピーの発言に驚きはするものの、それを表情として表すことはなかった。もっともワニノコは感情をあまり表に出さないのだが、フィフィのときは特別らしい。

「気のせいだよ。ピカ、出してないもん」

胡睦はようやく眠りから覚めたトゲピーを抱き上げながら優しく話しかけた。しかしトゲピーはゆっくりと首を横に振りそれを否定した。

「お兄ちゃんじゃない……」

一瞬、トゲピーの言っている意味が理解できず固まる胡睦。頭の上には疑問符が大量に浮かんでいるように見えた。

「お兄ちゃん”ってピカじゃないの？」

そんな姉に抱かれているトゲピーに椎那は話しかける。トゲピーは今度も首を振り否定する。

つまり、寝起き直後に言った“お兄ちゃん”は“お兄ちゃん”と呼び慕うイトコのピカではない、ということらしい。

じゃあ、誰なの！？　と言うことで椎那の頭にも疑問符が浮かび上がってきた。

「トゲピー、名前で言ってあげて」

いつの間にか戻ってきていたらしいユウイが会話に割り込む。トゲピーの言う“お兄ちゃん”の正体は知っているものの、自分の口から明かすつもりはないらしい。

それは昨晚、トゲチックの姿を見ているカメールやファイファイ、ワニノコも同じなようだ。

ユウイに兄の名を言うよう促されはしたものの、何も話そうとしない。ギョツと真一文字に結ばれた口元を見ると、言ってしまうと泣いてしまう……そんなトゲピーの感情が伝わってくるようだ。

そんな妹分の感情を察したのか、胡睦のリユックから一筋の赤い光が漏れだす。その光は徐々にピカチュウの形をかたどっていった。

赤色の光が収まり、黄色い体で頬にある赤い電気袋が特徴的な電気ポケモンが目をつむった状態で立っていた。そして何かを振り払うようにフルフルと体を振るわせるとしっかりと目を開けた。そして。

「…………トゲチックだよ」

トゲピーが決して言おうとしなかった名を椎那と胡睦に伝える。

「トゲチック…………」

ふたりの声が綺麗に八モる。

「いったいどんなポケモンなんだろう……。想像するが、思いつかない。」

うんうんと頭を悩ますふたりの正面でフィフィは何かを描き始める。その前足には先日、船室からかっぱらってきたメモ用紙とボールペンが握られていた。

「これがトゲチック」

5分ほどしてフィフィに見せられた紙の上には、首がすらりと伸び、背中には小さな羽根が付いた天使のようなポケモンが描かれていた。

「かわいいー!!」

そう黄色い声を上げるのはやはり胡睦。女の子らしく、可愛いポケモンが大好きなようだ。

一方の椎那はジィツとその絵に見入っていた。目がキラキラしてるところを見ると、絵ではあるが初めて見るポケモンに心動かされているようだ。

「相変わらず上手いなあ……」

ワニノコはその絵を見ながら感心したようにつぶやく。もしかしたら、手描きのポケモン図鑑が出来るのではないかと、密かに思っていたりもする。

「全部のポケモン描けたりするの?」

ワニノコの思いを代弁するかのようミウがフィフィに向かつて興味津々に問いかける。その目はいつかと同じかそれ以上にキラキラと光り輝いていたという。

フィフィはそんなミウの期待に応えるべく、そしてなるべく失望させないような返事を返す。

「モデル……がいたら描けるかもしれないね」と。

その後しばらく、フィフィの絵の話で盛り上がっていた。

しかしトゲピーは話に入ろうとはせず、眠っているときに感じた正真正銘の兄の気配に浸っていた。そして、なぜ自分を捨てたのかと再び頭を悩ましていた。

部屋の時計が10時を回りそうになるころ、椎那たちはようやくキキョウシティに向けて旅立った。ウインディと共に。

28話 "お兄ちゃん" (後書き)

更新ペース上げようかな……。

今年中、せめて今年度中にジョウト回れるように……。

29話 到着とマダツボミのとう

夜の8時が近くなり、暗くなってしまったキキョウシティの和風な街並みの中に大小3つの影がやってきた。

2匹は大型でオレンジ色のポケモン　ポケモンにはトレーナーが乗っていた　と、中型で黄色いポケモンが1匹の合計3匹……と人間ふたり。

大型のポケモンはウインディで、　の兄妹である。

パツと見、区別はつきにくいだが、妹の方は兄よりいくらか背が低く、表情も柔らかい。それに対し兄の表情は凜々しく、妹と比べれば体格もしつかりとしているようだ。

黄色い中型のポケモンはサンダース。

恐らくウインディ2匹と共にヨシノシティから走ってきたのだろうが、そこまで息切れしている様子はない。体格差も2倍近くあるのだが、体力はウインディ以上といったところだろうか。

3匹のポケモンは町の中心地付近まで来ると足を止めた。ウインディは足をかがめると背中からふたりの子どもを降ろした。兄のウインディからは男の子と2匹のイーブイ　椎那とミウとフィフィが、妹ウインディからは女の子　胡睦こむつとトゲピーが降り立った。

ふたりはここまですつと走ってきてくれたウインディ2匹に労いの声をかけるとモンスターボールへと戻した。

そして、後ろですつと待っていてくれたサンダース　ユウイへと向き直り、「行こ！」と無邪気に声をかけた。

「じゃあ、行こうか。ポケモンセンターまで」

ユウイが先導切つて町を歩いて行く。その後ろをトコトコとふたりと3匹は付いて行く。

数分歩くと、昔風の街並みに不似合いな白い蛍光灯の明かりが見えてきた。表の軒下には赤い十字のマーク、屋根も赤く大きめの建物。ポケモンセンターである。

入口の自動ドアが開くと、受付カウンターにいるジョーイが「こんばんは」と微笑みながら迎えてくれた。

胡睦はその前まで行くと、トレーナーカードを見せ、そして「泊めてください」と一言。

「あの、もうひとつの証明書はありますか？」

ジョーイは困ったように微笑みながらそう、胡睦に問いかけた。

「え？ えっとお……」

「はい！」

意味が分からず、あたふたする胡睦の横から椎那が皮のきんちやく袋を差し出す。

ジョーイはそれを受け取ると、中に入っていた灰色で円形のモノ椎那がニビジムで勝ち取ったグレーバッジを取り出した。そして、それが本物だと確認すると再びきんちやく袋の中に入れ、椎那へと手渡した。

「確認しました。では、これが部屋の鍵です。失くさないようにね」

そう言つて部屋のカードキーを胡睦に手渡した。胡睦は満足そうに微笑むとお礼を言つて、カードキーに書かれた番号の部屋へと向かった。

「えー。部屋取るのにジムバッジいるの〜?」

「いるよ!」

何のためにぼくがニビジムに行ったと思ってるの!?!」

ここは受付からいくら離れた宿泊棟の一番奥の部屋。手前の部屋はほとんど埋まっているらしく、通るたびにポケモンの鳴き声や人の声が聞こえてきた。

「だ、だってトレーナーカードのためだけじゃなかったの……?」

弟の剣幕に少々たじろぐ胡睦。しかしその言葉は火に油を注ぐ結果となった。

「あーのーねー! ケンくん言ってたでしょ!?!」

ぼくらの場合、トレーナーカードとジムバッジがないとトレーナーだって認めてくれないって!?!」

「そ、そうだったっけ?」

イトコである賢司の話を半分しか聞いていなかったらしく、あたふたする胡睦。そんな胡睦を見て何か言ってやろうと息を吸い込む椎那。

「もう、やめたら?」

呆れたように仲裁に入るフィフィ。ユウイもそれに同意らしく、苦笑しながら頷いていた。

「それよりも明日どこに行くか考えようよ。
せつかくキキヨウシティに来たのに」

ワクワクとした面持ちで提案するフィフィ。手にはどこかで手に入れたらしい町案内の地図を持っていた。

「何それ……」

「パンフだよ、パンフレット。」

ポケモンセンターの入口にあったよ」

フィフィの真上からそれを覗きこむ胡睦。ポケモンセンターの上側にある五重の塔のような建物に目が行った。

「これ、何？」

「それは“マダツボミのとう”。
説明によるとね、30mもの高さのマダツボミが塔の柱になったんだって」

漢字だらけの文章を何食わぬ顔でスラスラと読むフィフィに劣等感を抱く胡睦。

フィフィって本当にあたしと同年なの？ と自分は読めない文章を見ながら思っていた。

「あ。地元のトレーナーたちにはちょうどいい修行の場でもあるんだってさ」

「しゅぎょー？ 誰がするのよ」

迷惑そうな目をフィフィに向ける胡睦。その声にもそれもそうか、と思うと別の文章へと目を走らせる。

「へえ。この町にはジムもあるんだ……」

『ひこうタイプ使いのハヤト』、かあ」

「行かないからね」

ファイに何か言われる前に先に根っこを切る！

そんな姉を苦笑しながら見つめる椎那は密かに「もう一度ジム戦、したいなあ」などと思っていたのである。

「ねえ、“マダツボミのとう”に行かない？」

「それより、ヨルノズク探さなくて大丈夫なの？」

ワクワクした表情で姉に意見を求める椎那だが、寝ぼけ眼のミウにそれを遮られる。

今朝からヨルノズクがいないのは知っていたのだが、そこまで心配していないというのが現在の椎那。

「大丈夫だよ。どこかにいるから」

「それはいくらなんでも見放し過ぎなんじゃ……」

ヨルノズクのこととは好きじゃないけど、さすがにそれはどうだろう。本音を暴露する椎那にファイは苦笑いが込み上げる。

「たぶんこの町にいるよ。」

いなければ、しぜんこうえんにいるだろうし」

と、ユウイ。

マダツボミのとうに行くついでにこの辺りを散策すれば見つかるだろう、と言っているようだ。

「じゃ、明日はマダツボミのとうに行こうね」

そう確認取るとベッドの中に入り、さっさと眠ってしまった椎那。
そんな弟を起こすわけにもいかず、まあいっかとおつぶやくと自分
もベッドに入り眠ってしまう。

ふたりが眠ってしまったあと、ユウイは椎那の、フィフィは胡睦
のベッドの隣で横になり眠った。

次の日。

空は雲ひとつない晴天となった。

椎那たちはキキョウシティの街並みを楽しみながら“マダツボミ
のとう”目指してテクテクと話しながら歩いていった。

「えー。じゃあフィフィって甘いのが嫌いなんだ」

「そうなの！」

モモン味のパン食べて、すっごく嫌そうな顔してたもん！」

胡睦とそう話すミウの顔はいつも以上に楽しそうだった。

「それ以上言わないでよ、ミウ」

顔を少々赤らめてミウの暴走を止めようとするフィフィ。しかし、
ミウは全く気にも留めない様子でその時の状況を細かく伝えていく。
そして何を思ったのか、フィフィに同意を求めてきた。

「あーのーねー！」

“言わないで”って言ったじゃん、僕！

何、普通に話してるんだよ！」

フィフィが怒っているのにも関わらず、ミウはキャッキヤと楽しそうに笑っていた。

それが癪に障ったフィフィは、仕返しとばかりにミウが隠していたことを暴露する。

「ミウこそ、よくトゲピーと一緒に森の外に出てたんでしょ？突風にさらわれたあの日が初めてって言うわけでもなかったみたいだし？」

「ふい、フィフィ　！　それだけは言わないで！！」
「へえ？」

フィフィのそれに反応したのはミウだけではなく、ユウイもであった。

数週間前に聞けなかったことを今ようやく聞ける……。そういう思いも少なからずあるが、一度ではないと言っのを聞いて少々怒っているようだ。

「ち、違うもん！
トゲピーがあたしを連れて行ったんだもん！！」

必死で言い訳をするが　。

「あたしがミウを誘ったの、あの日だけだよ？」

現状を理解していないトゲピーが真実を口にする。

「ミウ？」

兄の放つ静かな声にドキリとする。ゆっくり兄の顔を見ると、明らかに怒っている顔が目についた。

「ごめんなさいッ!!」

そう叫ぶと、マダツボミのとうに向かって走って行ってしまった。妹の行く先を見ながらハアとため息をつくユウイ。

そんな出来事に苦笑しながら椎那はあるべきことをユウイに伝える。

「でも、でも。」

ミウとトゲピーがぼくらの家に来なかったら、ぼく達、今こうしていないんだからいいじゃん」

椎那のそれにフルフルと首を振るユウイ。

どうして? と胡睦が尋ねる。

「2日に台風が来なければ、その日に僕とカメールとで椎那達の家に行く予定だったんだ」

台風が来てしまったから次の日にしようと思っていたんだけど…

そうつぶやくユウイ。　　ということとは。

「じゃ、じゃあ、あたし達と旅してくれる予定だったの!？」

「そんなところ。」

どう過ごしているのか気になっていたし……おまけにヨルノズクは

こっちにいたし」

ユウイは何のこともないという様に言い、そのまま歩き始めるが、椎那達からすれば大問題である。

付いて来ていないふたりに気づき、後ろを振り向くと先ほどの場所ので立ち止まったまま、俯いていた。

「どうしたの？」

「だ、だって……」

“だって”？」

椎那が顔を上げるとそこには大粒の涙がたまっていた。

「だって！ みんなに忘れられているかと思つてたんだもん！！

ケンくんも全然来てくれないし、道場の人も来てくれなくなつてたし！

ぼく達のことなんて、どうでもいいんだ、って思つてたんだもん！！」

再び俯く椎那。地面に涙が落ち、土を湿らした。

ユウイはそんな椎那のそばにゆっくりと近づくが、椎那は顔を上げない。

「それなのに……」

涙で震える声をなんとか制御しながら、聞こえるか聞こえないかの音量でしゃくりあげながらユウイに思っていたことを伝える。

「それなのに、ぼくの全然知らない所でそう言う風に考えてくれたヒトがいたなんて……」

そこまで聞けば十分だ……。

ユウイは自分の体を椎那の足へと擦り寄り寄らせる。

椎那は堪え切れず、足下に来た暖かい存在に抱きつき、嗚咽を上げて思いつきり泣いた。

胡睦も抱いているトゲピーに顔を埋めさせると椎那ほどではないが、泣いていた。

やがて、どこからか戻ってきたミウはその様子を見て酷くビツクリしたそうだ。

プライドの高い兄がそういう風にして泣いている相手を慰めるのを初めて目にしたのでから。

椎那と胡睦の涙が乾いたころ、ミウは自分が見てきたことをユウイ達に伝えた。

「閉まってたよ、マダツボミのとう。」

「キュウカンビ？ とか言ってた」

「キュウカンビ……。きゅうかんび……。休館日？」

「休館日！？ うそ！」

フィフィは自分が持っていたパンフレットを開いて確かめる。

「……今日って何日？」

気まずそうな顔でその場にいる者たちに尋ねるフィフィ。

ユウイは自分のポケギアを見ると、「21日」と返した。

「……第3月曜……？」

「そう……かもね」

「……月に一度の休館日です……」

「戻ろっか」

別段怒るような様子もなく、諭すかのように言うユウイ。

「明日行こう、椎那。そっちのほうがいいよ」

未だに自分に抱きついていた椎那を起こすと、再び諭すように言うユウイ。

「カメール、聞こえる？」

出てきてよ。胡睦、支えてあげて」

ユウイは胡睦が下げている桃色のポシエットに向かって呼びかける。すると、その呼びかけに応えるようにポシエットが揺れ、赤い光が飛び出す。それは徐々に形を形成し、光が止むころにはカメールがそこに立っていた。

「大丈夫、胡睦？」

理由は何も聞かず、未だ泣いている胡睦に近づき、話しかける。

胡睦はその問いかけに微かに首を横に振る。

「戻ろ？ 明日、行こうよ」

そう優しく語りかけると胡睦の手からトゲピーを預かる。地面に

下ろすとミウのそばへと駆けて行き、そこから胡睦を見つめていた。

それまで支えとなっていたトゲピーがいなくなると、今度はカメールの方へともたれ掛かる。一瞬驚いたカメールだったが、いつもの柔和な表情に戻ると、胡睦を支えながらポケモンセンターへと歩いて行く。

そのすぐ後ろをユウイと椎那が、そのまた後ろをフィフィ、ミウ、トゲピーの順で並び、そのまま付いて帰った。

「本当にびっくりしたよ。胡睦、泣いていたから……」
「でも、出てきてくれて助かったよ。ありがとう」

お礼を言われ、少々照れるカメール。ほんのりと頬が赤く染まった。

「……ヨルノズクは？」

泣き疲れて眠ってしまったふたりを眺めながら呟くように問いかける。

「分からない。椎那は大丈夫だと言って探す気ないみたいだからなあ。

マサラにいた時と同じような状態なんだろうね」

きつとあの時も椎那達が寝ている間に出て行ったんだろうな、とユウイは推測していた。

ユウイの話聞きながらカメールは薄暗くなってしまった空を開けてある窓から見上げていた。

「……え……？」

「あ、しまっ……た……」

何かと目があったカメール。目があった方も目があった方もフリーズしてしまう。

先に動き出したのは……。

「ああ〜！！ ヨルノズク！！」

カメールである。

名を叫ばれ、焦ったヨルノズクらしき生き物はさっさと空へと舞い上がり、夜の闇の中に消えていつてしまった。

その声に驚き、ミウとトゲピーは今までしていた遊びをやめてカメールに注目する。

「カメール？」

「ヨルノズクがいた！」

カメールは空を指さし、ヨルノズクが消えて行った方角を目で追うが、すでにいなくなつた後だった。

落胆し座り込んでしまったカメールをファイファイがポンポンと背（甲羅？）を叩き励ます。

「とりあえず、この町にいるのは確かみたいだね」

ユウイのその言葉で元気を取り戻したカメール。

よしっ！ と声を上げるといきなり立ち上がる。その拍子に後ろにいたファイファイは後ろに突き飛ばされる形となった。

「あ……ごめん」

転んでしまったフィフィにちよっぴり慌てて謝る。

謝られるまで何が起こったのかよく分かっていたフィフィは一瞬目をパチクリとさせる。やがて理解すると、クスクスと笑い始めた。

そんなフィフィを見て、怒っていないと安堵したカメールはなぜか釣られて笑い始めてしまった。

部屋全体がにぎやかな声で包まれるのにはそう時間はかからなかった。

30話 じんとじそマッポミのじしへ(前書き)

三人称 胡睦 椎那と目線が変わります。

30話 こんどこそマダツボミのとうへ

次の日の昼過ぎ。

椎那と胡睦こむつはユウイ達と一緒にマダツボミのとうに来ていた。

「大きいねえ」

そう感想を漏らすのは椎那。ミウを抱いて塔のてっぺんを見上げていた。しかし、見上げても見上げても、3階建ての塔のてっぺんは見えずして。見えるのは3階の軒下までだった。

「椎那、中入るよー」

「あ、待って！」

見れば胡睦はフィフィヤトゲピー達と一緒に塔の中へ入ろうとしていた。入り口にいるユウイはこちらを振り向いて、どうやら椎那が来るのを待っているようだ。

椎那は慌ててその後を追いかけて、塔の中へと入って行った。

「……………揺れてる……………」

先に塔の中に入った胡睦が目の前に佇む巨大な柱を見てポツリとつぶやく。

「倒れないのかな？」

胡睦の隣に来たトゲピー。彼女に抱きあげられながら同じようにポツリと感想を漏らす。

「わあ。柱が揺れてる！」

意気揚々と遅れて入ってきた椎那。館内ということにも関わらず、大きめの声で話していた。

「椎那、もう少し静かにしたら？」

いつの間にか隣にいたフィフィにそう注意される。椎那は「はい」と軽く返事を返すと、揺れている柱の前まで進んでいった。

柱の周りは椎那と同じぐらいの高さの柵で囲まれており、それより中に入ることはできないようだ。

「この柱が30mのマダツボミだったんだって」

柱を見上げる椎那にフィフィが説明を付け足す。

「30mってどれぐらい？」

椎那に抱かれたままのミウがフィフィに尋ねる。椎那もうんうんと頷いていた。うーん……と考えた結果、「ユウイが30から32匹分」とのことらしい。

「他の表現方法、ないの？」

その話を聞いていたらしいユウイ本人が苦笑してフィフィを見る。フィフィは数秒ほど考えるようなそぶりを見せた後、すぐに「ないと軽く流した。

「ないわけないだろ……」

「じゃあ、僕だとどれくらい？」
「……なんでそうなる……」

少し呆れたような顔でフィフィを見るが、フィフィはいたずらっ子のような笑みを浮かべてユウイを見ていた。

「フィフィだとどれくらいなの？」

トゲピーを抱いた胡睦が会話に混じってくる。ユウイはそれに適当な答えを返すと、2階へと上がる階段を見つけ、そこへ近寄り。

「上に行く」

説明するのを面倒くさがったユウイの答えでもある。

「あれ、お坊さんだね。……なんているの？」
「あれが修行僧。ここで修行しているんだって」

階段を上って一番初めに目に着いたのは、お坊さんみたいな紺色の服を着て、頭がツルツルで禿げている人。フィフィはあの人達を修行僧だと教えてくれた。もちろん、修行僧以外の人もいたけど。

「行くのです、マダツボミ！」
「行くんだ！ おれのメリープ！」

近くで修行僧があたし達よりいくつか年上らしいお兄さんとポケモン勝負を始めていた。

こんなにも柱が揺れているのに、バトルなんかして大丈夫なのかな？

「……………相性、悪っ……………」

足下でフィフィが苦そうな顔をして呟いた。

確か……………マダツボミはくさタイプで、メリーブはでんきタイプ。

……………メリーブは昔、お兄ちゃんが連れていたから間違いない。それに“でんきショック”しているみたいだし。

「ねー。どうして相性悪いの？」

フィフィの呟きを聞いていたらしい椎那がフィフィに尋ねていた。今でこそその人の言葉を話すポケモンは増えてきているみたいだけど、それでももやっぱり珍しい。

そのせいで、近くを通りかかる人たちがフィフィのことをジロジロと見ながらそこを進んでいった。

「でんき技で攻撃しても、くさタイプはあまりダメージを食らわないの。」

効果はいまひとつ、ってところかな」

「逆は？」

人の波が途切れたころ、フィフィが椎那の質問に答えていた。それをこっそりと盗み聞きして、ただでも少ない知識を増やすのがあたしの戦法。

「逆……………って、くさタイプの技ででんきタイプを攻撃するってことでしょ？ 効果は普通だよ」

へえ、と相槌を打つ椎那。フィフィの説明にユウイがうんうんと頷いていた。

そう言えば、ユウイもでんきタイプだったっけ。すっかり忘れてた。

「ちょっとそのトゲピーを抱いているお嬢さん」

考え事をしていると、すぐそばでちょっと低めの声が聞こえてきた。何だろうと思って顔を上げると、目の前にさっきメリープを使ってバトルをしていたお兄さんが立っていた。

「僕とバトルしませんか？」

え。

「あ、あのっ。あたし」

な、何であたしなの!?

ば、バトルなんて今まで一度もしたことないし!　そ、そりゃ見たことはあるけど、でも、いろいろと違うし!!

指示なんてできないよ!　使える技も分らないのにつ!!

「……もしかして、トレーナーに成り立って？」

あたしがあたふたしている間にお兄さんは自分の推測をあたしに尋ねてきていた。その質問にうんうんと必死で頷く私。

どうか、バトルだけは免れますように!!

言われるがままにあたしは桃色のポシエットからカメールの入ったモンスターボールを取りだす。そしてギュツと握って元の大きさに戻すと、ボタンを押して足下へと投げる。

ボールは床に着くか着かないかというところで口が開き、赤い光を放出した。その光と共に飛び出したのはもちろんカメール。

「……………え、ピカチュウ？」

ではなく、ピカだった。いつにもなく不機嫌そうな顔であたしをジト目で睨んでくる……………。

「ま、間違えた……………」

「……………初めのうちはシールとか貼っておいたほうが見分けやすいよ。ボールの種類が違うなら、それでもいいと思うけど」

ピカをボールに戻しつつ、お兄さんの助言を聞き流す。そして今度こそカメールのボールを取り出すと、再び元の大きさに戻し、床へと投げた。

「……………りる？」

なぜか、ものすごく眠そうなマリルの声が聞こえてきた。眠そうなかだけでなく、あくびまでしていて、もう今にも寝てしまいそうなマリルの姿がそこにあった。

「……………マリルがいるのなら、マリルでやる？」

「うん」

カメールのボール、どこに行ったんだろう？

「よし！ それなら出てこい、ワタッコー!!」

お兄さんはそう言って腰に付けていたモンスターボールから、青色の体で頭と手のところにタンポポの白い綿毛をつけたようなポケモンを出してきた。

「いや、初心者って分かっているなら最終進化系を出すなよ」

隣にいたユウイが不審そうな目でそのお兄さんを眺めていた。確かに別にワタッコじゃなかったって……。それに、くさタイプって、みずタイプに強いんじゃないかなかったっけ？

「そちらからどーぞ」

軽い口調だけど、どこからでもかかってこい、という雰囲気やしひしと伝わってくる、けど。

「マリルって、技、何使えるの?」

どうやらあちらからすれば衝撃的発言だったらしく、大きくよろけていた。こちらは……なんとなく感じていたようでユウイはタハハ、という声がお似合いな表情を示していた。

「みずでっぼう」とか「バブルこうせん」とかが得意だけど、くさタイプじゃなあ」

目の前に立ちはだかる敵が問題。ユウイが教えてくれた技はどちらにもみずタイプのもので、くさタイプに有効というわけではないらしい。

「他は？」

「ぼく、基本的に水技しか使えないよ」

期待を込めてマリルを見つめたけど……ああ、そうなの。じゃあ、勝てないじゃん！！

「ダメージが少ないと言うだけで、全く効かないというわけでもないけど？」

フィフィがポツリとつぶやく。当事者じゃないからそんなこと言
うんだろうけどさあ！

……あ、そうだ。

「マリル、戻って！」

「りーるー……」

……またあくびですか。もう、最初からやる気ないよね。

「え、戻すの？ ……ワタツコ、“ソーラービーム”仕掛けるぞ」

「ワタツコー！」

返事をしたかと思えば、頭の上の綿？ に光が集まっていく。

“ソーラービーム”って時間かかるんだっただっけ。

「……どうするの？」

「フィフィ、協力してね」

「は？」

あたしはフィフィをグイッと前に押し出す。

もうこの際野生だろうと何だろうと関係ないや！ 今の目標はバトルに慣れること、なんだから！！

「……今度はイーブイか。でも！ ワタツコ、“ソーラービーム”発射！！」

「え、もうチャージ出来たの！？」

ワタツコから黄色く明るい光線がファイファイに向かって一直線に進んでいく。避けるっていったって、間に合わないかもしれないけど……。

「ファイファイ、避けて！！」

必死で叫んでいた。だけど、ファイファイはちらりとあたしを見ただけで、全く行動に移そうとしない。そ、そりゃ、あなたの特レーナーじゃないけど、少しぐらい言うこと聞いてくれたっていいじゃない！！

「ファイファイってば、避けてよ ……！！」

もう目の前に迫っていた。半泣き状態で叫ぶあたしの前でファイファイが微かに笑った気がした。

「“まもる”」

次の瞬間、ファイファイは丸く透明なバリアに囲まれていた。そしてそれは“ソーラービーム”をもものともせず、中心にいるファイファイを守っているように見えた。

「な、に？」

「な…… “まもる” を使えるのか!!」

…… “まもる” ？

「僕の十八番のひとつ。もうひとつは……」

フィフィの声が聞こえてきた。見ると、今度は口の前に黒い影のような球状のものを作り出していた。

「もしかして “シャドーボール” か……？」

ワタッコとお兄さんがすこし焦っていた。そこまで強力な技なのかな？

「わ、ワタッコ。 “エナジーボール” だ」

指示を受けたワタッコは、黄緑色で濃淡のある明るい球状のものを作っていた。それは宝石のようにものすごくきれいだった。

でも、いつまでも見てはいらなかった。

フィフィが “シャドーボール” を打ち出したからだ。それと同時にワタッコも “エナジーボール” をフィフィに向かって放っていた。それらはちょうど2匹の中心でぶつかり、はじけ、爆風が起こった。

「うわっ……」

「きゃ……」

風邪の勢いに負け、後ろに倒れそうになったあたしをユウイが支えてくれたらしく、尻もちをつくことはなかった。……お兄さんはついていたみただけ。

「わ、ワタツコ!?!」

爆風が止んだ時、ワタツコは目を回し倒れていた。
これって……勝ったんだよね?

「……………。今の、なし」

「え?」

不満そうな顔をしたお兄さんがあたしの勝利宣言を打ち砕く。

「だつてさ。君が指示した技ってわけじゃないし、そのイーブイが勝手にやったことだろ?」

それで勝ったと言われてもねえ……………」

明らかに嫌そうな顔をこちらに向ける。そ、そんなの有り?

「あーあ。こんなことならやるんじゃないかった。損しちゃった。修行僧も弱いし……………。ま、メリープが進化したから、いい事なしってわけでもないんだけど」

腕を頭の後ろに組み、ただ愚痴るだけのお兄さん。……………最初のさわやかさはどこへ行ったの?

「それじゃ、またなー。連れてくるポケモンの技とタイプぐらい把握しとけよー」

その格好のまま階段を下り、1階へと向かってしまった。

あー。タイプ相性とか教えてくれるんじゃないの? あれ

は、ウソ？

ただただ呆然とするあたしの足をフィフィが突っついて注意を自分に向けようとしていた。

「何？」

「タイプ相性ぐらいなら僕が教えてあげるよ」

「……余計なお世話よ」

「くさタイプはね、ほのお、こおり、ひこう、どく、むしタイプに弱くって」

勝手に演説をし始めるフィフィを無視してあたしは3階へと向かう階段を探した。見つけ次第上に向かって、さっきの嫌な気分を吹き飛ばそうと思う。

フィフィの説明は椎那がじっくり聞いていたから後で教えてもらおうかな。

「じめん、くさ、みず、でんきに強いんだ」

「受けた時に効果がいまひとつになるっていうだけだね」

フィフィの説明にユウイが説明を追加してくれた。今は書くものないからポケモンセンターに戻ったらもう一度聞こうかな。

お姉ちゃん、きつとぼくから聞きだす気なんだろうな……。

今日は絶対教えてあげないもんね。

「それでね、みず、じめん、いわタイプにくさタイプの技を当てると、効果は抜群になるんだよ」

つらつらと説明を続けてくれるフィフィには悪いけど、今は聞き流させてもらっね。ポケモンセンターに戻ったら、また教えてね。

そう思いながら、ぼくはお姉ちゃんの後を追いかけて3階へ上がった。

その日の夕方。

椎那はメモを取ることを、胡睦は椎那に教えてもらっ事をすっかり忘れてしまったという。

31話 ふくろじい兄弟とこねずみ兄妹（前書き）

やっとホーホーの登場……

31話 ふくろつ兄弟とこねずみ兄妹

次の日の朝。

「いい加減、起きろよ……」

ヨルノズクの超不機嫌な声を目覚ましに、椎那と胡睦こむつはゆっくりと目を覚ます。

昨夜、部屋でトランプをしていた時にこつそりと窓の外から様子をうかがっていたヨルノズクをユウイが見つけた。そして椎那がポールへと強制送還させたのだが、そのことを根に持っているらしく、いつもより不機嫌さが増している。

「おはよー」

「昨日、いつここを出るって言ってたっけなあ？」

目をくしくしとこすりながら胡睦はベッドから起き上がる。その光景をイライラしながら見守るヨルノズク。

「うるさいなあ」

そつばやきながら扉の上にかけられた時計を見ると、それは8時半を指そうとしていた。

「うそ！？ 椎那、起きて！！」

何度も瞬きして時計が指している時間を確認する。顔が青ざめたかと思うと、慌てて梯子を下り、2段ベッドの下で再び眠りに着いていた弟を激しく揺すり、起こそうと試みる。が、なかなか起きな

い。

「ちよつと、起きてよ　っ!!！」

「……僕が起こすから準備しておいで」

見かねたユウイが声をかける。その声で初めてユウイの存在に気づいたらしい胡睦は「おはよ」とあいさつを返した。そしてベッドの横に置いていた自分のリュックを引っ手繰るとパタパタと洗面所へと走って行く。

その慌ただしい様子を見て深くため息をつくヨルノズク。そして椎那を起こそうとしていたユウイへと視線を向ける。

「起こすったつて、こいつ二度寝したら起きないぞ」

呆れ顔で今もなお眠り続けているトレーナーの顔を見る。その顔はものすごく安らかで、いくら揺すられても起きないぞという、意志表明のようでもある。

「大丈夫でしょ」

「お前まさか、電気……」

「そんな物騒なことしないよ」

一瞬顔を青ざめさせたヨルノズクの言葉を笑いながら否定をする。しかしヨルノズクはその笑いを見てあることを思い出す。

旅立つ前に賢司にしたあれは物騒とは言わないのか……？ その事を考えると、どうしても複雑な表情になってしまった。

「椎那、起きなよ。椎那」

そんなヨルノズクをよそに正当な方法で起こそうとするユウイ。

しかしいくら揺さぶるとも起きる気配は全くない。それどころか、クウ……という安らかな寝息まで聞こえ始めてしまった。

「……」

「全然ダメじゃん」

呆れかえるユウイとヨルノズク。もう一度揺すろうとするが、なぜかその気が起きない。

そんな2匹のやり取りをずっと見ていたファイファイ。何を思ったか、椎那の頭がある位置に飛び乗ると、ペるペると頬の辺りをなめはじめた。それがくすぐったかったのか、クスクスと笑い声を上げる椎那。それでも何度かなめ続けると「もう……！」という声と同時に椎那が跳び起きた。

「おはよ」

「……おはよ」

若干不機嫌なのは気のせいだ。

ここはとある公園の片隅。

そこに2匹の薄い黄色の体をしたこねずみポケモンがいた。1匹は木の幹に寄り掛かり、もう1匹はそのピチューと対面する形で地面に座っている。どうやら何かの相談をしているらしく、足下の地面には何かを描いたような跡がある。

「で、ここでピーがジャンプ！ ぼくが受け取る」

「……前みたいに落とさないでよ、お兄ちゃん」

「大丈夫、大丈夫。あれは余所見していたからであって」

「お兄ちゃん!!」

兄ピチューのまさかの発言に、ピーと呼ばれた年下ピチューは嘔み付くような勢いで怒鳴る。そんな年下ピチューにごめん、ごめんと謝りながら頬をかく兄ピチュー。

そんな2匹のもとへ茶色く丸い体をし、頭には時計の針のようなものが付いたポケモンが、翼と言えないような翼をはためかせやってきました。2匹の前まで来ると地面へと降り立つ。

「ホーホー、今日も見に来てくれるの?」

そう尋ねたのはピーだ。見に来る、という言葉からして、先ほどの相談はどうやらこれのことらしい。

「うん、行くよ。……バカ兄に連れ戻されるまではね」

その言葉を聞いてピーはクスリと笑う。

「ボクたちと逆だね。ボクたちはお兄ちゃんに会うために目立っているのに」

「そうなんだよなあ。しかも、僕は君らの兄の居場所とか知ってるし」

「トキワのもり、でしょ。何回も同じ会話を繰り返さないでくれる?」

兄ピチューが地面に何かを描きながらぶつぶつと文句をいう。

「トキワのもりとか、ぼくらが住んでいたニビシティのすぐ近くじゃないか。そんなところへ行かなくなつて十分暮らしていたのに」

「お兄ちゃんも同じこと毎回言ってるよ」

「そうそう。そのあとピーと同年ぐらいのイトコ連れてどこか行つちやっただら？ 覚えちゃったぜ」

文句を言うピチューをからかう2匹。不貞腐れたピチューは2匹をムツと睨む。しかし少女がこちらに近寄ってくるのを見て急にこやかな表情に一変する。

「ちょっと、いい？」と小学校高学年ほどの少女が尋ねる。

「うん。なあに？」と一言で返事を返すピチュー。その顔は先ほどまでのムスツとした顔とは程遠いものである。

「今日は何時からするの？」

「んーと……」

ピチューは遠くに見える時計を見ようとすが、よく見えないうまく難しい顔になってしまう。

「ちょっとごめんね」

そう言ったかと思うと、始め寄り掛かっていた木にももの数秒で登っていつてしまう。そして、葉がたくさん生えている枝の隙間から顔を出し、遠くに飾られている時計を見る。

「今が10時だから……あと4時間後の2時から！ 場所はいつも通りのあの場所で」

「分かったよ。ありがとう、ピチュー」

そうお礼を言うと、少女は離れた場所で待っていたらしい数人の友達のもとへと戻っていく。時折、後ろを振り返っては手を振りながら。

「ふう」

そのため息をつくのはピチュー。先程まで手を振り返していた名残なのか、心なしか右手が上がっているように見える。

「良くもそう言う顔が出来るな、ピチュー」

疑うような、怪しむような目で彼を見るホーホー。ちょっとばかり視線が冷たい。

「何のこと？」

するとエイパムのごとく木から下りてきたピチュー。顔に似合わず悪ガキっぽく微笑んでいる。

「何のことって、お前……実は腹黒いだろ？」

「ふふふっ」

知っているんだぞ、と言うホーホーをよそに、口元に手を当て怪しい笑いをするピチュー。それを見る限り、自負しているようだが……しかし、いったいどこが黒いのだろうか。

「ピッチュウ〜」

その聞き慣れた節にピチューはピクリと耳を動かす。少し首を横に傾けると、いた。白い体をし、2本足で立つ犬のようなものと、茶色く長い耳と太い尻尾を持った例の2匹が、軽い足取りでこちらに近づいてきているのが見えた。

「トナ、オタチ……。何？」

若干困ったような顔で迎えるピチュー。否、明・ら・か・に、迷惑そうな顔をしていた。

「何？ じゃないよ。友達でしょ？」

「そうそう。ピーにも会えるし！」

「つまり、オタチはピー目的なんだな……」

迷惑そうな顔に異議を唱えるトナとオタチ。この2匹はトキワのもりにいたあの2匹に間違いない。そしてオタチの発言にポソリと眩きをもらったのはホーホーだったりする。

「それで、今日はどうしたの？」

未だ迷惑そうな顔でピチューが問うと、そうそうとトナが明るい声を上げる。

「ニユース、ニユース！」

「ユウイ達が旅に出たんだよ」

「……旅？」

「ニヤース？」

トナとオタチの言葉を繰り返すピチューとピー。天然なのか、上手く聞き取れなかったのかは分からないが、ピーはあるわけねこポケモンの名前を口にする。危うくずっとこけそうになったホーホーはニヤースじゃなくてニユースだ、と訂正をしていた。

「どうして急に？」

「んーと……ミウとトゲピーが迷子になって、人間がふたりを連れてきてくれたんだけど」

およそ3週間前に起こった出来事を手振り身振りでピチューに伝えるオタチとトナ。その横で苦そうな顔をしているのは紛れもなくホーホー。そんな彼の様子に気づいたピーはどうしたの？ と首をかしげて問いかけた。

「いや……うん。まさかね……」

「何が？ 何がまさかなの？」

難しそうな顔をするホーホーにキョトンとしながら問いかけるピ。オタチも隣でうんうんと頷き、同意を示していた。

「トナが言うマサラの人間って、トレーナーなんだよな？」

「うん」

「10歳超えてる一人前の、トレーナーなんだよな？」

その質問にオタチとトナは何かを確認するかのように互いに顔を見合わせた。

「……うん、違うよ」

一瞬青くなるホーホー。それでも、まだ知りたいことがあるらしく、質問を続ける。回答者はオタチだったりトナだったりしたが、回答を聞くたびに一段と青さが増していくホーホー。一体なんなんだ、と4匹が思いだしたころ、ホーホーはある言葉をつぶやく。

最悪だ、と。

「何が最悪なんだよ？」

真相が全くつかめないピチューは不機嫌な顔でホーホーに問いかける。しかし、ホーホーはそれを無視し、再度質問を投げかけていた。

「今、どこにいるか知ってる？」

「え……どこだよ？」

「ぼく、知ってる！」

兄ちゃんがリザードと会って聞いたみたい。ジョウト地方ってところに行くらしいって！」

自信満々にそんなことを言うトナ。調子に乗って、ジョウトに着いてから3日は経っているころだ、ともホーホーに話していた。

「……ピチュー、さっきの約束取り消し」

「え？」

「バイバイな」

「はあ!？」

言うが早いか、ホーホーは上空へと飛び立った。

ちょうどその頃、予定時間より1時間ほど遅れた9時半にキキョウシティのポケモンセンターを発った椎那達は、そんなやり取りが行われているとも露知らず、しぜんこうえんまであと3kmという地点を歩いていた。そこまではウインディに乗るといのは決定事項であり、暗黙の了解でもあった。

ヨルノズクはまったりと歩いている椎那達を置いて、一羽、2k

m先を飛んでいた。すると、しぜんこうえんの方角から1羽の丸い鳥ポケモンが羽ばたいて行くのが微かに見えた。

「なんだ？」

明らかに慌てているような様子で公園を飛び立つその鳥ポケモン。フォルムも丸っこいということで、なんとなくホーホーだとは理解するが、疑問に挙がるのは、何故あんなにも慌てているか、だ。

「…………まさか…………」

はつとなり、ホーホーと思いきものが飛んでいく先を見つめる。
あの方角は。

「やっぱりコガネ……………と言うことは、あいつか!!」

それまで飛んでいたスピードとは比にならないぐらいの速さで、その鳥ポケモンの後を追いかける。絶対に捕まえてやる、という気迫を身に纏わせて…………。

「げっ!？」

一方こちらはホーホー。

後方から殺気紛いのものを感じたらしく、振り返る。すると、猛スピードで自分に迫ってくる鳥ポケモンを発見! 間違いなくあれは、ヨルノズクの形。そして、他に目を向ける気配もなく、ただ一心不乱に自分を追ってくる様子を見る限り、ただ事ではないと感知した。間違いなく、兄だ。

「ウソだろ！？ 早すぎるっ！！」

ホーホーの言う“早い”はスピードではなく、この場所、つまりはしぜんこうえんに辿り着くまでにかかる日数の問題である。

捕まったら非常に不味い、と感じそれまで必死に飛んでいたホーホーだが、何を思ったのか、いきなり急降下し始めると、真下に生えている木へと向かった。

「何考えてんだ、あいつ……」

その様子を羽ばたきながら傍観していたヨルノズクだが、ホーホーが降り立った木からたくさんの鳥ポケモン ポッポ、ピジョン、ホーホーなどが一斉に空へと羽ばたき、いろんな方向へ飛び出していくのを見た。

「……やられた」

ポッポやピジョンが上空で飛び交う中、ホーホーの形を見つけるのは容易いが、ホーホーの中から自分の弟を見つけるのは骨が折れる。

「あんのヤロー……」

怒りのあまり、嘴をカチカチと鳴らすヨルノズク。これ以上追いかけても仕方がないということなのだろうか。進行方向を変えると、椎那達が歩いているであろう場所へと飛び去った。

ホーホーのやったことは兄の怒りを2倍増し以上にしたのは間違

いないだろうが、自分が逃げるためにはちょうど良い目隠し。先程確かに別れを告げたはずのピチュー達のもとへと舞い戻っていた。

「バイバイ、ホーホー」

戻ってくると同時に冷たい言葉をピチューから言い渡される。それも今までに見たことがないほどの 笑顔で。

「……さっきの言葉取り消すからさ、そう突慥つっけんどんにならないでよ」

苦笑しながら謝るが、ピチューはツーンとそっぽを向いてしまう。理由も告げず、バイバイと言ってしまった自分に非があるのは確かなのだが、そこまでツンツンされるとどうすればいいのかわからない。

「もーしわけありませんでした」

半ば自棄になり棒読み口調でピチューに謝る。その態度をピチューが許すわけもなく。

「とお！ー！」

何を考えたのか分からないが、ホーホーの背中へと飛び乗った。周りがキョトンとしている中、ピチューの頬にある電気袋からパチパチと小さな音が聞こえてきた。その音に焦りを感じずにいられないホーホー。

「あの一、ピチュー くん？」

「……“でんきショック”！！」

「ちよっ！？」

有無を言わずホーホーに制裁を加えるピチュー。残された3匹
ピーとオタチとトナは呆気に取られ、言葉にすることもできな
いでいた。

「……ごめんなさい」
「分かればいいんだよ、分かれば」

どちらが年上なのか分からない会話を繰り返すのは、もちろん
ピチューとホーホー。数十秒間でんきショックの餌食となったホー
ホーが必死に助けを求めた所、ピーがようやく止めに入ったのであ
る。 けして『止め』を『とどめ』と読んではいけない。

「ぼくら、そろそろ戻らないと……」
「ドールブルが心配するもんね」

ピチューとホーホーの仲が戻ったのを見届けたオタチとトナは3
匹へ別れを告げる。

「お兄ちゃん、」

2匹の姿が見えなくなったところ、ピーが兄の手を引っ張る。ピチ
ューは何、と優しく聞き返していた。

「ジョウト地方って、どこ?」

その質問に顔が引きつるピチュー。そういえば、と思いつく。ト

ナモオタチも、自分がピカの弟だと知っているのに、来ると言うことに対して何も言わなかったな、と。

「自分の出生地も知らないとは……」

妹のいる手前、口にするのを慎むピチューだが、その言葉の後ろに着くのは間違いなく「バカ」である。やれやれ、と言う風にため息をつくピチュー。ホーホーだけはそれには気づいているらしく、口を挟もうとしたが、先程のことが応えたのか、押し黙っていた。

「お兄ちゃん？」

答えてくれないことに疑問を感じ、キョトンと首をかしげる。そんな妹の頭をなでるピチュー。

「さ、もう30分したらご飯食べよ、ピー」

妹の気を「ご飯」と言う言葉へと反らせるピチュー。この公園にはたくさん木の実がなっているので食事には困ったことがない。

「今日は何食べる？」

「んー……。モモンがいいな」

「じゃ、探しに行こっか」

モモンの木を求め、トコトコと歩み始めるピチュー兄妹。その後ろをホーホーが低空飛行で付いて行く。

きつと、ピカ兄の姿を見たらきつと驚くだろうな。

妹の驚く顔を見たい。その思いからピチューは妹にこの地方

の名を告げなかった。

あと2時間ばかりで2時になる。そんなお昼時の話である。

32話 ピチュー兄妹との出会い

しぜんこうえんのとある一角で、わいわいとお祭りのような人だかりが出来ている。その中心にいるのは、紛れもなくあのピチュー兄妹。

跳んで、跳ねて、ジャンプして。時には空中でバツク転。

妹ピチューが兄を踏み台にして空中へと高く飛び上がる。その間に兄は、どこから取り出した黒いシルクハットを頭にかぶる。そうしてご覧あれと言う風に、両手を妹が飛びあがった空へと差し出した。

そこには空中なものにも関わらず、フワフワ漂う妹ピチューの姿。実は裏でホーホーが“ねんりき”を使っているのだ、ということを知っているのはほんの一握り。ちなみに途中でホーホーの姿を見かける者もいたりして、「あッ」と驚きの声をあげる人もいるのだとか。

最後に電気で作った火花を、2匹でパチパチと辺りにまき散らしてフィニッシュ。

パラパラと起こった拍手が次第に大きくなり、見ていた人々が思い思いに賞賛の拍手を2匹のポケモンに贈った。一人前のアイドルグループのように笑顔で手を振り、賞賛の拍手を全身で受けていた。やがて人々は散り散りになり、人だかりがまばらになる。そんなころ、ピチューに近づくとひとつのグループがあった。

「かわいかったよ」

「また見せてよね！」

「ピチュー達。これ、あげるね」

そう言ってひとりの少女が取りだしたのは、この地方では珍しい“ポロック”という名のポケモンのお菓子。それをピチューが差し出すシルクハットの中に、コロッコロンと数個入れた。

「抜かりないよね」

あはは、と笑いながらその場を去っていく少女達。実はこのポロック少女　昼間、ピチューに時間を聞きに来た、あの少女なのである。そして、その時と同じ様にバイバイと手を振り返っていた時、少し離れた所からこんな話し声が聞こえてきた。

「ピチュー……ってさ、ピカチュウの進化前だったよね？」

「そうだよ？　で？」

「ピカ、冷たい」

その声にピチューは、ん？　と聞き耳を立てる。

ピカと呼んだ者に問いかけ、冷たく会話を切られた少女　胡睦こむつは明るい声で笑っている。その横にいるピカは、はあとため息をつき、近くを歩くフィフィに面倒くさそうな視線を向けていた。フィフィはと言うと、困ったように笑いながら胡睦を見上げていた。

「ヨルノズク、ホーホー探すんじゃないのかったのか？」

「別にいいじゃん。っていうか聞いてよ！　この公園ってさ、とある曜日ごとにキレイハナを連れた踊り子が来るんだ。それを見たいんだ、僕は」

しぜんこうえんに着いたというのにも関わらず、ピチュー達のダンスを見たり、辺りを見回しては目的の人を探したりしているヨルノズク。少なくとも1時間以上、それを繰り返しているものだから、

ユウイは溜まりかねてつい声をかけてしまったのだった。しかし当の本人は自分の気の向くままに辺りを見回すだけ。そんな彼を見てはあと軽く息をつく。そうして、近くにいた胡睦と合流することに決めたのだ。

「ピチューって、可愛いよね!」

「可愛くないよ、あんなの」

胡睦の言葉に間髪与えず否定するピカ。呆気にとられ、口が開いたままになる胡睦だったが、気を取り直して理由を尋ねていた。

「何でって あいつ、心ん中、真っ黒だもん」

「それはピカの弟だけだろ。他のピチューは可愛いって!」

胡睦と話しているはずなのに、途中で違う声が割り込んでくる。それはいつの間にかボールから出てきていたマリルであった。不機嫌そうな顔になるピカを見てクスクスと笑う。

「ピチュー達、見つかるというーね」

「放つとけ、あんなヤツ」

ツンと顔をそむけるピカを見て、クスクス笑いが大きくなったマリル。ピカが本心からそう言っているのではないと知っているのだ。そんなマリルを押しつける形でフィフィがピカの目の前に立った。

「な、何?」

「弟いるの?」

「うん。3つ下なんだけどね。妹もいるんだ、ミウと同一年ぐらいの」

「それって、あそこにいるピチュー達のこと?」

え？ と驚き、フィフィの前足がさす方向をジッと見るピカ。そこには同じようにこちらを見つめてくるピチューがいた。目が合ったかと思うと、真後ろにいたピチューの手を引き、一目散に公園の奥へと走っていった。いきなり手を引かれた妹ピチューは、驚きはしたものの、兄に着いて公園の奥まで走っていく。

「ああ!？」

ピカの声に驚き、胡睦とマリルが、そしてユウイやヨルノズクまでもが一斉に声の出所を探し、その相手を見つめた。

「何だよ、ピカ？」

「ぴ、ピチューがいた……」

「はあ？」

迷惑そうな声で尋ねるヨルノズクに、ピカは今しがたまでピチューがいた所を指さし、ひとり慌てふためいていた。

「ピカの弟なんだって」

「さつき、あそこにいたピチューが？」

ユウイの質問にうん、と深くうなずくフィフィ。続けてピカを見ると、コクコクと必死で頷いていた。

「なら 追いかけるよ!!」

ヨルノズクの怒号に近い声に煽られ、ようやくピチューが消えていった先をめがけ走って行った。

「どした、ピチュー？」

兄妹よりも一足早く公園の片隅に戻っていたホーホー。翼を休めようと、一番低く太い枝に止まっていた彼だが、ピチューの慌て様に一瞬たじろいでいた。

「に、兄ちゃんがいた……」

「……僕も兄ちゃんに見つかったんだよね」

それまで下を向き、肩で息をしていたピチューだったが、驚いてホーホーと目を合わす。それに気付いたホーホーはコクリと頷き、そして、盛大なため息を2匹で付いていたという。ピーはわけが分からず、呆然とその様子を見ていたらしい。

「ホーホーもかあ……」

「ピチューもかよ……」

「ピチューー!!」

ホーホーと共にもう一度ため息をつこうとしたその時、怒鳴り声に近い声がすぐそばで聞こえてきた。見れば、ピチューの進化系であるピカチュウが、先ほどのピチューよりも激しく肩で息をしながら立っていた。

「……ピカ兄、どうしてここに？」

「お前の後を追いかけたんだよ!!」

「の割には遅かったね」

淡々と言うピチューだが、内心は相当な焦りがある。話しつ

つも、どうやって逃げようか、どうやって撒こうか、とあれこれ考
えているのだ。その間、ピーはピカに会えたのがよほど嬉しいらし
く、ピヨンピヨンとピチューの周りを跳ねまわっていた。

「わあ、さっきのピチューだ！」

聞き覚えのないその声に、フツと顔を上げるピチュー。すると、
兄の後ろに普通よりちょっと小さいイーブイを連れた人間の男の子
の姿があった。どうやら初めて自分と自分^{ピチュー}という種族を間近で見たらしく、
目が輝いている。

「……………はあ」

これじゃあ逃げられないな、と渋々観念するピチュー。そんな兄
の隣で、あれ？ とピーは声を上げた。それと同時に大きなダイヤ
モンド形の耳がピンと立つ。

「……ウ？」

その声でイーブイ もといミウは、初めてピーの存在に気づく。
恐る恐る確かめるようにして彼女に近づくと、「ピー？」と遠慮が
ちに声をかけた。

「やっぱりミウだ！ 久しぶり〜」

「ピー……………、どうしてここに？」

ぴよんとジャンプして、ミウに抱きつくピー。ミウはそれをつま
く受け止め、受け入れる。嬉しさのあまり、ミウの首元に抱きつい
たままピヨンピヨンと飛び跳ねるピーだが、ミウはどことなく苦し
そうだ。

「ミウの友達？」

「ピーって言うんだけど」

「ミウったら、全然保育所、来てくれないんだよ！！」

椎那がミウに尋ねると、うんと頷き言葉を返すがピーがそこへ割り込む。割り込んだピーは、出会ったばかりの椎那に不満をぶつけ、拗ねたかのようにぶうと頬を膨らませた。

「ミウ、保育所来てよね！」

「あたし……旅してるから……」

「え……」

困ったように笑うミウを見て、不機嫌になるピー。口を尖らせ完全に拗ねてしまう。それでもミウは困ったような微笑を浮かべ続けていた。

「旅……ねえ。トナが言っていたトレーナーって君のこと？」

「トナ……？」

はあ、とため息をつくピチュー。ダブルの弟だよ、と素っ気なく付け足す。椎那はそれがきっかけとなり思い出したらしく、ああ、と感嘆の声を上げる。そして、そうだと思う、と付け足していた。

「やっぱり……」

「やっぱりって？」

「トナとオタチがさっきまでここにいたんだ。それで、君らが旅しているって聞いたなら、ホーホーがどっか行っちゃってさ……」

「ホーホー？」

椎那がいつになく真剣な表情で聞き返していた。カサリとピチュー達の真上にある木の葉が揺れる。ちょうど、ホーホーがいる場所だ。

視線だけを真上に向けたピチュー。一瞬ホーホーと目が合ったが、すぐに背けられた。

椎那の声と、ホーホーの動き。そして、出会ったころのホーホーが言った言葉 『僕、トレーナーを捨て……いや置いてきたんだ』。それらを合算して考えると、目の前にいるこの少年がホーホーのトレーナーかそれに近い存在だと言うことになる。そのことを理解したピチューは一匹、うんうんと頷いていた。

「……お前、ホーホーのこと知ってるの？」

そんなピチューを見て、ピカが問いかける。先ほどの荒っぽい口調から一変し、穏やかな口調に変わっていた。しかし、目つきは鋭く、知っていることをすべて吐けと言わんばかりの顔つきだった。

「誰ぞ」

「知ってるよ。上にいる！」

ホーホーを庇うためにウソをつこうと思ったピチューだったが、思いもよらぬ声がそれを邪魔した。上、と言う言葉の通り、ピーの手の先は真上にある木を指し示している。

そんな突拍子もない言動にホーホーもビクツとしたらしく、風もないのに木の葉がカサカサと音を立てていた。

「ほーお？」

妹の言葉通り、木に近づき上を見上げるピカ。すると、瞬く間に目が虚ろになり、地面に伏してしまった。気絶したのかと思い、椎

那が近寄ってみると、規則正しく体が上下している。おまけに微妙ではあるが、寝息まで聞こえてきた。

「…………寝てる？」

「寝てるねー」

「さいみんじゅつ、だね」

ツンツンとピカの後ろ頭を突つつく椎那の横で、ピーの抱き付きから解放されたミウがそれに同意する。何で？ と思っていると、すぐ後ろでその答えを教えてくれた。振り向けば、ミウの兄であるユウイがヨルノズクと共にやってきていたのだ。

(まーた逃げられなくなった…………)

嫌そうな視線を見知らぬサンダースとヨルノズクに向けるピチュー。その嫌みな視線に気が付いたヨルノズク。その視線の先にある目をジッと見つめ。

「何だよ？」

「…………別に」

がんに近いものを飛ばしていた。ピチューはそれをさらりと避け、視線を背けた。そしてため息をつき、ペタリと地面に座った。

「だから、何だよ！」

その一連の動作が気に食わなかったらしく、ピチューに怒声を浴びせる。その声に驚き恐れをなしたらしく、ピカのそばにいたピーはひっつく…………、としゃくりあげていた。

「……ヨルノズク」

「分かってるって！ つうか、仕方ないだろ！！ あいつが
「ヨルノズク！！」

最初は穏やかな声でなだめようとしたユウイだが、なだめる相手が徐々に逆上していくのを感じ、声を大にして叫んだ。それに言い返そうとしたヨルノズクだが、ユウイにきつく睨まれ、押し黙った。

「黙ってて。一言も喋るな」

はい、と言おうとして口をつぐむ。ユウイの自分を見る目が、日に日に陰しくなっていくのは、気のせいじゃないだろう……、と心の奥底で思うヨルノズクだった。

そんな2匹のやり取りを見ていたピチューは、このヒトを本気で怒らせてはいけないと幼心ながら悟っていたのである。

「大丈夫？」

泣いているピーのもとへそつと近寄り、優しく声をかけるユウイ。心なしかピーの泣き声が弱まったように感じる。その光景を見て、はたと思いだすピチュー。……自分がやらなきゃ、と。

「ピー？」

未だ泣いている妹のそばに寄り、恐る恐る声をかけるピチュー。これで泣き声が一段と増してしまえば兄としてシヨックであるが、今回は少しずつ落ち着きを取り戻しているようだ。

ホッと、安堵のため息をもらし、ちよつと背伸びをして妹の頭をなでるピチュー。その際、足下にピカの尻尾があったりする。

「ピッ!？」

ピカチュウらしからぬ鳴き声を上げて、バツと跳び起きるピカ。踏まれていたところをフーフーと息を吹きかけて冷まそうとしていた。ちなみに、今のピチューに悪気は0だ。

「……そんな所で寝てるから……」

「おまつ　　!　他に言うことないのか!？」

若干涙目でピチューを批判する。兄としての威厳が台無しの一場面だ。対してのピチューの反応はと言うと……。

「ないですね、うん」

「そっか　　じゃなくて、謝れ!　わざとじゃなくっても謝れ!！」

もう痛みなんて忘れているんじゃないか、と思うようなピカの喚き声。それを間近で聞くピチューは耳を押さえている　素知らぬ顔で。喚き散らした結果、ゼエゼエと激しく息をつくが、それを見てピチューが一言言った。

「もう、言うことない?」

「お前はあるだろが!！」

再び喚くピカ。ピチューはしつこいなあという表情をするが、ごめんなさい、と素直に謝った。叫び疲れてはいたものの、褒めてやろうとする。しかし、同じ声でとんでもない言葉が耳に入る。

「　　って本気で言うとも?」

「……き、貴様あ!！」

先ほどとは違う怒りがピカの中でこみ上げる。一度しばかなきゃ、気が済まない。

ピカが一步近寄ると、ピチューは一步後ろに下がる。また一步近寄ると、一步後退する。そんなイタチごっこに腹が立ち、キツと、ピカがピチューを睨んだ。

「……………なあに？」

それは、可愛い笑顔でピカに問いかけていた。しかし、その笑顔の裏に隠された黒い笑みを見つけ、完全に切れたピカ。それに気づいたピチューは笑うのをやめ、逃げる態勢を整える。

「お前！ ま、待てえ ……！！」

「やーだよ。待てと言われて待つバカがいるもんか！」

兄と弟の、壮絶な追いかっこが始まった。
。 椎那とミウ、ユウイとヨルノズクは呆気に取られ、ただ茫然とその様子を見守っていた。しかし、ピーだけはクスクスと笑っていた。ホーホーも笑っていたのだが、ピーの笑い声に消され、誰にも気づかれることはなかった。

その後、木の根に足を取られ転げたピチューにピカが追いつき、パシンと容赦なく頭を叩いたのである。痛い、と言って涙目になるピチューだったが、兄をからかった当然の報いである。

32話 ピチュー兄妹との出会い（後書き）

『保育所』で疑問を感じた方。

一番初めの話に戻ってみましょう！

33話 フィフィと胡睦とホーホーと

ピカがピチューに制裁を加える少し前、フィフィとふたりだけになった胡睦（こむつ）は、別行動になった椎那を探すという建前のもと、公園の散策に出かけていた。マリルはというと、ピカがどこかへ行ってしまった途端、ボールに戻ってしまっていた。

「どこ行っただんぞ……」

独り言を声に出して言う胡睦。その顔は歩き疲れたという表情で満たされていた。

「あー、もう！ あっつい！ー！」

「夏だし、仕方ないじゃん」

胡睦の大きな独り言に冷静かつ的確に反応するフィフィ。

……というか、地面からの照り返しを直で受けている僕の方が、もっと熱いはずなんですけど、と心の中で不満を漏らしていた。

「ねー、フィフィ」

前を向いたまま、面倒臭そうに問いかけてくる胡睦に、何？とだけ返すフィフィ。話すのが面倒なら黙っとけ、と言いはしないがそういう目つきで胡睦を見ていた。

「ベンチ、探そ　じゃなくて、探して」

ぶつりと、フィフィの中で何かが弾ける。そのせいか、彼の口の端がピクピクと動いていた。

「いーでしょ、フィフィ？ 手伝っ」

その時になってようやく話し相手の姿を見る胡睦。先程から顔をこちらに向けていたようですぐに視線が合った。その途端、歩みが止まり、表情が凍りつく。

「自分で探せ」

低く冷たい声で、それでもはつきりと聞き取れる大きさを胡睦に言い放った。固まっていた胡睦が何かを言いかけようとしたが、ツイと前を向くとさっさと歩きだしてしまった。

「え？ あ、ま……待ってよ、フィフィ！」

慌てて追いかける胡睦。

何度か声をかけたが、それを無視してどんどん先へと突き進んでいく……。なんとか立ち止まっているフィフィに追いつくと、目の前にはベンチがあったりする。ちょうどよく日陰も設置されていた。

「あ、ありがとう……」

「どづいたしまして」

いつもそっけないくせに、意外と優しいじゃん！ とフィフィに対する考えを改めた胡睦。その返答もそっけないものだったが。

せっかくフィフィが見つ付けてくれたことだし、と思いそのベンチに腰掛ける。はあ、と安堵のため息が思わずもれてしまった。

そんな胡睦の様子を観察していたフィフィは、やがて胡睦の足下

にある涼しそうな所にちょこんと座る。しかし、思ったより涼しくなかったらしく、すぐさまベンチ下へと移動。数分後には横になっていた。どうやら眠ってしまったらしい。

「うわぁ、かわいい……」

ベンチから降り、その下にいるフィフィを覗く胡睦。

普段見ることのないその寝相に、小さく感嘆の声を上げていた。時折、大きな茶色い尻尾がふわりと揺れる。その尻尾をつかみたくなる衝動を胡睦は必死に抑えていた。だが、抑えきれなくなり、つかもつと腕をそこへ伸ばす。

「ごめんなさい」

「っ!？」

寝ているはずのフィフィから突然の謝罪の言葉。それに驚き、つかもつと伸ばしていた手をサッと引つ込めた。数秒後、ゆっくりとフィフィの顔を覗きこむ胡睦。相変わらず穏やかに寝ているし、寝言? ……と思った矢先、フィフィの目から何かが零れ落ちる。

「え?」

「ごめんなさい……」

再び驚き、その正体を確かめようとしたとき、また謝罪の言葉を発した。しかし、今度は断続的にその言葉をつぶやいていた。

「ち、ちよつと……、フィフィ?」

いい加減起こさないと危ないんじゃないか。

そう考えた胡睦は、控えめにファイファイに声をかける。しかしその声に反応したのか、咳きはよけいにひどくなり、起きるところではなくなった。雫の数も多くなり、地面に小さなシミを作り出していた。

「ふい、ファイファイ!? 起きて。起きてよ、ファイファイ!!」

少女がひとり、ベンチ下に向かって声を上げるその姿を、通行人は何事かと思いい奇の目を向ける。しかし、胡睦はそんなことは気にせず、ファイファイを起こそうと躍起になるが、全く起きない。焦りからか、暑いからか、彼女の額に汗が浮かび、流れた。

「ねえ、つてば……」

必死に起こそうとしている胡睦の目から、ファイファイが流すものと同じものが流れ始める。それでもファイファイは目覚めない。悪夢にとらわれているのだろう。

もう一度声をかけようとしたその時、自分と呼ぶ声が聞こえた。胡睦を置いてきたことが気になり、ユウイが戻ってきたのである。

「ユウイ!!」

胡睦は自分を探すそのポケモンの名を呼ぶ。その声が聞こえたのか、30秒としないうちに自分を見つけてくれた。

ユウイが人込みをかき分けその姿を確認したとき、胡睦は地面に座り込み、途方に暮れた表情を見せていたという。

「……どうしたの?」

タمامシシティ以来の胡睦の涙。声をかけるが、胡睦は話そうと

しない。代りに胡睦の指がベンチ下を指していた。不審に思いそこを覗きこむと、フィフィが何かに苦しみ、涙していた。瞬時に何が起きているかを悟る。

「フィフィ？ フィフィ！ 起きろ！！」

声をかけるたびにその音量が増すユウイ。半身をベンチ下に潜り込ませ、フィフィを揺り起そうとするが、起きない。一度ベンチから出ると、フルフルと体を震わせもう一度潜り込む。

本当はしたくないけど、と思いつつ、片手を彼の肩に乗せた。そして微弱な電気をそこから流す。が、しぶとく起きない。ムツとしたらしく、自身が10まんボルトに使っているような強力な電気を一瞬、流した。

叫び声に等しい声と共にフィフィの目が開く……。

「……やっと起きた……」

「なんか、肩痛いんだけど……なんで？」

これで起きなかったらどうしようかと思ったユウイと、電気を当てられ少々焦げてしまった自身の肩を不思議そうに眺めるフィフィ。それぞれ思うことはあっただろうが、のそのそとベンチ下から出てきた。

「フィフィっ！！」

「うわ！？」

フィフィの上半身が出てきた途端、ギュッと抱きしめる胡睦。わけが分からず、されるがままになっているフィフィ。その様子をただ眺めるだけユウイ。よかった、と胡睦が何度も繰り返し口にして

いた。

「……なんで、泣いてたの？」

ひとしきり落ち着いたころ、胡睦がそう問うた。

初めのうちはそれこそ意味が分からずポカンとしていたフィフィだったが、自身の顔が濡れていることにその時になって初めて気づく。夢の内容を思い出したのか、浮かない顔で俯いてしまった。

「フィフィ？」

「ごめん、話せない」

心配になりそう声をかけたが、謝られる。いつもはピンと立っている茶色い耳が、その時はくしゃりと元気をなくしたかのように垂れていた。

再び名前を呼ぶと、無理やり作った笑顔で「ごめんね」と返された。それは今までに見たことのないほど悲哀の漂う表情で、子どもである胡睦でさえ、それ以上声をかけることを躊躇ためらわされた。

「ねえ、」

微妙な空気が漂う中、誰かが声を発した。 ユウイである。

「椎那達の所に行かない？ ピチユーもいるんだ」

最後のおまけの言葉は胡睦に対して言ったようなものである。

この数週間の旅の中で、胡睦が大の可愛いもの好きということが分かっていく。そのことから、1時間ほど前に胡睦が「可愛い」と

言っていたピチューを引き合いに出したのだ。結果、「行く」という了承を簡単に得られた。

「……じゃあ、ピカはピチュー達に会えたんだ」

まだ暗い影を残してはいたが、ホツとしたように呟くフィフィ。兄弟が再会したと聞いて、少し安心したようだ。

「じゃ、行こうか？」

うん、とひとりと一匹が頷く。それを確認したユウイは、ピチュー達が住むあの公園の片隅までふたりを案内するべく、先頭に立った。

ユウイが胡睦と会ったとき、こちらはこちらで一波乱巻き起こっていた。

「おい、ホーホー。降りてこいよ」

とあることがきっかけで、ホーホーの居場所がその場にいる者たち、全員に知れ渡ってしまったのだ。

それを知って激怒したのはもちろんヨルノズク。理由のひとつに椎那達を置いて家を出たことがあるが、それよりもごく最近のことそれも6時間以内に起こった、あの出来事が大きな引き金となっている。

「お前、よくも僕をまいてくれたな」

「な、なんのことでしょーか？」

兄の声色に焦りを隠さずにはいられないホーホー。

本当のことを言ったら 否、言わなくても、恐ろしい目に遭ってしまふ……。そう言うわけでホーホーは必死に身を隠しているのだ。

「袋のネズミなんだよ、お前は。さっさと降参して出てこい！」

ヨルノズクの荒げる声に再び震えだすピー。しかし、今度は両サイドに兄が付いているせいか、泣き出しはしなかった。ポンポンと優しく頭をなでてくれるピカと、ずっと手を繋いでくれているピチユーのおかげである。

「い、嫌に決まってるだろ！ 何のために僕がこの地方にき」

「知るかよ、んなこと」

弟の言葉をよく聞きもせずに一蹴する。すぐそばにいる仲が良さそうなねずみ兄弟とは大きな差だ。

「だあー！！ もう！！ ヒトの話くらい聞け！！！！」

だから友達少ないんだろ、バカ兄貴！」

ホーホーが吹っ切れてしまった。そして言うてはいけないである言葉まで、口をついてさらりと saying してしまう。

「 てっめえー！！」

ヨルノズクは怒声と共にホーホーが隠れている木に突進していった。ホーホーは大慌てで大空へと逃げるが、当然の如く、その後をヨルノズクが追ってくる。

広い空をあちらこちらと飛び交う2匹の鳥ポケモン。そんなふくろう兄弟のケンカを周りのポケモンたちが啞然として傍観するなか、椎那はひとり、迷惑そうな顔で深々とため息をついた。どうやら、2匹が家にいた時はこんなケンカは日常茶飯事なことで、頻繁に起こっていたようである。

「ユウイ、早く戻ってこないかな……」

そう言って、ユウイが去っていった方向をジッと眺めるのだった。

「何、これ」

「……ホーホー、だいじょぶ？」

「おい……」

それからおよそ30分後。ユウイが胡睦、フィフィと共に椎那達のところへ戻ってきた。その際の発言が先ほどのものである。順にフィフィ、胡睦、ユウイが発したものだ。

その時の現状と言うのが、木の葉の付いた枝がいたるところに散乱しているわ、木の葉が見渡す限りに落ちているわ、なぜかいるんなどところに穴が開いているわと散々だった。そしてホーホーはある程度高さがある所から落ちたらしく、若干地面に埋まっていた。胡睦がそこへ駆け寄ると、自力で地面から抜け出てきたがものすごく不機嫌に見える。

パタパタと短く小さい翼を動かすと空中に飛んだ。辺りをきよろきよろと見渡し始めるが、目的のものが見つからなかったらしく、チヨンと地面に降り立った。

「……兄ちゃんは？」

目の前にいる胡睦には気もくれず、ただ自分の目的のものの行方を見ていた。だろつヒトに問う。しかし、誰も答えない。それを認識すると、はあ、と思いたため息をつき、萎えてしまった。

「ホーホー、何があつた？」

ユウイがホーホーに近づき、怒りを含んだ声色でそう尋ねた。問われたほうは、再びため息をつく。とケンカした、と一言だけ言った。

「ただのケンカじゃないよね？　ここまでなる？」

「いつもはならないよ。ちよつとエスカレートしちゃたんだ」

厳しい目でホーホーを見つめるユウイ。その視線を直に受けながら、ポツポツと理由を話し始める。

「ちよつと、僕が言いすぎたんだ。……ごめん、迷惑かけて。

「ここ、ピチュー達の場合なのに……、僕……」

相当反省しているらしく、しょんぼりとうつぶむいてしまった。胡睦はそんなホーホーの隣にしゃがみ、頭をゆっくりと何回かなでる。微かに嬉しそうな表情をみると、胡睦に寄り添った。

ユウイはそれ以上責める気にならず、もうひとりの加害者をその場から探すが、やはり見当たらない。椎那やミウにも尋ねるが、期待した答えは返ってこなかった。ただ、空高く舞い上がると消えてしまった、という情報は掴むことが出来た。

「そう言えばさ、そのイーブイって……」

ホーホーが今初めて気づいた、と言う様にフィフィと視線を交わす。フィフィはきよとんと首をかしげていた。その時には胡睦の愛撫を拒否していた。

「あの組織のこの子でしょ？ シルフから出て来るとこ、見たことある」

「……」

その発言にフィフィは目つきを鋭くさせる。口も閉じられ、どこか怒っているような、そんな様子である。

「別に興味無いんだけどね、僕は。兄ちゃんは興味ありまくりだけど」

そんなフィフィにお構いなしという風に、つらつらと言葉を並べるホーホー。ヨルノズクのように敵対意識は持っていないらしい。それにフィフィは少し拍子抜けしたらしく、僅かに口を開けた。

「兄ちゃんと僕は違うよ。あのヒトは自分が大事なヒトだからね。」

裕弥も大事か……」

久しぶりに出てきた兄の名前。その名前に胡睦と椎那はピクリと反応した。ふたりの反応に気が付いたのか、小さく「ごめん」と謝る。

その後パタパタと翼を動かすと、胡睦のリュックから空のモンスターボールを探り当てる。中央のボタンを嘴でつつくと、例の赤い

光がホーホーを包み込み、自らその中へと吸い込まれていった。

「あのー……。ホーホー？」

思い切りがいいと言うか、何と言うか。気が付けば、ホーホーは胡睦のパートナーとなってしまうていた。

33話 フィフィと胡睦とホーホーと（後書き）

『Adventurous?』紹介文の巻く』を作りました。

椎那の紹介を載せてあります。

o u t s i d e ・ 4 涙のわけ(上)(前書き)

今作品、初めての3部作？ です。

ホーホーが勝手に吸い込まれていったモンスターボール。その動きが止まった後、胡睦こむはすぐさまホーホーを出していた。

「なんで勝手に入るのよ！」

「別にいいじゃん。それに僕、もともと胡睦のパートナーなんだし」

まったく悪びれる様子がない。そして、悪いとも思っていないようだ。

「だ、だからって……」

「一手間、省けただろ？」

僕のそばで、そういう会話ばかりしている。椎那も止める気がないようで、ミウやユウイ、そして先ほど知り合ったばかりのピチュー兄妹といろんなことを話していた。

自分たちの旅についてこない？ とか、さっきのバック転もう一度見せて！ とか、そんなことを。

僕はというと、さっきベンチ下で見た夢に関わることを思い返していた。

僕はタマゴから生まれたとき いや、タマゴが出来たときからあの組織の一員となることが決まっていた。

僕が生まれたのはヤマブキの西のはずれにある、大きな木に出来

たウロの中。

そばにはまだ5歳だった姉ちゃんがいて、生まれたばかりの僕を愛おしそうにペロペロとなめていた。その時はよくわからず再び眠りに就いた気がする。それが、4月20日の出来事　僕の誕生日だ。

その日から1週間、僕は姉ちゃんのそばで過ごした。しかし、その期間を過ぎると、僕は人間の手によって無理やりシルフカンパニーへと連れて行かれた。そこで、僕は一生を過ごす羽目になりかける。　　というのもこの会社、僕らイーブイを使って何らかの実験を成功させようとしていたからだ。タマムシでミウが捕まりそうになっていたのも、そのせいだ。

小さいとき、本当に小さい1歳までの間、僕はその中で自由に過ごしていた。時々、1階のホールから外を眺めることもあったけど、大抵は1階と地下とをつなぐ階段に作られたちよつとした小部屋で、1日の大半を過ごしていた。

ある時、地下に設置された広い倉庫へ、わざと迷い込みに行った。そこにはたくさんの段ボール箱が積み上げられていて、ときには空の段ボール箱も混じっていた。大きさもそこまで統一されておらず、時にはその当時の僕の背の2倍近くはある段ボール箱も混じっていた。

僕はそこを遊び場に決めて、階段のように積みあがっている場所を見つけては、ピョンピョンと上を目指して登って行った。

次の日も次の日も、その倉庫に行ってはどこまで登れるか、という仕様もないことに挑戦していた。行くたびに段ボール箱の配置が変わっていて、飽きることはなかった。

そしてある日、誰かがそこに入ってきた。
隠れようとしたのだけど、タイミング悪く、段ボール箱から段ボール箱へと飛び移る最中に見つかってしまった。

「だれだ!？」

入ってきた主は、その声を張り上げていた。そして、僕が飛び移ったと思われる場所まで、なぜか軽々と登ってきた。当然の如く、見つかってしまった。

「……イーブイ？」

どちらが言ったのかはわからない。僕が言ったのかもしれないし、そいつが言ったのかもしれない。また両方ともが言った可能性もあった。なぜなら、そいつも僕と同じ、イーブイだったのだから。

「……なんでここにいる？」

明らかかな上から目線で、ものを言うそのイーブイ。幼心にも関わらず、ムカついた記憶がある。

「いちや、わるい？」

そいつはコクリと頷いた。そして、

「わるい」

とただ一言、言い切りやがった。

なんで、と言い返そうとしたとき、向こうから理由を話してきた。要約すれば、「ここは自分だけの隠れ家」だそうだ。今までは、僕

がここで遊んでいた時間と、そいつが遊んでいた時間がつまり具合に噛み合わなかっただけで、そいつも毎日のようにここに来ていたらしい。

「だから、でていけ」

「やだ。ボクもここ、きにいったもん」

「は？」

明らかに嫌そうな顔を僕に向けてきた。そして何を思ったか、一歩、また一歩と僕に近づいてくる。その迫力に押され、僕は近付かれた分、一歩後退するのだった。

「あ……」

ついに限界が来てしまった。後ろ足に段ボール箱が当たってしまった。左右を見ると段ボール。後ろを見ても段ボール……。知らぬ間に袋小路へと追い詰められてしまっていた。

「……ばーか。おまえ、なま」

「ばか、ってなんだよ！ ばかって！！」

追い詰められたのにも関わらず、啖呵を切ってしまう。相手もポカンと口を開き、言おうとしていた言葉を忘れてしまった様子だった。

「な、なんなんだよ、おまえ？」

「うるさい！ あっちいけ！！」

「ばかっていったほうが、ばかなんだ！」

当時の僕は「ばか」と言われたことが相当悔しかったらしく、よ

くわからない言葉をまくし立てていた。
そのせいでゼーゼーと荒れた息をついていた。

「……へんなやつ」

そう言ってあいつは笑った。

「ファイファイ、行こーよ」

物思いから元の世界に戻ると、辺りは薄暗くなっていた。話の内容からして、近くにちよつとした旅の宿があるらしく、そこで今日は泊まるという。

「今行く」

僕は椎那の後を追いかけた。

案内役のホーホーを追いかけて、胡睦やピチュー達は先に行ったらしく、ユウイとミウは立ち止った椎那と僕を待つべく、離れた場所で立っていた。

今回もヨルノズクを探すことは諦めたそうだ。椎那らしいと言ったら、らしいけど。

「おれは、レイ。おまえは？」

「ふん！」

「……なんだよ。ばかっていったの、まだきにしてんの？」

僕は段ボール箱の置かれていない床の上に座っていた。レイは苦笑して僕の顔を見つめていた。

「じゃあ、いくつだよ、おまえ」

「かんけーない！」

レイは仲良くなるうとしていろいろ話しかけてきていたらしいけど、僕はその思いをことごとく打ち砕いていた。僕はその時まで「ばか」と言われたことがなかったせいで、余計に悔しかったらしい。

「……なあ」

「なに？」

「おれ、おまえのこと、どうよべばいいんだ？」

質問を変えてきた。その問いに何の迷いもなく僕は名乗っていた。先ほどまでかたくなに拒否していたというのに……。

「やっぱり、ばかだ」

レイはそうつぶやいたらしい。僕には聞こえなかったから相当小さな声だったのだと思う。

「おれ、3さいだけどさー。ファイファイ、おまえは？」

「……いち」

啞然としていた。

そう。1歳になって半年が過ぎたころに、啖呵を切ったり、拗ねたりといろんなことをしていたのだ。たぶん、というか絶対可愛くないと思う。

その日から毎日、僕らはその倉庫で会うようになった。

そして出会ってから3日後、シルフを牛耳るあいつ　どうやら組織のボスらしいあいつから呼び出しがあった。なんでも僕に伝えたいことがあるらしい。そういうわけで、僕はあいつがいる13階まで連れて行かれた。

部屋に入ると、そこは薄暗かった。

その時の僕は、今暮らしている所がどういう場所か知らなかったし、どういう枠組みに入れられているかも知らなかった。ただただ平凡な普通のイーブイとして暮らしているとしか、思っていなかった。年齢からして当たり前前だと言えば、当たり前前かもしれないけれど……。

「ファイファイ、か？」

部屋の窓際に置かれた椅子に座り、机越しにこちらを向いていた。ただ、逆光のせいで顔までは確認できなかったが。

低く、重圧と威圧のある声で話すあいつ。その声に僕はただ「はい」とだけ答えた。部屋に入る前に、ここまで連れて来た人間のパートナーらしいポケモンから、そういう風に答える、と指示を受けていたからだ。

「……部屋の中央まで来い」

「はい」

「中央＝中心、真ん中」という方程式が、いつの間に頭の中にあつた。1、2日前、レイがそう言っていたのを思い出したのだ。

トコトコと、部屋の中心と思う場所まで歩いて行き、立ち止った。

そして、話が始まる。

「お前に付き人をつけることにした。
お前とさほど年は変わらないが、お前より遙かにものを知っている
奴だ。そいつに此処のことや世間のことを教われ。いいな？」

僕が頷いたのを確認すると、あいつはこう言った。

「……入って来い」

僕が入ってきた扉に向かって声をかける。すると、「はい」と言
った凜々しい？ 声が聞こえてきた。どこかで聞いたことがある、
と心のどこかで思ったのは、間違いではなかった。

「しつれいします」

そう言っただけから入ってきたのは、レイだった。

驚いて口を開けている僕の横まで来ると、ピタリと止まり、お辞
儀をした。

「れ……い？」

「なにかごようでしょうか、さま」

レイは僕に目もくれず、淡々と会話を進めていた。僕はと言つと、
そんなレイを不思議そうに眺めていた……と思う。

「今日からそいつの付き人になれ」

「……しようちいたしました」

そう言っただけで深々と頭を下げるレイ。僕のほうに向きなると、な

んだ……おまえか、という目で見られた……気がする。僕がポカン、
としていると前足を軽く踏まれた。

「いたい!?!」

「なのね。あと、よろしくおねがいします、っていう!」

「え、」

「はやく。おれ、さっさとこのへや、でたいんだよ」

よくわからないまま小声で話すレイに押され、名前とあいさつを
そのまま真似た。その後、一言三言交わすと、レイは正式に僕の付
き人となっていた。

「では、しつれいします。 おまえもいうの!」

「え、あ。し、しつれいします」

そうやって僕らはその部屋を出た。入るときには気づかなかった
けれど、扉の上にプレートが付けられていて、『社長室』と書かれ
ていた。

「あーあ。いきぐるしかった。

おまえ、テッテイテキにおしえこんでやるから、かくごしとけ」

レイにきつく睨まれる。教えてもらうのは結構なんだけど、そ
の前の単語、ものすごく聞きたくなかった。おかげで、外国語に聞
こえた。

「ファイファイ、寝るよー」

「うん、おやすみ」

椎那も胡睦も布団に入って寝る準備万端。それぞれの枕のそばにはミウとトゲピーが転がっていた。うん、文字通り、あっちこっちに転がって椎那たちが寝るのを邪魔していた。

「ミウ！」

「トゲピー！」

それぞれのトレーナーに名を呼ばれ、動きが停止する。そして2匹とも眠る体勢に落ち着いた。

「それじゃあ、明日ね」

胡睦は足もとで眠るピチュー2匹に声をかけていた。2匹ともすでに眠っていて、微かに寝息が聞こえてくる。クスリと笑うと、胡睦も横になり寝始めた。

「ファイファイ、」

ユウイがふたりとも寝たのを見計らって話しかけてくる。

「昼間、夢で何があったの？」

それから数か月から1年弱。僕は言われた通り、徹底的に礼儀を教え込まれた。敬語やら態度やら、そういうものを。

レイは1歳になったところに、それらを兄に僕にしている時よりも厳しく教え込まれたらしい。だからこそ今、身に付いているの

だとか。

「いや。ぜったい、はなしことばつかうなよ。とくに、としうえのまえ」

「としうえとか、としたとか……どうやってみわけろっていうの？」

「……ひとつ、いいことおしえてやる。おれより、としたなのはおまえだけだ」

要するに、出会う全ての人間とポケモンに敬語を使えということらしい。なにそれ。

「それがこのルール。……あと、きのう、おしえたやつのおぶくしゅ」

「またあ？ もうおぼえた」

「なら、そらでいえ、そらで。おれのかお、みるな」

「……みたって、なんにもかいてないじゃん」

「だったら、まいかまいか、おれのかおみながら、あんしよすんな！」

毎日毎日、これの繰り返し。

教えてくれるのがレイでなければ、きつと逃げていたと思う。年が近いせいもあって、レイは僕が何を考えているのか、何を思っているのか、よく理解してくれていた。

「で、おぼえたっていうんなら、あんしよしろよな」

「いや？」

ここはシルフカンパニー、って言って、おもてむきはふつうのかいじゃ。

うらは、あくのそしきがつどう、口……なんとかだん」

「……おい」

「で、こじはそのほんぶ。……なに？」

レイはジトと僕のことを見ていた。

「ろ、なんとかだん” ってなんだよ？」

「いいにくいんだもん。　　っていうか、いみかんがえたらいい
くない。」

つうしょう、ロダン

「かつてに、つうしょうつくんなー!!」

「いいじゃん、かつこいいもん」

「んな……!!？」

ワーワーと騒ぎながらいつも何かを覚えていく。

当時は言葉を覚えるのに必死で、それがどういう意味を示しているのか、確かめる暇はなかった。ただひとつだけ、組織の正式名称の訳はレイが教えてくれた。

「濁らせる」を1つ目の訳にもち、「怒らせる」「や」「苛立たせる」を2つ目の訳に持つ英単語『royal』　ロイルというのが組織の名。

平和ボケしたこの世を濁らせる、つまりは引っかき回す存在だということだろうと、僕は考える。

そして、僕の涙のわけは、これからおよそ1年後に起きる出来事が発端だと言える。

ちびファイファイとレイの会話が平仮名なのは仕様です。

よつやく組織の名前が出てきました。

実は、今まで考えてました (略)

outside・4 涙のわけ(中)(前書き)

少々ダークサイドに入ります。

ファイフィとレイの会話にも漢字が入りました。

喜ばしき、成長です！

僕が3歳になった年の5月初旬、弟が出来たらしい。その出来たらしい弟の世話をしろ、と組織のボスからの伝言を受け取り、僕はその弟のお付きにさせられた。そのころにはレイから教わるということもあまりなくなっていた。だからだと思う。

弟の名前はフー。

何がどうなつてこういう短く単純な名前になったのかは知らないけど、わかりやすいし、覚えやすいからいいと思う。

フーは、僕が会ったこともない母親のもとで2、3か月ほど過ごしたうえで僕に預けられるらしい。だからそこまで手を焼く必要もないから、僕に面倒を見るという話らしい。

姉ちゃんは姉ちゃんで命じられた仕事があるらしく、フーの世話は必然的に僕ひとりやらなきゃいけないらしい……。レイも手伝つてはくれたけど。

この3年間で姉ちゃんにあつたのは数えきれるほど少ない。だからと言つて寂しかったわけでもない。一度だけ、フーが生まれる前に一度だけ、姉ちゃんに外に連れ出してもらったことがある。それが、ユウイの家だった、というわけだ。

それからおよそ半年後の10月後半。

僕は名前の知らない誰かに呼び出しを食らった。あちらの一方的な知り合い、ということしか知らされなかった。何が起るのかも分からずに、指定された2階のちよつとした部屋へ向かう。

それが運の尽きだった。

そこにいたのは種族もよく知らない1匹の男のポケモン。僕がそこへ入ると同時に内鍵をかけられ、簡単には出られなくされた。部屋も太陽の光だけで賄っているらしく、僕が暮らしている部屋より一段と暗い。

僕がキヨロキヨロと部屋を見渡している間も、あちらは何も話しかけてこない。痺れが切れた僕は、その人に問うた。

「……ボクに、何か用ですか？」

「ああ、そうだ」

思った以上に低く、暗い声だった。だけど、耳に残る嫌な声だった。

「なら、何の用ですか？」

「お前、父親のことを知っているか？」

「父親……おとうさんのこと？」

きよとんと首をかしげた。実を言うと、母親のことでも父親のことでも僕は知らなかった。会ったこともないし、知らないままずっと生きてきたから、知ろうという気さえ起こらなかった。

「知らない……、です」

「そうか　ならば覚えておけ。俺がお前の父親だ」

「……そう、なの？」

実感がわかず、再び首をかしげる。父親だ、といったそのポケモンは、無表情で何を考えているかよくわからなかった。でも、僕の直感が告げた。ここに居ちゃ危ない、と。

「ああ。あとひとつ、ふたつ、教えておく」

「何？」

「お前以外の兄弟の父親は俺じゃない。別の奴だ」

「どうやら、ややこしい家族関係になっているようだ。　　ということは、姉ちゃんとフーの父親は同じで、僕だけは目の前にいる」
「の人が父親、ってことが。」

「ふたつめ。俺にお前は必要ない」

「……………へ？」

「だから、死んでもらう。今、ここで」

開いた口が塞がらない、というのはこういう状況のことなのか？
それ以前に、今しがた言われた言葉が理解できないでいる。

…………… 必要ないから、死んでもらう？ …………… 死んで、もらう……………。

僕、殺される、ってこと？

「いやいやいや、意味分かんないって！

なんで、そう」

「黙れ！」

少しは使えるかと思って生かしておいたが、やはり必要なかった。
それだけのことだ」

言うが早いのか、そのポケモンは僕に襲いかかってきた。ギリギリ
でかわしたけど、今の、直撃していたらただじゃ済まない……………。

直感が伝えたかったことは、こういうことだったらしい。

なんとかそのヒトの牙から逃れようと思ったあっちこっちに走るけど、

それも持たなくなってきた。体が小さい故に、体力も少ない。相手は僕の3倍……少なくとも90cmはあるのだ。体力の差なんて、分かり切っている。だけど、逃げることしか、今の僕には出来ない。たいあたりなり、でんこうせっかなり、出来ないことはないけど、どちらでも直接攻撃。自分からどうぞやってください、と言っているようなもんだ。

とにかく、扉の鍵は開けないと……。

「っ!？」

いつの間にか近づかれていた……。後ろから首根っこをくわえられて、宙ぶらりんの状態にいる。これじゃあ、暴れることしかできない……。

バタバタと暴れてはみたけど、そんなもんか、という視線を感じる。次の瞬間、部屋の奥へと投げ飛ばされていた。背中から壁にぶつかり、床に落ちた。

「いったあ……」

「痛いのが嫌か? なら、ひと思いに」

早いつ!?! さっきまであっちにいたのに、もう目の前にいる……。

「それもやだ!」

なんとかかして直撃は避けたけど、体の横に痛みを感じる……。見ると、血が出ていた。

「あ……」

「動くな。動かなかつたら痛みも感じないからな」

「う……うわぁ！」

いつの間にか、そのヒトにたいあたりを仕掛けていた。どうやら、近づけてきていた顔に直撃したらしく、ぶんぶんと頭を振っていた。その隙に、扉まで近づいて、鍵を開けた。

「お前、敵に背を見せていいと思っているのか？」

「え？」

振り向く暇もなく、首のあたりに激痛が走った。どんなに鳴いても、放してくれない。どれだけ時間が経ったかわからないけど、叫びすぎて声が出なくなっただころ、牙が首から離れるのを感じた。

「やはり、生かしておくべきじゃない、か」

荒い息遣いをしている僕とは正反対に、涼しい顔をして冷やかにそう話す。

……僕は、イラナイコなの？

そういう考えが頭の中をよぎった。でも、同時に僕の名前を呼んでくれるレイヤフー、姉ちゃんの声も聞こえた。3人とも、僕のことを必要としている、と思う。そう、信じたい……。

「……何をしている？」

僕が扉のノブを回そうとしているのが見つかった。そして、ゆっくりと近づいてくる気配がする……。

「言っただろう。敵に背を向けるな、と!！」

奴が噛み付いてくると、僕が扉を開けたのはほぼ同時だった。扉が開くと、僕は床に倒れた。その上にあいつが。

「何の騒ぎだ!？」

「ふい、ファイイツ!？」

知らない誰かの声と、姉ちゃんの叫び声を最後に、僕の意識は途切れた。

「これが父親との最初で最後の出会い」

驚いて、何も言えずにいるユウイに僕はそう話す。しばらくその様子を見つめていたけど、信じたくないという様子で首を振っていた。そして、話題を変えて来た。

「弟……元気？」

「うん。死んだ」

再びユウイの顔が引きつった。

僕のキズが完全に塞がるのに、実に1か月以上かかった。姉ちゃんとレイが交互に僕とフリーの世話をしてくれていたらしい。その間、父親と名乗ったポケモンが部下のポケモンたちに僕を探して殺すよ

う、命じたらしい。
そして、それは本気だ。

あの時、姉ちゃんと一緒に駆けつけてくれた名も知らないポケモンは、死にそうになっている僕を助けてくれたらしい。そのおかげで九死に一生を得ただけど、そのせいで、父親とその部下に狙われ、殺されてしまった。

レイが悲しそうにその訃報を持ってきてくれた。

久しぶりにフーに会いに行くと、嬉しそうな顔で迎えてくれた。フーのいる場所は地下1階の、牢屋。フーはここに移されてから一度も出たことがない。

だから、空の青さも、太陽の明るさも何も知らない。外に出れば見るものすべてが初めてのはずだ。

「フィフィ。ぼく、いつお外に出れるの？」

「うーん。わかんないけど、絶対に出してあげるからね」

そう約束して、その日は終わった。

だけど、僕ももう自由に外と中を出入りできる身ではなくなるうとしていた。一歩でも外に出たら、罰を受ける。そうでなくても、理不尽に痛めつけられることも多くなってきた。

恐らく、いや絶対に父親の根回しに違いなかった。

そんなこんなで年が明け、僕の誕生日が過ぎ、フーの誕生日が近付こうとしていた。

そのころ、当たり前だが僕は4歳になっていた。

しかし、状況は良くなるどころか酷くなるばかりだった。小さかったころは　　というか去年の今はレイの付き添いのもと、外に出たりしていた。

今はそれさえも許されず、少しでも逆らうと罰則部屋へと連行されるのがオチだった。それほど、僕に対する扱いは酷いものになっていた。階級で言うと、最下位もいいところで、僕の場合はそのさらに下、とランク付けされていたらしい。何度も言うけど、父親の根回しだ。

レイにはそんな僕と違って友達が数人出来ていた。

つい最近進化してしまったらしい元イーブイのコムギ、彼の友達のマグマラシとベイリーフの異種兄妹、そして、トゲチックやオオタチなど。彼ら以外にもサンドパンや、そのヒトの弟のサンドといったようにたくさん知り合いがいた。彼らと遊ぶ約束も時々していたらしく、僕を置いてどこかへ行く日も多々あった。

そんな時だった。僕は再びあの社長室へと呼ばれたのだ。3年前のような失態はなかったものの、その人間はあの時と同じ威圧的な声で僕に告げた。

「弟を、実験に使う」

「その操作をお前がやれ」

その短い2文だけはつきりと聞き取れた。後のこと　　日時以外
は忘れてしまっていた。

拒否、ということとは許されず、了承する返事しか求められていなかった。

「弟の1歳の誕生日。その日に決行だ」

フーにとっても、僕にとっても、最悪な誕生日となることを予め
言うておく。なぜならこの実験のせいでフーは命を落とすのだから
。

空には月が出ていた。細いのか、ちょっと太いのかはよく分から
ないけど、とりあえず出ていた。

「何の実験だったの……？」

ユウイが申し訳なさそうに尋ねてきた。ただ、僕は期待に添える
ような答えは持ち合わせていない。

「分からない。聞いてないもの……」

そう……とだけ言って、うつむいてしまった。それを見ると、悲
しくなってしまった。だからつい、ごめんね、と謝ってしまったん
だと思う。

ユウイはそれを聞くと、フルフルと首を振った。否定の意味を示
すことはすぐに分かった。

「ファイファイ。つらくないの、今」

「そんな感情、どこかに置いてきちゃった」

ユウイからしたら無理に笑っているように見えるだろう。だけど、
悲しいとか、つらいとかいう感情を取り戻したのは、この旅が始ま
ってからだ。

「フー!!」

僕がいくら叫べども、弟は動かない。当たり前だ。心臓、止まっているもの。行き場のない悲しみが怒りに変わる。

操作、というのは至極簡単なもの。

機械の設置はフーの牢の前に、あちらが勝手にやってくれていた。だから僕は、バーを引くだけで良かった。だけど、逆にバーを引いたからフーが息絶えた。

「…………ボクのせいだ…………」

フーは青い空も、赤く輝く太陽も、夜の空に浮かぶ月や星たちを一度として見ることもなく、逝ってしまった。約束、果たせなかった…………。

実験が終わったたろう時間に、科学者らしき人間が何人か入ってきた。そして、フーの姿を見ると、失敗か…………とつぶやいた。別の人間たちは、成功しないとおかしい、運んだ時に何かが落ちたんだ、とぼやいていた。

言い争う人間たちを横目に、僕はその部屋を出て行った。争ってフーが戻ってくるのなら、いくらでも争えばいい。だけど、戻ってくるわけ、ないじゃんか。

レイが言うには、僕は相当神経を擦り減らした様子で部屋に戻ってきたらしい。それを見て、明日の約束を急遽キャンセルしたらしい。僕はと言うと、そのまま寝入ってしまった。

次の日起きると、レイが止めるのも聞かずに、フーのいた牢屋へと向かった。昨日までいたはずのフーはどこにもいなかった……。気がつけば、僕の後を追ってきたらしいレイが、隣にいた。僕と目が合うと悲しそうな顔をして、戻ろう、と一言言い、出て行った。

その日からレイは、閉じこもってしまった僕のために、僕の部屋へ自分の友達をひとりずつ連れて来ていた。

初めのうちは、双方とも僕に気を使って控え目に話していたのだが、いつの間にか、数人が集う憩いの場と化していた。僕に話を振ってくることもあったけど、それをいつも無視した。僕用に与えられていた薄い毛布を頭から被ると、頑として口を利こうとしなかった。

僕がそれをする、レイがいつも悲しそうにため息をつく音が聞こえた。また、僕の代わりに話を振ってきた相手に謝る声も聞こえた。別にいい、と返してくる相手もいれば、何こいつ、と僕に反感を持つ相手もいた。だけどそれが毎回のこととなると、僕がそうしているのは当たり前と解釈されたようで、前ほど話しかけては来なくなった。

ある日、レイが僕に話を振ってきた。久しぶりに僕とレイしかない空間だった。

その時には僕もある程度心の傷が癒えていて、友達同士の会話にも混じることが増えてきていた。

「オレ、来年からいなくなるから」
「は？」

単刀直入にそれだけを言われた。

よくよく聞いてみると、来年の春、僕より2歳上のレイは小学校

に入ることになるらしい。そして、いい機会だということだ。レイの兄がレイと一緒に違う地方へ行くという。

「蹴ってよ」

「無理だな。決定事項。アニキが勝手に決めやがった」

「蹴って、てば」

駄々をこねる僕に、レイは衝撃的な発言をする。

「あんなー。そういう風に命じられたの、オレ。」

お前が知らないところでオレも仕事してんの。あいつらはその仲間なの」

レイより1歳下のコムギも、マグマラシもベイリーフも、2歳上のオオタチやトゲチックも仕事仲間だと言う。知らないうちに置いていかれていたらしい。

「オレだって、最初拒否したんだぜ？」

だけど、決定事項だって、向こうも譲らないんだ。どうかしてるよ……」

お前のこと、置いて行きたくないのに……。そう漏らすレイは本当につらそうだった。

そうしてレイは僕には何も告げず旅立った。それが、僕が5歳になる春だ。

また、レイがいなくなったことにより、僕に対する風当たりが今まで以上にきつくなったのは言うまでもない。

o u t s i d e ・ 4 涙のわけ(中) (後書き)

フィフィはまだ「ボク」でした。

outside・4 涙のわけ(下)(前書き)

ファイの過去編、最終話です。
ちよっと箇条書きが多めです。

そこまで話した時、ユウイが再び質問をくれた。

「レイはハウエンに何をしに行ったの？」

ずいぶん、というか数年前のことなので、簡単には思い出せない。でも、確かオオタチはこう言っていた。

「偵察……だったかな」

へえ、と相槌を打つと、そのまま静かになった。夜が、更けていく。

レイが行ってしまった次の週より、僕は姉ちゃんと会うことさえ完全に遮断された。それまでは頻繁に とまではいけないけれど、2週に1回は数分だけど話せるときがあった。ただでさえつらいのに、それ以上つらい出来事を増やさないで欲しかった……。だからつい、反抗してしまった。

「なんで！？ なんでダメなの！？」

「うるさい、黙れ」

そう言われ、何度も頬を打たれた。それでも、ずっと「なんで？」を繰り返していたら 蹴飛ばされた。後方にあった壁に激突し、フラフラしながらも立ち上がる。

「お前、また入れられたいのか、あの部屋に」

「そうそう。お前、今日から監禁、な。あの部屋で」

「どちらにせよ、入れられるんじゃないか。一生あそこで暮らせば？
そうしたら俺らのストレスも発散できるし」

その2匹組をキツと睨むが、2匹はゲラゲラと嘲り笑っていた。
そしてまた、話しかけて来た。

「お前の姉貴、もうお前に会いたくないんだと」

その言葉を突き付けられた時、僕は負のどん底へと突き落とされた。
た。

大事に世話していた弟には死なれ、唯一の友人には去られ、たったひとりの姉には拒絶された。

頼る者も、必要としてくれる者さえもいなくなってしまった。それから、僕は感情が消えていった。

そしてその日、僕用の罰則部屋へと連れこまれた。それから毎日のように私刑を加えられたけど、どんなになぶられても、泣くことも、痛みに声を上げることも、徐々になくなった。最初のうちは、表情をしかめることもあったけど、それさえなくなっていった。

所謂、無表情とやつになった。

時々 本当に時々だけど、レイと仲良くしていたあの5匹が、代わる代わる僕を訪ねてくることがあった。それでも、僕は顔色ひとつ変えなかった。それ以前に、視線さえ合わさなかった。
ある時、オオタチと一緒に来ていたトゲチツクが言った。

「聞くフリでもいいから、話聞いてくれるか？」

返答はせず、ただ微かに僕がうなずいたのを確認すると、ゆっくりと話した。

「レイさあ、お前に言う前の春から決まっていたんだよな。ホウエーンに行くこと」

初めて聞く事実には耳をそばだたせた。それを知ってか知らずしてか、トゲチックは話を進める。

「でもその時って、ちょうどお前の弟が死んだころだったし、あいつ、言い出せなかったらしいんだよな」

レイらしい……。そう思いながら、話に耳を傾けていた。

「それで、決まっているのは変わらないし、お前は引き籠るし……。それであいつも、いろいろ苦労していたんだぜ？
言いつけられた仕事蹴ってまで、お前のそばについてさ」

ま、それはレイの代わりに俺らがやっていたんだけど、とオオタチが付け足す。

「で、あいつは思ったわけ。来年、自分以外に知り合いのいないお前を、放っておくことなんてできない、ってな」

「そんで、俺らが頻繁にお前の部屋へ邪魔しに行ったんだよ。友達をつく」

「友達なり知り合いなり、作らせるために。お前のこと頼む、って言われているんだよ、俺たち」

お前いいところ取りすんなよ、とオオタチがぶつぶつとトゲチックに不平を言う。それに対し、割り込んできたのはお前だ、と軽くあしらうトゲチック。そのうち、軽い言い合いが始まった。 。
 だけど、僕はそんなことは気にせず、今しがた2匹が言ったことに思いを張り巡らせていた。

レイが、僕のために？

僕のために、自分の友達を僕と仲良くさせようとして、連れてきていたの？

なんで？ なんて、そんなこと……。

「なあ、つらい時泣いたら？ そっちのほうで楽だよ。

友達^{レイ}いなくなつて、姉さんとも会えなくなつて、つらくないわけないだろ？」

お前ぐらいの年のやつが、と小声で付け足された。そんなこと言われても、泣く気が起きない。 というか、泣き方を忘れた。

「俺らさー、妹、友人のところに置いてくるんだ、もうすぐ。

ずっと、俺らのそばにいたらあの子たちまで、ここの被害に遭っちゃうからさ」

まだちっちゃいんだぜ。トゲピーなんか、今年の1月に生まれたばっかりなんだから。

彼女の大きさを示すように片手を床と平行に置く。 だいたい、15cmあるかどうかだった。僕がそれをじつと見てみると、生まれた時だけどな、と付け足された。今はそれより数cm高くなっているらしい。

「あのさー、時系列、むちゃくちゃになっってきてない？」

（僕、あのふたりに頼まれたの、4年の時なんだけど。

というか、トゲピーさ、来年で2歳だよ？

ファイイが話すその当時のふたりって3年だろ！？

生まれてないって、トゲピー！）

いろいろ突っ込まれた。またの名を指摘された、ともいう。僕の中ではそれは5歳のころに起きたと記憶しているのだけど……。

「……そう？」

んーと……、整理すると。

・僕が頼まれたのは5歳だから、トゲチックは4つ上の9歳。つてことは、3年。

・トゲピー、1月生まれ。トゲチック、6月生まれ。

・8月現在、トゲピーは1歳7か月。彼は6年、つまり12歳2か月。

・差は約10歳。正確には10歳と7か月ほど。

・もう一度言う、彼らが9歳の時に僕に頼んだ。

・9歳 - 10歳7か月 - 1歳7か月。

・どう引いても、マイナスが出る。

「……あれ？」

「記憶、入り混じっているみたいだね。色々ありすぎて」

どろぢやら、そうらしい。気付かなかった……。

「でもまあ、聞いて、聞いてー！」

「……うん」

眠いの、我慢しているのだろうか。目を塞いでしまっている。この時はまさか自分のテンションが原因だとは思わなかった。後でその事実を聞かされる。

話の流れ的に、オオタチにも妹がいる。そして現在、2歳？らしい。

(それ、やっぱり一昨年だろ、と突っ込むユウイの声は聞こえないことにする)

「なんでそんなこと あ……」

しまった、と思い口をつぐんでしまう。

「なんで、って……こんな所と関わらせたくねーしな、やっぱり」
「妹たちの思い踏みにじっちゃうけど、安全性が高いほうがいいからね」

「てか、“あ”って何？」

気まずくなつて、顔を背けた。それなのに、オオタチは何々、としつこく聞いてくる。と、トゲチックがポン、と手を打った。

「監視カメラだろ？ 切ってきたけど」

「…………え？」

オオタチは納得したかのように、ああ、と頷いている。カメラ、
……切った？

「い、いいの！？ そんなことして！」

驚き焦る僕に、トゲチックは言う。

「んー……。いけないけど、元に戻しとけば問題ない。
それに、こんな話をするつもりで来たのに、カメラあったら邪魔だ
ろ？」

…………もつともです。

「あと、扉？ 内鍵かけているから、誰も入って来られません。
何か問題ありますか？」

呆然とする僕に、トゲチックが悪戯っぽく問いかけてくる。それ
に答えるために、ぶんぶんと首を振った。 横に。

その当時。

僕を監禁しているその部屋は監視カメラが付けられていた。僕が
何をしているか見張るために。僕が何をされているか見るために。

そして、僕がここから出られないように、外からも暗証番号付き
の鍵が掛けられていた。もちろん、その暗証番号は特定のポケモン
にしか知らされていない。そして、人間も知らない。地下にあるこ
の部屋を使うのはポケモンだけだから。

むしろ、人間は地下よりも2階以上にいることが多いし、ここま
で降りてこないのは当たり前だったりする。でも、僕がここで何を

されているのはちゃんと知っているらしい。

はっきり言おう。 意味不明だ。

ついでに言うと、外鍵が開いている間は、今のように内鍵が当然のごとくかけられる。ただ、内鍵には2種類あって、外からカードキーを差し込めば開くタイプと、差し込んでも開かないタイプとがある。今かけられているのは、絶対的に後者だ。地味だけど、感じたくもない科学の力を感じる……。

「なー、組織（組織）から抜きたいと思わないの、お前」

トゲチックがバカ、と言って制止させようとしたが、遅かった。

「俺は思うけどなー。いつか抜けるんだ、こいつと一緒に」

そう言って、隣にいるトゲチックの手を握ろうとするが、その手をパシンと叩かれ拒絶されていた。

「あれ。なんか怖いよ、相棒さん？」

「お前さ。この子が俺たちと違うの、わかっているだろ？ そんなこと、この子の前で言うな！」

ジッと睨みつけながらそう言い終えた。……僕が、彼らと何が違うって言うの？

「そうだ。ファイファイ、階級制ってわかる？」

くるりと僕のほうを振り向くと、さっきとは全く違う表情でそう

問いかけて来る。

「や、あの……」

「そうだよな、知らないよな！ 階級制っていうのはな」

自分の失言を意識しているかのように、僕には一切質問はさせない気でマシンガントークを始めるトゲチック。いや、説明自体は分かりやすかったよ。うん。

「簡単に言うと、位が高いほどそいつが持つ力は大きい。

俺たちのいる組織は7から12の階級があるんだけど　まあ簡単に分けたら7つか」

なんだ、それ。

その後にはトゲチックが言ったことを、位が高い順に箇条書きするところなる。

1 .

本来的なトップ。だが、どこで何をしているかが不明で、その姿を見たヒトは少ないらしい。色は白。

2 .

実質トップと言われる位。発言権を無駄に行使する人がいる。色は紫。

例：僕の父親

3 .

ナンバー3だとか。発言権が増える……らしい。ちよくちよく危な

つかしい仕事もしている。色は青。

4 .

自由さだけが取り柄だが、その分仕事量が増える。外と中を自由気ままに行き来すること可能。罰則とかがなくなる。色は赤。

例：目の前の2匹（トゲチック・オオタチ）、レイ

5 .

一番よく分らない位。でも、罰則はすべて軽いもの。一番人数が多いんだとか。色は橙。

例：マグマラシ、ベイリーフ、コムギ

6 .

外に出てもいいけど、条件付き。この辺りから仕事を言いつけられ始める。色は黄。

例：姉ちゃん

7 . 室内暮らし限定。でも、その代わり自由。色は茶。

例：……僕？

「色」ってのは、その位に昇格・降格したときに強制的に持たせられる星の形をしたバッジの色のことらしい。通称、『星』。僕は持っていない。

「……ちなみに、ABCで分けられる。

トップはSで表わされるけど、それより下の11の位は高い順にA、

B、C となる。

一番下は……K、だっけ？」

「アホ。6だ、6。細かく分けたら11だろうけど、6だ。

だから一番下はFで、CからEの位はC - ?とかD - ?とかになるんだよ。

Fだけは例外で?まであるけど」

途中で話を持って行ったオオタチが、盛大に間違える。トゲチツクが呆れつつ間違いを訂正するが、とりあえず、こついつことらしい。

『S A B C - ? ? ? D - ? ? ? E - ? ? ? F - ? ? ?』

「へえー?」

「怒るなよ、フィフィ」

相当不機嫌な声になっていたらしく、そうなだめられた。だ
けど、引つかかる。

「色は? どうなるの?」

「?になったら薄くなる。薄橙とかだな」

「じゃあ、F - ?は?」

「聞くな……」

……ほら。どーせ、そうだろうと思ったよ……。

話の先が見えた僕は完全に拗ねてしまう。

「でも、知らないところの先困るぞ」

「そーそー。 ってかお前、最初より感情むき出しになってきてるし!」

ケラケラ笑い始めたオオタチ。何がおかしいんだか。そのせいで余計に拗ねて、そっぽを向いた。

そんなバカイタチを放置して、トゲチックは真剣な表情をして僕の目の前に来た。

「……来年、お前も小学校上がるだろ」

そういえば、そつだ。コクリと頷く。

「入学式と、卒業式がある日は自由だ。ここから出られる。だけど、それに行く・行かないはお前が決める。そつでない、出席していないことになるから。」

たぶん、現状で行くと一度も授業ださせてくれないぞ」

なに、それ。

「たまに俺たちが誘いだしてもいいのだけど、低学年ってちょっと変わっているだけで、すぐイジめたがるからな。」

どちらかと言えば、そつちが問題だと思っただけど……」

鍵のかけられた扉がドンドンと音を出す。外で誰かが叩いているようだ。2匹はそちらに一瞬視線を向けると、また僕のほうを向いた。オオタチもいつの間にか、笑いやんでいた。

「長居しすぎだな。これ、あげるよ。」

持っけていても何も言われないうようにするから」

そう言っけて渡してくれたのは、僕の体の色と同じ色の布でできた巾着袋。中にはオレンやオボンなどの木の实が入っていた。

「とりあえず、今日はここまでだな。戻ろう、タオ」

そう言つて、相方の手を引つ張り、立たせる。そのころには扉の叩き方も相当激しさを増していた。

「じゃーな」

軽く手を振り、部屋から外へと姿を消した。

その後、ドヤドヤと騒がしく入ってきた10名ほどのやつらに、何をしていたか厳しく質問されたけど、詳しくは答えなかった。だけど、珍しく手を出されることはなかった。2匹が出ていき、やつらが入ってくるほんの数秒の間に、彼らが何らかの助けを出してくれたようだった。

まだ終わらない。だけど、もう時計の針が丑三つどきを指していた。

「ねえ、寝よ」

「え。突然だね……」

僕はユウイの前でふわぁ、とあくびをして見せる。そして片目を軽くこする。

「だって、眠いもん」

「……肝心なところ、抜けている気がするのだけど」

「知らなーい。僕、寝る」

無造作に置かれていた座布団を適当に持つてきて、その上で丸まり寝る体勢に入る。ユウイが軽いため息をつくのが聞こえた。仕方ない……。

「じゃあ、小学校に上がった後のことをちょっとだけ……」

トゲチックの言った通り、僕の状況はあまり変わらなかった。変わったと言えば、住む場所。トゲチックやオオタチに与えられている部屋の隣になった。ちなみに、組織のほとんどのポケモンは住み込みで働いている。野生であっても、だ。

「……どして？」

「嫌なら戻すけど？」

「ううん、ここがいい」

僕はポフン、と柔らかな毛布の上にダイブした。現在、2匹は僕の部屋にいる。

「……どーやったら位、上がるの？」

「命じられたことやり遂げられたら、だな」

「一生、無理じゃん」

不貞腐れて毛布のすみをかじる。なぜか、落ち着く……。

「俺らに与えられた簡単な仕事、分けることもできるんだけどなー？」

「……やる」

そう決意したのが入学式当日の夜。授業に出られる保証はなかったけど、初めての行事には出た。知らない顔がたくさんあったなあと思いつつしながら、毛布の気持ちよさと2匹がいることに安心し、

ウトウトし始める。

「そうそう。ダイっていうマイナンの妹 プラスルで“りん”っていうんだけど、お前と同じ学校で同じ学年だから」

ん？ と疑問を口にしながら、眠りの世界から元の世界に戻ってきた。

「4月初めに、ここと関わりが出来ちゃったらしくってさ。会ったら励ましといてやって。土日含まない1か月間は自由にさせるから、お前を」

……僕に何が出来るん？ トゲチックさん。

「ま、楽しんでおいで、学校を」

ひらひらと手を振りながら部屋を出ていく。えー……、何それと思いつつ、その1か月は真面目に学校へ行った。

また4回あった日曜日の度に、逃走を図っては捕まった。最後の4回目のとき、ワニノコと出会い、そして、もっと外の世界を知りたくなった。

そして、5月。自由な1か月間が終わったところ、りんともずいぶん仲良くなったところ、彼女が殺された。

「おーわり」

「いや、何その終わり方!？」

批判を受けた。

「結局話してないじゃん。最後がダークとか、やめてよ」
「突っ込むのもやめてよ」

突っ込みに突っ込みを入れてみた。意外と面白いかも……。

「僕ねー。あの子のこと、好きだったんだよ。
だから、つらいって言う感情、閉じ込めちゃった。
閉じ込めて、トゲチック達がわけてくれた仕事、淡々とこなした。
だから、一番最初　僕が生まれたころに持っていたE-?まで戻
ったんだよ」

去年を思い出す……。あの組織を壊したくて、必死に働いたあの
ころを。

「でも、今は違うって、オオタチが一度話していたよ？」
「……そうだよ。C-?だよ。彼らと並んだんだ」

にっこりと笑ってみる。ユウイは少しどころかだいぶん驚いてい
た。

「じゃ、本当に寝るね。お休みー」
「え。ちよ、寝るなよ……！」

隣で目を丸くさせているユウイの姿が目映る。目を閉じている
から、まぶたの裏に映るわけだけど……。
ユウイ。そんなに知りたかったら、彼らに聞いたほうが早いよ。
あの地獄は思い出したくない。

鞭で打たれたり、頬を打たれたり……。体のありとあらゆるところを、赤く染められたあの地獄は　思い出したくない。

ごめんね、ユウイ、フー。……りん、また会いたいよ……。

砕けた話し方はオオタチで、
ある程度丁寧な言葉を使うのはトゲチックですが……わかりにくい
ですかね？

ちなみに学校。

入学式に出席した者だけが入れます。受け入れは当日10時まで。

次からまた冒険モードに戻ります。

34話 ミウとピチユー（前書き）

今回はミウメインの話です

34話 ミウとピチュー

ファイファイが寝てしまった。
いろいろ突っ込みどころ満載だったけど、少しばかり気になることがある。

まずはマイナンのダイと、プラスルのりん。
僕の記憶に間違いがなければ、ホウエンにいたところに出会った最初の友達のはず。数年ほど会えていなかったけど……そっか。組織ロイルにいるのか……。

あと、ファイファイが最後に言っていたC-?の件。
あいつら、Bに昇格したって聞いたんだけど……ファイファイ、知らないのかな。……知ったらかわいそうだし、言うのは止めておくけど……。

ポケギアのデジタル数字が、2、3、4と順序良く並んでいるのを確かめると、僕も眠りに就いた。

「ユウイ、起きて！」

「ファイファイ、起きてよ〜」

夜更かししていた2匹は、いつもは起きるのが遅いトレーナーふたりに起こされていた。

「どうしたの？　なんか眠そう……」

「寝たの、2時過ぎなんだよ……。もう少し寝かせて」

椎那がフィフィへ心配そうに声をかけている。ちなみに現在時刻は6時半だ。夜更けに話し込んでいた2匹は、4時間ほどしか寝ていないという計算になる。

「だめー！ コガネに行くんだから！」

「……いつも出るの10時のくせに……」

ぶつぶつと文句を言うだけで、全く起きようとしないフィフィ。それに対し、同じく夜更かし組のユウイは はつきりと目が覚めないように軽く頭を振ってはいいたが、起きていた。どうやら、夜更かしの常習犯であるらしく、慣れているようだ。

「いつもはいつも！ 今日は今日！ ほら、早く起きるっ！」

「いつもがいつもなら、今日もいつもと同じ。
だから10時に出よーね」

理屈は理屈だが、それは屁理屈ちひりくつと言う理屈だ。胡睦こむつの高い声で頭を痛めつつ、再び眠りに就こうとするフィフィ。
そこへピチューがトコトコと近寄って来た。眠そうにそれを確かめると、これまた眠そうに声を出した。

「なあにー？」

「でんきショックっ！」

「ち、ちよっ ……!!」

2日連続にして、電気技を体に浴びたフィフィだった。

「大丈夫？」

「起きてね？　ファイファイ……でいいのかわからないけど」

ユウイが心配し、ピチューはそれが当然かのような顔をする。にっこりと笑ってはいたが、ファイファイはその瞳の奥に悪魔の微笑みを見たという。

ファイファイです、と紹介しつつ、やれやれと体を起こす。電気技を使ったのに、自分が痺れないとは……、とピチューに感心しながら

「さてと。ご飯どうするの？」

「7時半ぐらいに持ってきてくれるんだって」

いつの間にかピチューが取り仕切っている。それに気づかず椎那は返事を返していた。

「じゃあ……。どうしょ？」

1匹だけ、うーん、と悩む。妹のピーは、寝ていたりする。トゲピーも、寝ていたりする。ミウは、ファイファイの叫び声で目を覚ましたばかりだ。少し眠いらしく、しばらくクシクシと前足で目をこすっていたが、それが落ち着くとピチューに声をかけた。

「ねえ、何歳？」

「ぼく？　ぼくはねー、5歳。夏の終わりが誕生日なんだ」

夏の終わりと言えば、8月末　つまりは8月31日が誕生日らしい。ふふふと笑って、片足でその場を一回転した。

「この子はピー。ぼくの妹」

今もなお、寝ているピーのそばへ寄ると、軽く紹介し始める。

「ぼくもピーも バカ兄も、もともとニビシティに住んでいたんだ。けど、いろいろあってぼくらだけ、しぜんこうえんに行ったんだ」

ピカのことを指しているであろう“バカ兄”という言葉が、他より遅れて聞こえて来たのは気のせいだろう。

「ピーとは仲良いの？」

ピチューが首を横にかしげた。それにならって、大きなツートンカラーの耳も左へと傾いた。なんとなく、おもしろそーと思い眺めていたミウだったが、ピチューの質問を思い出し、答える。

「うん。同じ幼稚園だし、組も同じだもん」

「それでも、ぼくとは会わなかったよね？ けっこう休んでるよね？」

「ぼく、休み時間とかよく遊びに行ってるんだけど……」

変だな、と思いつつも、ミウがウソを言っているとは思えなかったため、本当のところをはっきりさせたいらしい。

「んつと……」

急に言葉に詰まるミウ。あまり話したくないのか、しきりに兄のほうをちらちらと見ていた。しかしユウイはミウに背を向けており、ファイファイと何かを話しているらしく、時折ファイファイの目が見開いていた。

「えつとお……」

徐々に泣きそうな顔に変わっていく。それを見つけたフィフイがユウイに合図を出したらしく、兄がようやく妹の状態に気づいた。

「ミウ？」

フィフイのそばを離れ、妹へと近づく。あと数歩で隣に行けると思ったとき、ミウから飛びついて来た。口をへの字に曲げ、必死に涙をこらえているようだった。

「……………どうしたの？」

妹が本気で泣き出しそうな様子を見て、少し焦るユウイ。なにかあったな、と感じ、一緒に話していたと思われるピチューを見る。

「まずかったのかな……………」

ピチューの目があつちこつち行き来しているのを見る限り、かなり狼狽しているらしい。悪気があったのことはないらしく、そんなピチューをひとまず落ち着かせることにした。

「何があったの？」

「うーん、とね……………」

先ほどミウにした質問と同じ質問をユウイに話す。その間、ユウイの隣にいるミウは、ふるふると震えていた。

「なるほどね……………。ミウからしたら禁句だろうなあ、それは」

「そっなの？」

苦笑するユウイ。ピチューは少しだけ視線があった本人に問うと、
ゆっくりとうなずいた。……肯定らしい。

「何か、あったの？」

興味から聞いているのかどうかはわからないが、心配しているのは確かのようなのである。フィフィも気になったのか、そばまで寄ってきていた。その光景に交わらないトレーナーふたりではない。

いつの間にか、ユウイとミウを中心に円が作られていた。

「あったから、こっとなっちゃっているんだけどね」

ユウイがその場に座ると、ミウが兄の腕の隙間から腹部へと潜り込む。兄の体に挟まれた状態で座ったようで、前足の間から頭だけ突き出していた。尻尾は横に垂らしているようで、時々白い先っぽがちらりと見える。

ユウイ自身、それに慣れていくらしく、仕方ないなという柔らかい眼差しで妹の頭を眺めていた。

「ミウ、話してもいいの？」

一拍の間ののちに、微かにうん、という声が聞こえて来た。それを聞くと、ユウイは少し固くしていた表情を緩めた。

「……どこから話せばいいかな……」

いつもは迷いなど見せないユウイに、椎那やフィフィは少なからず驚いていた。それに気づいたユウイはふつと微笑む。そして話し

出した、妹であるミウの過去を。

僕の両親は、子どものことなんていつも放っておくヒトだったんだ。

それは生まれたばかりだったミウも例外ではなくて、ミウの面倒はずっと僕が見ていた。それにもちよつとしたわけがあるんだけど、今回は割合させてもらつう。

ミウが生まれたのは、ちょうど学校が春休みに入ったあとだった。休みが明けて、学校が始まってもしばらくは休んでいたんだけど、さすがに休みつぱなしもまずくて、午後の授業が終わるとすぐ家に帰っていた。

最初のうちはそれでよかったんだけど、そうもいかなかった。

3か月を過ぎると、どんなに成長が遅い子でも辺りを歩き始めるからね。ミウもそれに例外なく、僕の部屋の中をうろつろつしていた。ただ、一度だけ部屋の扉がきちんと閉められていないことがあって、もう少しで階段から落ちそうになっていたんだ。

(僕の家はトキワの南西にある2階建ての古い洋館で、僕の部屋は2階にあつたんだ)

それ以来、ミウを学校に連れて行き、保健室の先生に理由を話して面倒を見てもらっていた。

だけど、同級生の悪党たちがミウをからかったり軽くいじめたりして、遊び始めたんだ。幼稚園には少なくとも6か月を過ぎないと入れさせてはもらえなかったから、それから3、4か月後の10月、11月までミウには我慢してもらっていた。

それから手続きを済ませて、なんとか幼稚園に入れてもらえたん

だけど、そこできているいるあつたんだ。

入った当初、ミウは一番年下で、最初のうちは、上の子たちに仲良くしてもらっていたらしいんだけど、ある時、それが一変した。それがいつかは分からないんだけど、でも、変わったんだ。

僕は幼稚園に入ったことないから、どういう風に1日を過ごすのかわらなかつたし、ちゃんと組分けされていると思っていた。というか、パンフレットにそう書いてあったからね。年長、年中、年少、それ以下の子、という風に分かれていると。

だけど、それは建前で、実際にはきちんと分かれていなかった。分かれていたのかもしれないけど、出入りが自由すぎたのかもしれない。だから、あんなことが起こったんだと思う。

「あんなこと？」

フィフィが軽く首をかしげた。目が、早く先を話せと訴えている。一方のピチューは、何かを怪しむように考え事をしていた。続けるよと、とユウイが言うと、それに待ったをかける。何度かそれを繰り返した後、ようやく考えがまとまったらしく、口を開いた。

「今はちゃんと区別されてるよ？」

休み時間と幼稚園終わった後じゃないと、ピーの組に入れてくれな
いもん」

「その時、先生って部屋にいる？」

ユウイの質問に「いるよ！」と元気よく答える。しかし小声で時

々だけど、と自信なさそうに付け足していた。

「それじゃあ、変わってないんだね。あのも……」

「あの後……？」

オウム返しに尋ねるピチューに、ユウイはコクリと頷いた。そして続ける。

12月に入ったころかな。

ミウが幼稚園に行くのを渋るようになりだしたんだ。

最初のうちは悲しそうな顔をしていたけど、それでも行ってくれていた。だけど、日を重ねるごとに、嫌がり方が激しくなってきた。それこそ、幼稚園という言葉を聞くだけでビクツとするほどに。

でも、あともう少しで僕も学校が冬休みに入る頃だったから、それまでで行ってもらった。

冬休みに入ると、ミウは異様にはしゃいでいた。幼稚園に行かなくていいからなのか、単に僕と長い間一緒にいられるから嬉しいのか、分からなかったけれど。

冬休みが明けて、始業式の日にはミウを幼稚園に連れて行った。その日は僕も学校が半日だったし、ミウを連れて早く帰るつもりだった。それが、幸運を呼んだ。

幼稚園の敷地内に入ると、どこからか騒ぐ声が聞こえて来た。近付くと、ミウのいるはずの教室が発生源だった。ちょうど時間的なものから昼休みだからかな、と思っただけだけど、それだけじゃなか

った。

ちょうど5、6歳ぐらいの子たちが、誰かを取り囲んで何かを言っているようだった。教室には先生もいないし、ミウと年齢の近い子たちは隅に逃げているように見えたけど、ミウはそこにはいなかった。

まさか、と思って輪の中心を覗いたら、ミウが縮こまって丸くなくなっているのが微かに見えた。

教室は、園庭側から出ることが出来ても、入ることが出来なかった。だから、内側の廊下を通して入らないといけなかったけど、昇降口には職員室があったから、外部の人や保護者は必然的にそこを通る羽目になっていた。

だから、先生方に理由を話して、急いでミウ達の教室に向かった。そしたら。

「鍵が、掛かっている？」

内側から鍵をかけられていて、簡単に入ることは出来なかった。鍵の到着を待っている間、外から中の様子をずっとうかがう。

やがて、教室の扉が開けられると、幼い子たちはそこから逃げ出して行った。残ったのは、ミウの取り巻きと、ミウだけ。

ミウと視線が合うと、その場から弾けるように走ってきた。何を言われたのか分からないけど、家に着くまでの間、ずっと下をうつむいていて、何も話そうとはしなかった。

再び、ユウイの口が止まった。

「それだけ……ってわけでもなさそうだね」

何か足りないような、そんな表情をしながらピチューは疑問を抱く。ピチューの問いに答えるように、そうだよとユウイが返す。

「もちろん、これだけじゃない。

あの後ミウはずっと幼稚園に行き続けてはいたんだけど、行けなくなっただ」

「行けなくなっただ？」

今度はファイファイがオウム返しにユウイに問う。椎那や胡睦は、ただ黙って話を聞いているだけだった。

「口だけだったのが、手も出すようになってね……」。

最初は本当に小さな痣だけで見落としてしまっていたんだけど、徐々に数も増えて、目立つような傷ばかりになってきていたから……」

昔　とはいっても数年前だろうが、その時のことを思い出しているらしい。いつの間にか、悲痛そうな表情に変わっていた。

「ユウイは、それに気付かなかったの？　それとも、知ってて行かせたの？」

「妹の状態に気づかないほどバカじゃないし、そこまで鬼じゃないよ」

ピチューの問いに苦笑しながら答える。しかし、それならそれでまた別の疑問が湧き出てくるらしい。いくつ目か分からない質問をユウイに投げかけていた。

「じゃあ、なんで？ どうしてミウはそれでも行っていたの？」

「それがね」

「あたしが、行くなって言ったの」

ユウイの声に混じって、女の子の声が聞こえて来た。もちろん、発したのはミウだ。バツが悪そうに、もぞもぞとユウイの腕の間から這い出てきた。そして、ユウイの目の前でお座りをした。

「あたしが、それでも行くなって言ったの。だからお兄ちゃんは悪くない」

「なんでまたそんなこと……」

行かなきゃいいじゃん、というような目でミウを見るピチュー。

「行かなかったら……、休んだら、もっとひどくなるもん」

「そんなこと言ったら……、痛い思いするくらいなら、行かなきゃいいじゃん！！」

ずっと、休めばいいじゃん！ ippそのこと、辞めちゃえばいいじゃんか！」

荒く息をつくピチューの横で、ピーが何事？ という表情をしながら目を覚ます。トゲピーも然りだ。

ミウはと言うと、だって と呟きながら言葉を探していた。

「あたしが辞めたら、お兄ちゃん、困るもん」

「休んでる今も、辞めてるのとそこまで変わらないと思うけど？」

冷たく言い放つ。ミウがウツと言葉を詰まらせたかと思うと、頭にたくさんの涙を浮かべていた。

「え……」
「う、」

ピチューが一瞬後ろに身をよじったのと同時に、ミウはワッと泣きだしてしまふ。

「……お兄ちゃん？」
「や、ちが……う。たぶん」
「ミウー!？」

起きたばかりなはずの妹から冷たい視線を受け、数歩後ろに下がるピチュー。トゲピーはいきなり泣き出したミウのそばへと駆け寄り、どうしたの、どうしたのと連呼していた。

「なんか、ごめん。泣かせちゃって……」
「いいよ。そう思って当たり前だし」

ユウイは泣き疲れ、眠ってしまった妹に寄り添っていた。

あの後、何分にも渡ってユウイがなだめ続けた結果、ようやく落ち着きを取り戻していた。そして、今のようにコテンと横になり眠ってしまったのだ。

「……もう、卒園しちゃってるんでしょ、ミウをいじめたヒト達」
「うん。もう1年以上は経つと思うからね」

そっか、と呟くとユウイの隣にすくとんと座ってしまう。

現在、部屋にいるのはこの3匹だけで、他の顔触れは外に出てヨルノズクの搜索をしているのだという。実は、こっそりと椎那の後を追いかけて、現在民宿の屋根の上で休んでいるなどは、誰も考えはしなかった。のちに、外に出たユウイに見つかることとなる。

「ぼくら、園に入ったのこの1月あたりだから、あまり知らないんだけどね……」

だからこそ、ピーがミウのこと知っててびっくりしたんだ」

ぼつりと思っていたことを話し出すピチュー。ユウイはそれに相槌を打つでもなく、ただ耳に入ってくる言葉を、聞き入っていた。

「仲良いのかと思ったけど、顔見たことなかったし……。だからつい、どうして見かけないのか理由を知りたくなっちゃって……」

はあ、とため息をつくとき、天井を見上げる。

「ダメだなあ、ぼく。年下の子、泣かせちゃったし……」

悲しそうにそう呟くピチューに、大丈夫と励ますユウイ。

「好奇心旺盛なのはいいことだと思うよ。それに、すごく妹思いみたいだし」

それはユウイもでしょ、と笑いながら言い返す。そして、ふと物思いにふけてしまったらしく、笑い声が急に止んだ。ユウイが不思議そうにしていると、にっこりと笑うピチューと目が合った。そして。

「ありがと。これからよろしくね」

「いちぢらこそ、ピチユー」

同い年の妹を持つ者同士、短くあいさつを交わした。

35話 気ままな道 ｛in 35番道路｝

現在、椎那たちは35番道路にいる。フィフィのわがまま通り、10時に民宿を出てコガネシティを目指している最中だ。

残暑の厳しい日差しに頂垂れつつも、テクテクと目的を目指して歩み続けている。

暑さに負け、ため息が出てしまいそうになるそんな時、自分たちの真上に気紛れだが日陰を作ってくれるヨルノズク。胡睦こむもホーホーを出したいのだが、出せばもれなく兄弟ゲンカが付いてくるので、出せず仕舞いである。

「ヨルノズク、どこ行ってたの？ 心配したんだよ？」

民宿を出て数分たった頃、頭上をバサバサと音を立てて飛ぶ何か。その正体が分かった椎那は、飛び去ろうとするのそれに声をかける。

「ウソつけ！ 最初、探そうともしなかったら、お前！！」

空で立ち止り、椎那と視線を交わしながら、言おう言おうと思っていたことをズバンと口にする。言われたほうは、凶星なので言い返す言葉がないという。しかし、だ。

「だって、絶対近くにいると思ったもん！」

反省するどころか、逆に開き直るトレーナー。しかも、その開き

直りの内容がどこかすごいと思う。

「だからって……」

少しぐらい探してくれたって良くないか？ ……僕の行き先を臆気ながら分かってきてくれているのは嬉しいけど……さ。

言葉にするのが難しい、胸中に渦巻くこのもやもや感。

うーんと考えた結果、まあいつかということとで終わってしまった。そういうことで、後はただひたすらコガネシティを目指し、歩く（飛ぶ）ことに専念することにしたヨルノズクである。

一方のピチュー兄妹とトゲピー御一行。イトコだからか、昨日の今日というのに完全に打ち解けている。トゲピーに至っては、ピーのことを「ピーちゃん」と呼ぶ仲になっていた。

「ピーちゃん、ピーちゃん。コガネシティに行ったことある？」

「あるよ〜。デパートとか、モノレールとか、たっくさんあった！」

たっくさん、を強調させるかのように、両手を内側から外側へと円を描くように回していた。その様子を見て、へえ！ と目をキラキラさせながら、まだ見ぬ新たな街への期待を膨らめますトゲピー。わくわくしているその横で、ピチューは呟く。

「モノレールじゃなくて、リニアモーターカーだったの……」

どうやら、間違うのは初めてではないらしい……。そんな呟きもむなしく、ピーはモノレールと連呼し、仕舞いにはトゲピーまでも

がモノレールと言い始めていた。はあ、とため息をつき、諦めモードに入ってしまった。

「あとどれくらいー？」

「んー……。あと　2時間くらい？」

胡睦の問いに、首をかしげながら予想で答えるピチュー。

確かにコガネシティには何度も行っているのだが、まともに歩いて行くのは初めてなのだ。いつもなら、例の抜け道を使ったり、中型以上の鳥ポケモンをお願いをして乗せてもらっていたりしているところだ。

「暑い……」

「ぼくも……」

普段ならそんな分かり切っていることは滅多に言わないふたりだが、この日ばかりは違ったようだ。

適当な日陰を見つけると、しめたとも言うように、先を争ってその下へと涼みに行っていた。いつもなら文句のひとつでもいうヨルノズクだが、今回ばかりは自分もその木の下へと飛んでいき、先についていたふたりと同じように涼んでいる。

この日の昼間の気温が、今年の最高気温となっていたのを知るのは、まだ先の話である。

「……………ここがコガネシティ……………」

椎那一行が涼んでいるちょうどその時。1匹の黄色い四足のポケモンが、キョロキョロと周りを見渡しながら前を歩いていた。そして当然のように、突然現れた電柱へと見事に頭をぶつける。ものすごくいい音がしたらしい。

「いったあ……」

はずみで尻もちをついたらしく、少々無様なお座りの姿勢になっている。ゆっくり立ち上がると、何を思ったか。先ほどぶつかった電柱の正面に立つと、前足でベシベシと電柱の表面を殴りだした。

道行く人は、そのポケモンの行為に興味を持ったり、「見ちゃいけません」と連れてくる子どもの目を隠して先へと進ませたり、無視したりと様々な行動をとっていた。

そんな中、2匹のポケモンがその黄色いポケモンの数メートル後ろへ立った。1匹は三角の小さい耳を持った紺とクリーム色のツートンカラーのポケモンで、もう1匹は頭に穴のあいた葉を持ち、首周りに数個の蕾をつけた薄黄色のポケモン。見た目からして、ヒノアラシとチコリータに幾分か近いようだ。

「……お前、何やってんの？」

ツートンカラーのポケモンが数歩近寄り、その声をかけた。黄色いポケモンは「んあ？」と意味が込められていない言葉を喋りつつ、後ろを振り向く。目に入るのは、きよとんと首を傾げたそのポケモンの姿。一目で、あいつだと理解した。

「マグマラシ……」

名前を呼ばれると、「よお」とでもいつかのよう片手を上に突き出した。それに答え、何か言おうとしたコムギだったが、そいつに遮られた。

「コムギくん？ まあた、ぶつかったのか？」

からかい口調のマグマラシに、放つとけと冷たい言葉を投げる、コムギと呼ばれたポケモン サンダー。紛れもなく、ユウイ兄妹のイトコである。

「また」と言われたところから考えると、少々ドジなところがあるようだ。

「何しに来たんだよ？」

あからさまに機嫌の悪いのを見せつけるコムギに、お言葉だなあと苦笑して返すマグマラシ。そして同意を求めるかのように、一緒に来ていた草ポケモンになあ？ と話を振る。

「マグが、悪い」

「えー……」

くれたのは同意ではなく、非難の声。マグマラシが不服そうに彼女を見つめるが、答えは変わらないようだ。そんな友達の姿を見て、ざまあ見ろと言わんばかりに、冷たい視線を向けるコムギ。いまだに機嫌が悪いようだ。

「べーい……。そんなこと言うなよ」

コムギの向ける視線を無視し、彼女に話しかけ続けるマグマラシ。

ベイと呼ばれた彼女は、困ったような顔をして、コムギに助けを求め視線を送る。

「マグマラシ、ベイリーフ困ってるから」

仕方なく助けに参上するが、無視される。何度声をかけても無視され続け、仕舞には自身の体から電気を放ち、そいつにぶつけたのであった。

「……で、何の用？」

「お前のイトコ、今ジョウトにいるらしいよ。トゲチックがそう言ってた」

パンパンと体に付いた煤を落としながら、ここへ現れた理由を簡単に説明する。コムギはと言うと、納得できないようで顔を渋らせていた。

「それとオレと どう関係あるの？」

「それプラス、単独行動は慎むようにとお達し。イエローカードだときさ。」

「これまたトゲチックから」

「だから、わたし達が来たんだよ」

それを聞くや否や、はあと重いため息をつく。それを見て、まあと慰めるように肩を思しき所を叩くマグマラシ。

「イエロー、2枚目だな」

「……慰めたいのか、落ち込ませたいのか どちらだ」

明るく笑って言い放つマグマラシとは対照的に、暗く低めの声でぼつりとつぶやいたコムギであった。

35話 気ままな道 ｾin 35番道路 ｾ(後書き)

短めです。

なくともいいかもしれない(笑)

36話 コガネ百貨店で
(前書き)

2週間ぶりの投稿です

36話 コガネ百貨店で

あれから1時間ほどで、目的地・コガネシティへとたどり着いた椎那一行。見渡す限り、背の高いビルディングが立ち並んでいた。そんな大都会の中をテクテクと歩いていると、目の前に「コガネ百貨店」と大きな看板を掲げた9階建ての建物が見えて来た。

「コガネ……ひゃく？」

「百貨店。デパートみたいなものだよ」

漢字が読めず、言葉に詰まる胡睦こむつの隣でユウイがさらりとその漢字を読む。へえと感心しながら、なおもその看板を見続ける胡睦。どうやら、中に入りたらしい……。

「ね、ね。寄っていかない？」

近くにいた弟の手を引き、百貨店を指差す。初めは見向きもしなかった椎那だが、ある言葉でそれが一変する。

「お菓子、買いに行こ？」

「行く！」

先ほどとは打って変わって、目をキラキラさせながら百貨店を見つめる椎那。余程、お菓子に飢えているとみる。

「高いだろ。半端なく……」

そんな姉弟の平凡な会話に水を差すヨルノズク。確かに、普通のスーパーより安いとは言い難い場所ではある。否、言えない 言

えるわけがない。しかし、それを知らないのが子どもでもあるふたりの姉弟。ヨルノズクがどんなに止めても、行くと言って聞かないのだ。

「だあ、もう！！勝手にしろ！！」

いつかと同じようなパターンになったような気がする。ただし、そのいつかはいつだったかは分からない。気がする、だけなのだから。

そういうわけで、歓喜の声をあげて百貨店へと入っていきこうとするふたり。そんなふたりにユウイが待ったをかける。

「何〜？」

不服そうに振り返り、ユウイを見る胡睦。早く入りたいと言わんばかりの様子で、恨めしそうに見ている。椎那も同じくだ。声をかけた本人は、少々呆れた様子でこう答えた。

「荷物ぐらい置いていけば？」

早い話が、先にポケモンセンターへ行き、宿を取ったあとでなら遊ぶなり、ショッピングするなり、好きにすればいい、ということらしい。

そんなユウイの意見に渋々ながら納得したふたりは、ポケモンセンター目指して歩いて行った。もちろん、名残惜しそうに百貨店を振り返りながら、だが……。

「よし！ 行くよ、椎那！！」
「うん」

いつも通りポケモンセンターで部屋をとり、荷物を置いて、いざ百貨店へ！ と意気揚々に部屋を出ていくふたりとミウとトゲピー、それからピー。タタタ、と廊下を走って行ってしまった。

その後ろで、はあとため息をつきながら、ふたりと2匹の行く先を見つめるユウイとファイファイ、ヨルノズクにピチュー。ユウイの口には先ほどジョーイさんから借りた部屋のカードキーが……。言うまでもなく、大都会のポケモンセンターなので、宿舎ももちろんオートロック。鍵を持ちださなければ、中に入ることはできないのだ。それを知らないふたり（プラス3匹）。この先もいろいろと何かが起こりそうである……。

一方、こちらは椎那と胡睦たち。あれから10分も経っていないにも関わらず、もう百貨店の前まで来ていた。

「さ、入る」
「うん！」

自動ドアの前まで行き、立ち止る。しかし、待てども待てども開かない。身長が低いせいでセンサーが感知していないだけなのだが、子どもたちがそんなことを知る由もない。

「開かないね……」
「うん」

実は隣接して普通のドアも設置されているのだが、まるで気付い

ていない。大人が出入りすれば、その隙に入れるのだが、この時ばかりはそんな大人もいない……。そういうわけで、ジッとドアの前で待っているのだ。

そうして待つこと約5分。

「あ、開いた！」

突然、自動ドアが開く。

百貨店から出てくる人はいないのだが、なぜか開いたのだ。後ろに誰かがいたのかもしれないが、椎那や胡睦たちは後ろを振り向くことをせず、さっさと百貨店の中へと入って行ってしまった。しかし、ただ1匹　ミウだけは後ろを振り返った。

そこには、ピチューがなぜかしゃがんだ状態でこちらに笑いかけていた。そのそばにはユウイやヨルノズク、フィフィといった顔触れが並んでいる。

どうやら、自動ドアで苦戦しているうちに、ここまで追い付かれていたらしい。そして、ドアの前で立ち往生している5名に気付いたピチューが、お得意のジャンプでセンサーを反応させ、自動ドアを開けてくれたようだ。

「ピチュー、お兄ちゃん……」

「早く追いかけなよ。ぼくらは、屋上の広場に行くからさ」

ね？　とにつこり笑う。ミウもその笑いにつられ、自然と口元が緩み、うんと元気良く返事をする。先に入って行ってしまった4名の後を追っていった。

「……おくじよー？」

ミウが行ってしまった後、不満げに反芻するヨルノズク。言った本人は素知らぬ顔でユウイやピチューと話している。どうやら、ヨルノズクを除く3匹の間では屋上に行くことが決定したようだ。そして、そこでは現在フリーマーケットを始め、いろいろな催し物が開かれているらしい。買い物好きの胡睦のことだ、必ず来るだろう。喚くヨルノズクを置いて、3匹は屋上へ向かうべく、百貨店の中へと入っていった。不満たらたらヨルノズクは空から向かったため、彼らとは目的地で会うことになる。

「ベイ〜！ コムギ〜！ 早くしろよ」

そしてそれから数十分後。ユウイ達がいた場所には、コムギ、マグラシ、ベイリーフという3匹が立っていた。そして、椎那やユウイ達と同じく、百貨店の中へと入っていった。

先に百貨店の中へと入った椎那と胡睦。胡睦はすでにその階にはいなかったが、椎那は来るのが遅れたミウを入り口近くで待っていたため、姉たちに置いていかれていた。

やがてやってきたミウと会話を交わしていると、ユウイ達も来ているという内容の話聞き、それなら！ ということで彼らが入ってくるのをその場で待っていた。

「あれ、椎那？」

「待っていてくれたんだ」

「……胡睦は？」

椎那の顔を見てすぐに疑問の声を上げたのはフィィ。周りにしか聞こえないほど小さな声でポソリと呟いたのはユウイで、昨夜、自分のトレーナーとなった人物を、辺りを見回して探すのはピチューである。もちろん胡睦はついでで、本来の目的は妹であるピーだ。しかし、どんなに探せどもピーはおるか、胡睦さえ見つからない。がっくりと肩を落としてしまった……。

「ねー、どこ行く？」

そんな状態のピチューに気づかずに無邪気に笑って、今しがたやって来た3匹にそう問いかける椎那。そんな椎那の笑みにピチューもつられて笑顔になる。そして、屋上に行こうと、持ちかけたのだ。

「おくじょう？　そう言えばさっきもミウが言ってた……。何かあるの？」

「あるある。今、フリーマーケットやってるみたいだから、普通なら高いものが安く買えるんだ！」

ピチューの怪しい説明に、椎那はへえ！　と相槌を打つ。そのそばで、そうだっけ？　と確かめるように、フィィがユウイと視線を合わそうとしていた。ユウイはその視線に答え、フルフルと首を横に振る。それを確認すると、だよね……と小声でポソリと呟いた。どちらかというピチューの言ったそれは、アウトレットに近いだろう。

やがて、その場から離れた椎那たちはまっすぐにエレベーターのある場所へと向かうはずだった。椎那の方向音痴のせいで、「まっすぐに」とはいかなかったが……。フィィがたまたま標識を見つけていなければ、もっと迷っていただろう。

一方の胡睦。百貨店を見つけた際、椎那に言ったようにお菓子を
買ったため、地下のお菓子売り場へと向かっていた。トゲピーとピー
もちろん一緒だ。

「あ、マシユマロがある！」

「チョコ！ チョコが入ってる〜！」

キャツキャツとにぎやかに売り物を品定めしていく胡睦グループ。
商品を手にとったり、試食品を口にしたりと、なにかと忙しそうだ。
その様子を影からじっと眺めているものがある。黒ではなく、琥珀
色の目をしたサンダーズと藍色の毛皮をしたマグマラシ、そして頭
に大きな葉をつけているベイリーフの3匹だ。

彼らは単なる興味で地下1階へと赴いたのだが、今の興味は売り
物よりもうるさいほどにぎやかに品定めをしている胡睦たちにあっ
た。

「……………うるせ〜」

「そう言うなって。そのうち、親が注意するだろ。」

それにほら。あの子が連れてるピチュー、しぜんこうえんに住んで
いる子じゃないの？」

額にしわを寄せ、さも迷惑そうに呟くコムギをマグマラシがなだ
める。そう言った彼の興味は胡睦よりもピーのほうにあるようだが、
その理由はもちろん。

「あの子たちのダンス、見てみたいんだよね」

わくわくした表情で一心にピーを見つめるマグマラシとベイリー

フ。そんな兄妹の熱い眼差しにコムギは呆れを抱き、はあとため息をついていた。

そんなとき、コムギのため息が聞こえたのか、2匹の眼差しに気がついたのかは定かではないが、ピーが3匹の隠れている方向を振り向く。そして、熱い眼差しを向けていた2匹とではなく、たまたまそちらを向いたコムギと視線が合ってしまった。

つながった視線をそらそうとするが、幼い相手はひたすらジツとこちらを見つめ続けているため、そらすタイミングがつかめない……。どうしようかと頭の中で考えを張り巡らしているうちに、相手はトコトコとこちらに近寄って来ており、そして、かわいらしい声で話しかけて来た

「何してるの？」

まさかストーリーカーに近い行為をしていたとは言えず、黙りこくるコムギ。その時になって、ようやく視線をそらせることが出来ただとか。

熱い視線を向けていた2匹は、「なぜ自分たちではなくコムギに話しかけたのか」という議題で議論を始めていた。そのため、コムギの助けを求める視線に気づかずじまい。その間も幼いピーは、「なに、なに？」と繰り返し尋ねてきていたらしく、彼らがそれにようやく気がついたときには、コムギは疲労困憊になっていた。

「大丈夫か？」

「ねー、何してたの？」

マグマラシがツンツンとコムギをつつくが、疲れた表情でちらりとこちらを見ただけで、すぐに明後日の方向を向いてしまった。ピーはそんなコムギの様子を気にも止めず、同じ言葉を飽きずに繰り返していた。これが兄のピチューなら、多少なりの心配はしたのだ

るうが、好奇心旺盛の妹である。同じ言葉を飽きずに繰り返すなんてことは、朝飯前なのだ。

ちょうどその時、胡睦はピーがそばにいないことに気付いた。辺りを必死に見回すと、数メートル離れたところに例の黒いひし形の耳が見えた。そこへ、トゲピーとともに近づくと、何故を連発するピーとその質問の連続で疲労したサンダース、そして弟の連れているヒノアラシとチコリータによく似た2匹のポケモンたちと出会ったのだ。

女の子ピチューの質問に丁寧に答え、一段落ついたところ、マグマラシは自分の前に立つひとり人間の少女に気がついた。隣……というか足もとには、少女の足に隠れるような形でトゲピーが控えているのを見て、あのヒトの妹だな、と勘付く。それと同時に、少女の身元もなんとなく勘付いた。というのも、この前トゲチックに会ったときに、少女やその子の弟についても聞かされていたのだ。

「こらむ……だったっけ？」

「……え？」

心の中で呟いたつもりだったが、ばつちり声に出ていた。それも、人の言葉で。微かではあったが聞こえた自分の名前に、僅かな恐怖を抱く胡睦。会ったこともなく、種族もいまいち分からない見ず知らずのポケモンに、いきなり名前を呼ばれたのだから、誰であっても驚くだろう。

胡睦を例外ではない。恐怖に押され、数歩後退してしまう……。それを見て、しまったという表情をするマグマラシに、それらの示す意味が分からず、傍観者になっっている残り数名。そんな彼らはさ

ておき、マグマラシは少しのウソを交えた弁解を始めた。

「こいつ、コムギって言うんだけど、ユウイのイトコなんだ。僕、こいつから君のこと聞いてたから、知ってただけだよ。だから、怪しくないよ?」

それを聞き、一步前に踏み出そうとしていた足を、数歩後ろに下げた。自分から怪しくないという者ほど、怪しい奴はいない、ということだろう……。そういうわけで、マグマラシから離れようと数歩、また数歩と彼から遠ざかっていった。

一方、墓穴を掘ってしまったマグマラシ。それに気付いていないのか、なんで!? という驚きの表情で胡睦を見、そして近くに寄せようと必死になっていた。が、どういうわけか遠ざかられるばかりである。必死になればなるほど、墓穴を掘ってしまっているようなのだが、それすら気付いていないという始末なのだ。

だが、最後の最後に言ったある一単語で胡睦は近寄ってくることになる。

36話 コガネ百貨店で (後書き)

〈紹介分の巻〉にて主人公ふたり+その他のポケモンたちに関する質問募集中!

37話 言われたくないこと

胡睦コムはついさっきまで一緒にいたあの瞳の茶色いイーブイのことを思い出していた。昨日、たまたま涙していたところを目撃してしまったあのイーブイを。

「ファイファイ……?」

「え……? あ、うん。ファイファイ」

胡睦の変わりように目を丸くするマグマラシ。知り合いなのか、と胡睦に尋ねると、そうだという。そして驚くべきことに、今現在一緒に旅しているとも教えてくれた。

それを聞き、どおりで最近姿を見なかったわけだ、とひとり納得するマグマラシ。ヤマブキシティから離れていたのなら、出会う確率は相当低くなる。会えなくて当然だと思うのと同時に、それを教えてくれなかったあの胴長イタチと白い羽付きを恨むのであった。

「あなたは？ あなたもファイファイの知り合い?」

恐る恐る、という様子で胡睦が話しかけてくる。そうだよ、と答えようとしたが、隣にいたベイリーフに先に答えられてしまう。

「知り合いじゃなくて、友達」

ここにいるみんな、と付け足し、マグマラシやコムギをツルで指し示す。そして、ね? と言いながらにっこりと微笑んだ。そんなベイリーフの行動に安心感を覚えた胡睦。気が付けば、ベイリーフの首元に抱き付いていたのだ。

当然ながら驚くベイリーフ。完全に困り切った顔をマグマラシに

向けるが、何の対処もされず。胡睦が自然と離れてくれるまで、そのまま固まっていた……。

「えーと……ごめん、なさい。びっくりさせちゃった」

ベイリーフから離れた直後に、胡睦が言った言葉である。初対面であるのにもかかわらず、抱きついてしまったことには自分でも驚いたんだとか。顔を薄い赤に染めながら、ぽつりと話していた。

その後、その3匹とともにその階を周り、地下売り場を十分に堪能した胡睦。これからどうしようか、と考えている時に、首から下げているポケギアが突然鳴った。

「椎那からだ……」

ポケギアの画面に映し出された発信者名を確かめてから、電話を取る。あ、お姉ちゃん？ という聞きなれた弟の声と一緒に、周りが騒がしいのか、ざわざわとした感じのいろんな雑音も聞こえて来た。

「なに？ ……今、屋上なんだ。……うん、行くね。じゃ！」

電話を切ると同時に、どこか楽しそうな表情に変わる。そんな胡睦に「なあに？」とトゲピーが問いかけていた。上を向き、きよとんと体ごと首をかしげるトゲピー。そんな彼女の様子が愛おしくなつたのか、床から抱き上げ、ギュッと抱きしめる。されている本人は突然のことに驚きもせず、こらむちゃん？ と不思議そうに首をかしげているだけだった。

「あのね、屋上でフリマしてるから来ないかって！ 行こ！」

30秒ほどで満足したのか、普通にトゲピーを抱っこすると、ピ
ーやマグマラシ達がいるほうに向かってそう問いかける……いや、
断言してしまう。わくわく気分で足取り軽く、エレベーターが設置
されていると思われるところへと向かうのだった。もちろん、
正反対の方向だったりする。

胡睦に電話をかけた後、近くに置いてあったベンチに座り、のん
びりとくつろぐ椎那。椎那の足よりもベンチのほうが高いので、プ
ランコに乗っていると時と同じ感覚で、自然と足をぶらつかせてし
まう。そんな彼の足もとにはユウイやヨルノズクが待機し、膝の上
にはミウが、ベンチの空いているところにはフィフィやピチューが
座るといふ少し異様な光景となっていた。

それから10分後。

正面より左側に位置するエレベーターが開き、そこから胡睦とピ
ー、それから抱かれたままのトゲピーが出て来た。その後ろには見
慣れぬサンダーズとマグマラシ、ベイリーフの姿があった。途中で
別れるのかと思いきや、胡睦と同じように自分の正面にまでその3
匹は付いて来たのである。

「……誰？」

「え、つと」

誰、と聞かれても、さっき会ったとしか答えようのないこの状況。

いつの間にか付いて来ていた、とありのままを話せば、きっと椎那は怒りだすだろう。当たり前障りなく、穏便に済ませることはできないのか……。

そう考えをめぐらしている胡睦の隣で、ユウイが軽いため息をつく。椎那の服を引っ張り、自分に注意を向けさせる。

「僕のイトコと、その友達。フィフィの友達　でもあるよね？」

自分と同種族を指し示し、その次に、マグマラシとベイリーフを手で示す。最後にベンチ上にいるフィフィを振り返り、同意を取っていた。しかし、3匹が目の前にいることに驚いているようで、数秒ほど何の反応もなかった。そのうち、問われていたことを思い出したらしく、慌てて返事を返す。そんなフィフィの行動が面白かったらしく、クスクスと笑うマグマラシ。笑われたことが恥ずかしかったらしく、つい、とそっぽを向いてしまった。

一方の椎那。ユウイの説明もあり、そうなんだ、と機嫌よく納得する。そして、「名前あるの？」と興味津々に問いかけていた。その問いに顔を見合わせる3匹。小声で何かの相談をしているようだが、椎那はその様子をずっとじっと見ていた。

その間に胡睦はフィフィの隣に座り、トゲピーを膝の上に乗せていた。ピーはというと、ピチユウのそばへと行き、地下で見たものを、あれやこれやと言いながら紹介していた。表面は妹の話を目に聞くお兄さん面だが、内面はさっさと終わってくれと思っている黒いピチユウであった。

「オレならあるよ、名前。コムギって言うの」

椎那の正面を陣取り、そこに座り視線を近くさせるコムギ。だけど、と続ける。

「本当の名前じゃないんだよね……」
「え？」

へえ、というわくわくした表情から一変し、驚きの表情に変わった。驚いて目が見開いているのはミウも同じこと。だが、マグマラシ兄妹はもちろん、ユウイとフィフィもそのことを知っているらしく、別段表情が変わることはなかった。ただ、それも言うのか……という呆れをユウイは持っていた。

「ど、どどういうこと!？」

ベンチから立ち上がりそうな勢いで、コムギに問い詰める椎那。いつの間にか足のぶらつきが止まっていたりする。ミウは、椎那の勢いに押され、膝から落ちかけていたりもする。そんなミウを見ながら、話を進めるコムギ。特に何の表情も浮かべていない。

「記憶、そこだけないんだよ、オレ。
要するに、記憶喪失なの、キ・オ・ク・ソーシツ！」

異様に記憶喪失を強調するコムギ。言葉を覚えてほしいのか、理由を覚えてほしいのか、はっきりしない。とりあえず、分かったのは記憶喪失で名前だけ忘れたということ、だけだろう。過去に何があったのかは知らないが。

そんなこんなで新たに加わったその3匹との会話を日が暮れるころまで楽しんでた。そのせいか、3匹の性格がなんとなくわかってきた。

まず、コムギは明るくて単純だということ。またの名をお調子者という。

それに対して、マグマラシは冷静そのもので、調子に乗ったコムギの歯止め役。しかし、ちよっぴりドジというか、天然なところがあつたりするのがたまにキズ　　かもしれない。
ベイリーフはと言うと、控え目で物静か。ただ、おしとやか過ぎて、あまり会話には加わってこないの、たびたびマグマラシが会話に入れようとするときがある。だが、マグマラシとふたりだけの時は全く様子が違うようで、一方的によく話すらしいが……、真相は闇の中である。

長いこと話し込んでいたのもあつて、のどが渴いた椎那は席を立った。あたしのも、という姉の声を聞き入れ、自動販売機を探しに行く。その後ろをミウとヨルノズクが付いて行った。ミウは単なる好奇心で、そしてヨルノズクは上段に設置された、絶対押せないであろうボタンを押してあげるために……。

人ごみに消えていくひとりと2匹の後ろ姿を見ながら、仲がいいなあとちよっぴり嫉妬感を持つ胡睦。はあと軽いため息をついたとき、コムギが思い出したかのように、胡睦に話しかける。

「なあ、ちよつと聞きたいことあるんだけど」

何の前触れもなく、話しかけられたことに少しばかり驚く。しかし、気を取り直すと、何？　尋ね返し、コムギのほうに体を向けた。それを合図に、コムギは胡睦たちと会ってから聞きたかったことを口に出す。

「なんで、施設に入んなかったの？」

その質問を聞いて、度肝を抜かれるユウイ。やめさせようとしたが、時すでに遅く、タブーなことをいくつも言ってしまった後だった。

「親くないんなら、そっちで暮らしたほうが安全じゃん。近所とかにも心配されることないしさあ。確か、カントーのどこかにあるって聞いたことあるし……。」
ふたりだけで暮らし続けるよりも、イトコン家に転がり込むよりもずっといいと思うけどな。
そっちのほうがイトコの親だって安心するんじゃないの？ こうして旅してるよりかは、さ」

その全てを聞いて、しまったという顔をする。それはユウイだけに限らず、ファイイやマグマラシ、ベイリーフなど、意味がはつきりと理解できたものは、コムギを非難の目で見ていた。ユウイが何か言おうとしたが、それは遮られた 胡睦によって。

「……んたに、……たくない……。」
「え？」

「あんたに、そんなこと分かったように言われたくない!!
あたし達の気持ちなんか、全然知らないくせに、そんなこと言われたくない!!」

途切れ途切れだった言葉に疑問を抱くと、機関銃のような勢いで言い放たれた。声はさっきまで聞いていた声と大分かけ離れており、相当荒い言い方で、かつ、荒い息もついていた。全く悪気ないコムギは、その変わりように疑問を抱くばかりで、何故胡睦に睨まれているかも、理解できていなかった。

言葉の意味を理解できなかったトゲピーやピーたちでも、周りの反応から言っではいけないことだと、自然に理解したらしく、口をはさむことはなかった。しかし、そんな変わり果てた胡睦を心配そうに見上げていた。

「お姉……ちゃん？」

タイミング悪く戻ってきた椎那。何が起きたのかが分からず、ただ呆然としていた。胡睦が一瞬こちらを見たのに気付いたが、今しがたやってきたエレベーターに乗り込んでしまったので、どんな顔をしていたのか全く見えなかった。

「……何があつたんだ？」

「……後で話すから、胡睦を追いかけて。暗くなる前に見つけないと……」

そう言つて西の空を見るユウイ。赤く染まりかけた太陽が、高層ビルの向こうに沈もうとしていた。そんなユウイの心を理解したヨルノズク。いつもなら拒否のひとつも示すのだが、今回はかりはそんなことも言っていられないと察知したらしく、屋上から飛び立っていった。

「ユウイ……、お姉ちゃん……」

「大丈夫。絶対、絶対見つけるから。」

もしかしたらポケモンセンターに行くかもしれないから、先に帰っていて。トゲピー達も連れて」

心配そうにしていたものの、うん、と頷くと、持っていたふたつの缶をどうしようかと一瞬悩む。ひとつは飲み干し、もうひとつは抱っこしたトゲピーに持ってもらうことにした。そして、ファイファイやピチュー、ピーとともにエレベーターを待っていた時、近くにふたつの影が寄って来た。

「僕らも探すの手伝うよ。な、ベイ？」

話を振られ、コクリと頷くベイリーフ。探す、と短く反応してくれている。ありがとうと呟くと、ちょうどよくやってきたエレベーターにひとりと数匹は乗り込んでいった。

「コムギ」

短く、イトコの名を呼ぶ。ただそれだけ。

「……オレ……、別に、悪気あつたわけじゃ……」

知っている。悪気を持って言うような子じゃないってことぐらい。だけど、今回は。

「コムギ」

もう一度だけ、彼のことを呼ぶ。3つ離れた年下イトコの名を。ピカやマリルと同一年のイトコの名を……。

「ユウイ、オレ……どうしたらいい？ 何が……いけなかったの？」

胡睦と同じくらい泣きそうな顔で問いかけてくるコムギ。ただ、純粹に知りたかっただけなのは知っている。だけど、その純粹さが時に刃物となるときがある。今回のように。

胡睦のことは、今はヨルノズクに任せるしかない。あと、椎那と一緒に降りて行ったあのふたりに託すしかない。

「知りたかったのはわかるけど、僕らも深い理由は知らない。けど、ふたりがああ町に　自分達が育った町に住み続けたっていう気持ちにはわかるよ。それを傷つけるようなこと、言っちゃいけない。」

時が来れば、きっと話してくれると思うし。それが誰にも話さず、ふたりの胸の内に閉まって置くのかもしれないけれど」

あふたりにとって、一番、聞かれないこと。それは「何故、ふたりだけで過ごしていたのか」ということと、「何故、児童養護施設に行かなかったのか」ということ。特に後者は、誰であっても行つて欲しくない言葉。

コムギに悪気は微塵もない。だけど、タブーを言つて傷つけてしまったのは、紛れもない事実。言ってしまったことは仕方がない。今、考えないといけないのは胡睦の行き先と、コムギがなくなるとはいけないこと。前者は他のヒトに任せた。なら、僕とコムギが考えないといけないのは、後者だ。

「コムギ？」

固まってしまったようで、全く返事を返さない。怒らせるだけならともかく、泣かせてしまったから、当然の反応なのかもしれないけど。今は、返事してほしい。

その後も何回かイトコの名を呼んだ。だけど、返事はなし。僕も胡睦のことを探しに行きたいけど、今はコムギのことが先。気ばかり焦っても仕方ない。だけど、いい加減。

「返事、してくれる？　コムギ！」

……そりゃ、ビクツとするよな。僕が同年代以外に向かって声を荒げるなんてこと、滅多にないもの。ま、とりあえず、なに、と擦れた小さな声で返事してくれたから良し、とはするけど。

「謝りなよ、胡睦に」

数拍の間の後、うん、という短いけどしっかりとした声が聞いた。それじゃあ、僕らも胡睦探しに加わるうか。僕はコムギと並んで、エレベーターへと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7530k/>

Adventurous? ~ 物語の序章 ~

2011年11月10日08時08分発行